
葉月の流星～青潟大学附属シリーズ中学編

舞夜じょんぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

葉月の流星／青潟大学附属シリーズ中学編

【Zコード】

Z6795E

【作者名】

舞夜じょんぬ

【あらすじ】

中学二年八月。宿泊研修中、立村上総は担任との対立、および親友の羽飛貴史、清坂美里との違和感などで疲れ果てていた。自分のできる精一杯のことをしているのに裏目の連續、とつとう熱を出して倒れる。ふとしたきっかけから、上総は停学覚悟の計画をひとりで練ることになる……。

その一 出発前のおじなーる

1 しおり作り

どうしてこの学校つて、やたらとクラス旅行が多いのだろう。しかもみなマイクロバスときた。遠距離なんだから、みな素直に汽車を使えばいいのに。そっちの方が景色も楽しめるし、ゆっくり坐れるし、なんてつたつて酔わない。学校側だつて、旅行費が安くなるんだからいいんじゃないだろうか。

狭いコピー室で次から次へと刷り上げた用紙をテーブルに置きながら上総は本条里希評議委員長に意見していた。この日はどうしても「コピー機を一人で占拠したくて、登校届を出していた。本条先輩が一緒にいるのは偶然だ。たぶんどこかへ繰り出そうと誘いたがっているんだろう。どうせ夏休み、上総は暇だった。知らん振りして原稿を三十五部ずつ刷り上げた。

「せめて今度の冬の評議委員会合宿は、公共機関を使いましょう。ダメですか？」

「当たり前だろ、駄目にきまつて。よく計算してみろ。実はマイクロバスの方が安上がりだつてこと知らんのか。旅行会社もちゃんとそここのところは計算してくれるんだそうだ。それに考えてみろよ。俺たちみたいな『見た目優等生中悪党連中』が集団で移動してみろ、絶対に修羅場が起こるはずだ」

本条先輩は絶対、修羅場を作り出しているだけだ。
「いかの女子に声をかけて悪いことをたくらんでいるに決まっている。」「ダメでもともと、言つてみたかっただけ。

上総はわざとらしくため息をつくと、さっそく大量のコピー紙を

一枚一枚折り始めた。端から端まできちんとたたんで。合計枚近く六百枚弱。ページ数二十ページ。本当だつたら同じ評議委員相棒の清坂美里に手伝つてもらつのが筋なのだが、どうもそんな気になれない。美里だつてそういう女子の取りまとめで忙しいはずだ。

本条先輩が一枚摘み上げ、ふわっと両手の上に置き田を通し始めた。

「なんだ、こりや」

「うちのクラスで作った、しおりです。俗にいう『歌集』って奴ですか」

「渋いもの作るねえ」

「うちの担任の趣味です。最初の注意事項およびバスの席順以外は、他の連中がみんなこさえてくれたもんですから。とりあえずあとは金具で留めて、明日中に全員に配つて。口頭で注意事項を説明して、それで終りです」バス、およびホテル部屋の席順決めはすでに決まっていた。上総が面倒を見なくてはならないのは男子だけ。助かっただ。二年D組の男子はあまりうるさいことを言わないし、上総も大体長い付き合いだから、呼吸は飲み込んでいる。ただ、やはり評議委員としての特権を利用してバス運転手後ろ、先頭右側の窓際席に自分の席を取つた。

ちなみに清坂美里は相対、左側先頭の窓際だ。

上総の隣は当然羽飛貴史。美里の隣は古川こづえ。

いつもながら分かりやすい席だつた。

一年時の席とほぼ変わらないではないか。

問題は、その間に菱本先生がいるということだ。

通路のど真ん中に、補助席を敷いて坐りたいとのたまう菱本先生をさすがに蹴るわけにはいかなかつた。あれでも一応、二年D組の担任だ。評議委員としてはうやまわないわけにはいかない。

とにかく上総としては『絶対窓際』『車に酔わない』という最大条件をクリアしていればあとは問題なかつた。多少のマイナス条件は覚悟していた。

「お前のクラスもずいぶん大変なんだろ?」

同情する田で本条委員長は上総を見た。

「男子はともかく、女子ってやたら仲良しがどうだとか、誰々がいいとか、いうだろ。俺のクラスも相当なもんだけだな」

「女子は清坂氏に全部まかせました」

きつぱり、上総は答えた。

「お前、彼女に対するその言い方、いまだに変わつてないな」

「当たり前でしょ。何が変わるつていうんですか」

「もう、まる一ヶ月経つたつていうのに、全然あつちの方は進んでないみたいだしなあ」

この言い方、本当に腹が立つ。

意地でもポーカーフェイスを装つことを決意した。

「はい、俺は本条先輩と違いますから」

「青潟大学附属中学一年D組・旅のしおり」は、三十五部、そろそろ出来上がる頃だつた。コピー機を使っている間は、枚数の多さにつづづくめまいを感じたものの結局、本条先輩が半分以上手伝つてくれた。空き教室でしばらくホチキスを使い、完成させてクラスのロッカーにしまいこんだ。こんなものを盗む奴なんていないだろう。出発当日に持ち出して配ればいいだけのこと。

「全く、立村もずいぶん細かいこと書いているなあ。規則魔つて言われるぞ」

「いえ、うちの担任がうるさいだけです。でも後半はほとんど俺のオリジナルですから」

「なになに?『クラス全員、エチケット袋(気分が悪くなつた時に使うビニール袋)と空いたペットボトル、大判のタオルは必ず用意すること』って。そんなことまで書く必要あるのか?いや、その前に質問として、なんだ?ペットボトルつて「気付かないのか、本条さん。

上総は答えるのをためらつた。

「おい、言いたそうなその田、続けれよ」

「本条先輩は修学旅行の時、それのお世話にならなかつたんですか」「俺は乗り物に強いからそんなことはなかつた。でも必要最小限のものは用意しておいた。それよりもむしろ、休憩時間の間にみな、いつたん外に出て乗り物酔いのクスリを用意しろとか、トイレにはきちんと行つておけとか、そういうことを優先しておいた」

「近い、本条先輩」

「あ？ てことは、おい、まさか立村、ペットボトルつて・・・」「單刀直入に言つてしまつと、簡易トイレの代わりです。できれば紙袋か何かに入れて突つ込んでおけばベストでしよう。そんなの使うことなんてないとは思いますが、万が一つてことは考えられますしね。で、タオルで膝をおおう感じにしておけば、そつちの修羅場からは逃れられるでしょ？」

「あんなあ、立村」

本条先輩は上総の頭を思いつきりぐりぐりと撫で回した。

「そういう知恵、どこでつけた？」

「本条先輩は、バスの中で修羅場にあつたことはないんですか」

「お前はあるのかよ」

言いたくないが、答えるしかなかつた。

「いつ、しくじつてもおかしくない状況には追い込まれてましたけれど、幸い、この年までないですよ。ちなみに本条先輩、どうなんですか？」

深い意味はなかつたのだけれども、本条先輩の手は頭の上でぱたつと止まつた。

答えを探しているようだ。

2 ふたりつきひとつみつどもえ

よつとした小旅行が行われる。通称『宿泊研修』と呼ばれている。一年は四月、二年は五月初旬と八月末、三年は六月。こちらは「修学旅行」と名前が変わり、五泊六日の長丁場となる。クラスごとの旅行だから、日程もまた別々だ。確かに組は、七月の頭、夏休みを利用したときいている。しかし自らのクラスR組では、「涼しくなつた頃にしよう」という意見が圧倒的だったこともあり、あたり八月一十六、七、八日の3日間を指定した。

評議委員である立村上総、清坂美里に行き先はゆだねられていた。あまり遠くないところを希望する上総だったが、美里の方から、「やっぱり、せっかく一日も泊るんだもの、思い切つて遠くにしよう」と押し切られた。

「でもさ、マイクロバスを使うんだぞ。俺、体力持たないって」「何言つてるの。立村くんがひ弱すぎるだけなのよ。少し鍛えなくちゃダメよ」

強く言えず、黄葉町に決定した。

名前の通り紅葉美しく、自然も豊か。それなりに観光施設も整っている。温泉もそれぞれ泊る所に蛇口から出るようになつていてるそうだ。古い和洋折衷の街並みが残つていてる町で、一日三日観光するにはうつてつけの場所だった。名称・黄葉山と呼ばれる丘もあり、そこではよつとしたハイキング(気分も味わえるという。いかんせん美里の趣味にはぴたり合つてしまつたようだ。八月末ということもあり、旅行客はそういう。学生旅行の割引も効く。

ただ問題は青潟からバスで五時間という、距離の面だった。汽車が通つていないわけではないのだけれども、地元の交通機関だとかなり高くつくのだそうだ。

計算が得意な美里は電卓を叩いて数字だけを上総に見せた。次にマイクロバス一台分の代金を計算した。想像以上の差額に、言つことを聞くしかなかつたというのが、実情だった。

「八月末なのに、黄葉市は結構寒いって聞くよ。もしかしたら、紅葉が見られるかもね」

「どうせだつたらみんな自由行動にしてほしいよな。それはだめなんだろ。菱本先生が許さないんだろ」

上総が一番頭に来ているのはそこだつた。

本当だつたら、各班ごとに分かれて好き勝手なところを歩くのが楽しいと思う。女子男子関係なく仲のいい同士が集まれればそれがベスト。でも、別に今の班同士でも全く問題はない。なあに、南雲秋世がいるので一緒につるんでいればいい。

だがその案を持ち出したとたん、烈火のじとく怒り狂つたのが菱本先生だつた。夏休み直前、ホームルームの時間に、また壇上の上でつるし上げを食つた。

「だからお前はいつも、自分のことばかりしか考えていないんだ！」

立村、いいかげん他人のことも考えろ！」

本当に俺は一年D組の評議をやつていいんだろうか。

しかも、来年は一応、評議委員長になつてしまふんだ。

この様子だと、菱本先生は絶対に、俺を評議として認めてないよな。

さらにむかついたのは、結局菱本先生の「全員行動で山登りをし、全員でほのぼのと公園でバレー・ボールをやる」『お付き合い』の相手クラス全員が飲んでしまつたことだ。誰か、もう少し意見だせよ、と言いたかった。

味方になつてくれたのが、相棒であり現在『お付き合い』の相手である清坂美里、仲のいい羽飛、南雲、くらいだらうか。

「なんで俺ばかりいつもつるし上げくわなくちゃなんないんだよ」

「いいじゃない、どうせみんな坐る場所は別々なんだから。どうして立村くん、そんなにクラス旅行を嫌がるの？」

深いため息をついて、上総はつぶやいた。

「俺は遠足、修学旅行、みんな熱出して欠席してきたんだ。どうい

「う」とかわかるだろ」

「まさか、立村くん」

美里はゆっくりと、遠慮がちに、

「おねしょがまだ直らないとか?」

「違うって。とにかく前日になると、三十九度くらいの熱がでてつなされて、目が覚めたら出発時刻ってパターンなんだよ」

本当のことだから堂々と言える。美里も慌てて上総に、両手を合わせて謝ってくれた。

「ごめんね、私の通っていた小学校の修学旅行で、おねしょが直らない人がいて、結局出なかつたつてことがあったから」「いや、それはたぶん、人によつてあると思うな」

上総は思い出して、また頭を抱えた。

「そうだよ。その問題があつたんだよ」

「あの、ねえ、立村くん、別に私、立村くんがもし、まだ直つてなかつたつて言つても、ね、あの」

周りをちょっと見回してから、上総の耳元にささやいた。

「付き合いやめるなんて、言わないから、安心して」

三回目のはめ息だ。上総は怒る気力もなく首を振つた。

「だから、俺のことじやないんだつて」

清坂美里に『付き合い』をかけられてからまるまる一ヶ月が経つた。

一週間自分なりに『付き合い』の意味を、貴史、南雲、本条、そして美里に教えてもらい、今では一年D組の公認カップルとして自然に接しているつもりだった。『立村くん』『清坂氏』と呼び合う間は、特に変わつたこともなかつた。

ただ、帰り道ひとりでいると

「あれ、彼女はどうしたの」と声を掛けられたり、また菱本先生に呼び出され、暗に

「男子と女子の感情は違うものだから、気をつけるよつ」

と説教されむかついたり。

自分が思ったよりも周りに変化はなかつた。

二年D組公認カツップルの先輩である南雲からは、

「たまには、一人つきりで遊びに行く必要もあるかもしれないよ。もしなんだつたら、夏休みにダブルデートしようか」

と誘われたりした。個人的に南雲ともつと話をしたい気持ちはあつたので、ありがたくお断りした後、

「今度俺の家に遊びに来て、思いつきり語り明かそうか」と、別のお誘いをした。夏休み中なのに、実現していない約束だ。

本当は、夏休みもつと、美里と会つてもいいのだらう。

付き合つている同士なんだから。でも、身体の調子が許さなかつた。もともと上総は身体が弱い。夏になると高熱を出してしおり倒れる。海辺に出かけるなんてもつてのほかだし、泳いだりするのもそう好きじやなかつた。なによりも、真夏だというのに、長袖の羽織が手放せない体质というのにすべての問題がある。

ふたりつきりで会えないかわり、羽飛貴史を含めた三人組ではよく集まつたものだつた。もちろん今回のクラス旅行にかこつけて、いろいろな準備やシナリオ作りなどが中心だつた。遠くから来ている子、実家に戻つている子、たくさんいる。そういう人たちにも連絡を取るべく、連絡網を便りに希望を取つた。女子と男子が別々なのはかなり気が楽だつた。上総はただ、男子連中への『席の場所希望』と『注意事項』を電話で伝えればいいだけのことだつた。

二日に一度は顔を合わせ、たまに美術館に連れて行かれたりしたものだつた。同じ年だといふのに、美里も貴史もやたらと絵に詳しかつた。上総がぼんやりと、「きれいだ」「つまらない」の一言で片付けてしまうよつた絵を、ふたりは猛烈なスピードで盛り上がりまくつっていた。もちろん難しい絵画用語を使つたりはしない。ただ、「これを見ていると理科の先生の鼻の穴を思い出すよな」

「この絵は大きくポスターみたいにして、べたべたべたつて貼つて

みたいよね！」

と、想像を絶するのりでしゃべりづけていた。後で聞くと、子供の頃からふたりとも美術館で騒ぐのが大好きだつたらしい。なんか迷惑な客なんじやないかと思いつつも、ふたりの話題を聞いているだけで、上総は面白かった。たとえ半分以上言葉が、自分の中にある言語と異なっていても、かまわなかつた。答え方が分からず、帰つてから自分の感覚が鈍いことに落ち込んで、その場では見せないと決めていた。

「あのね、立村くん、ひとつだけ言つておきたいんだけど。これは貴史のいない時に、つて決めてたんだけどね」

ふと、ふたりつきりになつた時、ささやかれた言葉。

「私、立村くんが、外国の本とか小説とか、そういうものについて話してゐる時、いつもすごいつて思つてゐるんだからね。私、あまりそういうのわかんないけど、でもでも、絶対に、ばかにしてないからね」

やつぱり、絵画のことがわからないところのことを、気にしていると思われてゐるのだろうか。

上総は曖昧に領いて、ありがとうだけ答えた。

そしていつもその後思つ。

いつまで、三人でいられるんだろうか。

いつまで、ふたりの仲間に入れてもらえるんだろうか。

その一 出発朝のよしなりと

1 いい奴なのだが、しかし

朝六時に青大附中前に集合した。

旅行終了後、次の日からなしきずしに始業式が始まる」ともあり、各地の下宿生たちもみな実家から帰つてきていた。一ヶ月ぶりの再会とあって、女子の中には手を取り合つて大喜びしている姿も見受けられた。男子はとくに、青湯市外の海で焼いたらしい肌を見せつけて、腕をぼりぼり搔いていた。

「せめて、制服じゃない形にしてほしかったよな。普通のTシャツとかさ」

「まだ夏休み中なんだから、私服だつていいのに」

「なんで、ネクタイまで持参なわけなんだ」

意味不明な校則の数々を改善するべく使命をおびた、次期規律委員長南雲秋世の姿もあった。聞きつけたのか、あごの先で頷いて答えた。

「そうだよな、俺もそう思つ。学校始まつたらすぐに規律委員会開いてもらつようにするよ」

相変わらず、シャギーの髪型は変わつていない。もし微妙に変化したところがあるとするならば、「つきあい」相手の奈良岡彰子を田で探して、見つけるなりにつこりと笑いかけているところだろうか。笑顔が一段、南雲は自然だつた。戸惑つてているのは奈良岡の方だつた。周りの女子に

「彰子ちゃん、愛されてるよね」とからかわれているのが聞こえた。

「ところで、立村、このしおりの通り、持つてきたけれどさ、なんだ、ペットボトルって」

羽飛貴史が上総に尋ねた。

やつぱつ、普通の発想ではないらしかつた。

上総にとつては自分の身を守るゆえに、絶対必要なことだつたのだけれども。でも説明するとまた、

「お前つてば大げさんんだかださあ、もう俺たち中学生なんだぜ、そんなしぐじりする奴なんていねえよ」

と笑われるだけだつた。

ま、使わなければそれに越したことはないんだから。ただ、万が一つことは考えられるわけであつて。

一寸先は闇。

「いや、たいしたことじやないよ。それよか、羽飛、もし俺が酔つたら、その時はごめん。申しわけない。できるだけ気を付けるつもりだけだ」

今のはうちに謝れるとは謝つておひや。これから三日間、隣の席にいるであろう貴史に手を合わせた。

「立村つて自分で酔う酔つつていつとも言つてゐるけど、くどあげたことなんて一度もないだろ、心配性な奴だよな」

「こいつ、わかつていない。

いまさらながら上総はあきらめていた。

羽飛貴史はいい奴なのだ。無口な上総をいつも、クラスでフォローしてくれ、いろいろなことがあっても変わることなく仲間にしてくれて、さらには幼なじみの清坂美里との恋路も応援してくれている。いつも

「俺は立村の味方なんだよ」

ということを、どこかで伝えてくれている。

こんな性格のいい、奴なのが。

上総にはどうしても受け入れられない部分がある。

自分の友達である以上のことを、せりに求めようとするといつだらうつか。

上総にさりに、自分の感情をさらけだすよつ、求めるとひや。

きつに。悪意がなくて、誰よりも自分を大切に思つてくれている

ことがわかるから、何もいえなくて、さらに辛い。

親友という扱いをされていながら上総は、いつも口をきけないでいた。

どんなに今まで上総が、旅行の時に気をつかっていたかなんて、たぶん貴史は分からぬにちがいない。酔い止めを飲んで、窓の空気を吸うためへばりつき、いつも吐き気をこらえていたなんて、気付かないのだろう。

俺の味方でいるなんていう奴を、どうして素直に受け入れられないと、いんだらう。

最低だ、本当に最低だ。

整列し、菱本先生に軽く挨拶をした後、男子、女子の順に乗り込んでいった。女子同士二名ずつの組に分けるのはそう難しいことはないようだつた。後ろの席だけが三名ずつになつて男女セツトになつてしまつた。が、どうもその後ろには奈良岡と南雲の二人が坐つてゐるらしい。どう考へても、南雲の意志だ。いくら付き合つてゐるとはいへ、いつも露骨にいちやいちやぶりを見せ付けられるのも、なと思う。

でも南雲としては当然のことなのだろう。

上総たちよりも一ヶ月くらい早く両思いになつたふたりだが、周りからは外見上つりあわない究極のカッフルと言われている。南雲が女子受けするようなアイドル歌手雰囲気の顔立ちなのに對し、奈良岡彰子はかなりぼつちやりめだ。一部の男子いわく、「ビール瓶」というのも頷けなくて、南雲の言つとおり

「一般受けはしないかもしぬないが、俺にとつては完璧だ」
なのだそうだ。男女関係なく気持ちよく接してくれる女子だから、性格に惚れたといえばそれまでなのだろう。が、南雲の様子を見るにどうもそれだけではない。外見内面ともに、満足度百パーセントらしいのだ。もつといいうなら、南雲の想いの方が圧倒的に高い。奈

良岡彰子の方は戸惑いがまだ完全に消えていない。断然、南雲の想いにひつぱられている状況が、この夏も続いていた。

上総は南雲の坐っている奥まで進んで確認した。

「じゃあ、なぐちゃんはここでいいか？ もしなんだつたら変わるよ」

「いいつてりつちゃん。これ以上贅沢なんて言いますかつて」

奈良岡彰子に向けるぱかつとした笑顔を、上総にもそのまま見せて、南雲はポケットから小さな子瓶を差し出した。

「りつちゃん、これは結構、酔い止めに効くと思うよ、薄荷の匂いがするかぎ薬だつて。うちのばあちゃんから借りてきた」

「でも、それはまずいんじやないか？ お前だつてそう強いほうじや」

「大丈夫さ、俺には最高の酔い止めがいるからや」

隣で奈良岡彰子は困りきつた顔で南雲を見つめていた。

「ほら、立村くん、凍りついているじゃない。とにかく、この席で大丈夫だから立村くんも、あまり気にしなくていいよ」

目で

「早く、前に戻りなよ」

という表情だつた。読めないほど上総も馬鹿じやなかつた。。

「じゃあ、なにはともあれ」

2 毎度恒例『朝の漫才』

バスガイドさんはいない。バスの中はそれなりに余裕のある雰囲気だつた。

菱本先生の音頭でまずは、景色を眺めつゝ「しおり」での合唱だ。たいていはカラオケつきた。マイクを持つだらつ。でも菱本先生の意志で、すべてカットとなつてしまつた。

「そういうところにはお金をかけないで、自分たちでバスの中を楽しもう」ということだそつた。しかたないので、音楽委員ふたりに

しきつてもううい、しおりに載つてゐる歌を一曲ずつ、合唱する」とした。歌謡曲もあれば、教科書に載つてゐるものもある。マイクを持つたまま合唱に燃えている。

上総にとつてはそれこそうるさい以外のなものでもない。

盛り上げ係は幸い、貴史と美里がいる。

「悪い、ちょっとだけ空気吸つていいか?」

細く窓を開け、上総は外を眺めていた。バスを降りるまでの間は、評議委員としての仕事はまずお休みだ。これがもし学校祭とか合唱コンクールだとまた話は違う。行事が終わるまでの間ずっと、気を張り詰めていなくてはならない。上総の場合自分でも、かなり神経質すぎるところがある。

「さつて、では、次は、「山を越えてゆこうよ」でいこう!」

まだ歌謡曲の順番は回つてきていらないらしい。元気な羽飛・清坂コンビの声を聞きながら、上総はいつのまにか眠りについていた。たぶん、酔い止めが効いてきたのだろう。

かちやり、と音がしたので目を覚ますと、一時間くらい経つたらしく一部のグループが静かになつていていた。さほど揺れた記憶はなく、上総も風に当たつてすこし寒気を覚えていた。

「今、どこまで来ている?」

「まだ山を昇つていないよ。サービスエリアにそろそろ到着するころだな」

菱本先生が答えた。貴史に聞いたつもりなのに。できるだけこの先生とは口をききたくなかった。でもそんなわけにもいかない。本当にこの先生とは相性が合わない。どうしてだろう。

窓から見える景色は銀紙がかつておいて、といふビューポート事中の山切り崩した跡などが見受けられた。その奥には黄土色の山壁。すくと細長い木の群れが固まつて生えている。緑色が濃く、天に突き刺すような雰囲気だった。

「なんていうか、きりたんぽって感じかな」

「なにがだよ、あの木がか？」

「やたらと細長いよな」

別に意味は何にもなかつた。おなかがすいてきたので、サンドイッチを取り出した。大きい声ではいえないが、現在親からもらつた小遣いおよび生活費がほとんど切れている状態なので、買出しができなかつた。バターをぬつて薄切りのハムを挟んだだけのものだが、ラップに包んでハンカチにくるんできた。

「開発途上の場所つてところなのかな。この辺は」

食べながらぼんやりと眺めているところに、古川しづえが声を掛けってきた。

今は朝。

「ねえ、立村、いまあの木のことをなんとか「ぼ」つていわなかつた？」

「ああ、きりたんぽつて知つてるだろ。秋田の名物料理。『飯を筒状にして穴をあけて、それをかためてゆでて食べるつて奴。作つているときの状態によく似ていたからさ』」

意味はないはず。

「ふうん、『タンポン』ねえ、立村、どういつものだか知つてるよねえ。美里も教えるでしょ、そのくらい」

窓を見たまま頭は真つ白くなつた。

いや、知らないわけじゃなかつた。

ゆつくりと言い返した。

「古川さん、あんたの耳の方がおかしいんではないか。俺は今、『秋田名物料理のきりたんぽ』つて言つたよな」

「なあに向くなつてるのよ、あんたつてほんつと、いまだにガキだねえ。お姉さんは頭が痛いつてよ」

「ばかばかしい」

椅子の間も離れているし、今日はそれで朝の寸劇ちゃんちゃんのはずだつた。が、唯一うるさいのがいる。貴史がつんつんとつづいてきた。

「なんだ、その『タンポン』って？」

「知らないのか？」

「ああ、俺、その辺よくわからねえよ」

「残念ながら、古川さんのように本体を見たことないので、そうなのかどうかはわからないけどね」

むかつきついでに、古川「じずゑに聞こえるように」返した。

「立村くん！ ちょっと、いったい何言つてるの？」

「あの、だから、羽飛にきかれたから」

「だからって、いつたい」

美里が端の席から上総に向かつて猛烈に反撃を開始している。『』

惑う上総に今度は貴史が迎え撃つた。

「お前、何切れてるんだよ。俺、知らないんだけどさ、その『タンポン』ってなんなんだ？」話がよめねえんだ

「そんなこと、こんなおおっぴらに話すことじやないじやない。こずえもこずえよ。なんで朝から変なことまたつっかけてるのよ。それに」

ふたたび美里は上総をにらみつける。びくっとしながら、窓辺に張り付く。

「立村くんも立村くんよ。そんな声で言わなくたって！」

「『めん、俺が悪かった。』『めん』

「だからあやまらないでよ。私が悪こことしていふみたいじやない！」

「じゃあ、どうしろっていうんだよ」

「どうもしないけど、でも、変なこと言わないでよ、もつ」

以上の会話は、奥のグループに全く届かなかつたようだつた。雲行きは怪しい。他の連中はそれなりにいろいろな盛り上がりを見せているようだが、上総と貴史はしづらへ小声で

「女子つて、怖いよな」

「本当に、怖い。うつかりしたこと、言えねえな。でも、まじめに

『タンポン』ってなんだ？」

「俺も見た事ないから、わからない。今度本条先輩に聞いてみるよ」隣で居眠りをしたふりをしている菱本先生。こいつは絶対聞いている。今会話もすべて聞いている。実はそちらのほうに、思いつきり腹が立つたのもまた事実だった。

バスは第一次ターミナルに到着した。

降りた時、風のひやりとした冷たさが首筋に触れた。みな、ジュースを買いに走るものあれば、トイレに化粧ポーチを持つていく女子ありと、実にさまざま連中だらけだった。まだ一時間程度だから酔つた奴もいない。上総と貴史は用を済ませた後にすぐバスに戻つた。

「天気よさそだから、それなりに盛り上がるんじゃないかな」

「そうだな。立村もかなり無理しまくつたしな。それよかさ、お前、美里とどこまで行つたんだ？ 今の調子だとまだ全然進んでいねえみたいだけど」

「まだ一ヶ月だぞ、何考えてるんだよ」

三人で会つ時も、上総はいつも恋愛の匂いをできるだけ嗅がせないような振る舞いをするよう勧めていた。ふたりの時はほんの少しだけ、自分の中にある感情を、ちょこっと出してみたりもする。一歩近い感じで、冗談を言つてみたりもする。美里もだんだん、上総に対しても以前のように気を遣うこともすくなくなり、かなり際どいネタふりをしてくるようにもなつた。

だが、あくまでも、ふたりの時だ。

手が触れたつたつて、一回だけ、たまたまドアのノブをひねる時に指先が重なつただけのこと。それ以上は全く何にも触れたりなんてしていない。ましてやキスやそれ以上何てもつてのほか。

「それを言つならだ。羽飛、現在の一年生とはどういう付き合いをしているんだ？」

「付き合つてなんかねえよ。きちんと俺は断つたぞ。だが、相手がそう思つてないみたいなんで、九月までようすを見るかつてことで、

一回くらい会つた程度だつて

「断つた相手に会つて奴か」

少しむつときて上総は言い返した。

「それはちょっと、失礼じゃないか」

「だつてさあ、相手なんて話を全然していないだろ。俺の場合は一回でもしゃべらないとピンとこないんだよ」

貴史の言つことはわからぬくもない。特別に好きでも嫌いでもないという状態だつたら、ためしに付き合つてみるのも一つの手だろう。実際、上総はそういう気持ちを残したまま、美里と「はじめてのおつきあい」を始めていた。ただ、貴史にはどうも、カモフラー ジュの匂いが消せない。

もしこれが、古川こずえだとしたら話は別だつただろう。

上総としては、授業中の下ネタ振りにほとほとまいつていたので、いいかげん貴史とくつつけて、おとなしくしてほしいと思つていた。それなりのお付き合いでもいいだろうと思つ。しかしながら、告白された一年生については、どうも気がなさそうなのだ。いろんな考え方はあるだろうが、「好きになら女性との交際」だけは避けたいと思つていた。

最近、南雲の恋愛観に感化されているかもしれないが。

「どうせお前らとは違うんだからな。立村、お前も人のこと気にしてる暇があつたら、美里をもつと口説いてなんかしろよ

「人にそんなこと言われたくないね」

上総は軽く受け流し、しおりの日程を読み直した。

「黄葉市に到着するのが、十時くらいか。それから荷物をホテルに預けて、昼からバレー ボール大会か。やつてられないよな」

「その後で、街並みめぐりとくるわけだな。三十人ぞろぞろぞろと歩くわけかよ。みつともねえよな。もつと遠くから来た奴ならともかく、青潟なんて言つたら、近いし、制服姿だろ。恥ずかしいよな」
「全くだ。菱本先生の考え方はどうしても、納得いかないよな」
貴史が頷く頃に、菱本先生がジュー スを持って帰ってきた。

「お前ら早いなあ、おい、立村、外の空気吸わないで大丈夫なのか」「一度外に出ましたから」

わざと冷たく反応する。最低限の会話のみ、にどどめたい。教師としても、また一人の男として、生理的に好きになれないタイプだつた。もつとも菱本先生も同じ感じを持つているのだろう。上総に對しては、評議委員という扱いよりも、一段下の小学生並みの怒鳴り方をする。頭越しに怒鳴られるので、思わずかつとなつて言い返したくなる。でもここで負けはだめだと言い聞かせ、歯をかんで頭を下げる。去年はその繰り返しだつた。どうして貴史は平氣でいられるのだろう。そちらの方が不思議だつた。

「それにしてもなあ、羽飛。今日のバレー ボール大会、お前のポジションにすべてがかかるつているからな。頼むぞ」

「わかつてますつて。先生。俺のチームはその辺みんな心得てますから」

「やる気のなさうな奴もいるけどな。全員で思いつきり勝負をするつてのもいいもんだぞ、立村」

答えるのもうんざりだ。上総は眠氣が来た振りをして、窓辺にもたれた。目を閉じた。朝早くつたから、ふりが本当に居眠りになるのも時間の問題だつた。わしゃわしゃと人が戻つてきても、上総は目を閉じたままでいた。が、ぱしゃりと、ふたたび音が聞こえ、ぱちりと開いた。

「羽飛、いま何やつた！」

「俺じゃねえよ！」

「ごめーん、立村起きちゃた？ 寝顔写真撮らせてもらつたからね

「ああ、もしかして古川・・・！」

「大丈夫よ、渡すのはどうせ美里だけだから」

「そんな問題じゃないだろう！」

隠し撮りすることに情熱を燃やしている古川に、ずえの存在を忘れていた。これはうつかり、変な顔して眠れない。

「その写真、あとで返せよ。全く油断も隙もありやしない」

「でもな、今のは立村、お前が悪いんじゃねえの。勝手に狸寝入り
こいていたんだから」

貴史につつかれても、上総の気分はすっかりめいつていた。

「全くなんだよ、まだ旅行、始まつたばかりだつていうのにわ」

騒ぎは収まることもなく、バスは順調に黄葉市に向かつた。バスの運転手さんも、口が少ないながら笑顔がやさしい人だつた。大体二十歳後半あたりだらうか。上総が

「一日間、よろしくお願ひします」

と挨拶すると、

「青大附中の生徒さんは礼儀正しいから、運転していく気持ちいいよ」

と答えてくれた。去年もやはり、この時期の宿泊研修を担当したらしい。休憩所でちょっとだけ聞いたところによると、ビーチやら本条先輩たちのクラスだつたらしい。

「あの時やはり、クラスの会長さんみたいな子がいて、『お前、酔い止め飲んだが、お前体調大丈夫か、お前歌の順番どうだ』とか全部仕切つていたんですよ。で、最後に全員で『どうもありがとうございました』ときちんと礼をしてくれてね。びっくりしました」

本条先輩ならば、自分のクラスにそのくらい徹底させるだらう。上総は運転手真後ろの席に座り、少しだけ椅子をリクライニングさせた。

「悪い、大丈夫か後ろ」

「立村もう寝るのかよ」

「まだ一時間あるだろ。頼むからちよつとだけ寝させてくれよ」

仕方ねえなど、後ろの席の奴らは椅子を斜めにしてくれた。奴らはまだ寝るなんてとんでもないといつのりだらう。元気な奴はうらやましい。

すでにこの段階で胃がむかむかしていきたなんて、いえない。

理由はわかつていた。ひとつはだんだん山岳地帯に入ってきたた

め、横揺れが激しくなってきたこと。またもうひとつは、運転手さんのタバコが匂ってきて、窓から直撃を受けていること。

もともと上総はタバコの煙に強い方ではない。父は自室以外で喫煙はないし、学校ではもちろん禁煙となっている。青大附中の職員室でタバコを吸う先生は誰もない。生徒に喫煙を禁止している以上自分たちが吸うなんてもってのほか、という考え方だからだとう。ゆえに、喫煙者が見つかったりなんかしたら、すぐに停学、場合によつては退学となってしまう。

いろいろ悪いことを教えてくれる本条ですらも、タバコについて手をつけていなかつた。めつたにタバコの煙を吸うことなんて、なかつたのだ。

しかし、運転手さんはかなりのベビースモーカーらしい。

運転席の灰皿を覗いてみた感じ、すでに朝から二十本くらいの吸い口が残つている。

本当だつたら、菱本先生に頼んで、

「すみません、タバコやめてもらえますか」

と頼みたいところだつた。全く口を利かない、感じの悪い運転手相手だつたら、たぶんそうしていただろう。

しかしながら、ついさつとき話をしてみたところの運転手さんは、上総にとつて非常にいい人だつた。

白くゆるやかな煙が窓からぱつと散る。

窓を開けたままにしているとその煙がすみからするすると顔真つ正面にたゆたつてくる。上総も窓を半ば開け放しにしているので、新鮮な空気は吸える。でも一回口から思いつきり、煙を吸い込んでしまつた。それがまずかつた。咳き込む次いで、さつき食べたサンドイッチを戻しそうになる。ぐつとうつむいて、片手では万が一のために「エチケット袋」を手探りする。こんな早く使うかもしれない事態に追い込まれるとは思わなかつた。

幸い、隣の貴史も、当然向こう側の美里も、そういう上総の苦悶には気付いていない様子だつた。一年半つきあつてみて分かつたの

だが、ふたりとも乗り物にはかなり強い。進行方向反対側を向いても平気な顔してはしゃいでいる。

「立村、死んだように寝てるな。お前も入つて「古今東西」やるつてさ！」

「頼む、何も言わずに寝させてくれ」

「これ以上口にしたら本当に修羅場となつてしまつ。

「本当に立村、身体弱いよなあ」

貴史はそれ以上なにも突っ込まず、男女対抗、「古今東西」ゲームを楽しげに仕切っていた。女子チームのリーダーは当然美里だった。

「古今東西、青鴻市内のスーパー名はなーんだ！」

つぐづく思う。元気な人たちだ。

こんな暑い盛りに、本当にうらやましい。

その三 黄葉山でのよしな」と

- 1 ホテル到着よしな」と
- 2 青潟大学附属中学2年D組ファッションチェック
- 3 坂をのぼつて千畳敷へ
- 4 ちょっとしたわすれもの
- 5 ひとりしづかにゆめのなか

1 ホテル到着よしな」と

なんとか最悪の事態は免れ、朝十時、ホテルに到着した。

『黄葉シルバーライトホテル』という、一見ビジネスホテル風の宿を強く推したのは上総の一存だった。父に頼んで一通りホテルの資料と□□ミ情報を集めてもらい、

「二人部屋で、ほとんどこの時期借り切り状態にできて、しかも夕食がついていて、大部屋も借りられる。値段も普通の旅館よりはるかに安い」

という点で満足の行くところを選んだ。本当はしたくなかったのだが、父親の仕事関係で得た情報という後ろ盾もつけ、菱本先生を説得した。これもまた一苦労だった。

なにせ菱本先生は

「絶対に民宿のよつな、アットホームな環境で、男女別の大部屋にする」

ここにこだわっていたからだった。もちろん今までの宿泊研修、合宿はそのパターンだった。しかし、上総にとつては集団で風呂に入つたり、十五人集まつての大部屋に寝たりとかそういうのがどうも好きになれなかつた。一年時の宿泊研修では五人ずつの部屋でかな

り神経をすり減らした。帰つてから高熱を出して学校を休んだことを覚えている。もちろん学年で行動する修学旅行の時はがまんするつもりではいる。見境なくわがままを言つていいわけではない。

でも今回は、「一年D組評議委員によつてプランニングできる」というものなのだ。自主企画なのだ。だつたら絶対に譲りたくない部分だつた。

当然のことながら、菱本先生には何度も怒鳴られた。

「だからお前はわがままなんだ、立村、みんなはもつとこの機会に、裸の付き合いを求めているんだぞ。学校ではみんなのことを思いやつて行動するのが当然のことじやないのか？」

一步も引かなかつた。

「一泊程度だつたらまだかまいませんが、やつぱり一泊になるとみな、身体の具合を悪くする人もでてきます。また、いろいろな人と一緒に過ごすことが困難な人もたくさんいます」

できるだけ冷静なままで話を進めようと決めていた。感情のフイルターをかけて、美里と相談した譲歩案を出した。

「どうしてもそれが問題があるのでしたら、生徒の部屋にはカギがかけられないようにしてもらうといつのはどうですか。それだつたら、先生も安心して様子をうかがうことができるんじゃないですか」「あまりにも険悪な流れに美里も不安を感じたのだろう。何気なく言葉を挟んでくれた。

「先生、電話で他の人たちに意見聞いてみるから、それから決めていいですか？ 立村くんだけの案じやないから。そうしたら、安心できるんじやないですか？」

夏休み最初、さつそく連絡網で意見を募つたところ、D組の男女ともにホテル案が受け入れられた。陰で上総がもつともらしい説明の暑中見舞いを男子全員に送つたことを、たぶん美里は知らない

部屋割りもツインルーム、一人ずつだつた。ひとりだけ三人部屋として補助ベットを出してもうことになつた程度で、問題も特別

起きなかつた。

上総の同室は貴史だつた。端から一一番田。一番端に菱本先生の部屋があるのが気に入らないが、それ以外に不満はない。

女子の部屋は男子部屋の真向かい一列だつた。

「女子と話をしたい時はロビーを使いなさい。ただし、夜九時になつたら自分たちの部屋に戻ること」

別に、無理して夜這いする気もない。上総は冷めたまま菱本先生の注意を聞いていた。むかむかして今にも吐き出しそうな状態をこらえたまま、急いで自分の部屋に向かつた。番号はあるがカギはない。勝手に入つてこられてもしかたない。ただし、女子は別だつた。男子はともかく女子だけは、カギを持たされていた。美里がそのあたり、女子への電話連絡網で意見を集め、自分なりに交渉した結果だつた。上総と違つて美里の受けはかなりいい。あつさり受け入れられたようだ。

「お前大丈夫か、本当に今にもぶつ倒れそうだぞ」

貴史が心配そうに上総を見る。

「とにかく、部屋に行つてから、少し寝たい」

「まだついたばかりだぜ。これから黄葉山に上るつていうのにか？」

「一時間だけでいい」

部屋に入るなり、上総はベットに倒れこんだ。

窓が大きい。カーテンの隙間から白い光がじゅうたんに落ちている。寒すぎないけれど熱すぎない。貴史が窓をすぐを開けてくれた。部屋の中から見える景色は、黄葉山と名のあだけあり、薄黄色の粉末がはたかれているようだつた。空気の匂いも青湯とは違う。木々のかすれた粉っぽさが鼻の中に流れるようだつた。なかなかの実が青く、ぶら下がつていて。山といつても、むしろなだらかな丘に近い、広々とした原っぱだつた。登山遠足のように息切れしないですむ。だから行かなくてはならないと分かっている。でも、どう

しようもなく、胃が気持ち悪くてめまいがする。

まあもつとも、上総の場合は夏、すかつと気持ちのいい日なんて一日もないのだが。

「バレー ボール大会はさ、絶対優勝しようぜ」

「元気だな、お前も。でも俺は戦力から外してくれよな」

「どうしてだよ」

「レシーブをちゃんと決める自信がない」

男子、女子五人ずつ3チームをつくり、原っぱのあいまいな線をしるしに、男女対抗戦をやるいうというのが、菱本先生の強行な意見だった。上総にとつてはもう、いいかげんにしてくれというのが本音。制服から軽いデニムシャツに着替え、もう一度上総は枕に顔を伏せた。

五分くらいしか寝てないつもりだったが、貴史がいうには、

「もう三十分近く死んだように寝てたぜ、お前」

なのだそうだ。髪はぼさぼさ、目の周りには隈。学校で身なりをきちんとしている上総の顔とは思えない。大急ぎで髪をとかして抱えるかばんを持つていくことにした。父のお下がりである、よくしらないブランドのバックだつた。中には手帳も入つていて。今回の旅行をすべて計画した上総の記録である。でもあまり、見られたくないことも書いていて。かばんは絶対に手放してはいけないと思っている。

2 青鴎大学附属中学2年D組ファッショントエック

まずはロビーに全員が集まつた。決して広いホテルとは言い難い三十人も集まるとにかくうるさい。多少なりとも『山登り』ので私服が許された。しかし明日は街の散策中心なので、制服着用が厳命されている。

そんなのどうでもいいのに、とは上総の本音だがさんざんわがままを通してきた以上、無理に逆らうこともなかつた。

女子の格好はさすが、ジーンズ姿がほとんど中、キュロットスカートを短めにはいている子もいたりして、何気なく男子は目が足元に行つている様子だった。そのくせ隠そうとしているのが見え見えだ。むしろそういう野郎の様子を観察するのが面白かった。

美里の格好は、何度か夏休み中に見たツーピースのキュロットだつた。マドラスチェックの橙系上下で、ブラウス風の半そでジャケットと、膝丈ぎりぎりのキュロット。巣廻目なしに見ても、結構似合つてていると上総は思つてゐる。しかし口にはしない。何言われるかわからないから。

しかし、平氣で自分のお氣に入りを褒め称える男子もいないわけではない。

「すつごく、似合つてゐよ。彰子さん」
奴しかいない。

南雲の格好はまさに、真っ白いパークーに少し余裕のあるターロイスのジーンズ姿。濃紺のTシャツには锚の柄がさりげなく施されている。上総もあまり詳しいほうではないが、ある男性芸能人の生き写し、そのものだといつ。髪がシャギーなのは相変わらずで、どうもきつちりとブローしてきている。一部では「化粧道具まで持つてきているらしい」という噂まであるくらいだ。

そんな南雲が、本日一緒に連れ歩く予定の奈良岡彰子は、決して似合わない格好をしているわけではない。ちょっとフリルのついたジーンズ系のブラウスに、やつぱりデニムのロングキュロットだ。膝まで隠れるくらいだが、丈がちょっと合わない。一番足が太く見えるラインで切れている。あれは誰か、気遣つてやれよと上総は密かに思つてゐる。ぽつちやり体系の奈良岡ではあるけれども、周りが言つほど不細工だとは思わない。むしろ、目が大きい分あどけなさが垣間見えて得をしているのではといふ気がしていた。

ただ、誰かセンスのいい子がもう少しさんとかしてやるべきではないか。

その相手は、南雲、お前じやないのか。

貴史は「うう」と、シンプルな黄色のTシャツにジーンズ。大抵の男子はジーンズが多い。チノのスラックスを着るようなのは上総くらいのものだった。どうも上総は、ジーンズといわれる系統のものが好きになれない。親類のお下がりで全く持っていないわけではないのだが、もともとからだが細いこともあって合わない、という言い訳のもと一度も着用していない。

好きになれないというただそれだけなのだが、周りからは「立村のこだわりって理解できない」と言われる。同じように、丸首のTシャツ、さらにポロシャツのようなものも、よっぽどのことがない限り、絶対に着なかつた。体育の授業で否応なしに、学校指定の水口を着用するくらいだ。

ひとりだけ、ジーンズのオーバーオールを着ている、妙に似合う男子がいる。水口要だつた。中に来ているのはやはり襟のついた半そでのチェックシャツだつた。暑苦しそうだつた。

上総は水口に声を掛けた。

「すい君、大丈夫か？」

年齢こそ同じだが、精神的にかなり幼いところのある水口は、クラスで「すい君」と呼ばれていた。いじめるなんてことは誰もしない。クラスのいわば、「赤ん坊」のような存在だつた。菱本先生もその辺はよく心得ているようで、クラスメートの中で一番気にかけている様子だつた。

水口は小さな布リュックを背負い、頷いた。

「うん、ちょっと暑い」

「もし、具合悪くなつたら無理するな。俺も体調崩したらすぐ帰るから遠慮するなよ」

水口は見た感じも、さらに行動も小学校中学年程度にしか見えない。ちょっとしたことでからかわれるたび物を投げつけて泣きじやくるところも、手がかかるのはわからなくもない。こういう奴がよく青大附中に入れたというのが正直なところだ。ガキっぽすぎるとはいえ、成績はトップクラス。そのアンバランスさがかえつて、頭を抱える原因になつているらしい。

だが菱本先生の水口に対する接し方は『幼稚園児』ターゲットだ。体調の是非をこまめに確認するのはいい。

給食の食べ残しをチェックされるのも、まあ仕方ないだろう。だけど、周りの連中と一緒に遊んでいる時に、「お前ら水口にあわせてやれよ」と、本人のいる前で声を掛けることはないだろう。もちろんこちらも気を遣つていなければならない。

田の前で自分をみそつかす扱いされた水口の気持ちを全く考えようとしたい菱本先生に、上総はいつのまにか憤りを覚えていた。もつとも、水口本人はあんまり気にしていない、風に見える。だから、菱本先生も平氣で接するに違いない。

上総は水口を人のいないうらやまくクローケに引つ張つていった。他の連中に聞かれるとまずいことだつた。

「あのさ、すい君。この前のことなんだけどさ、一晩徹夜する自信はあるか?」

「うんと、わからぬ」

「だよな、その時になつてみないと、わからぬよな」

表情を変えないよう気をつけながら、上総はささやいた。

「わかった。じゃあ、どつちにせよ夜中の二時過ぎに、俺がすい君のいる部屋に、用事がある振りして入つていくからさ。無理やり起こすかもしれないけれどいいか?」

「うん、ありがとう」

水口の表情に陰りが見えた。今にも泣きそうになつてている。理由は上総も重々承知だつた。

「それとさ、この前も電話で話した通り、バスの中で間に合わないと思ったら、ペットボトル、あれを使えよ。すい君の隣は、金沢だろ？隠してもらって、膝にタオルをかけてすれば、絶対に女子に気付かれないからさ」

「すごい、どうしてそこまでできるの」

水口のきょとんとした幼顔に、表情を変えず上総は頷いてから、素早く貴史たちのグループに混じった。だいたい男子のグループには三種類あって、ひとつが貴史の率いるクラスの中心元気いっぱいの連中、ひとつは南雲たちのいる、ファッションやハードロックにやたら詳しい、ちょっと派手目の連中、もうひとつが水口たちのいる、クラスにちょっとなじめないタイプの連中だった。上総の場合いつも、三グループをふらふらと行き来しているが、メインはやっぱり貴史の補佐だった。

「よし、それでは全員揃つたか！ ではいくぞ！ 黄葉山ハイキン

グだ！」

「わーい」

元気な女子たちが歌を歌いながら玄関に走つていった。本当にみな、元気な連中だ。上総はまだむかむかする胃を抑えながらついていった。

貴史がミントガムを差し出した。口の中だけでもさっぱりさせたくて、ありがたく頂戴した。

3 坂をのぼつて千畳敷へ

バスに乗つて三十分。

運転手さんは笑顔で迎えてくれたがタバコは手放さない。

貴史と美里の二人がバスガイド用マイクを使ってカラオケ大会を催し始めた。その脇で、上総はひたすら目を閉じていた。油断した

ら大変だ。そのへんお好み焼き状態になつてしまつ。

貴史はマイクを近づけてくる。

「ほり、立村、お前もなんか歌えよ」

「悪い、頼むからそれだけは勘弁してくれ」

「なに嫌がつてるのよ。立村、あんた音程狂つてないくせに」

一年時の音楽歌唱テストで、みな好きな曲を選び、カラオケつきで歌わされたものだつた。一時間たつぶり音楽の時間を取つてあつたので、結局は紅白歌合戦状態だつた。企画を立てるのはかまわないのだが、自分でも歌わなくてはならないと知つた時、上総はめまいがして卒倒しそうになつた。結局、シンプルなバラードっぽい曲を必死に探して事なきを得た。あの時の恥ずかしさといつたら、三ヵ月後の『評議委員会ビデオ演劇・赤穂浪士』に匹敵するものがあつた。

「無理させないほつがいいかも。立村くん顔色真つ青だからほつときましょ」

よくできた彼女が「ると助かるということを、再認識する。

清坂氏、ありがとう。」の一言をささげたい。

幸い、横揺れが少なかつたこともあつて、黄葉山に到着したのは十一時近くだつた。山といつても、実際は自然公園に近いつくりとあつて、ある程度舗装された坂を十五分くらい歩く程度だつた。が、その坂が傾斜きつぐ、いくら歩いていつても平行線が見えない。何にも持つてこない方が正解だつたと上総は思った。バックもそんなに重たいわけではない。洗面道具を入れる袋程度のものだけ、歩いていいるとやつぱりしんどい。

でもみつともないところは見せられない。なにせ女子が元気すぎるので。美里は古川こずえと一緒に楽しそうに走つていつた。

歩いているのではない、走つていてる。

「立村くん、上で待つてるね」

追い越しきわにさわやつていくのはなぜだろ？。

「あんたも持久力足りないと、将来困るよ」

とはこずえの言葉。何を言いたいんだ。全く。

「立村、お前そんなに体力ねえのか。手、ひっぱってやるつか」

とは貴史のお言葉。結構です。そのくらいこのプライドは持つている。

後ろの連中を心配する振りをして、一步一歩踏みしめて「へ」とにした。振り返ると、下の方では南雲と奈良岡彰子が仲良くなっている。よく見ると、奈良岡の方がかなり疲れきっている。苦手だろう。こういう体力を使うのは、手を差し伸べて、「握れるし、一緒にいてもおかしくないし」と笑顔でひっぱっているのが南雲だ。隠したい気持ちもあるだらうに。奈良岡は田立たないように騒ぎ立たないようとする。

「どうやらかいとせ、内側に沿つて上ったほうが、楽だよ」

上総は南雲と田が合ひ、軽く手を振つた。

「つちやあん、そつちばどですかあ」

気持ちよい声の響きに上総も答えた。

「あと、もう少しだよ」

さらに後の方はと見ると、菱本先生が手をつないで水口を引っ張つてゐる。ほとんど半べそ状態だ。心配そうに、金沢卓がくつついてゐる。

もつとも金沢の場合、荷物がやたらと多いので、かなりしんどいだろう。荷物の中身は公認だ。水彩画道具一式。去年の文集作りでもつとも活躍したのが金沢だつた。クラス全員の横顔を、一枚一枚書き上げて、全部掲載したといつ兵だ。くつきりとしていてひきつけられる雰囲気だつた。

〔冗談で上総は

「これ、売つてくれないか?」

とからかつたことがある。今考えるとかなりするどことこを突いていたと思つ。

その後金沢は別の絵で青潟の展覧会に入選した。学生だけではなく、プロの人も混じつている絵画展でだった。もう冗談でも、「売つて」なんていえない。身上つぶさないでよかつたと上総は思ったものだった。

菱本先生たちは先に登りたいので、上総は無理やり走り加減で足を動かした。かなり無理している。奥からのかすれた響きでわかる。

到着してみるとそこは通称「千畳敷」と呼ばれる叢だつた。ちゃんと観光客用に食事場所もある。その辺はきちんと整えられている。秋の草花らしきものもたくさん咲いている。青潟には咲いていない黄色い野草もあれば、薬に使われるらしき薬草も生えているという。詳しい奴にその辺は、今度レクチャーしてもらおう。まずは腹ごしらえとして、近所の売店でお弁当を購入することにした。

「余計な出費を防ぐため手作りの弁当を用意した方がいいんでは」という、菱本先生の意見をあつさり切つたのも上総だつた。

「お母さんがいる人とか、作ってくれる人だけならいいですよ。うちなんかどうするんですか。俺も一食分作つて持つていく根性ありませんよ」

本当のところ料理そのものは得意なのでたいしたことじゃない。でも連絡網を使い、電話でいろいろ他の連中と話をしているうちにそれぞれの家庭事情が見えてきた。

お母さんだつて、好きで弁当をいじらえているわけではないとか、腐りやすいとか、いろいろあるのだ。

菱本先生が心配していたのは、三十人分の弁当がちゃんと手に入るかということだったが、売店はなんと三箇所もあった。この小さいところで、よくも。と関心した。きっと同じこと考えている学校

の生徒がいるんだろう。

上総が選んだのは山菜弁当の方だった。腹持ちのいい「まんも」が食べたかったのと、でも油物は避けたいといつ、「一一点だった。周りの連中はサンドイッチや菓子パンで済ませてこらねりだつた。腹空かないのか?と聞きたかつたけれども、空腹には勝てない。貴史たちのグループで集まり、シートを敷いてまずは食べ始めた。隣には美里たちが女子五人でかたまつっていた。いすえの他、今日は奈良岡彰子も混じつていた。

「彰子ちゃん、珍しいね、今日どうしたの。サンドイッチだけなの?

「やつぱり、いろいろ考えるのよ

丸顔に前髪をすくつて、ほんほんのついたゴムで止めている。額をきちんと上げてるので、よく見るとあどけなさが見え隠れしている。南雲の影響か、上総も最近は奈良岡彰子のルックスがさほど、とは思わなくなりつつあった。たぶん、損をしているとしたら、身体のぽつちやり加減だらう。

それさえなくせば、かなり。

ということは、今、ダイエットしているんじゃないだらうか。

俺みたいに食べても食べても太らない体质ならともかく、反対の人もいるしな。

上総は、わびしそうにサンドイッチだけかじつてこら奈良岡に隠すように、じ飯を口に運んだ。他人から見ると、非常に「まずそつ」に食べているよう思われるところだつた。

旅行一日目のメインイベント、といつことで、菱本先生は網に入れたバレーボールを取り出すよつ、上総に指示した。持つてきたのは菱本先生だ。上総は意地でもタッチしていない。やる」と自体を無視していた。

なんでの先生つて、やたらと「集団」でやる」とこじだわるんだろうか。

なんでこの先生つて、みんなで感動を求めたがるんだろうか。ほつといてやつてほしい奴には、ほつといてやつてほしい。例えば、この俺みたいに。

指で押すと滑らかでやわらかいボール。白い、さわり心地のよいものだつた。しばらく撫でていると、やつぱり見つかった。『じゅえんの一聲だ。

「なんだか、す』く卑猥なさわりかたしてない？ 立村の指つて『古川さんも触つてみるよ。気持ちいいよ」

「え、気持ちいい、つてまで、言つちやつていいの？」

にやりとして、『じゅえんは続けてきた。まだよと、周りではやし立てる声がする。

『じゅえんと上総とのしじうもない、下ネタの突つ込みあいは、すでにD組での年中行事となつていた。

人よんと「朝の漫才」ともいつ。また別の奴らは「夫婦漫才」と名づけているのもいる。

「だれかさんの、ふとももみたいな感触でしょ。触らせてもらつたことつて、ないの？」

「そういうあなたはどうなんですか、よく細かい」とじゅえんまで知つていることだ

ぽんと、上総は『じゅえんにボールを投げた。反射的にすぐ、受け取つてくれた。よしよし。

「うわあ、ほんと、新品。ねえ、もしかして菱本先生、この日のためにボール買つたんじゃないの？」

「たぶんな。あえてその件については何も言いたくない」

「ホールは原っぱそのものだから、線を引いているわけでもないし、アウトラインがどこなのがも目見当で決める。

菱本先生が一応、小枝で線を引いて、『じんに落ちててる色つきの石まで並べてくれた。

「じゃあ、始めるぞ！」

全く、元気な先生だ。付き合わされる方はやつてられない。

各五人ずつ、チームを分けた後、美里と相談して男女総当り戦試合をしてもらうこととした。

「立村くん、ほんとに、今日はやる気ないでしょう」「ない、全くないね」

「運動嫌いじやないくせにね。変なの」

「深い理由はないよ。ただ、押し付けられるやり方が、いやなんだ」美里は、納得顔をして頷いた。

「立村くんつて、そういうの死ぬほどいやがっているよね」

「当たり前だよ。清坂氏は平気なのか?」

ちらりと周りを見て、誰もこちらに視線をやつていないことを確認し、美里は耳もとにささやいた。息が耳の穴に溜まりそ�で、熱かつた。

「大丈夫、私が免疫になつてあげるから」

こういう時、上総の感覚はふわっと麻痺してしまつ。言葉がではない。

吐息の熱さつて、こういう時に感じるものなんだ。

世の中には、信じ難い感覚があるんだ。

これが「つきあつている」同士の特権、なのかな。

「好き」という感情とは違うものだけど、気持ち悪くはない。

バレーボールの試合は、やたらと盛り上がる美里と貴史の掛け声によつて、騒がしさだけは倍増していた。半病人状態の上総は、適当に貴史へボールを回すだけで精一杯。結局、一部の人間が疲れ果てた段階で休憩となつた。

「お前ら、若いくせになんだそのだらしなさは、全く泣けてくるよなあ」

一人で泣けよ。うつとおしい。

心で罵詈暴言を吐きながら、上総は貴史たちの陣地に坐つてぼんやりと景色を眺めた。青湯の夏は短いと言われる。特に山の方はあ

つといつまにナナカマドや銀杏が色づき、九月半ばには紅葉狩りもできそうな風情となる。ましてや奥まったここ、黄葉市は半月近くそれが早い。

「金沢、お前、絵、かかねえの?」

水口と一緒に坐つて水彩セット準備に余念のないのが金沢だった。貴史が気付いて、水を汲んでやつた。

「描きたいけど、でも」

金沢と水口は顔を見合わせて、菱本先生の方にちらつと視線を走らせた。

「先生がたぶん、山の方の景色を描けつていつんだろうなあ

「不満かよ」

「本当はあの、原っぱを書きたいんだけどな」

ずいぶん地味な趣味だと思う。でも、珍しい花も咲いているし、かなり面白い着眼点だ。聞きつけて上総もささやいた。幸い菱本先生は南雲たちのグループと、なにやら音楽の話で盛り上がっている。聞こえない。

「黙つてこい。描いてしまえばいいんだろ。なあに、決めるのは自分なんだからさ。鉛筆でスケッチしてしまえばこいつの勝ちだろ」

「そうか、そうしちゃえればいいんだ」

金沢は水口に

「すい君、その草をむしつて、ついでに虫とかいたら、なんでもいいからとつてくれないかな」と、声を掛けていた。

「いつたいあいつら何を描くつもりなんだ?」

貴史がささやく。

「わからん。たぶん、宿泊研修後の文集表紙には出来ないよつなものだと思う。俺の直感だけだ」

「はあ?」

上総のたらんだ通り、一人はにこにこしながら土を掘り、そこか

ら「ガネムシやらアリを連れ出し、わざわざルームまで持ち出して細かく観察していた。[与生だとしたら、かなり怖い。女子には思いつきり怒られそうだ。つぐづぐ思つ。天才の考へる」とはわからない。

4 ちよつとしたわすれもの

気付かないうちにふたりの[与生も終わったようで、よつやく田も斜めに駆つてきた。もちろんまだ遊んでいられる時間、三時になつたところだけれども、バス三十分のことを考えれば、そろそろ潮時といつもする。

「じゃあ、お前ら、『じみは持つたか?』

菱本先生は弁当箱およびそれぞれの『じみを、大きなビニール袋にまとめ、

「ほい」

と、上総に手渡した。

「お前、最後に忘れ物がないか、見てから最後に降りて来い。それが義務なんだからな」

別に異存はない。菱本先生は歌を歌いながら先頭に、水口と金沢のお絵かきコンビを連れて降りていった。くだりは早い。あいつら、走つてゐるよ。逃げ足の速い連中にあきれつつも、上総はさつと見直した。

かならず忘れ物があるんだよな。

別にそれはいいんだ。俺が持つてかえればいいんだから。

問題は、俺ひとりだと、それを見つけられないことなんだ。

じついう時に、美里がいると安心して探してもらえるのだが、ちよつと声は掛けずらい。すでに美里はこすえたちと一緒に、坂を降りていってしまった。残つてゐるのは貴史だけだった。

こらいらしながら待つてゐるようだつた。

「おい、立村、先行つちま「うぞ」

「悪い羽飛、一通り見てもられないか」

上総の場合、なくしたものを探すのに尋常ならざる時間がかかる。ちゃんと自分では見ているはずなのに、こいつのまにか見落としていることが多いこと。よく忘れ物の鬼にならないですんでいると思つ。答えは簡単。とにかく、自分の荷物はきちんと、片付けすぎるくらい片付けてあるからだ。場所も順番もすべてきつちりと決めてある。ただし、それを誰かにいじられたりするともう田の前がパニックになる。もちろん人には見せないけれども。

貴史はぐるっと原っぱを足早に一周し、ふと立ち止まつた。

「こんなのは落ちてたぞ」

拾い上げたのは、黒い定期入れだつた。

「誰だろ、金なんか入つてないよな」

「それはないけどさあ」

ぽんと渡した。開いてみると、青大附中の学生証がモノクロ写真入りで刺さつっていた。「2年D組南雲秋世」とある。前髪をきちんと整え、幼さ残つた顔が写つていて。妙に厚ぼつたいのが気になるが、人のものをそう覗くのはまずいだろう。

「わかった。渡しとく」

「お前南雲と仲いいもんな」

感情を入れない声で貴史がつぶやいた。その通りだ、と上総も頷いた。

「てつきり奈良岡の写真でも入れていいかと思つたぜ」

「いや、それはたぶん」

上総はバックにきちんと入れたのち、

「机身はなさず持つているから、落としそうがないんだろ?」

「全くだ」

D組連中が誰もいなくなつたゆえに、貴史は響き渡るくらいい笑いこけた。声はかすかにこだましていた。

予定されていた庭園散策が時間の都合で次の日に延びた。

上総と貴史は、最後に到着し、ごみを処分した後ゆっくりとバスに乗り込んだ。

「お前らいつたい何をしてたんだ」「みんなの忘れ物がないか確認していたんです」

菱本先生の質問にそれ以上答えず、上総は一番奥の席に進んだ。南雲はやつぱり一方的に、奈良岡に張り付いていた。奈良岡彰子はというと、もう一人隣の子に、懸命に話し掛けている。あまり、男子とばかりくつついていると思われるのが嫌なのだろう。気持ちは大変よくわかる。南雲も少しは気を使ってやれと思うのだが、それなりに考えもあるんだろう。

「ほら、なぐちゃん、忘れ物」

「あ、ありがと。助かったよ。あれ？ 僕の定期入れだな」「全く、こんなにバスの期限が残っているんだからさ」

さりげなく渡して、さっさと戻った。さて、これからはホテルに一直線だ。思いっきり発車する前に、窓を全開にした。誰がなんと言おうとも、これだけは譲れない。

「立村、もう少し窓を狭くできないか」

「すみません、酔いやすいものですから」

冷たく答える。貴史も、

「先生、しようがないよな、こいつほんと、行きのバスで死人面してたから仕方ねえよ」とフォローしてくれる。ありがたい。

しかし敵もさるものだ。
「清坂、古川、そつちは寒くないか？ 寒いよな」

上総の方をちらつと見ながら、女子に声をかけてくる。味方を増やして反撃しようという手だらう。

「別にいいけど」

とはこづえの答え。しかしながら、今回敵は美里だつた。

「立村くん、体調が悪いのはわかるけど、あんた一人だけじゃない

んだから

たしなめるより、やつくりと。

「後ろの子も、風邪引いてる子いるんだから、少しは譲歩してよ」

あのな、なぜそつ、そつこうことこうかな。

美里の言葉に説得をせられたわけではない。最後にとじどめ。

「な、だからお前はいつも自分のことばかり考えてるつて言つん

だ。全く、本当に立村、それでも評議か。情けない奴だ」

結局それが。しぶしぶ上総は半分だけ締めることに合意した。

「大丈夫だつて、立村。本当にやばくなつたら、俺が面倒みてやるつても」

貴史の言葉は、本当にとこりありがためいわくだった。

「冗談じゃない、こいつなつたら意地でも耐えてやる。

バスが出発した。感じのいい運転手さんはやつぱりタバコを吸っている。

ちゃんと氣を遣つて外に逃がすよつこしてくくれてい。

上総の顔に煙が直撃するところ問題はさておいても、本当にこの人は、いい人だと思つ。まだめまいもないよつなので、しばらく貴史としゃべつていた。

「あのな、立村、そつきのことなんだけどな」

菱本先生に聞こえないように、小さな声だった。

「そつきの」とつて？

「ほら、南雲の定期入れだよ」

黒い皮のバス定期入れだつた。やたらと厚みがあつたのをまだ覚えていた。きっと貴史も同じことを考えたのだつ。

「渡したよ、ちゃんと」

「中、見たか？」

「まさか。南雲の定期見でどこが楽しいつて言つんだ」

「違う、もう片方の、厚みのあつた方」

貴史は美里たちと、後ろの様子をちらちら見ながら、ぐつと上総

の耳もとに口を近づけた。

「ゴムが入つてたみたいなんだ」

「ゴム?」

「ピンとこない。普通に響く声で答えた上総を、貴史は慌てて口をふさいだ。

「お前本条先輩から見せてもらつたことないのか? ゴムつてあれだよあれ」

「本条先輩?」

「本条先輩」とこいつ名前によつて引き出された答えは、簡単だつた。

本条先輩が日常的に使用しているといわれる、あれは、もつこやというほど、見せ付けられてきた。「お前もいつか使うことになるんだからな、よく選び方見とけ」と半ば強引にだつた。

「あの、もしかして、俗にいう、避妊具つて奴か」

貴史の耳もとにこれ以上聞こえないであろう声で、たれやいた。

「それしかないだろ」

「でもさ、まさか」

「でもそれしかねえだろ」

少し先走つた話題で、仲間内だけだと思いつきり馬鹿になる貴史だが、なぜかそういう気分ではないらしかつた。おちやらける気なんてさらさらないようすだつた。

「別に、それはいいけどな。奴がどう考へているかわからねえよ。お互いがお互ひだつたら知つたことじゃねえよ。ただな、そういうものを平氣でよく、持つてられるよな」

あれ、普段の羽飛の意見じやないな。

上総は言い返したくなるのをやめて、ふつと天井を見上げた。

「人のことなんだから、そんなのビツでもいいだろ」

「お前は南雲びいきだからなあ」

「こいつはなにげなく、妬いているんだりう。

おそらく、ゴムを使うチャンスのある南雲を、やつかんでいるん

だらう。

そりやそりやよな。

できるだけせりつとしたまま、上総は答えることにした。自分の個人的感情は風に流してしまったかった。

「本条先輩に言われたんだ。使つことは最低限の義務だつて。俺はとりあえず、本条先輩の主義に従つことにしているから、ノーコメントだ」

「全く、立村。お前本条先輩絶対主義だもんな」

貴史がもともと、南雲のことをあまりよく思つていはないのは知つていた。

グループが別といふこともあるだらうし、あまりちやらちやらした雰囲気の連中を好まないとこりもあるのだろう。意外と貴史は硬派だつた。洋服などにも、過剰に気を配つたりしない。美里にまよへ「貴史、いいかげんあんたも、もう少し洋服のセンスを磨きなよ。立村くんに似うなりしてさ」

ときついことを言われ、むつとしていたりするけれども、まあそれは否定できない。

「女子みたいにそんなもの、着る必要あるかつての」

言い返すものの、上総にはさほどひつこんだりしない。

上総もかなり、服装には神経を遣うし、好みもうること細う。

貴史にいつ、いやがられてもおかしくない。

「あのや、羽飛」

「なんだよ、立村」

すでに顔を窓辺に向けたまま、上総は尋ねた。

「そんなんに、服に気を遣う人間つて嫌いか
裏の意味を匂わせないで尋ねたかった。

「いきなりなんだよ」

「いや、なんとなくや」

向こうに向いたまま答えたので、貴史の様子は窺えなかつた。

軽く答えるかと思つたけれど、しばらく黙つてゐる。言い方に険があつたのかもと、上総は息を殺した。

「立村、あのな」

「俺が見かけだけで人を決めつけるよつた奴に見えるのかよ」怒らせてしまつたか。

「別にお前は女子受けするために服を選んでいるわけじゃねえだろ」ちよつと棒読み風に、投げやりに。

「お前はお前だ、それで十分だろ」

そのまま動かすにいたら肩にぽんと、ひとつ手をのつけられた。「ま、しばらく寝てろよ。着いたら起こす」

答えないですんとよかつた。ガラスにつつすら映る自分の顔には、情けないくらい泣きそうになつてゐる小学校時代の上総が見えた。自分にしか見えないその顔を隠して、二年間、青大附中で生きてきた。

5 ひとりしづかにゆめのなか

貴史の言葉に甘え、ずっと目を閉じてゐた。幸い、いづえのカメラ攻撃はこなかつた。あいかわらず元気な貴史と美里のコンビが、いきなりカラオケ大会を始めたからだつた。菱本先生も楽しそうに最近流行の曲を、英語で歌つたりなんかしている。

菱本先生が社会担当であることを知つてゐる上総としては、たとえ発音がひどかるうが、果てしなく日本語に近い歌い方をしていると思つても口にしたりしない。自分にかまわないで、寝させてくれればそれ以上なにも求めない。美里がその辺はわかってくれてゐるよつで、

「あれ、立村は歌わないの？」
といつこすえの声に、

「……のよ、どうせ眞会悪いんでしょう。明るい人だけでいいの?」
と交わしてくれた。とつてもだが「つきあつてている」相手の言葉
とは思えないけれど、その奥にちゃんと、意味があることを上総は
知っている。だから、かまわなかつた。たとえ美里が女子同士の集
まりで「所詮、情が移つただけよ」と笑い飛ばしているのを聞いて
も、腹なんか立たなかつた。

つきあいはじめてから、美里はずいぶん上総への態度ががらつぱ
ちになつた。以前だつたら懸命にかばつてくれていたらしいのに、
両思いになつたとたん

「全くあんたつて人は!」

と、かなり言いたい放題だ。貴史にも影でたしなめられているのを
聞いた。

「お前、ほんとに、立村の彼女なのかよ。しんじらんねえな。あ
れだけ熱上げてたくせに、これかよ」
と。

たとえば南雲のよつよ、奈良岡に対して「彰子さん彰子さん」と
べつたりすることなんて、上総には絶対できない。奈良岡彰子がた
め息をつきつつも南雲をやさしくあしらつてゐる、あれが限度だろ
う。その点、女子だけれども上総には奈良岡の気持ちがわかる。

上総と一年以上、友達付き合いをしてきて、美里はだいぶ理解し
てくれたのだろう。生々しい「恋愛」の匂いを上総は好まなくて、
むしろ突き放したように友達つきあいしてくれる方が、楽だという
ことを。上総が一番望んでいるのが、何かつてことを理解してくれ
るから、美里は思い切りつっぱなした言い方をするのだろう。
別に、私になんにもしなくてもいいのよ、と
べたべたしなくたつていいよ。

立村くんの、一番望む形で、お付き合いしていいんだからね。
つづづく思う。俺は本当に、この学校で、人間関係に恵まれてい
る。

「ひるをければひるをいせび、氣がまぎれた。田を閉じていると太陽の日差しがまぶたに映つて虹らしきものに見とれたり、橙色の花火の幻想を見つけたりと、それなりの面白い画像を楽しめた。隣では貴史と美里が何を考えたか、いきなり一人でデコエットを始めている。菱本先生のリクエストらしい。

「羽飛、清坂、お前らやつぱり一度は歌わねばならないだろー。」

「当然、隣に清坂美里の彼氏がいるなんてことは一切無視だ。」

「先生それはまずいっすよ。だつて清坂には・・・・・」

とのよけいなおせつかいも、あつさり切り捨てる。

「いや、やつぱりベストカップル同士の方が、聞いていて楽しいだろ」

菱本先生にとつて、一年D組のベストカップルは決して評議委員コンビではないらしい。

これが普通の恋人同士だつたら激怒するんだろうな。

寝ている振りをしたまま、上総は思った。

俺は全然、そんなのに関心ないから、別にいいんじゃないかと思うけどな。

かえつて、話しかけられるようそうしてくれたほつが退屈もまぎれるし。

「立村、お前起き上がつて抗議しろよー。つたく、だからお前女子に『昼行灯』つて言われるんだぞ」

好意的な応援をありがとう「」ぞこます。

でも、周りからひゅうひゅう言われて結婚式ののりになるようになります。

「なんでお前とまた、組まなくちゃなんねえんだよ。全く、相手のいる女子と歌うなんてさ」

「私だつて、なんでまた貴史となのよ。で、何にする? いつものあれにする?」

「あれがあ

「あれ」とは、どうやら一人の小学校時代、しおりの歌つていた一曲らしい。付き合いが長いとレパートリーも増えるようだ。「でもなあ、じゃ、新曲でいくか。『砂のマレー』の主題歌あるだろ、あれでいくか」

「ミーハ なんだから、貴史は上

やり取りを聞いているだけで顔がにやけてくる。ちなみに「砂のマレイ」主題歌「サンデルージュ」は、男女コンビで歌われている。途中にせりふが入るので、そこをうまくやり取りするのが、コツと言われている。毎回、作品中で遣われるせりふを用いるので、お互
い息が合わないとまぬけに終わる。

なかなかやるじやないか
やっぱ、これは羽飛と清坂氏でないと、できなによな。
寝ている振りしてたつぶり堪能させていただいた。

まだ二十分くらいある。時計を薄田で確認し、タバコの煙を吸わ
ないうよう息を止め、振動にあわせてめまいをこらえていた。目を
つぶるだけでだいぶ楽になる。そうしているといろいろなことが、
ぐつぐつ煮込むような感じで煮えてくる。ずっと気になっていたの
に、いえなかつたことのひとつひとつが、灰汁のように、浮かんで
くる。掬い取ると、ぺつたらした灰汁が、いつしか自分の本音に思
えてぞつとする。

なぐちさん、本当にあれを使っているんだろうか。
なんだか、信じられないけど、おかしくないとも思つんだよな。
やつぱり、夏に、そういうこと、あつたんだろうか。

つていると勝手に頭にへばりつぐ。

南雲も上総たちより一ヶ月早い程度の、「おつきあい」だ。たとえバスの最後方で奈良岡に甘つたれても、まさか「ゴム」を使うところまでは行つていないと信じていた。南雲よりも奈良岡の態度がまだ、ぎこちなかつたからだろう。そりやあ、本条先輩

のように「一股かけて、どちらとも深いお付き合いをしている人もいることはないが、でも自分にはまだ関係ない話だ」と思っていた。でも、決して、出来ないわけではない。

ふたりがそういう気持ちだったら、場所を確保して、「する」ことは出来るだろ？

今は特に夏休みなのだ。チャンスは山とあるだろ？

もしかしたら、今夜だって菱本先生の目を盗んで夜這いするのも可能だ。

南雲はそこまで強い思いを奈良岡に抱けるんだろうか。

もし今ここで田を閉じてるのが南雲で、「サンド・ルージュ」を楽しくデュエットしているのが奈良岡だとしたらそりやあもう、大変なことだろ？ 南雲がやきもちやきかどうかはさだかでない。でも、あれだけ仲良くしている相手が、あまり相性の合わない野郎といちやいちゃされていたら、おもしろくないに決まっている。もしかして、それを楽しんでいる上総自身が、変なのかもしれない。

普通は、こういう時、もっと妬くんだろうなあ。

俺はもつと、羽飛と清坂氏の漫才を聞いていたいんだけどな。

それでも一応、俺は清坂氏とつきあつてていることになつてているんだ。

一年D組の公認カップルってことだ。

事実だけがずっと手の届かないところにあって、自分がまだ間に合わないって感じだ。リレーのバトンタッチみたいな感じだろ？ どんなに走つても、前の走者が離れていくっていうような。で、思わず転んでしまってバトンを落としそうになるというのかな。

夢の中でたまに見る、顔のない少女との戯れ。いつか本条先輩がくれたグラビア写真集でみつけた、ボブカットのたおやかな、哀しげなまなざしをしたショミーズの少女。いくつかの記憶が「ゴム」という言葉から溢れていき、まぶたの裏を走つていく。薄暗い橙色のベールを、閉じたまぶたの奥にみつめながら、いつしか上総はほ

んどの夢に落ちていつたらしかつた。

「おー、立村、もうついたぞ」

貴史にゆさぶられて目を覚ますと、すでに全員、バスの外に出ていたようだつた。ホテルの入り口でまだ数人がうぶらうしている。バス運転手さんも、にこやかに振り返つてゐる。

「大丈夫でしたか？」

「はい、大丈夫です」

たぶん、顔はまた、朝と同じくらいひどい状態なんだろう。寝起きの顔はもう、同一人物と思われないようなやつれ方なのだ。上総は貴史に軽く手を引いてもらい起き上がつた。運転手さんに無理やり笑みを作つて頭を下げた。

「しつかし、あれだけうるさい中でさ、よくもまあ、寝られたよな。ある意味でお前尊敬するぜ」

「たぶん夜は寝られないかもしない」

「へえ、お前寝る氣でいたんだ。甘いな、それは。宿泊研修一日日の夜は、徹底して付き合つてもらつて約束だろ。な、立村」「軽口を叩きながらバスを降りると、玄関の方を振り返る女子の姿が見えた。

美里かどうか、判断はつかなかつた。

「しつかし、美里つて薄情な女だよな」

「慣れてるから別に」

一步踏み出したとたん、急に溜まつていいためまいが頭の中をわんわん鳴らした。今さらになつて酔いが出てきてしまつたらしい。ぎゅつと貴史の手を握り締め、すぐに緩めた。恥ずかしい。

「いきなりなんだよ。あ、そうか、夢の中でさ、美里と間違えたのかよ」

「そんなんぢやない。たつた今、俺が望んでいふことはひとつだ」「顔を上げて上総はゆっくり、貴史に答えた。

「何も考えず、横になりたい。それも当然、ひとりでだ」

「わかった。要はお前、吐きたいくらいに真面目いんだな」

その四 一寸田あやすみまでによしない」と

- 1 臨時個人面接の時間
- 2 サスペンスドラマを見ながら一言
- 3 てさぐりのクラスミーティング
- 4 めにみえる危険性

その四 一寸田あやすみまでによしない」と

1 臨時個人面接の時間

上総は貴史と共に、自分たちの部屋に戻るつもりでいた。一度、クラス全員で大部屋に集合し、そこで夏休みみなにをやらかし、どうへんで遊びほつけたか、最後に宿題はどこまで進んだかななどを報告しあう予定だ。どうせ、三十分くらい余裕があるのでからと思つていた。

まあ、一応は、研修らしきことも、ませておかねば。

上総なりの考慮点だった。菱本先生も待つてましたとばかりにOKを出した。

「おい、立村、ちょっと来い」

「なんでしょうか」

奥歯をかみ締めて理性を保つよう、自分に鞭を入れた。気付いているのかいないのか、菱本先生は時計をちらりと見て、次に貴史の方に軽く頷いてみせた。

「悪い、羽飛、ちょっと立村とふたりつきりにしてくれないか?」

「先生、まさかそういう趣味だったのかよ」

からりと貴史が言ってのける。

「ばかだなあ。俺は完全なノーマルだ」
よくもまあそんなことがいえるもんだ。貴史に救いの手を向けた
が、あっさりと階段を昇ってしまった。

「こんなはずじゃなかつたつていうのに。」

ただでさえ車酔いが消えていないつていうのにだ。
一体何を言いたいんだろ？

また予定変更して外に出ようなんて言つんだらうか。
たまつたもんじやない。

真つ正面に坐ろうとした。菱本先生は首を振つて、隣のクッショ
ンを軽く叩いた。

要は、隣に来いつてことか。

「冗談じやない。」

耐えているのは自分が一年D組の評議委員だというプライドだけ
だつた。冷静沈着でありたいという意地もある。

上総はかばんを、菱本先生との間に区切り線代わりに置いた。

「立村、お前、夏休みはどうしてたんだ？」

言葉はいきなりがらりと碎けた。いつものようにしきりつけたり
頭ごなしに怒鳴りつけたり、そんなもんではなかつた。
ぞつとする。気持ち悪い。

「いえ、別に」

そつけなくも、礼儀は忘れないように答えた。

「お父さんと、どこかに行つたりしなかつたのか？」

「別にそういうことはありません」

ぴんときた。

もつとも上総の嫌つているパターンだつた。
防御しなくては。

「大変だなあ、お前のうちも、野郎がふたりだつたら大変だらうへ
「たまに母が来ますからそのへんは」
本当のことを言つてやつた。

「そつか、お母さんも心配なんだなあ。そりやそうだな。一人つ子
だつたもんなあ、お前は」

だからそう、お前なんてなれなれしい呼びかけするなよな。
胸焼けで倒れそうなのに、ますますひどくなる。

一人つ子と、心配と、どう関係があるのかわからかつた。
銃があつたらぶつ放してやつてているだらう。

一時期、巷では「教師を殴る生徒たち」という現象が取りざたさ
れたことがあつた。青大附中ではあまりそういうのを見かけないが、
他の学校では今でもなんとなく起つてゐるらしいといふ。菱本先
生に對してだけは、そうしてやりたい。

少しずつ離れよつとした。

「まあ、いいだろ。少しくらい。ところでだ、最近立村は、何か悩
んでいることとかないのか?」

「別にそういうのはありません」

「ほり、清坂のこととかあるだろ」

やつぱり來たか。

クラスで公認カツップルになつたのは事実だつた。でもクラスの連
中はさほど変な目で見ていないはずだ。要は一番色眼鏡で除いてい
るのだが、菱本先生だつてことだ。上総は答えを探して軽く指同志を
絡めた。あれかこれかと、迷つてゐた。

「別に、そういうことはありません」

「まあ逃げるなよ。初めて付き合つたんだる。清坂は面倒見いいか
らなあ。気持ちはわかる」

だからなんだつていうんだよ!..

言葉にならない言葉で口がねばねばしてきた。

「夏休みは、ふたりつきりで会つたりしたのか?
よかつた。これなら答えは用意されている。
堂々と答えてやつた。

「はい、羽飛と三人で、宿泊研修の計画を練つていました

「ほお、羽飛があ」

にやけだした。何を言いたいのかがおぼろげにわかる。

「羽飛と清坂は仲がいいもんな。お前、妬けるだろ」

「別にそういうことはありませんから」

早くこの不毛な会話を終わらせたい。上総は必死に席の立ち方を考えた。思い切ってぶつ倒れてしまおうか。でも介抱されるのは絶対にいやだつた。周りには誰もいない。みんな自分の部屋に戻つてしまつているんだろう。

羽飛、一生恨むぞ。

上総の本音を氣付かぬかのように菱本先生のお言葉はさらに続いた。

「まあまあ、お前からすると、あの一人は親みたいな存在だろうなあ。羽飛はやんちゃだが性格はあつたかいし、清坂は清坂で面倒見がいいもんな。立村、お前もあの二人みたくなりたいから、必死に評議委員をやっているんだろうとは思つていたよ」

顔をほころばせて上総を見つめてきた。

「うつとおしい。吐き気がする。身をかわそうとした。

「でもな、人間にはそれ向き不向きつてものがある。いくらお前が懸命に努力しても、受け入れられる部分とそうでない部分それがあるものなんだ。立村、お前、青大附中に入学してから無理してないか？」

「別にそういうことはありません」

目を逸らせたまま上総は答えた。

「自分に不釣合いな立場に立つてしまつて悩んでなんかいないのか？」

「別にそういうことは全くありません」

もう耐えられなかつた。これ以上菱本先生の側にいたら、自分が何をしでかすか分からぬ。それこそ、手元にあるバックで殴りつけるか、ソファーをひっくり返すか、握りこぶしで頬を張り倒すか。

そのどつちかだ。今まで、自分の手で人を殴ったことは一度もない。大人に対して怒鳴り返したこともついぞない。必死に押されてきたからだ。

しかし、この状態、この現状。

「ありがとうございました。少し気分が悪くなつたので、先に戻ります」

「おい、立村、逃げるのか」

頭の中で何かが破裂するような音がした。

上総は一気に立ち上がつて、まだ微笑みを絶やさずに見上げている菱本先生に一礼した。

どういう顔をしていたのかは想像がつかない。きっと泣きそうな顔をしていただろう。

みつともないくらい、顔がゆがんでいただろう。

上総が自分の中で理想とする、「青潟大学附属中学」一年D組評議委員」の、端正な表情では、決してなかつただろう。

「言いたいことがあるんだつたら、はつきり言つんだ。俺はなんでも答えるぞ。ほら、何が言いたい」

「別に何も言いたくありませんから」

殺意すれすれの感情を胸元のあたりに貼り付けたまま上総は背を向けた。

こんな言葉に他の連中は感謝したり感動したりできるんだ?

どうして誰も、一発殴りつけようとかしないんだ?

第一、どうして一年D組の担任としてあいつは評判いいんだ?
絶対、絶対殺してやる。

それともなにか? そう思う俺の方がおかしいのか?
なにが「親のような存在」なんだ?

「逃げる」だと?

階段を昇つて後、ホテルの部屋をノックするまでの間、誰にも顔

を見られないですねんだのが救いだつた。独り言をつぶやきながら、げんこつを握り締めていた自分の姿は即座に抹殺してやりたいものだつた。それは自分がよく知つてゐる。永遠に見せたくない表情だつた。

2 サスペンスドラマを見ながら一言

「どうした、立村。菱本先生としゃべっていたんだろ。なにつこまれた?」

テレビをつけたままベットにねりこりがつてゐる貴史がいた。

「こいつのことを、なんで「親」と思わなくちゃいけないんだよ!」

深呼吸をした後、上総はゆっくりと首を振つた。

口元だけは笑うよ「う」。

「羽飛、あのさ」

「なんだ?」

「噂に聞いたんだけどさ、うちのクラスは父兄およびそのクラスからも人気が高いんだろ。菱本先生のクラスになりたいと願うやらがいっぽいだつて聞いたことある」

貴史はゆっくりと寝返りを打ち、身を起こした。テレビの音量を低くするため、スイッチをひねりながら、

「ああ、そうだつてなあ。だつてA組みたくさ、成績と進路の話しかしない」ともあるだろ。盛り上がりなくて一人、退学する奴が出てつて話を聞いたぞ。学校行事に全然燃えないところとかも、ほら、B組なんてそうだつたらしい。部活に入つている奴がほとんどだから、委員会活動にも情熱がもてねえとか言つて。C組はC組で、女子が死ぬほどうるせえだろ。それ考えたら、D組つてさあ、妙に仲いい。俺は好きだぜ。このクラス

「そつか。羽飛は好きか」

口の中で舌打ちし、ベットの上にバックを投げた。時計を見て、

まだ余裕があることを確認した。

「立村は嫌いなのかよ」

「嫌いじゃないよ。たださ」

言つてしまおうか、隠しておこうか、迷つた。

テレビの画面をちらりと眺めた。

ちょうど一時間ドラマの山場らしく、探偵と犯人の対峙シーンが流れていた。ナイフを持って脅している女と、冷静に答えを出そうとする男。ストーリーは終盤に入つてないと分かる。

「なんていうか、とにかく、こうしてやりたいって思つのは俺だけか？」

指差した。犯人の女に向けた。貴史も画面に改めて田をやり、ほおとため息をついた。

「菱本さんにか」

「あつたりまあだろう。どうして羽飛、お前冷静でいられるんだ？」

「へえ、何か言われたのかよ、また。美里と付き合つてていることだからかわれたんだろ。まったく、立村はそういうところがうぶだよなあ」

「お前にじょっちゅうつゝこまれているから慣れてるさ。それより言いたいことを口にするのはばかられる、何かがあつた。

貴史の顔を正面からじらみつけてしまつたらしい。ぎょっとした表情をして、身を引かれた。

「ごめん、別にお前のことを言つたんじや」

「驚いたぜ。立村すげえ目でじらむんだもんな。ま、落ち着けよ」

貴史はガムを一枚差し出した。枕もとにおいてあつたらしい。今朝もらつたミントではなく、なぜかブルーベリー味だつた。すぐ口に入れた。甘いものを舌先で感じると、なぜだか落ち着いた。つばがちやきちやき音をさせる。ふたり、その音だけが響いていた。

「犯人、どうなるかな」

「たぶん包丁で自殺すると思うよ」

上総は、予想通りの場面を眺めながら、ぼんやりと血しづきを見

つめていた。絶対に言えないことだけど、たまにこうやってしまってくなる時がある。人からは大げさすぎると言われるかもしない。こんなことを考えるお前が悪いと言われるだけだろう。

でも、菱本先生の話を聞いていた時。

もし、刃物を持っていたら押さえられていたか自信がない。

3 てさぐりのクラスミーティング

結局、十分くらいしか部屋にいられなかつた。部屋から出て、一階の大広間に向かつた。第一日田のクラスミーティングだ。菱本先生には説教をしないよう、遠まわしにお願いしておいたのだが、果たしてどこまで通じているだらうか。

誰か反抗しろよ、とつぶやきながら畳に上がつた。

すでに女子全員、男子の半数以上が足を伸ばしてわやわややっていた。

菱本先生が上座である。

背後にはカラオケセットを始め、敷き板がやたらと光る小上がりの舞台。幕の端つこには「祝・浜松組」と金の刺繡が施されていた。

「おい、ここにか『組』の何かなのかよ」

貴史が耳元でささやいた。明らかに勘違いしている。

「建設会社の名前だよ。まかりまちがつてもまずいとこからじやないって」

上総は紫色の幕側にすわり、片膝立て、片膝は伸ばしたまま落ち着いた。全員が揃うまで始められないけれども、たぶん大丈夫だろう。仕切り役は一応自分でやらなくてはならないけれども、たいしたことではない。

夏休み、みんな何処に行つてましたか？
何をしてましたか？

小学校レベルの内容だ。菱本先生が知りたがつてゐるんだからしか

たない。前もつて電話連絡で
「ちゃんと、一応もつともらじい」と、作つとけよ」と云えておいたから、みなそれなりの『思い出』を捏造しているはずだ。

南雲がひとりで入つてきて、ふすまを閉めた。

といつことはもう全員つてところか。

すでに奈良岡との行動は別々らしい。

当然だ。

まさかホテルの中までも、部屋の中までもべたべたしていたら大迷惑だ。

さすが次期規律委員長、本能より理性を優先している。

坐る場所もちゃんと野郎連中と一緒にだ。

数えようとした立ち上がり見回すと、美里も一緒に腰を上げた。

ざつと見渡し、上総に向かつて大きく一回、頷いた。

何を言いたいのかわからなくて近寄ろうとしたら、手を振つて押しどじめるしぐさをした。

「こるよ、全員。始めて大丈夫」

「数えたのか？」

「当たり前でしょ！」

美里はすぐに古川「数えたちと混じり、膝を抱えてわえずりだした。

菱本先生にさう言つてくれればいいのに、なんであつたと。

疑問はあつさつ貴史が解いてくれた。

「お前、数えるの苦手だろ。人にしろ物にしろ」

「ああ、確かに」

「去年の遠足の時、お前何回、集合した奴らの頭数、数えなおしたか覚えてるよな。立村」

か覚えるしかない。あつさつと。

「五回、よおく、覚えてるわ」

「だる。その時美里もいたよな」

思い出した。隣でじっと見ていた様子だったが何もある時は言わなかつたはずだ。黙つて、よつやく数が合つてほつとした上総の後から乗り込んでいったはずだ。

「つまり、あいつお前の行動を、頭の中にひとつひとつインプッシュしてゐんだなあ。やつぱり美里は怖い女だ」

「よく出来た評議の相棒がいて、俺は幸せだつて思うよ」
「よく出来た評議の相棒がいて、俺は幸せだつて思うよ」
言ひ捨てて、上総は菱本先生に声を掛けた。まだ声がくぐもつてゐる。響きが荒い。咽がちくつとする。

「先生、全員揃いました」

いわばなおやつこ、菱本先生の指點により答えていく形。円陣で適当、一応はみな旅行もしていたようだし、ネタに「あきる」とはなかつた。

「やうか、じゃあ、清坂、お前はどうしてたんだ？ 夏休み
こやつと一聲、

「デートでしょ、デート」

と響き、ほとんどの視線が上総と、なぜか貴史の方に向いた。笑つちゃいけないけれど、笑いをこらえられない、そんな雰囲気だつた。首から上の空気がぼこつとふくれてあわ立つたみたいだつた。隣り合つた貴史と顔を見合わせ、すぐによそを向いた。意識してるなんて、思われたくなかつた。それは貴史も同じようで、反対方向の天井を見上げあぐびをした。

そんな雰囲気を無視できるのが清坂美里たるゆえんだら。

ちらつと視線を男子一同に投げかけた後、

「小学校の時の友達と、泊りがけで海に行きました。みんな思つてるとおり、羽飛くんとも一緒にすよ。ええ、みんな、期待してたでしょ！」

確信犯。お見事だ。

毒氣を抜かれた格好で、みなぼそぼそと隣同士でつぶやき始める女子たち。男子はあまり反応がなかつた。

もちろん、清坂美里の彼氏が誰であるかを、よおくわかっているからだらう。

「ほお、そうか。じゃあ、羽飛も一緒か」

「そうです。でも、ちゃんと、大人もいましたから安心してください。」

「うちらの両親と、あと別の友達の両親と」

「つまりなにか？ 家族旅行か？」

菱本先生が身を乗り出して訊ねた。

「うん、だよね」

貴史もはつと気がついて、じくじくと頷いた。

恐るべし。この二人に照れとかはにかみとかは無縁のようだつた。いまさら氣付いたというわけでもないけれど、上総からしたら貴史と美里とのつながりは、想像を絶するものがある。氣を遣つていないくせに仲がいいなんて、上総の感覚ではまず理解しがかつた。

「そうか、お前ら仲がいいなあ

「だつていつものことだもんね」

普通だつたら貴史がここで、冷やかされる羽目になつていただろう。ひゅうひゅう攻撃だつて仕掛けられるはずだ。なのに男子のみ、知らん振りを通している。そんなのどうでもいいから早く終わらうぜ、と言いたい男子達の本音が、鼻息、吐息、鼻水の音でよく、わかつた。

上総はふと、古川こずえの方を覗き見た。

美里の隣で思いつきり唇をかみ締めている様子だつた。上総と一方的下ネタ漫才をかましている時とは大違ひだつた。もちろん隠しているつもりなのだろうし、立場としては美里と一番の仲良しだ。言いたいことがあるだらう。しかもクラスの大多数は、貴史への片思いを重々知つてゐる連中だ。

どうでもいいけどさ、入り組んだ人間関係だよな。

海辺の思い出や、拾った貝殻で「じゅうえたアクセサリー」を纏め、「いろいろ説明する美里の声。すでにふたりから聞いていた。

妬く必要なんて、さらさらない。

周りだけが上総のいる方に向けて、吐息攻撃をかけてくる。意識はしていないう。でもなんとなく、「ふわあ」という、様子をうかがうような音。

別に関係ないだろ、人のことなんだから。

上総は空氣に、色をつけてみたかった。男子から来る吐息と、女子から来る視線の色は、果たしてどんなものなんだろう。円陣の真中に空気がたまつて球になり、やがて光りはじめる、そんなSFドラマを観たことがあった。その球がゆっくりと上総の前に近づいてきて、やがて頭の上に乗つかる。そこでうわっとばかりに液体となってこぼれおちる。頭の上にマーブル模様の液体が零れ落ちる、またそこでぐるぐると首の周りを浮遊しはじめる……。

俺が感じているのはまさにそれなんだけだな。

でもそんなこと言つたって、変だと思われるだけだよな。

「立村、どうした、妬いてるのか？」

かしいでいた頭を建て直し、上総は空氣の妄想から抜け出した。まだ首筋にはもやもやとした視線がまつわりついている。声は、菱本先生だった。許されたとばかりに、周りから笑いが小さく沸いた。下手に答えるとじつぼにはまりそう。無視した。

「まったくなあ。ほら、立村、お前の番だ。どこ行つたんだ？ さつき答えなかつただろ」「

マーブル状の空氣の輪で、咽を締められたよつだ。苦しくて痛い。

「どこにも行きません。家にいました」

「海には行かなかつたのか？」

「いいえ、ほとんどこの宿の準備でした」

海なんて大嫌いだからなんて、ことはさすがに言えなかつた。

暑いだけならまだしも、咽が渴いて熱が出て、動けなくなつて、食べられなくなつてと、ろくなことがない。一日中ベットにひっくりがえつていて、麦茶を飲みつづけていたなんて絶対に。

「そうか、そうか、だからお前いまだに焼けないんだなあ」

「妬ける」は「焼ける」と同じ発音だつた。

掛詞つてやつだらうか。

悔しいことに、上総はそういう言葉の当てこすりにつけには非常に敏感な性格だつた。

感じたくないのに、かつとなつてしまつ。

言葉がみつからないのに、怒鳴りたくなつてしまつ。

ねじを巻かれたように、じきじきと音が体中からするのはなぜだらう。

右手を開いたり閉じたりして、なんとか体の響きを落ち着けた。

「ほら、先生、俺と立村と、美里と三人でさ、やつてただる。宿泊研修の準備をさ。結構大変だつたんだぜ。ほとんどこいつが電話掛けたり、ホテル調べたり、観光案内取り寄せたりしてさ。悪いけど、遊んでる暇ねえよな」

貴史がのほほんとした顔で、割つて入つた。

ほつと、菱本先生も反応する。

貴史は上総にちらつと目をやつてから続けた。

「あ、でもさ、立村。お前と一緒に行つたよな。あそこ、青潟市立美術館。ほら、観光するところ決める時に、美術館に行こうつて話になつただろ。あれもどつか行つたつてことにならないのかなあ」

美術館。

ちろりと何かが火を噴いた。

咽と、そして目の中。

上総は目を閉じてうつむいた。思い出すよつなふりをした。

がつと閉じると、買った絵葉書と、静かな館内の冷たい空気がよみがえる。

そして思い出したくないことまで思い出してしまった。

「ああ、行つたな。やたらと直線が多い画家のだよな」
かろ「うじて言葉を搾り出すと、貴史は頷いて答えた。

「現代抽象画展示会つていう、あれ。先生も観にいかなかつたのか？」
な、あれすげえおもしれかつたよな。いろんな線がさ、変な
ものいっぱいこしらえて見ているうちにいろんなことが思いつ
てくるんだよ。な、美里、お前もああいうのり、好きだろ」
「だからといつて美術館の中でやたらとしゃべりまくるのはやめよ
うね貴史」

いかにもうんざりといつた風に、美里が答えた。貴史のほうに入
差し指をさし、数回振りながら続けた。

「なんでだよ。誰もいなかつたじやねえか」

「あのさ、あんたが芸術的感性に目覚めたのはよつくわかつたのよ。
それは認める。でもでもね。なんで見張つている美術館のお姉さん
たちの前で、『これは野良猫の家』『ここは青大附中の影にある謎
の銅像に似てる』とか『これは鈴蘭優が歌う時のセットに使うとい
い』とか、意味不明なことをしゃべりまくるのはやめてよね。人が
いなかつたからよかつたけどさ、ひざ掛けかけて坐つてた美術館の
人たち、ずっと私たちを変入つて目で見ていたよ」

上総も含まれていてははずだ。何にも話していないのに、貴史と美
里だけがひたすら騒ぎ立てていたので、上総の方に「少し静かにし
なさいや」といわんばかりの、冷たい視線を覚えていた。

「いいじゃねえか。素直な感想を言つてるだけなんだからなあ。そ
うだろ、立村」

「立村くんはああいつのり嫌いでしょ。あまり関心なかつたみたい
だもんね」

いつもやつだつた。貴史と美里が話しうると、まわりがなくなつ
てしまつ。最初は「羽飛くん」と、『丁寧に「くん」付けをしてい
たのに、関心のあることになるやいなや周りの視線も気にせずにし
やべる、語る、身を乗り出す。

隣には複雑な気持ちでいるであらわし、いざながいるのにだ。

わけのわからなかつた幾何学模様の絵画や、現代美術と呼ばれる針金をぐしゃぐしゃにした「オブジェ」。ただキャンバスを真っ黒く塗りたくつたよう絵。ペンキをぶちまけたような、見た目手抜きにしか見えないもの。文字だけを耳なし法一のよう「はずらつと書き並べたもの。

上総は何も言わなかつた。

口にするとすべてが壊れてしまいそつだつた。

いつものよつて、無表情のまま、膝を抱えて坐つていた。

4 めにみえる危険性

大抵黙つていると噛み付きたくなる気持ちも落ち着き、冷静沈着な自分に戻れるはず。だがミーティングが終り、夕食時刻を迎えても、上総はまだ、元に戻れなかつた。

もちろん人前で怒鳴り散らしたりとか、菱本先生に味噌汁をぶつかけたりはしない。精一杯の努力でもつて、普段どおりの自分で振舞つたつもりだつた。あくまでも、つもりだが。

でも隣の貴史をはじめ、離れた席の南雲、さらには美里といざなえまでもが帰り際、寄つてきたのはどうこうことだらわ。

廊下で呼び止めた美里は、

「どうしたの？ 私立村くんが何かしでかすんでないかと思つて、気が気でなかつたんだから。あんたが菱本先生嫌いなのはわかるけど、でもああまでにらまなくたつていいでしょが」

うなずくこずえの姿もあつた。

「全くいつものことながら、立村、あんたはほんとガキだねえ。菱本さん、思いつきり勘付いていたよ。さつき私たちにもね、聞いてきたんだよ。『立村の様子、なんだか怖くないか？』って」

いいかげんにあしらつて部屋に戻つたら、別部屋の南雲から内線電話が入つた。貴史が風呂に入つてゐる間だった。

「あれ、りつちゃんさあ、これから夜の散歩つてやるひりこねび、行く気あるのか」

「どうしてそんなことを聞くんだ?」

上総の疑問にあつさり南雲は答えてくれた。

「いや、なんとなく菱本さんに闇討ちくらわせたさそつな顔して、ずっと箸の先、かじつてただろ。先、はげてないか?」

まあい、完全に見られてゐる。

整髪剤であらためて前髪をつんつんさせた貴史は、ぼんやりと坐つている上総に向かつて一言。

「まさかと思ひつけど立村、お前凶器とか、持つてきてたりするかなぜ、と訊ねる前に答えが返つてきた。上総のかばんを軽く持ち上げ、ちろりとこりみ、

「気持ちはわかるけどな。何でも言つちまえばいいのになあなにをだよ、と言いたいけれど、図星を指されていふことはわかつていた。

貴史の言葉には投げやりだけど柔らか味もこもつてこることを知つてゐる。

気持ちいいかどうか、許せるかどうかは別としても。言い返すなんてことはできなかつた。

すぐに風呂に入りたかった。ユーチュバスだ。頬骨のあたりが妙に熱くてならないけれど、きっと日焼けしてしまつたせいだらう。頭がまだわんわんと鳴つてゐるけれども、ちょっと熱が出た程度だらう。これから夜九時前に、菱本先生と一緒に夜のお散歩があるのだ。シャワーを浴びた。

血が氷付けになつてしまつたようだ。

これって寒いってことじゃないだろうか？

今は八月だつていうのに。

水を浴びるまでは熱っぽいくらいだったつていうのに。

「羽飛、なんか寒くないか？」

風呂から上がり、上総は靴下を脱いではだしになつている貴史を探した。いないと思つたらなんのことはない、歌謡ベストテン番組を見ているのだった。当然、愛する鈴蘭優の「デビュー曲を聞くためだ。たぶん前もつてチェックを前もつてしていたんだろ？。邪魔するな」という風だった。

上総はジャケットを羽織りなおした。

「寒い？ どこがだよ、立村お前やつぱり感覚狂つてるぜ。それよかほら、優ちゃん、可愛いよなあ。ああいう女子がどうして青湯にはいなんだろ？なあ」

上総からしたら「音程が微妙にずれてているのはビリーハーことなんだ？」くらいだろ？か。そんなこと言つたら殺される。熱狂的ファンには、不要に逆らつべきではない、ということを、上総は評議委員会で経験していた。お元気だろ？か。結城先輩。相変わらず女性アイドルグループの追っかけしているんだろうか。

「まだ時間あるか？ ちょっとだけ横になりたい」

答えを聞かずに上総は布団にもぐりこんだ。格好は昼とほぼ同じだつたけれども、開襟シャツだけは替えておいた。一枚だけでは寒すぎる。ジャケットを羽織つても温まらない。しかたない、薄くてもタオルケットに包まつて落ち着きたかった。

蓑虫感覚でもぐりこんだけれども、体温の感覚が冷え切つたままだつた。

骨だけがアイスキャンディ状態になつてしまつているんじゃないだろうか。小学校時代氷に塩をかけて、試験管でアイスキャンディーを作る実験をしたことがある。塩をかけた氷には触れてはいけないと、きつく言わされたことがある。手がくつついて大変なことになるからと。

まさに今は、氷の身体に塩をびっちり塗りこめられたようだった。

「羽飛、悪い、なんかタオルかなにかかるか？」

「あるけどどうするんだよ」

「頼む、寒すぎる、俺このままだと、凍え死ぬ

鈴蘭優の黄色いフリルミニスカートに見とれていた貴史は、めんどうな返事でかばんの中を探していた。まだ上総に背を向けたまま、下半身をベットに残したまま、上半身をかばんの上に傾けたままだつた。

「ほいな、お前寒いって言葉、八月に使うもんじゃねえだろ」寝返りを打つて貴史があらためて、上総のベットに投げてよこした。

受け取った時、急に貴史が身を起こしはだしのまま、上総の顔を見下ろした。靴は履いていなかった。タオルケットの上からさらに貴史のタオルを巻いて暖を取っている上総の様子は、そりや変だろう。自分でもそれはよくわかつていた。

手を置き、貴史は上総の頭をかるくたたいた。

響く、やめてほしい。

「立村、お前、それって、風邪つてやつじゃねえの」「かもしれない」

歯を鳴らしながら上総は答えた。

「それでこれから夜のお散歩、行こうなんて、思つてねえよな」

「休めたら休みみたいに決まってるだろう」

「そいじゃ、休めよ。ほら、俺のも使えってば」

自分のベットにかかっている、まだ形崩れないままの薄っぺらいタオルケットを貴史は一気にひっぱがした。二つ折りにして、ぎくつと上総にかぶせた。

顔が隠れた。

光が隠れて、視界が橙色に染まつた。

遮られたからだろ？

まだ濡れている髪のぬめりが頬に触れて、気持ち悪かった。

「じゃあ、行くぜ。菱本先生には言つとくべ。どうせお前、朝から死んだ魚の田してただる。誰もが納得するつてばよ」

「羽飛、助かる」

顔をかろうじて出し、再度タオルケットを巻きつけなおしつつ上総は感謝の一礼をした。

全く寒さを感じていないのであらう、貴史。ふと、ドアの前にある鏡をちらとのぞき、前髪をもう一度つんと上げた。一言。

「今の立村、何やらかすかわからねえもん。怖えよ」

いつも通りの沈着冷静な自分は、もう演じられないってことだつた。一枚重ねると、少しばしだ。

上総は鼻を覆うくらい深く、タオルケットを巻きつけた。勝手に唇からもれた言葉はひとつだった。

「情けないよな・・・・・・」

その五 丑三つ時のこと

- 1 丑三つ時にそなえて
- 2 最悪の展開
- 3 最悪の展開その二
- 4 かばってくれたのか、それとも

1 丑三つ時にそなえて

ぐるまつているうちに眠くなり、気が付いたらすでに十一時過ぎだった。つまり、四時間以上死んだように寝ていたつてわけだった。淡い橙色のライトがドア、天井、そしてライティングデスクの側に設置されている。まぶしくないけれど暗くないのは、それだけだからだろう。

だいぶぬくもつてきたが、まだ動くのはきつかつた。

上総はデジタル表示の時計が「12：45」で光っているのを確かめた。蛍光色、緑色。目覚まし付。

あとで朝六時にセットしておかないとまずい。

たぶん羽飛はそんなこと、していないだろうしな。隣のベッドには戻っていないようすだった。

もどつてきたつて、上総が貴史のタオルケットを奪い取つている状態だから、寝られないだろう。たぶん、真夜中起きている連中の部屋にもぐりこんで、トランプか、はたまた宴会か、なにかやっているのだろう。菱本先生もその辺は大目に見てくれていいよつだつた。

「酒とタバコ、それだけは持ち込むな。いいな」と、旅行が始まる前にしつこいほど繰り返していた。

裏を返せば、それ以外はまあ、いいかってことだろ。ひ。

修学旅行や、他クラスと一緒に宿泊研修とは違うところだ。

夏休みに唯一出かけた旅行らしきものといえば、評議委員会の夏合宿だつた。青潟市内の青少年宿泊施設を借りて行つた。四人部屋だつた。上総と本条先輩とは一緒だつた。同室のはずだつたふたりが、別の部屋に泊りこんでしまつたので実質は一人部屋だつた。どんちゃん騒ぎをしたけれど、本条先輩の厳命もあつてか、酒タバコの持ち込みは一切なかつたはずだ。表の活動において、本条先輩は決して脚を出すようなことをしない。

本当だつたら上総も一緒に、貴史たちのグループでだべつていたらう。夜がふけるにしたがつて話もだんだん下半身中心になるだろうし、それなりにすべきなネタも出てくるだらう。

夜、何回やるのか。

どんな写真集を使つているのか、とか。
お前はいつたい誰が好きなのか、とか。
すでに経験したのか、とか。

黙つて聞いているうちは平氣だけれど、自分にとばっちりがくるとたまらなく腹が立つて逃げ出したくなるような話題ばかりだ。いつもなら貴史がまぜつかえしてくれるかなにかする。でも、すでに「彼女もち」とされている上総には誰も手加減してくれないだろう。ひ。

清坂とはどこまでいつたんだ？

清坂さんとすべきなことしたいとか思つたことないのか？

夢でいっちゃんつたりしないのか？

せめて写真使つたりしないのか？

具合悪くなつてよかつたことといつと、そのくらいかもしれない。

普通だつたらきっと、一緒にオールナイトできないつてことが悔しこのだろう。

一人で考えている方が落ち着くのはなぜなんだろう。

咽が渴いてたまらないので、冷蔵庫に入れておいた缶ジュースを取り出した。セットされている飲み物は高いので、ちゃんと自動販売機でまとめ買いしておいたのだ。うまく使うとちゃんと入る。ただ、冷蔵庫の温度があまりにも低いので、置き場所によつてはシャーベット化してたりもする。幸い、オレンジジュースを振つてみると、ちゃんと「水」らしい音を立てていた。しゃりしゃり鳴つた時はまずいと、経験上知つていた。頬につけて楽しんだ後、一口飲んだ。

同時に時計を見た。

田覚ましだ。

思い出すものがあつた。忘れるところだつた。

確か、一時だつたよな。起きるのは。

上総は説明下敷きらしきものを時計の下から抜き出し、四回繰り返して読んだ。平たいデジタル式時計のボタンを何度も押した。「2・0・0」に鳴るようセットした。

びんと耳もとで鳴りそつた、冷たいジュースを全部飲み干した後、もう一度横になつた。

一枚タオルケットを貴史のベットに戻すのだけは、忘れないようにしておいた。

「うとうとしながらも、神経だけはじりじりしていたのだろう。田覚ましが鳴る直前に田覚めた。

隣のベットに貴史は戻つてきていない。

電子音が三回、ゆるく鳴り、やがて強烈な響きに変わる。かさかさした空気が咽に染みる。さつきよりは少しだけ楽だつた。

上総は腕立て伏せの要領で起き上がつた。一度果てた後、もう一度回転して身を起こした。

頭の中はまだ、心臓の音が耳もとで響いている状態だつた。

目覚めた直後はそんなに痛くなかったのだけど、起き上がったとたん、急にうるさく響きだした。押されると、耳たぶが熱かつた。約束は、やっぱり果たさないとな。

枕もとのライトをつけて、かばんから「しおり」を取り出した。すでに折れ目がついている「ホテル内部屋割表」ページを開く。見るまでもない。少し離れているけれど、一番奥の部屋だった。脇には自動販売機が並んでいる。

たぶん貴史たちは真中あたりの部屋でこいつぞり盛り上がりしているに違いない。もしくはベットを占拠して寝ていたりして。できればそいつらとは顔を合わせたくなかつた。

上総はぼろ雑巾状態で眠つてていると思つていてはすだ。

金沢と水口。部屋のメンバーは一人だつた。

オールナイトしているんだつたら問題がない。できればそれがベストだと、前もつて伝えてある。

でも、もし寝てしまつてはいるとしたら。

上総の責任は重い。

あれだけ宿泊研修に参加するのを嫌がつていた水口を説得したのだ。

はつきりした理由を言わずに「行けない、行けない」を繰り返す水口に、上総は何度か電話を掛け、何気なく、

「もし、間違つていたら」めん。一年の時に菱本先生が起こしに行つてただろ。夜中にさ。もしかしたら、夜、トイレかなにかがますいのか？」

かまを掛けた。宿泊研修の時に、菱本先生が真夜中、自分の部屋にいきなり入つてきつたことを覚えていたからだつた。図星だつたらしく、水口は黙り込み、鼻をくすんくすんと言わせはじめた。

しばらく上総は受話器の向こうの様子をうかがつていた。

言葉が返つてこないので、思い切つて続けた。

「なら、そ、俺が起こして行つてやるよ。一時くらこりつそり、
気付かれないよつて行くかひわ」

「こるけど、でもやだよ」

「誰にも気付かれないよつてするつて。約束する」
もし笑う奴がいたら、俺があとで眼に掛けてやるからな。
心中でつぶやき、なんとか参加の意志を確認した。

寝汗をかいていたので、まずは浴衣に着替えてはだしのまま、靴をはいた。白地に紺でホテル名がプリントされている。ローマ字だつた。なぜかそろいで帯も用意されている。濃紺の、無地ものだつた。

正式な結び方を一応は知つてはいるけれど、適当に巻きつけた。蝶結びだけはしなかつた。はだけなよつて胸を搔き合せ、きつちりと着た。

音を立てぬよつて廊下に出る。

いくら防音されてこるとはい、向かい側の女子部屋からはかすかに笑い声が聞こえた。美里とこずえの部屋は、ちょうど水口たちの向かいだつた。寝ているかもしれない。それとも女子同士で盛り上がつているんだらうか。古川こずえとコンビだつたら、また下ネタできやあきやあ言つてはいるかもしれない。赤いじゅうたんを足音させないよつてと踏みしめた。音がするのは浴衣のするしやかしやかした響きだけ。ぶつんと聞こえるのは、自動販売機から。本当はもう一本、買ったかつた。でもその音が響くとまずいだろつ。つばを飲み込んでがまんした。

一步、一步、めまいを感じながらも歩く。
さつきまで寒くてならなかつたのに、なぜか手だけは熱い。
背筋だけが冷たい。

真中あたりで、南雲らしき声が小さく聞こえた。

やつぱりあのグループも集まつてこゐるのだらうな。

音楽ネタだらうか。

やつぱりこな一回混じつてみたいんだけだ。

隣の部屋では、まつきつと貴史の声が聞こえた。

意味がよく通る。

立ち止まつてみる。

「だつたらなあ、言つちまえよ。お前惚れてるんだらー。その先輩
ひた」「ひた」「ひた」「ひた」

「駄目でもともどじやねえかよ。ビーフせ回りは一年たつたらいな
くなつねまつんだし」

「・・・・・・」

「あ、やつつか。お前、附屬高校進むんだよな。あとをひくからこ
やかあ」

仲間内での恋愛相談を受け付けているのだけだ。

ようやく、水口たちのいる部屋の前に来た。
おしゃべりしていたらノックだけして帰らうと黙つていた。

ドアは黙つても開くようになつてこる。
じつと、ドアの前で集中する。

何も聞こえなかつた。

じゃあ、やつぱり、寝てるといふことか。

立ち止まつてもういちど、念を送つて見る。

一点に意識を集中して、見つめつづけると反応するかもしねい。
でも、全く物音なし。
すい君、起きててくれよ。
ふいつと、振り返つたときだつた。

いきなり反対側のドアが開いた。

一番奥、一番遠い場所。

上総と貴史の部屋と隣あつていいところ。

まさか、奴か。

上総は後ろすりながら、自動販売機の側に寄つた。本能だつた。とにかく部屋のまん前でうろついてたら何を言われるか大体想像がつく。頭がぼおっとしてきた。ポケットを探そうとしたけれど、着てこいるのが浴衣だということに気がついて、手の行き場所を失つた。

見覚えある顔がちらりと見える。天井の淡い明かりで、影絵のように写つていてるようだつた。

上総の姿を見咎めたのだろうか。影はすぐにドアを閉め、しちゃに近づいてくる。

万事休す。

こんなことだつたらドアの前でうろついて、さつさとしない君の部屋に入つてしまえばよかつたんだ。全く、何考へてるんだろう、俺は。

首筋の方がきりきりと痛む。すぐに倒れこみたい。でも立つてなくてはいけない。とにかくジュースを買う顔をして待つしかない。こんな時間だつていいのに。怪しまれないわけがない。それによりにもよつて。

女子側の部屋は、清坂美里と古川こずえのいるところだ。

ああ、でもすい君とは約束したんだ。絶対に気付かれないようにするつてさ。絶対、守らなくちゃいけないんだ。だったら、これしかない。

上総は息を吸い込んで、女子の部屋のノブに手をかけた。音をさせぬよう、ただ、軽くこぎこむ感じでだった。手の平に冷たく、

ぶつかつた。

「どうしたんだ」

ドアのノブを握り締めたままの上総に、菱本先生が声を掛けってきた。

静かだった。見たらわかるだろうに、この行動だったら、何をしかそうとしていたかなんて、簡単に誤解されるだろう。

女子の部屋だ。

しかも一人は自分の「彼女」だ。

真夜中に一人でこっそり、ドアのノブを握っているなんて。考えていることは一つしかないではないか。

そつと手を離して、ぶらんどぶら下げた。言い訳をしようと、うつむきながら考えた。横でぶうんと、自動販売機が鳴った。「咽が渴いたので、ジュースを買いにきました」

嘘がばれただ。全く持つて最悪の展開だ。

てつきつすゞい勢いで怒鳴られるかと覚悟していたが、やはり夜中の一時過ぎだ。気を遣っているのだろうか。菱本先生はしばらくじつと上総の手と顔を交互に眺めていた。

「お前、体調を崩しているんだろう。早く部屋に戻りなさい」「わかりました」

菱本先生は上総の背中を軽く叩いて、促した。優しい感触だった。片手で額に触れ、

「思つたよりひどい熱だな」

とひとりごちた。

「いつからこんな状態だったんだ。ホテルについてからか?」「わかりません」

支えられるのを頑固拒否して上総は、小さな声で答えた。別に反抗したわけではない。咽がだんだんひりひりしてきて、口を開くのが苦痛だっただけだった。

「無理するな。立村。お前がする予定の仕事は、俺が全部承つている。安心して寝てろ」

言われた意味がよくわからない。次の朝、バスの中でのしきり役について心配してくれているのだろうか。首を振った。

先生に見えない片手だけを握り締めうつむいたまま、

「大丈夫です。明日まではなんとかします」

じゅうたんをじつと見下ろしながらつぶやいた。自分で説得力のない言葉だった。

菱本先生は、唇の端に、何か言いたそうな笑いを浮かべながら、「でも、今はゆっくり休め。水口のことは、ちゃんと俺が面倒を見るからな」

水口のこと？

どうじつことだ？

だつて、あのことは、すい君は俺にしか話してないって言つてただろ？

自分でもどうじつこんなに動搖しているのかわからなかつた。鐘の音が鳴り響くがごとく、上総の耳もとでは空気をばんばん揺るがすような音が聞こえ、ふらついた。がまんできず、立ち止まつた。

菱本先生が心配そうに顔を見下ろした。

「立村、本当に大丈夫か？ 朝になつたら病院に行つたほうがいいぞ」

「いいえ、大丈夫です」

なぜ、水口のことを知つているのかなんて、口が裂けても訊ねたくなんてない。

はたして水口が自分のおねしょ癖について菱本先生に相談していたのかどうかもわからない。ただ、話をしていた段階で、水口が泊りがけの旅行にいけないと悩んでいたことだけ、本當だと思つてた。惨めな思いをしていることだけは、十分上総も想像できた。

だから、なんとかしてやりたかった。

自分がもし同じ立場だったらどんなに苦しいか、惨めか、そのくらいの想像力は、上総も持っているつもりだったから。

なのに、どうしてだらう。

まさかすい君は菱本先生にも同じことを相談していたのか？
同じくらいの時間に菱本先生も起きて、すい君を起しそうとしていたのか？

それで、俺と鉢合わせして、つてことか？

着崩れた浴衣でふらふらしていて、下手したら女子の部屋に夜這いしようとしている顔を、見られたってわけかよ。

馬鹿だよな、俺って本当に馬鹿だよな。

3 最悪の展開その一

「やつぱりな、羽飛はいないのか。たぶんあいつはバスの中で爆睡するな」

自分の部屋までたどり着き、たつかと布団にもぐりこむつもりだつたが、菱本先生はまだくつこっている。「うざつたい。早くどうかいけ、と言いたいのを上総はこらえた。敬語を使つた。

「もう大丈夫です」

「薬をもらってきてやろうか」

「いつも持ち歩いているのがあります」

さつさといなくなつてくれればいいのに、菱本先生はわざわざ水を汲んでき、冷蔵庫からジュースを一本抜き取つた。「この分は、俺が払うから安心して飲め」とのことだった。

「本当に、もう大丈夫です」

再三出て行つてもうつとうに頼んだが、全く効果なしだ。
かくなる上は、貴史が部屋に戻つてきることを祈るのみだ。

でも、あの恋愛相談が長引くようだとまだ先だわ。」

菱本先生は教え子がひどい熱だと聞いたこともあって、どうしても気になつてしかたないのだろう。いい先生だと美里も貴史も言つ。

特に貴史は

「俺があ小学校時代の担任が最低であ。俺たちのことを田の仇にしてるんだ。卒業式の時も、俺と美里の方を無視して、記念写真を撮らうとしてたんだぜ。まあいいけどな。それから考えたら、菱本さんはましだと思うなあ。立村、どうしてここまで菱本さんが嫌いなんだよ」

といつ。

わからない。自分でもここまで人間を嫌うことは少ない方だと思う。

テレビドラマに出てくる熱血教師や理想の教師はこうこう感じなのだろう。わあっと喜んで、怒鳴つて、涙して、感情の起伏が激しい一方で、少々大きめの感情を抱くくらいにスキンシップを求めてくる。

美里が言つには、

「女子からするとね、ちょっと触りすぎつて気もするけれどね」とのことだが、嫌がつてゐる連中はそういうだ。

スキンシップか。

ふたたび菱本先生が、タオルをぬらして顔を冷やしてくれた。指先が触れる。爪の厚さが頬に伝わる、と同時に顔を背けたくなつた。

ああ、これだ。俺が何よりもいやなのは、

誰にも触られたくないんだ、俺はただそれが言いたいんだ。ずっと小さな頃から、そればかり言いたくて、だから、だから。まずい、また、やつてしまつ。

歯を食いしばり上総は枕に顔をうずめた。自分のどこかにスイッチのようなものがあり、そこに触れられるとどうしようもなく涙が流れてしまう。そんな瞬間がいつもやつてきた。触られること。入つてこられるこり、すべてだった。菱本先生のすることはすべて、

自分の中の起動コマンドを打ち込まれるようなもの。

貴史や美里の言葉やしぐれにも感じることがあるけれど、それは耐えられた。

でも今の上総には、耐えることができなかつた。

「おい、立村、落ち着け。どうした。苦しいのか？」

背中をさするようにして、菱本先生の荒てた声が聞こえる。

「すみません、なんでもないです」

荒く息を吐きながら上総は菱本先生の触る手から逃れようとした。でもだめだつた。心配してくれているから、教え子だから、生暖かいやさしさをたっぷりと浴びさせてくれる。それがどんなに上総にとつて逃れたいものなのがなんて、一生分からないんだね。どんなに嫌だと言つたつて、伝わらないんだろう。

子供の頃からそうだった。

4 かばつてくれたのか、それとも

「あれ、先生、なにしてんの」

ドアを開ける音が聞こえ、聞きなれた間延びした貴史の声がした。
「ははあ、さては立村となんか悪いことしようつとしてたんじやねえの。やつぱりホモなんじやねえのか」

にやけているような、少しひりびりとくるよつた声の響き。

上総はタオルケットを頭からかぶつて自分の視界を真つ暗にした。

「あんなあ、羽飛、今の時間何時だと思つてるんだ。一時過ぎだぞ。ちゃんと『しおり』にも書いてあつただ。『消灯時刻は夜十時』だつてな」

「そんなお堅いことは言つこなし。それより、どうしたの立村」
上総が答えようと、そつと顔を出したとたん、菱本先生は軽く額を抑えて、言葉を封じた。

噛み付いてやろうか。

「体調をかなり崩しているみたいだな。こりゃあ、病院に連れていった方がいいかとか思つてな。羽飛、悪いけど今夜、様子みてやつてやれないか」

「別にいいけど。まあ、こいつ朝から具合悪そうだったもんな」

貴史は当然のように頷き、にやつと笑つた。

「でもさ、先生、一つだけ条件ほしいんだけどいいかなあ」

「なんだ。どうせお前らのことだ、朝食のゆで卵がほしいとかそんなもんだら」

「食い物はいいよ。っていうかさ、誰も俺たち悪いことしてねえから、見回りは勘弁してほしいんだ」

田のところまでシーツを下げる上総は様子をうかがつた。貴史の姿はどことなく、眠そうだつたけれども口調はしつかりしていた。

「先生、俺たちたばことか酒とか持つてきてねえから、その辺はわかつてくれよな。たださ、今夜でないとしゃべれない内容とかあるんだよな」

ため口を叩くのも、貴史の計算だらう。菱本先生は「先生」と敬われるよりもむしろ、「仲間」として扱われたいタイプの人間だらう。

掴んでいる貴史は突ぐ。

「ほんとうか?」

「当たり前だつて。気になるんだつたらさ、明日の朝にでも持ち物検査してみればわかるつて。それに、変な話だけど、女子の部屋に行こうなんていう奴もいなかつたと思うんだ」

「こいつはさつき一番端の部屋の前にいたけれど、違うつと思つのか?」

「の辺は軽い口調の菱本先生。感じからして、本気で怒つてるわけではないだらう。からかい半分なんだらう。冗談なのだらう。それは聞いている上総にもわかる。でも、あまりにもあまりだ。まるで自分が、一番端の部屋に夜這いしに行つたところのことを、貴史に知られるはめになる。

「一番端つて、ああ、美里のとこか」

「そんなんじやないつて！」

からうじてかすれた声で言い返した。

「大丈夫だつて、こいつそんな度胸ねえよ。むしろ美里の方からこちらに来るなら可能性はあるかもしけねえけどな。ま、でも大丈夫だよ。先生。俺たちその辺は頭働くから。菱本先生に『不祥事』のために免職なんてこと、させないようにするからさ。一年D組はその辺、団結力強いんだから」

貴史の本気なんだか冷静なんだかわからない言い方に、なぜか菱本先生も納得したようで、ベットからようやく離れた。

暑苦しい手がなくなつただけでもほつとする。

ほんの少しだけ、シーツを握り締めた手を緩めた。

「やっぱり、羽飛が裏のトップだなあ、いやあ、負けた」

「大丈夫だつて。俺もそんなばかじやねえから。じゃあ、おやすみなさい」

その後何か一人で、上総に聞こえぬよう話をしていたようだつた。

「だだつこ」

「だとか

「全く何を考へてるんだか」

とか、上総に聞ける低い評価のお言葉であることは確かだつた。タオルケットに噛み付きたいのをこらえながら、背中を丸めているしかない自分が情けなかつた。

あいつら、いつたい俺が何をしたつていうんだ？

こんなに馬鹿にされるようなこと、してないつていうのにや。

ああ、そのとおりや。どうせ俺は評議委員としての評価も低いんだろうし、自分ができないことをやううとばかりしてるつて思われているんだ。それはよくわかってる。本条先輩にも言われてる。本当は羽飛の方がずっと、信頼を得てるつてことだつて、わかんない

わけじやないや。

でもなにか？ 人の田の前で、よく
「だだつ」の面倒を見るのは大変だ
とか

「こいつにそんな度胸ねえよ」
つて言えるよな。

そういうと周りの連中は口を揃える。それは俺のことを、みんなが心配してくれているからなんだつて。ほつておけないからなんだつて。そうひ、いい奴なんだ。みんな善意でしてくれることなんだ。わかつてゐる。いやつてほどわかつてゐる。それを受け止められない俺が馬鹿なんだ。

しうがなじやないか。触られよつとすると寒気がするし、一対一で語りかけられると吐き気がする。菱本先生と話をしている時は自分の感情を、ぱたつと止めた状態にしてしゃべらないと、かなりまずい状態になる。ほんと、一瞬、そしてやりたいつて、そう思つた。

しまつた。すい君を起こすの忘れてた。

最後の手段だ、電話で起こそつか。

内線番号は0発信で、部屋番号をまわせばいいんだよな。最初からそうすればよかつたよ。でも一緒に金沢も寝てるんだし、かえつてまずいかな。

上総は貴史が菱本先生と話し込んでいた間に、すばやくダイヤルを回した。二回鳴らした。

貴史がげげんな顔で振り返つたため、着信確認はできなかつた。

「立村、お前や、今朝から変だぞ」

自分のベットに腰をおろし、貴史は上総を見下ろす格好を取つた。もどしてあつたタオルケットをもう一度、上総の方に投げてよこした。

答えたくもない。答える気力もない。

「お前が菱本さんのこと毛嫌いしてるのはものすごくわかるけどさ、何もああまで荒れることはねえだる。ほっとけば、おとなしく帰るだろつてさ」

それに、と付け加えた。

「どうして、美里の部屋の前まで行つたんだ？　あと、今さつきかけた電話、どこだよ。お前すぐ切つてしまつたから聞かねかつたけど」

理由はどれも一つだ、でも答えられない。

上総はからうじて答えた。

「「めん、理由は言えない。菱本さんたちが想像してくるようなことじやない」

激しい頭痛でこめかみから後頭部がびんびんと響く。遠慮なく貴史の言葉はハンマー化していく。

「ばあか。言つちまつてもいいのにな。女々しい奴だぜ」

本当だつたら反応してすべてぶちまけてしまいたかった。自分の積み重ねてきたものが、みんななくなつてしまいそうだった。

一年近く、自分を評価してくれたといつ「評議委員」の証を、自分なりに精一杯、出してきたつもりでいた。どうすればみんなの役に立てるのか、どうすれば、みんなが気持ちよく旅行できるのか、どうすれば、みんながかつての自分とおんなじ思いをしないで過ごせるのか。そればっかりを馬鹿みたく考えてきたつもりだった。

でも、菱本先生の視線は相変わらず、小学校時代の上総を見つめるものと同じだつたし、貴史の言葉もみな、「いい奴なんだけど」

という言い訳のもと、受け入れなくてはならないものばかりだつた。言い返す方法が、上総にはわからなかつた。

「羽飛、ごめん。もう大丈夫だから」

「どこが大丈夫だよ。お前明日、これだつたらバスに乗れねえだろ。

俺も残るからお前、ここで寝てろよ

上総が言葉を返す前に、貴史は手元にあるガーゼのハンカチをぬらし、枕もとにおいて。しぼっていい。水浸しだ。

礼も言わず上総は額に乗せた。水が滴つてくるのが気持ちよくて、

一気に眠りについた。

その六 朝の日差しのよしな」と

- 1 水銀を噛み碎きたい朝
- 2 まちかねたひとりぼっちの時
- 3 理想的展開のはじまり

1 水銀を噛み碎きたい朝

目が覚めた六時過ぎ、まだ熱は下がらない。
「立村、起きたか？ お前、まだ顔色死人色してるけどなあ」
顔を洗つて戻つてきた貴史に聞かれ、身体を起こそうとした。
でも動けなかつた。

「本当に、まずいんじやないか、お前」「
「すぐまずいと思う。朝食、俺行かないから」「
「わかつた。あとでなんか食い物くすねてくるから心配するな」
かすかに腹の虫が鳴いているのが聞こえた。夜あれだけ遊んでいたというのに、腹のすき方はただものじやないようすだつた。貴史は急ぎ早に食堂へ降りていつた。

単に食べたくないだけだといつた。薬の加減か胃がむかむかする。体調はぼろぼろ、しかも今日は長丁場だ。絶対バスに酔つてしまつだらう。酔い止めが効くとか聞かないとかいう次元の問題ではなかつた。

ドアがノックなしに開いた。貴史がもどつてきたのかと思つて知らん振りをしていた。

「おい、立村、大丈夫か」

この声を朝つぱらから聽きたくなかった。菱本先生だ。

「大丈夫です。たぶん。昨日はありがとうございました」

「ちつとも大丈夫じゃないだろ？。ほら、無理に起きるなよ。体温

計読みで上総は答えた。

「いいとも大丈夫じゃないだろ？。ほら、無理に起きるなよ。体温計、計つてみる」

「いいです、自分のことは自分でわかりますから」

「馬鹿野郎、黙つて体温計を加えろつていうのがわからんのか」
わざわざフロントから借りてくれたらしい。箱入りの水銀体温計だ。しかたなく横になつたまま水銀部分をくわえて天井を見つめた。五分くらいこうしていなくてはならなかつた。

口が利けない。舌を頬の粘膜に押し付けながら、上総は菱本先生のお説教を聴いた。

「お前が評議委員として責任感を持つてるのはよくわかる。これだけ癖のあるD組男子をまとめるのは大変なことだと思うし、一年連続して立村を推薦するのはやはり、それだけ信頼されているからだろ？。それは俺も認める。今回だつてそういうとつ、お前にしては無理をして準備していただろ？」
ほら、水口のことも、知っていたんだろう。起こしに行くことを約束していたんだろ？。さつき、水口から聞いたよ」

「うそだろ、と言いたい。言えなこのは口の中の温度計。噛み砕きそうになつた。

「実はな、一年の宿泊研修の時に俺は水口のお母さんから頼まれていたんだ。夜の十一時くらいに一度、起こしてトイレに連れて行ってもらえませんかってな。でも宿泊研修の夜つていうのは、普通オールナイトしちまつものだろ？。何事もなかつたし、その辺は全く問題なかつた」

「当たり前だろ？。じつ、生徒の秘密を平氣でばらして正氣なんか！」

布団の中の手を握り締めた。

「今回の宿泊研修は一日も泊るとあって、お母さん心配してて、

やつぱり先生ところにも連絡をくれたんだ。でも、水口本人は、それをすくいやがっていたんだな。お前に相談するつてことは、ある意味、しかたないのかもしだれないな」「だから何が言いたい。

「今回お前が必死に約束を果たそうとしていたのは、偉いと思う。でもな、体調を崩していく、ただでさえ苦しい時にだ。人のことまでかまつて余裕は、なかつたんじゃないか。そういう時には、俺に相談するなりしてくれれば。そういうために、大人はいるんだからな。一人で何にもできなくなつてしまいそうな時に、助けるためにしてるんだからな、そのことだけは忘れるなよ」

「ああ、ひざつたい。こいつが教師でなかつたら、俺は絶対銃殺してやる。」

それにあんまりだ。すい君は自分でなんとかしようと真剣に悩んでいたつてことを、こんなにも平気に出していいもんか。

もし俺が、すい君とおんなじ立場で、いまだに世界地図を描く状態だったとしたら、死んだつて人には頼まない。なんとか自分で身を守るべく方法を考える。

徹夜を一日するとか、水を一滴も取らないようにするとか。

口には出せない方法だつて色々あるさ。どんなに悔しい思いをしてきたかなんて、きっと菱本先生には理解できないんだ。

きっと。俺に夜、起こしてもらおうとこいつとすら、はつきり言つてすい君には屈辱なんだ。

もしかしたら余計なことをしているのかもしだれないつて思つけれど、でも、本当にやらかしてしまつたら、もつと恥をかくつていうのがわかるから、約束したんだ。

それをなにか？ 俺が熱だして倒れたからといつて、すい君を尋ねたのか？

どうして俺が熱を出した状態で廊下をふらふら、していたのかを。こんなんだつたら顰蹙かつてもいいから、女子の部屋を襲つてい

ればよかつた。

こんな体温計なんて加えてなければ。
ああ、本当にむかつく。腹が立つ。

上総はしづらかうとする感情を口の中でとどめていた。体温計のメモリが三十九度のところで止まった。自分で抜こうとしたところが、菱本先生にさつとひつこながれてしまった。それぐらいできるつていうのに。

「やつぱり熱はあるな。お前、今日はここで寝てろ。ちやんとホタルの人には昼ご飯の用意とか頼んでおくから。なあに大丈夫だ。お前の親友も、それから彼女もいるからな。今日中に安心して熱を下げるんだ。よく努力したものな。何かの拍子で熱が出てるのもしかたないよ」

上総はきつくならみつけた。そうしたつもりだった。
咽さえ痛くなれば。身体がもう少し楽に動けば。

「それはそうと、こんなに熱があるつてここのに、風呂にまで入つてたのか。全く、お前は自分のことを全然自覚してないな。やつぱりそこんところが子供だな。立村、お前はたぶん何にも知らないと思うが、すでにお前が小学校時代、どういう経験をしてきたかは、谷川先生から聞いている。だから、無理に自分を繕う必要は全然ないんだ。普段の、お前どおりの姿でいれば、みんなは受け入れてくれるんだ。わかるだろ。無理に、評議委員だからといって、背伸びしなくたつて」

頭の中で、破裂音がしたような気がした。
小学時代の担任の名が、出てきた段階で。

「どうこつことだよ。谷川先生つて。

小学校時代なにしてきたかってか？

ああそうだよ。俺は六年間、とことんいじめられてきたさ。

正確に言えば、いじめられていると思い込んでいたってことか。何かがあると泣いてばかりで、人としゃべることもろくにできないで、教室ではひとりぼっちでいた、そんな自分のままでいれば、そうか、一年D組では受け入れてくれるって、そう、言いたいのかよ。

ふざけるなって言いたい。谷川先生は確かに、一生懸命かばつてくれた「かも」しれない。よくしてくれた「かも」しれない。そういうことを理解できない俺が馬鹿だった、それは認める。でも、だからこそ俺は必死に、うまくやつていけるよう、「理想的評議委員」を目指しているだけじゃないか。

努力して、理想を求める事すら、ダメだつていうのか。そのままの自分で、つて、大嫌いな自分をそのまま認めるつて、そういうことかよ。

「立村、お前がそうとう小学校の頃から、いやな思いをしてきたのはわかっている。だからこそ、青大附中で自分を変えようと努力しているのもよく俺は見てきているつもりだ。でもな、他人を巻きこんではいけない。自分に出来ないことを、無理にやろうとするもんじゃない。そのために大人はいるんだ。陰でこそこそと、復讐してやろうとしたつて、結局はむなしさだけが残るだけだろ？ それならこつちが大人になつて、許してやるのがいいんじゃないのか？ 次期評議委員長までやるお前のことだ、そのくらいは、わかつてもいいんじゃないのか？」

何も言い返せなかつた。

決して菱本先生の「いつ」とを受け入れたわけじゃない。素直に「先生わかりました」と、涙したわけではない。

血が上りすぎて、鼓動が頭を叩き割りそうなほどに鳴り響いたせいで。体温計が三十九度だとしたら、瞬間に四十度以上に沸騰している。ひたにやかんをのせたら、一発で沸騰しそうだ。

息が苦しくて、枕にうつぶした。荒い息を吐きつけ、うめいた。

「おい、立村、大丈夫か」

触られた。額だ。がまんできず振り払おうとした。

「本当にひどい熱だな。もう一度病院に行くか？」

「大丈夫です」

搾り出すような声で上総は答えた。

触るな。俺に近づくな。側に寄るな。

しゃべることができない今、上総にでかけるのはひとつだけ。

顔を隠して嗚咽するだけだった。声を殺し、誰にも泣いているよう見えないように。

「わかった。ホテルの人には皿ご飯を持つてきてもらうように手はずを整えておくから、寝てなさい。薬は飲んだのか？」

「まだです」

当たり前だ。食事の後に飲む薬だつていうんだからな。

「熱さましは座薬の方がいいのか」

「ふつうの薬でいいです」

顔を隠し、上総は咽の奥からこみ上げるむかつきと、熱い塊を飲み込むことに専念した。かけぶとん一枚の仕切り。こんなにありがたいと思つたことはかつてなかつた。顔を完全に覆えるだけの場所があることに、上総は感謝した。

2 まちかねたひとりぼっちの時

しばらく経ち、貴史が戻ってきた。

手には、どこから買つてきたのかインスタント粥のパックを持っていた。

「立村、あのや、起きてるか」

「かううじて、生きてる」

「あのや、お前、今日残るんだろ。さつき菱本さんが言つてた。とつてもだけど起きられる状態じゃねえつて。ほんとだな」

ポケットに財布としおりを突っ込み、枕もとにやつてきた貴史。「俺も残るうかつていつたんだけどさあ、菱本さんから絶対駄目だつて言われちまつてな。悪い」

さつきの菱本先生により毒を吹きかけられたせいか、うまく声が不出来。

「いいよ、一人の方が楽だし。それにしてもどうじょうもなく悔しい」

「俺もめちゃくちゃ淋しいが、土産買つてきてやるよ。お前絵葉書とかそういうもんが好きだ。それとも食い物がいいか？」

「いや、いいよ。それより今日のバス道中なんだけどや。盛り上げ役は羽飛に任せた」

「と、美里だ。あいつも心配していたぞ。立村が熱出したつて聞いててさ、夜中になんかあつたのかつて菱本先生に聞いてたよ」

「よりによつて、あやつに聞くなんてやめてほしいよな」

菱本先生のことだ。上総に説教した通りのことを丸写しで美里に伝えた可能性がある。もしくは真夜中にふらふら廊下を歩いて、とつつかまつたことまでも。

「大丈夫だつて、明日もあるし、美里にも言つとくよ。お前はまだ生きているつてな」

何度も思う。羽飛貴史は本当にいい奴だ。

こんなに友達思いの中学生は、そういうやうだ。

仮に上総がバスの中で酔っ払つてしまい醜態をさらしたとしても、貴史ならばいやな顔しないで、介抱してくれるだろう。そんなところを見られても、お前の味方だから安心しろとか言われて。

菱本先生の言ひ、「普段の、お前どおりの姿」であつても受け入れてくれる友達、それが貴史だろう。

それはわかる。なのになぜだろ。上総の中では絶対に受け入れられない一点があるというのは。自分が絶対に、見せたくないところを、手当てしようとして、手を差し伸べてくれる。そんな人々か

ら逃げたくてならない。そういう上総がいる。大切な友達なんだと思つ一方で、違う違うと激しく抵抗する自分が隠れている。

「じゃあな、行つてくるから」「無事に帰つてこいよ」

貴史がドアを閉めた。

上総はそつと耳を澄ませた。
ばたばたと足音がする。ドアの前で
「あれ、立村くんは行かないんだつたつけ
「なんか熱出したみたいよ」
「またあいつ知恵熱だしてるので、ばつかじやないの」
「ねえ、美里どうするのよ。彼氏がいなから淋しいんじやないの
？」

などと女子のしゃべる声もある。

清坂氏に、一言頼んでおけばよかつたな。

まあいいか。俺よりはるかにしつかりしてゐるから大丈夫か。

窓辺から聞こえるバスの発車音。と同時に声はほとんどが、掃除のおばさんたちのものだけとなつた。ばたばたと片付けに入つてゐるのだろうか。でも学生の部屋は諸般の事情でまだ掃除が出来ない状態。食事代わりには、お茶用のお湯を沸かして、インスタント粥を食べることにしよう。とにかく、薬を飲むためには、何か食わねば。

しかし全く起きられなかつた。鉛の布団をかけられたようだつた。汗だけがだらだらと流れ、熱がこめかみを刺激する。

思考力はだんだん途切れてきて、とうとう、頭の中が真つ白くなつた。

上総はうつぶせになつたまま、枕に顔を伏せた。勝手に競りあがる涙のかたまりを吸い取らせるため。自然ともれる泣き声のため。

今は誰もいない。四時半までは誰も戻つてこない。どんなみつともない顔も、今ならば、さらせる。

本当は、この時を一番待っていたのかも、しれなかつた。

寝汗をかいたのか、それとも薬が効き始めたのかよくわからないが、とりあえずは起き上がって重たい頭を振るくらいのことはできるようになつた。自分の額に手を当ててみると、じんわりとしめつている。前髪も自然と持ち上がつてゐる。

時刻はすでに九時近く。一時間くらいしか経つてないらしかつた。

誰も残つていよいのはよかつた。
ひとりでいられるのがうれしかつた。

ほおにかすかな、固まつたざらざらしたものが残つていて、すぐに顔を洗つた。こんなんだつたら、無理してバスに乗り込むこともできたな、と思つたものの未練はなかつた。

自然とおなかもすいてきていたので、貴史が残してくれたインスタントおかゆをこしらえた。小さなヒーターのようなものがテーブルの上にセツトしてあり、マグカップ大のステンレスカップを載せておくと、自動的にお湯が沸くようになつてゐる。想像以上に早かつた。すぐに粥飯はふくらんで、ちょうどよい量に納まつた。ひたすら食べた。

食欲がいつも通りだつてことは、もう大丈夫だらう。

こんなになることわかつてたら、本とかもつと持つてくるんだつたな。

荷物になるからやめといつて思つてたんだけどな。

シャワーを浴び直し、外の青空と見慣れない野鳥の集団を眺めながら上総は、ベットから天井を見上げていた。タイムスケジュールからするとそろそろ、第一次目的地の黄葉市内散策が始まっている。天気がいいから、きっと歩かされるだらう。さすがに今日

は私服でかまわないといつお許しがでたそのので、「歩いているだけで青大附中の宣伝になつてしまい、他の中学からバッシングがきわづ「なことはないだろ」。

3 理想的展開のはじまり

電話が鳴つた。軽いフォン音だつた。

フロントからだらうか。鳴つてゐるからには出なくてはまづい。

「はい」

立村ですが、と答えるのもなにかまぬけで、返事だけにした。

「おおい、りつちやーん、生きてるかあ」

「なに?」

なんで南雲の声が聞こえるのか、繋がらずとんちんかんな返事をしてしまつた。

あいかわらず邪氣のない、さつぱりした口調だ。

それに今ごろ、南雲はクラス行動してゐるはずではないだらうか?

「今からそつちに遊びに行つてかまわんか?」

「そつちつて、だつてなぐちやんお前、今どこにいる? 市内見学の最中だろ?」

わけがわからなくなつて上総は聞き返すしかなかつた。まさか幽霊になつちまつたんじや?と不謹慎なことすら頭を掠める。

生霊?

何かあつたのだらうか?

そういえば超常現象雑誌に、そんなこと書いてあつたよつた記憶がある。

「大丈夫、中、中。じゃあ、今から行くからさ。またあとで、中、中つて、つまりはホテルの中つてことだらうか。南雲も今回の市内観光はお休みしたつてことだらうか? でもなぜ?

とりあえずかぎはあけたままなので、浴衣の上に羽織るジャケットだけ着て、身を起こした。食べ終わつた粥皿は捨てた。ほとんど手をつけていないお菓子を机の上に載せておいた。甘くないバタークッキーだ。貴史もあまり好きでなかつた。今のところ誰も食べてくれないものだつた。

電話から一分もたたないうちに、どんどんヒノックが響き、シャギーのぱかつとした笑顔が覗いた。

幽霊じゃない、生身の南雲だつた。

「あれ、どうしたのりっちゃん。俺が来て、かなりショック受けたる？」

「いや、本当に、生きてるなつて、ただそう思つただけ」

着替えておけばよかつた。南雲はいまにも出かけそうな格好をしていた。昨日とはちがつて、ビニールのスポーツブランドもののポロシャツに肩から水色のサマー・カーティガントをかけていた。両腕部分を軽く結んでいる。髪型は、手ぐしで軽く浮かせるような感じにしてある。たぶん、ムースをつかっているのだろう。女子がバスの中で噂をしていた。「南雲くんつて、女子と同じくひこ、髪型いじるのに時間がかかるんだつて！」と。

「さつき自販機でサイダー買つてきたんだけど、半分飲むか？」

「うん、茶碗でもらおうかな」

「ふだんだつたら一本のみ干せるんだけど、今日まちよつときつてんだ」

南雲は軽く皿のところを押されてつぶやいた。

「夜、食いすぎたみたいでさあ、朝これはずいわと思つて、残ることにしたんだ」

「腹壊している時に炭酸はきつこぞ」

「しゃあないよ。俺、あんまり甘つたるいの好きじやないから」
伏せたままにしてある茶碗に、サイダーの缶から少しづつ注いで飲んだ。貴史のベットに腰掛けて、クッキー一枚ずつまんだ。

ほのかな甘味が残るだけの、昔風の味わいだった。

「あと残っている奴はいないのか？」

「いないよ。りっちゃんが倒れたって聞いたのが朝だろ。それでしばらく誰かが残らうかつて話になつたんだ。でも、それだつたら俺も腹がまだ痛いし、りっちゃんよりは動けるしつてことで、居残り決定さ。あ、気にするなよ。俺は俺で理由があつて残つてゐるんだから。何も俺だつて好き好んで、つてわけじやないよ」

「そうか、ならいいんだ」

たぶん、菱本先生のことだ。だれか付き添いで残らせよつと話し合ひを持つたのだろう。貴史あたりが残ると言い出したのかもしれないが、たまたま南雲がいたからうまく、話がまとまつただけなんかもしれない。

とにかくはつきりしているのは、上総ことつて一番いい組み合わせだつたつてことだ。どこかつぼを押さえてくれている。絶対に触れてほしくないとこひこは、微妙に避けようとしてくれている。つい自分も、油断してまことに口走つたりしてしまうけれども、それをねたにまた揶揄することもない。そういう南雲との波長が上総には心地よかつた。

「ここ、羽飛のねどこか？」

「そう。でもほとんど使つてないはずだよ。あいつ夜遅くまでオーラナイトしてたからさ」

「あれ、りっちゃんは？」

苦々しくも言わざるを得ない。遠慮なく、タオルケット一枚に足を突つ込んだ。

「ご存知の通り、菱本さんに捕まつてひのきがせん、悪ことできなによな」

南雲にだつたら、「清坂さんのところへいつて夜這いしようつとした」と言つてもかまわなかつた。聞かれたら答えるつもりだつた。でもそれ以上つっこんでこなかつた。

「そうか、災難だよなあ、でもまあ、前からりっちゃんと約束して

いたことも果たせそうだし、それはそれでまあいいよ」

南雲は『ごりつ』と横たわり、上総の方を見て笑つた。押し付けると
ころのない、せらつとした笑顔だつた。答える必要のない笑顔だつ
た。

『Jへつと頷いて上総も、もつ一度ベットにもぐつこんだ。

その七 青雲をみあげながらのよしなじ

- 1『規律委員会コレクション・秋のファッショングッズ』
- 2「理科準備室告白事件」における行動記録
- 3 絵画にかんするつれづれに

その七 青雲をみあげながらのよしなじ

1 『規律委員会コレクション・秋のファッショングッズ』

たいてい南雲と交わす話題は、洋楽のヒットチャートだとか、中古レコード店での掘り出し物とか、あとは双方の親が所蔵しているレコードの貸し借りが中心だった。会計事務所を経営している南雲の両親は、かなりの音楽好きが全く入っていない、インストロメンタル系の、哀愁っぽいもの」をリクエストしてずいぶんテープに録音してもらつたものだつた。お返しに上総も、父の持つているクラシック系のものを大量に持ち出している。仕事に忙しい父はたぶん、勝手にいじられていていることを知らないだらう。

外は青空。うすい金色の山々が、そそりたつように窓につきをさつてくるようだつた。遠慮なくカーテンも窓も開けた。クーラーはかけなかつた。黙つても風がするすると入つてくる。ちょうどいい温度だつた。

「おもにつきり、『今生会口和だよなあ

「ほんとだ。俺もそう思う

思い出したくないことをつつかれたようで、寝返りを打つた。

「さて、金沢くんはどのような傑作をものとするんでしょうな

「昨日は一生懸命、虫のいろいろを虫眼鏡で観察しながら、何かを

「写していたよ。とにかく、普通でないものを描きたそつた顔、してた」

その場では筆でうつすらとまとめていたはずだ。帰つてから完成させると楽しそうに話していた。

「自由研究の提出物は完成なんだ。いいな」

南雲はふうっとため息をつきながら、膝を抱えてじいじいと回った。ゆりかごのようだった。

「つちやん、今回の自由研究は完成したか？」

「一応。もう夏休みの段階で英語の先生からこれやれって言われてたし。イギリスの児童文学で短いのを、自分なりに訳してみるって。ほんとは普通の文学書みたいなやりたいって、先生に言つたんだけどな」

「そんな難しい奴やりたいって言つたのか？」

「お前には早すぎるって、却下された」

『グレーント・ギャッビー』の原書はペーパーバックスで手に入れていた。暇があると単語を調べて、書き込んだりしている。自分で現在ひとり、訳してノートに写している。本当はそれを提出するつもりだったのだが。

好きな作品だったら、いくらでも熱中できる自分。

「それはそうと、なぐちゃんは何にしたんだ？」

答えず、南雲は天井を見つめたままひとこと、答えた。

『規律委員会コレクション・秋のファッショングック』原稿

わざわざ部屋に戻つて、スケッチブックを持つてくれた。

B5程度で、自由研究提出用のラベルを貼つてあった。印刷するだけであとはOK。受け取つて上総はぱらぱらとめくつた。絵の前後にはちゃんと、南雲の直筆ファッショングラムもたくさん記入されていた。南雲の文字は、英語の筆記体を日本語に写したような、斜めががつたものだった。

その後はしづらべ、とつとめもなく、音楽ねたを振つていた。本当は南雲も、もう少し絵の話をしたいようだつたけれども、上総が乗つてこないのを察してかすぐにそらしてくれた。

洋楽チャートトップ100の傾向についてひと段落し、南雲はもう一杯サイダーを注いだ。だいぶ気が抜けているようだつた。甘つたるい、砂糖水になつていて。

「でもな、こんないい天氣だつたらふつうは、外に行きたがるんだろうな」

だんだん太陽が白く、輝いてきている。窓辺からもやのように流れてくる。空の青さだけが歯切れ良くて、上総は身を起こし、眺めながら言つた。南雲もつられてか、立ち上がり窓辺に立つた。

「ふつうは、たぶん海とか山に行きたいつて思つよ。俺もたぶん、そう思つ」

「つちやんは？」と聞いてこないのが、南雲のいいところだった。

「これが貴史や美里だつたら

「どうしてなの？ 夏つて体を動かすと気持ちいこよ。だから立村くんつて、軟弱だつて言われるのよ。すこし鍛えなくちやだめよ」とあきれられるのが落ちだ。言つたことがなかつた。

どうしてみんな、夏が好きなんだろう。

外に出れば頭が痛くなるし、汗をかかない代わり熱が出て途中でしゃがみたくなるし、大抵貧血起こしてぶつ倒れる。海に行くともう駄目だ。潮風をかいだとたんに胸がむかむかして、何も食べられなくなる。水着に着替える場所の、ぬめぬめした足の感触ががまんできなくて、小学校時代からほとんど、プールや海に行つたことはなかつた。

そういうことを、周りでは「変わつてこる」とか「不健康」とかいづ。

口には出せなかつた。

「なぐちゅんは、夏、海に行つたりしたのか?」

「行つたよ。でも泳いだのは家族旅行で、だけ。じいちゃんの墓参りもあって、この前行つてきたんだ。やっぱり、青潟の海とは違うぜつて感じ」

ふと、突つ込んでやりたくなつた。口元までシーツを持ち上げて、小さな声で訊ねた。

「あの、例の「青潟大学附属中学ファッショングラフィック」に、水着バージョンつていうのは入れなかつたのか?」

「描いたよ。もちろん。そりゃあ、ビキニもあれば、ワンピースもあるしや。提出する時の反応が今から楽しみだな」

イラストといつよりも、少女漫画の少年キャラクターを、大判にしてファッショングラフィックのようなポーズを取らせていい。顔はほとんど描かれていない。鉛筆でさらさらと線が入つていて。それにクレヨンか何かで輪郭を取り、華やいだ色合いを持たせている。

「『ビキニは基本として、体型がずんどう型の日本人には向いているので、太目のお嬢さんもどんどん着るべし』って、結構すごいこと描いているな」

そのほかにも、

「制服は基本として着崩すとまぬけに見える恐れがあるので、家中のみでチャレンジすること。学校では、おしゃれなつもりが一気に、コメディアン化する恐れがあるので、悪いこといわない、校則に従つていた方がいい。もしその形がおまぬけだったら、規律委員会に直訴してください。センスの素晴らしい規律委員一同が、頭をひねつて話し合いに持つていきます」

などと、南雲ならではのしゃれた書きぶりが笑えた。

そういう南雲がだ。どうしてだらつ。

どうしてよりによつて、奈良岡彰子と付き合つていてるのだらつ。しかも惚れるだけ惚れぬいているつていうのは。

昨日だつて見るに耐え難いへりこのこりやこりやぶりを見せ付けていた。

「南雲は奈良岡のねーさんにて惚れ薬を飲ませたんだ。たゞが保健委員」とか
「なにか奈良岡の家と南雲との間に密約が交わされているんじゃないか。借金かなにかで」
ありとありゆる噂が流れていた。

「あのや、なぐちゃん」

思い切つて聞いてみた。

「これ、奈良岡さんには、見せたんか?」

南雲はもぢりん、といつ風に、青空を満面にうかべたがごとく頷いた。

「つちやんは一番田。最初はやつぱつ彰子さんですがな

「で、感想はどうだつた?」

「『あきよくんは才能があるよね』だつた。向いつけは俺のこと、

『あきよくん』って呼ぶんだ」

聞きたかったのはそんなのわけじゃない。上総はためらつた。窓の向こうを見た。青空の色が後押ししてくれた。

「それだけか?」

うまくいえなくて、それだけ搾り出した。どうかわかつてほしかつた。南雲にだつたら伝わるかもしれないといつ勝手な思い込みが、突然噴出したかの、ようだつた。

「お前の好みとか、露骨にこに描いてあるだぶ。それ見て、つらそうな顔とかしなかつたんか」

急に胸が締め付けられるようだつた。心臓が苦しくなつたのはなぜだらつ。

勝手に自分の想像力が膨らみすぎたせいだ。

「つちやんその辺、よくわかんないけど、なに?」

「だからつまつ」

顔を隠して表情を見せないようとした。

「この中に奈良岡さんはいないんだろう」

南雲は、最初とまどつたように上総の方に近づいた。が、腰を浮かせかけたとたん、言葉を見つけたらし。すぐに坐りなおしてつぶやいた。

「水着のところのコメント、読んでもらって、誤解解いてもらつたけどさあ、うまくいったかな。俺、好きな相手にはきちつと好きだと伝えるのが筋だと思ってるからせ、できるだけオープンにしたつもりだけど、彰子さんのことは描けなかつた。一般大衆に受けるようについて選んだんだけど。ちょっとやばかったかもなあ」

「『ビキニ』は基本として、体型がすんどう型の日本人には向いているので、太目のお嬢さんもどんどん着るべし』、か

上総はそつと首筋までシーツを引き下げる。無理やり口元をほころばせようとした、うまく行つているか自信はなかつた。

南雲は上総の方をにこにこしたまま見つめていた。タオルケットのすみにおいてあつた、スケッチブックを手に取つた。表情を変えることがなかつた。大抵だつたら、

「なんか、やばいことしたんじやないか」と心配そうに覗き込むか、

「なに一人でいじてるんだよ」

とつっぱねるか。そのどちらかだろう。

どうしてこいつばかみたいなことを聞いてしまつたのか、わからなかつた。たまに自分が止められなくなる時がある。たまにがまんできず、意味不明な言葉を吐き出してしまつことがある。

「別に、意味なんてない。なんとなく、そう思つただけだつて」

小声で答えた。年齢が一気に下がつてしまい、幼稚園児になつてしまつたみたいだつた。みつともないつたらない。押さえられなかつた。顔を隠しつぱなしにしれもでもいように、頭をまくらにつ

けて、あお向けになつた。足もとが汗でしめつてきて、気持ち悪かつた。

「なぐちゃん、サイダー、もう一杯ほしいんだけど、ある？」

「オッケー、余裕ですぜ田那」

飲みたかったわけではないけれど、会話を続けるのが苦しくなつてしまつた。南雲には気付かれたくなかつた。でも、見え見えだつてことも分かつていた。

空の青さはまだ光を帶びている。どうしてこんなに天気なの。どうしてこんなに夏は明るいのに。

俺はいつも「う、ばかなことばっかりしゃべつてしまつんだう。

2 「理科室告白事件」における行動記録

南雲はもう一度、貴史のベットに寝転んだ。

もともとは腹を壊して休んだ奴なのだ。炭酸なんか飲んで、ちょっとまづかったんじゃないだろうか。しばらく口を利かずにいた。上総も窓の方に寝返りを打つて、じつと空を眺めていた。ガラスが白く反射して、目を刺した。しかたなく、目をつぶつた。向こうのベットで寝返りを同じく打つ気配を感じた。

背中に聞こえた。

「りつちゃん、返事しないでいいからさ。寝てるなら寝ていいからさ。俺、ひとりごと好きなんだ。聞き流してちょうだいな」
よけいな響きのない、さっぱりした声だった。
上総は目をかたくつぶつた。

「俺ぞ、すげえ軽い奴だと思われてたんだろうな。りつちゃんとも一年の頃はあまりしゃべらなかつたからなおさらそうかなとは思つてたんだ。まあ、音楽のこととかりつちゃんやたら詳しかつたし、真面目なようでいて結構遊び人だしさ。あの本条先輩に気に入られてるつてことからして、ただもんじゃないとは思つてたんだ。だか

ら、しゃべってみたいとは思つてたよ。そう、一年に入つて同じ班になつて、やつぱり俺の思つていたとおりだつてさ。でもやつぱし、あの時は驚いたよ」

あの時つて、いつだらう?

奈良岡への「理科室告白事件」のことだらうか?
上総は素早く記憶を巻き戻した。

俺は何をしたつけ?

「いきなりクラスの野郎どもに指示、出し始めた時。本当にびびつたよ。まあ、覚悟はしていたよ。あんなおおっぴらにやつちまつたら、ばれねえわけねえわな、って思つてたけど」

ああ、のことか。

五月の終わり、想いを募らせた南雲が、たまたま理科室準備室で二人つきりになつた折、いきなり奈良岡彰子に告白したという事件だつた。たまたま忘れ物を取りにきた奴にその現場をもろ見られてしまい、二年D組始まって以来の色恋沙汰に発展した。

先生たちに片をつけてもらひような問題ではなかつた。

本当にただの、付き合いかけるかけないの話だつた。

陣頭指揮をとつて上総は、なにげない日常の出来事に治めることに成功した。あの時取つた行動は絶対には間違つていないと、信じてゐる。

寝たふりをしばらくしたまま、上総は目を開けた。瞬きした音が

聞こえていいなかどうか、心配だつた。

空の青さの中、白い雲が細く切り裂いた。

この辺に飛行機が飛んでいたのだろうか。

「俺は軽いつて言われてたし、ほとんど冗談だつて言つ奴もいたし、人間として最低だつていう奴もいたし、今だから言えるけど、ほんと俺、参つてたんだ。もっと別なことで言われるだらうとは思つてたけど、まさか、人間の価値みたいな、そんなことでつっこまれるなんて思わなかつたし。それにさ、向こうのことを、あそこまで

ひどく言われるとは想像してなかつたんだ」

言葉を切つた。上総の様子をつかがつているのだろうか。聞いて

いると思つてゐるのだろうか。

南雲には見られなによつて、田が乾きそつたと見開いた。

「理科実験室告白事件」直後の一年D組は、そりやもつすさまじい騒ぎだつた。

南雲の友達ですらも、

「なぜ、あの女に？」

「なぜ、よりによつてあのビール瓶女に？」

の連呼。

ましてや対して付き合いのない連中の言葉は遠慮がなかつた。

クラスで相性の合わない貴史は、

「自分が持てていることを自慢したいのかよ。気がないくせに、からかうために付き合いかけたのかよ。最低だな」

元の彼女がいたC組にいたつては、

「なぜ、彰子ちゃんにあの南雲くんが？」

「いつたい何が不満だつたわけ？」

騒ぎはいつそう膨らんだと聞く。

「あの後、授業中にいきなりりつちゃん、貧血起こして倒れたつて掃除の時間に戻つてきて、俺と一緒にごみ捨てにいつたる。覚えてないかも知れないけど、言つてくれたんだよ」

何を言つたつけ？

首を傾げたいのをがまんした。

「『大丈夫、絶対うまくいくから安心しろよ』つて」

上総は人差し指の先を軽くなめた。

空の青がスクリーン、雲がキャスト。思い出した。鮮やかに。

事件発覚の直後、上総はD組の様子がぎこちないことにすぐ気付いた。妙なところで鈍感な上総は、それが南雲の告白からだということを知らず、美里と貴史を通じて詳しい事情を聞き出した。理科

実験室での酸化鉄製造実験が終わった段階で、なぜこんなにクラスがざわめいているのかを理解した。努力したのではない。

勝手に、自分の感情に答えが響いてきてしまつただけだった。

ただ、告白したされただけではない。

南雲は全年年の女子から人気の高い、次期規律委員長候補。先生、同級生のほとんどに好かれて、人懐っこく、幼さときせつぽさが同居している顔立ち。女子からの告白も、一度や一度ではないはずと聞く。C組の彼女と言われていた女子も、それなりの子だつたはずだ。

しかし、一ヶ月でその子と別れ、間をおかずになぜ、ビール瓶体型の奈良岡彰子を選んでしまつたのか？

性格か、それとも趣味か？

そりや、奈良岡のねーさんはいい奴だけどさあ。

でも南雲だぜ。まだ南雲だつたらいくらでも選びようあつたら？

たぶん一年D組の男子には理解できないことだったのだろう。

そして別の意味で暴露してしまつたのだろう。

男子も、そして女子も、奈良岡彰子の見栄えより上だと、信じてきただことを。

南雲の言葉によつて、あつさつとくつがえされてしまつたことが、ショックだつたのだらう。

次の授業中、上総はずつと南雲の様子を観察しつづけた。南雲の表情は青ざめていて、いつものすかつとした笑顔が消えていた。奈良岡の姿は教室になかつた。

「たぶん、保健室に行つたんじやないかなあ。彰子ちゃん保健委員だから。それに、今この状態で、戻つてくるなんて、できないよ」美里から聞いた。

他の人たちにはたぶん感じられないような感覚が、上総の場合異常なほど発達しているらしく、他の連中がつぶやいた言葉がひとつひとこと、ずんずん飛び込んできた。

「奈良岡さんになぜ？」

「どうしてこの組の子を振つて？」

「あんなデブと付き合うなんて南雲も狂つてるぜ」

「いったい何が奴をそいつさせたんだ？」

「計算が働いているんだろ」

「からかっているだけなんだぜ、最低だ」

自分が好きな子をもし、そういう風に言われたら。自分にそういう経験はないけれど、でももし。そう、言われたら。しかも、自分よりも相手の方をさんざん馬鹿にされていたら。

唇をかんでうつむいている南雲の感情が、勝手に自分の中に入ってきた。

いつもくせだった。

もし、自分だったら、どう感じるだろう。

辛くないわけなんて、絶対にないつて。

授業中、上総は自分で南雲の分身のよつなものが、激しく自分が責めているのを感じて息苦しくなった。その拍子にめまいがして椅子から崩れ落ちた。いつもの貧血だと、診断されて保健室に行つた。

たまたま保健委員の奈良岡彰子が、委員の特権を利用して保健室に避難していたからといって、追いかけたわけではない。

また、付き添ってくれた男子の保健委員が、

「あれ、ま。奈良岡のねーさん、ここにいらしたんですねか」と、気軽に声を掛けていたのも、ちょっとしたきっかけにはなつただろ。たすがに一年D組の男子が一人、保健室にやってきて、

ひとりがベットを口抛してしまった以上、奈良岡も教室に帰りざるを得なくなつた。

「じゃあ、教室に戻るつかな。久しぶりに保健委員の仕事もした」とだし

「やつぱつねさぱつはまづいっしょね」

表向きはさうとした調子で、一年の組の保健委員ふたりは出て行つた。

上総は保健の先生から額をぬらしてもらいながら、何かを口走つたはづだ。頭が重かつたことと、めまいがひどくてろくな会話をした記憶がない。ただ、奈良岡彰子に向けて、何かを伝えようとしないで、果てたはづだつた。朦朧とした意識の中で、まずこれだけはやらなくてはと、思つていたはずだつた。

「だいぶたつてから聞いたけど、りつちゃん、ぶつ倒れた時、言つてくれたんだつてな」

南雲は言葉のトーンを全く変えずにつぶやいた。

「『南雲が、真剣に心配してたよ。隣で感じたあいつの気持ちは、本当だよ』つて」

言葉が出ない。自分で覚えていない。ただ、おぼろげに必死に、伝えなくてはと口を動かしただけだつた。

「彰子さん、それまで俺が冗談言つてるつて思つていたみたいださあ。でも、りつちゃんの言葉でなんとなく、もしかしたらつて思つたらしいんだ。俺がやらかした直後、そういうふうと言つてくれた奴は、りつちゃんだけだつた」

ぱたつと、ベットに倒れこむ気配がした。

「いろいろ手を回してくれたこととかそういうことがビックとかいうんじやないんだ。あんときにはりつちゃんが俺のことを気付いてくれたつてことが、すげえ嬉しかつたんだ。俺は、りつちゃんのするどすぎる感覚がすげえ、つらやましくよ。他の連中が気付かないところをすくこあげてしまつといつて。お前自身が思つてるほど、りつ

ちゃんは、嫌な奴じや絶対ないって

ふわあ、とあぐびをしながら、最後は締めくへつた。

3 絵画にかんするつれづれに

しばらく黙っていたのは、言葉がいつ「冗談で交わされるかを試したかったから。

眠ったふりをしていうか、それとも振り向こうか。

どう答えればいいのだろう。上総はタオルケットの裾を何度も握りなおした。

俺はするどすきる感覚なんて持つているのか？

いきなりあふれでそんな言葉を、止められなかつた。

「俺はするどすきる感覚なんて、持つてないよ」

それだけがこぼれた。

「どうして？」

波長は変わらなかつた。南雲の声はやわらかく響いた。

「ただ、神経質すぎるだけだって。なぐちやん。だつたらどうじつて俺は絵がわからないんだ？ 美術館に行つてたくさん絵を見ても、ただきれいだとしか思えない俺の感性の、どこがするどいつていうんだ？」

思いつきり弾みをつけてベットから起き上がつた。南雲に振り返つた。きょとんとした、表情はさっぱりしたままの顔がえた。驚いてはいなかつた。

「絵、好きじやなかつたつけ？」

「わからない。でも、なぐちやんは描くことができるから、絵は好きだらう？ 絵を見て、きれいだつてこと以外に何か言いたくなるか？」

首をかしげて、田をふせ、すぐに南雲は答えた。

「言いたくなる、うん、なるな」

「だらう？ 頭の中にいろんなイメージ、浮かぶんだらう？」

「うん、うだなあ、浮かぶよ。確かに、

南雲に問い合わせたつてどうしようもないってわかっているの。元の心臓からぶるぶる振るわせる何かが、自分に似合わない言葉をどんどんはじき出させていく。

ぎゅっと握りつけた。

「そうだよな、それが普通なんだ。他の連中と同じく、そう感じるのが普通なんだ。わかってる。俺だって、もつとそういうものを知りたいし感じたいよ。でも、わからないんだ。こんな奴がどうして、鋭いとかなんていえるか？」

穏やかに静かに、上総の知っている自分の通りにつぶやいたつもりだった。精一杯、押さえたつもりだった。絶対に、泣いてはいけないと思っていた。これ以上何もいえなくなり、ぐつとうつむいた。そうしないと、声がかすれてしまいそうだった。南雲に見破られてしまいそうだった。表情がひょいと変わるのが見たくなんてなかつた。

南雲が立ち上がった。上総の方を見ないで、ふうっと深呼吸をした。

「それにしても、外めちゃくちゃいい天気だなあ。窓開けるだけじゃなくつてさ、外してしまいたい気分だなあ」

窓辺に近づき、身を乗り出した。落ちそうなくらいに、上半身を外に傾けた。

「あの鳥どこの鳥かなあ。りっちゃん、鳥に詳しくないかな」

「俺が分かるのはすすめとカラスと四十雀くらいだ」

つられて上総も窓辺を眺めた。南雲は片手で上総を手招きし、指差した。

「ほら、なんでこんなとこに、来てるんだろう。あれって、白い鳩か、それともかもめか、それとも、なんだろ? なあ」

見ると、すずめたちがちゅんちゅんかやつていてる間に、ふたまわり大きな白い鳥が、うるうろしていた。一羽だけだった。遠めで見る

と、鳩にも見える。羽根の裾が少し黒っぽかったところを見ると、かもめにも見える。普段、黄葉山の周りにはいないであろう鳥だった。

「はぐれたんだな、きっと。もしかもめだつたら海はないから」「うん、でもなあ、あれ一羽だけでうかうかしてて、妙にめんこくないか？」りつちゃん

はぐれ鳥。

上総はためらいながら頷いた。言葉は出なかつた。

「青い空に白い鳥、いいなあ。なんか、こうじつのつて絵になるよな。俺そういうのが好きなんだ。ほら、今、飛行機雲がどんどん消えかけてつてるだろ」

斜めに一筆書きで、白い筋を立てていた雲が、だんだん震えるようにゆがんでいつている。窓に近づいて見る青空は、色をぼやかさないままの青そのものだった。

「俺、ああいうのは好きなんだ、りつちゃん」

「ああ、俺もそのまま、景色を見るのは好きなんだ。ただそれだけなんだけどぞ」

「ああいつ鳥とか眺めながら、山の景色見るのも、俺好きだよ」

「うん、おんなんじだよ」

白い鳥は何度かはばたきをして、何かをついていた。大きく羽をひろげ、見得を切るようなポーズをした後、ゆっくりと飛び立つた。ちゃんと大空に舞い上がるところをみると、やっぱり空は飛ぶためにあるとこりタイプの鳥らしい。木々の陰からふわふわと、横一直線に飛び立つていった。

「あら、いつちまた」

「いつまでもはぐれちゃいられなかつたんだよ」

南雲はしばらく白い鳥の去つた場所を眺めていた。すずめたちが安心したのか、また同じ場所に集まつてきて騒ぎ始めた。たぶん、なにかえさがあつたのだろう。お米とかパンとか、撒いているんだろうか。あとで聞いてみよう。南雲にそういうおつと思つた時、先手

を取られた。

「俺さ、りつちゃん。よくわかんないけど、空の青さをめまいといなって思つし、白い鳥もすすめも見るとめんこいなって思つ。可愛い子の写真みたらおおつて思つし、でも彰子ちゃんのことは好きだし、りつちゃんはいい奴だつて、思つ。俺、美術関係の難しいことわからんし、知りたいとも思わないけどさ、でも、イラストは書きたいなつて思つ。俺はただ、好きなことを、好きだつて言つだけで十分なんだ。絵だつて音楽だつて、語るだけが能じやねえよ。ただ、好きだときれいだとか、それだけで十分だつて思つんだ。しゃべりたい奴は、勝手にやつてろつていうんだ」

空に目を向けたまま、上総の顔は見ないで続けた。雲がだんだん消滅していくのがわかつた。

「南雲家では、ガキの頃から『好きなものは好きだとほつせえること』が真実だつて言われてきたんだ」

わざと背を向けて、南雲はサイダーの量を、振つて確認した。

「やべえ、ないや。なんか飲み物買つてへる」

そのハ「畠下がりのよしな」と

- 1 絵画がダメでも写真なら
- 2 定期入れの中に、ある想い
- 3 二日目夜に向けてのセッティング

そのハ「畠下がりのよしな」と

1 絵画がダメでも写真なら

南雲が出て行つた後に、上総は素早く浴衣から着換えた。さつきから話をしている間、居心地が悪くてならなかつた。ひとりだけだらしない格好をしているようで、自分が小さくなつてしまつたかのようだつた。柔らかいベージュの開襟に、麻布のベストを羽織つた。色があいまいなせいか、自分もとろけてしまつたようだつた。

「もう大丈夫なんか」

「うん、どうせ、寝るだけだつたらこの格好でいいしさ」「靴下だけははかずには平たく坐つた。

南雲は今度ウーロン茶の缶を一本持つてきた。胸にかかる格好だつた。その間に文庫本っぽい本が隠れていた。

「本持つてきたんだ」

「他の奴らに見られたら、何言われるかわかんないから、こつそりと、な」

ねちつこくない、さらりとした口調で南雲は、上総に缶を受け取るよう促した。水滴がまだしたたつていない。細かい粒子のままだつた。額に当ててみたのち、すぐに口をつけた。

南雲の手にある、本に目をやつた。カバーがかかっている。

「さつき、いつもちゃんが、絵のことあまり好きじゃないって言つて

いただりつ。写真だつたらどうかな、と思つてや」

何かポストカード集かな。受け取つてぱらぱらとめくつた。

一瞬、何が見えたかわからず、すぐに閉じた。

もう一度、めくつた。

「なぐちやんこれつて」

「そうだよ。『最新水着アイドルハンディフォト』文庫。今回、『青潟大学附属中学ファッショングッズ』をこしらえるに当たつて、参考資料にと思って購入。でも必要経費には落としてないよ」

「うそつけ。どうせ自分の必要経費だろ」

そろそろと、今度は一ページずつめくつていつた。南雲とふたりつきりだつたら、まあ、ゆつくり堪能したつてかまわなかつた。これが貴史だつたら、もつとしらけた顔してめぐるのだりつが。

最初は見覚えのある女性アイドルの、上から下まで繋がつてている水着。

名前はよくわからない。やたらと派手なのが多い。虹をかたどつたような七色模様。金銀をあしらつた、皮膚呼吸大丈夫なのかと心配になりそうな柄。しかし、どんどんページが後ろの方に行くにしたがつて、名前の知らない人が増えてきた。上下分かれた水着が続いた。最後の方は、肌の隠れた部分が少ない、限りなく限界に近い水着のオーバーレードだつた

さすがにそれをまじまじ眺めることはできず、閉じた。

「な、健全だろ？ 裸の人にいよいよ」

「そりやあさあ、いたらまずいだりつ。とこりでなぐちやん、これは他の誰かに見せたのかよ」

「いいや、見せてない。参考資料なんだから」

経費で落ちたら、規律委員会の存在 자체が問題になりそうだ。

貴史だつたら

「な、立村はどの子が好きなんだよ。俺は絶対、優ちゃんだけどな。

ほら、水着だつたらどんのがいいんだ? やつぱり、胸のある子がいいのか? それともさ

としつこく問われることだらう。上総は決して自分の好みを口にしなかった。知らん振りして「写真の『写り』についてのみ、語つていた。写真のことについてうるさいとか、絵葉書を集めるのが好きだと思われているのもその辺からきていると思われているだらう。南雲に尋ねた。

「こういうのは本屋で買うんだろ」

「もちろん。万引きなんてしませんがな。俺の場合、『実用書』は、健全だつたら本屋、不健全だつたら古本屋と分けてるからなあ

「なんなんだ。その、『不健全』つて」

「たとえば、こうこう風に着るもの着て、見られても言い訳できるようなのは、カバー掛けてもらえば恥ずかしくないよ。領収書ももらつたんだ。『青潟大学附属中学規律委員会』で」

いい根性している。笑いをこらえながらさうに続けた。

「で、どに隠してる? お前のつちつて、両親と一緒にだろ。おばあさんとも一緒にだろ。本棚に隠すのつて大変じゃないか?」

「定番、ベットの下。つちやんは?」

つられて答えた。

「本棚に並べておけるもので文学全集の箱みたいなの、あるだろ?」

」

「ああ、あるな

「その中に押し込んでる。あれで見つけられたらすじこ」と思つさすがに、「フィッシュ・ラルド作品集」の箱に詰めているなんてことは言わなかつた。引き出しに本そのものだけ、いつも取り出せるようにしてあるから、空いているところとも。

「ふつん、つちやんはそういう本をどうやって手に入れる?」

「本条先輩が使用済みのをくれるから」

六月に、一度は返したグラビア写真集。

一週間後、中の一冊とまた別の写真集三冊をセットにしてプレゼント

ントしてくれた。

「へえ、そうなんだ。本条先輩つてそういう本山のよつに持つていいそうだよなあ。でも本当に自分の好みと合つのかな。りっちゃん、密かに好みがつるをそうちだしさ」

「言つたか、どうしようか、迷つた。

「確かに好みは、つるさこよ」

膝を抱えてもう一度ベットに脚をつつゝんだ。やわやわ声で南雲を呼んだ。小さな声で話したかった。

「一度だけ、普通の女の人の写真集を、買おつと迷つたことがあつたんだ。本屋で、ちゃんと図書券使つてや」

「ははん」

「でも挫折した」

南雲はしばらく人差し指をぐるぐる回しながら首をかしげた。

「アイドル、じゃないだろうな。りっちゃんだつたら。すっぱだかなんでもないよなあ」

「俺も名前しか知らないし、その人の写真も、一枚しか見たことないんだ。たまたま、雑誌でその人の写真集が出るつて書いていたから。わかつてもらえないかもしれないけど、やつぱり」

「わかるわかる、りっちゃんの言いたいことは俺もわかる」

本条先輩が一冊返してくれた写真集に載つていた、哀しげな表情の、清楚なショーミーズ姿の少女だつた。ショートカットだが、どことなく気品があつて、なんでこいつの写真集に出ているのかが謎だつた。返してくれた理由を尋ねたら一言、

「お前のページしか見てなかつたんだ。黙つていると、このページだけ自然に開くんだ。いつたいどのへりここの子でやつたんだ？」

とあきれられた。言い返せなかつた。

「買わなかつた理由、知りたいなあ」

お互い顔を見ないで、青空だけを眺めながら言葉を交わした。

上総は一気にタオルケットにもぐりこみ、顔だけ出してはつきり

答えた。

「買えるかよ！ つなひきの縄みたいなのを巻きつけで坐っている写真なんてさ」

すぐに、勘付いたようだつた。

「あの、それってさあ、服を着ないままで、縄が巻きつけられるのか。それって、もしかして、鞭で叩いたり、つるしたりするっていう」

さすがに聴い。

「未知の世界だつた」

南雲は大きく頷いて、枕もとにかがみこんでやせやいた。

「じゃあ、今度古本屋で見てみるよ。見つけたら、知らん顔して買っておくからや」

2 定期入れの中に、ある想い

ホテルのフロントから電話があり、昼食用の弁当が届いていると連絡があった。なんでも菱本先生が、行く寸前に一人分の、「黄葉山弁当」なるものを頼んでくれたそうだ。その辺やはり、担任だ。中身は薄茶のどんぶり風容器に、たけのこ、栗、ぜんまいを炊き込んだ、山菜混ぜご飯といった風だつた。前の日に食べたものとほぼ一緒でげんなりしていたが、もう一箱、おまけがついていた。緑色の、おそらく山菜のエキスかなにかを混ぜたバウンドケーキ折り詰めだつた。もちろん、ふたりで分けて食べるよに、とのことだろう。フロントまで南雲が取りに行つてくれた。さつそく食べながら、よしなごとをしゃべりつづけていた。青空は、食べ物が減つていくのと同時に、早く薄い色合いにかすれていった。雲が少しずつ、もみこまれるよう広がつていていた。風が冷たくなつてきたので窓を閉め、湿気とりだけしておいた。

会話はまったく途切れないのに、まだなにか、肝心なことを聞い

ていなじょうな気がした。だんだん、バスの戻つてくる時刻、四時が近づいてくるに連れて気持ちがばさばさ言いはじめていた。南雲は気付かぬ風に、ベットになつこりがつたり、起き上がつたりいろいろしながら鼻歌を歌つていた。

「あの、なぐちゃんや」

「ごみを捨てるために立ち上がつた。寸前まで日本のインストロメンタルについて語つていた南雲の話題に、休止符を入れた。

「今、あれを持つてるか？」

背を向けたから言えたことだつた。割り箸で余つた漬物を寄せながら上総はもう一度繰り返した。

「定期、あれ、持つていいんか？」

「定期入れか？ 持つてきてないよ。別に必要じやないもん」

「あの、といふか、さ」

箸の先が空の弁当箱の中、ぐるぐるとまよつていた。上総も自分で、なんでこんなことしなくちゃ、いえないのかわからなかつた。みじめつたらしくて腹が立つた。すとんとごみ箱にほおりこんだ。南雲に振り返つた。

「昨日、俺が拾つただろ。なぐちゃんの定期入れをさ。その時、別に見る気なかつたんだけど」

もう一度息を吸い込んだ。落ち着いた顔を作つてみた。教壇で口ングホームルームに立つ時と同じ感じにだつた。

「コンドーム、持つていたんだろ」

貴史から聞いた、とは絶対に言ひ氣などなかつた。

南雲はぽかんとした顔で口を半開きにしていた。

驚かせてしまつたのだろうか。やはり、知られたくなかつたんだろ。いくら仲間内で、息を吹きかけて巨大風船のようにして遊ぶことはあつても、本来の目的を忘れるためにおどけるだけ。ふくらんだ風船の中に何が入るか、何を見るのか、それを認めたくないから隠すだけ。普段の上総だつたら決して、質問なんてしなかつただ

ろう。もし、南雲以外の相手だったら、決して口になんてしなかつただろう。かくしてしまいたいものを、ひっぱりだすなんて耐えられなかつた。でも、今、この時。南雲にだけは本当のことを教えてほしかつた。「つきあい」という言葉の影にひそむ、自分の大嫌いな感情を、南雲の口から、分かりやすく話してほしかつた。

驚いた顔もそれほど長くは続かなかつた。うつぶせになり、顔をいつたん隠した後、すぐに起き上がりて笑いかけてきた。

「りつちゃんは、清坂さんにそういうことしたいと思つたことないんか」

「なんでそういう話に持つていくんだよ」

「違う違う。俺、からかうつもりで言つたんじゃないよ。りつちゃんすげえそういうの嫌つているの知つてるよ。单にお守り。それだけだよ」

ひとりでいきなり頬が腫れているようだつた。南雲の方は落ち着いて、いつも通りのすかつとした笑顔で話しているのに、自分だけが自意識過剰状態。でくの坊状態だつた。南雲の言葉はさらに続いた。

「俺、彰子さんと付き合つたのつて三ヵ月前だろ。でもその前に、いろいろ女子と出かけたり、会つたりしたことはショッちゅうあつたんだ。小学校の頃から、バレンタインデーにはチョコレートたくさんもらつた普通だつたし、この学校では話したことないけど、フーストフードの店でジュース飲んだりもしたことあるんだ。だから俺、軽いつていわれても仕方ないんだつて、思つてたんだ」

「本条先輩と同じくらいにか？」

比較対照の相手がまづいのではと思いつつも、上総は尋ねた。

「いいや、だつて本条先輩はするここまで行つてたんだろ。確か、小学校六年の夏に、きもだめし大会があつてそんとき」

「その辺の事情は、たぶん俺の方が事細かに知つていてると思つ」

「当たり前だつた。一年の頃からの付き合いだ。

「してないしてない。でもや、うちの親の方がかえって心配したみたいでさあ。中学に入つてすぐ、父さんに箱ごと、渡されたんだ」

絶句する番だった。

「あの、箱ごとつて、その、ダース単位で数えるつていう、あれですか？」

南雲は当たり前の顔をして頷いた。

「やつぱりそういうのつて、珍しいんだなあ。俺、ビールのうちでもそなんだつて思つてたから別に何も思わなかつたけど」

「そういう話、全然したことないし、したくもない」

「俺が男である以上、絶対に逃れられないことなんだから、かならず一枚持つて通えつて。たぶん、規律委員会でそれがばれたら騒ぎだらうな。でも、うちの父さんの言つこともそだなつて思つたら、いつもは定期に入れておくつとしてたんだ。あまり何も考えないで」

妄想で浮かんでいた生々しいものとは別のようだ、上総は困惑した。

「でも、彰子さんと付き合つただる。今までただのお守りつて感じだつたけど、最近うちの父さんが言つたことが妙に分かるんだ。『男だつたら絶対に逃れられない』ってことがさ」

わかる。たぶん南雲とは別の意味かもしれないけれども、上総には逃れられない感情というものが、伝わってきた。へらへら笑いのない、乾いた空間の中で流れる南雲の言葉が心地よくて、上総は自分のベットに腰掛けた。想いをこめて、言った。

「言いたいことは、なんとなくわかる」

これ以上、聞く必要はないと思つた。

「どうして南雲はいじめや奈良岡のことを想つことができるのだろう。

う。

まつすぐすぎるほどだった。

どうして惚れたのか、聞いたことはなかつた。きっかけは何だつ

たのか、どうしてあそこまでべたべたしたところを見せつけようとするのか、聞きたくても聞けなかつた。

たぶん、「つきあつてゐる」者同士だつたら感じるものがあるのだろうと思つてゐた。独り占めしたい、誰にも触らせたくない、そんな激しいものが、さうと南雲の中に溢れているのだううと思つていた。

上総には絶対に理解できないものだつた。同じ「つきあい」の相手がいても、全く感じられないものばかりだつた。定期入れの中にゴムの包みを入れてお守りにするとか、考えたことすらなかつた。

でも、南雲の父が言うとおり、「男だつたら絶対に逃れられないもの」だけは、いやとこうほど感じていた。

「あ、りつちゃん。俺、実際はまだ、封印切りしてないよ。一枚くらい、実験で開けてみたことはあるけれど」

南雲はからりとした表情で答えた。

「練習用にか？」

「うん。でも、今はまだ無理かな。俺まだ、金を稼ぐ」とできないから

「就職するまで待つって、ことか？」

「相手に責任を取ることができるまでつたらどうしてもそつなるよな。親にもいつつも言われてるでも、それまでがまんする自信なんて、ないけどな」

「じゃあ、本条先輩はどうなるんだ？ あの人、もしどちらかの彼女としくじつたらどうするんだろうな。たぶん念には念を入れているだろうから、そういうことはないと思うけど」

一人の恋人の間を行き来しつつ、光源氏のような生活を送つてゐる、青大附中の女つたらし本条里希先輩のことを思い出した。評議委員長としての敏腕ぶりや後輩たちへの面倒見のよさは見習いたいけれども、例の一点だけはどうも、ご遠慮したかつた。

「りつちゃん、俺さ、比較的そういうチャンスつて、あつた方だと思つんだ。でも一年の頃は、全然そんなこと考えなかつたんだよな

あ。でも、なんかの拍子で彰子さんと付き合つて、それからふうつと息を吐き出しながら、ベットに大の字となり、

「絶対見せられねえよな。そういう時の、俺の頭の中。きっと向こうは、俺が冗談でやつているとしか思つてないんだろうなあ。まだ、信じてもらつてないから、俺は俺なりにやってみせてるんだけどさ、好きだつたら好きつてきちんと伝えるのが、南雲家の流儀なんだけどや。」

3 一日一夜に向けてのセッティング

しばらく話が途切れた。上総は南雲をそのままにして時計の文字盤を見た。四時にさしかかるとしていた。壁下がり、にふさわしくない言葉ばかりが部屋の中にたむろしたのに、今の上総にはすべてが気持ちよかつた。自分の中で詰づけられなかつた、もやもやしたものに、南雲がすべて命名してくれたかのようだつた。どうして南雲はここまで上総の感じでいるものをわかつてくれるのだろう。菱本先生や貴史のよひで、痛すぎるのことなく、上総に入つてきてくれるのだろう。

上総は窓辺に立つて耳を澄ませた。バスの床つてくる音が聞こえてこないか、それだけを確認したかつた。まだ異常なしだつた。

「なぐちやん、今晚が最後のチャンスかもしれないよ

「なんだよいきなり」

「みんな、菱本先生にひっぱりまわされてぼろぼろに疲れ果てる

と思うんだ。たぶん、昨日の俺みたいに夜中、とつつかまることもないと思つよ。きっと、伝えたいこととかたくさんあるんだりうじ、どう考へても昼間に話せないことだつてあるだろ？」

「夜這いを推奨する立村くん、いつたい何を言いたいんだ？」

「ただし、封印切は許さない。明日の朝、定期入れ、薄くなつてないかどうか確認するからな」

そこだけ生真面目につづぶやいた。

たぶん南雲には、どうして上総が余計なおせつかいをやいてしまったのか、わからないだろう。それでよかつた。上総はただ、青空を部屋から見つめながら過いした時に、恩返ししたかつただけだった。

膝を組んで南雲の手をじっと見詰め、思いつくままに言葉を発した。

「夕方、夕食前にまたミーティングやるだろ？ 今日の反省というか、なんというか。その時に俺が夕食後の予定として、菱本先生の部屋でゲームをするかなにかの案を出す。そうしたらお前のグループや他の女子グループもだいぶ混じるだろ？ 菱本先生の部屋たつて、そんなに広くないし、途中で眠くなつたからと言つて抜け出すのも自由だ」

「ああ、だいたいりつちゃんの言いたいことはわかる。でもなんで『最後まで聞けよ。あの先生のことだ。最後の夜だし夜中まで盛り上がるや。ロビー』には人気もなくなるだろ？ ホテルの中には外に、ほら、鳥が飛んでいた池とか散歩するところもあるぞ。どうせだつたらそこでふたりきりになればいいじゃないか。まあ、『封印』を切ることは無理かもしれないけれどさ」

言い切つた後、南雲の言葉を待つた。

案に反して、南雲の顔はだんだん火照ってきた。

「あのや、りつちゃん。俺、あまり聞いたらいけないと思つから聞かないけどさ、どうしてそういうとてつもない案、思いつくんだ？ 俺がもし、りつちゃんの立場で、それこそ清坂さんとお前がそういうことになつていたとしても、たぶん言わないと思うな。いや、評議委員長だとか規律委員長だとか、そういうのは抜きにして」「いや、なんとなく。なぐちゃん、なにかがずっとひつかつたままなんじやないかな、って思つただけなんだ。バスの中とか、山登

りとか、している時、俺の中で勝手にそう思つただけなんだ。余計なお世話だつたら『ごめん。しないほう、いいかな』

不意に、南雲を怒らせてしまつたかと不安になる。

最後の方はかすれてしまつた。。

「いや、そんなことぜんぜんありませんって。あのさ、その『なにかがずっとひつかかつたまま』ってどうにかことなんだよ」

答えに迷つていろうち、くぐもつた車輪の音がかすかに聞こえた。窓邊にもう一度立ち、身を乗り出すと、さっきまでちゅんちゅん鳴いていたすずめたちがあつと/or>聞に遠くへ散つていった。同時に小さなマイクロバスが滑り込んできた。時間どおりだつた。ゆつくりバックして、駐車場に止める様子。何度も前、後ろに前後した後、ぴたつと止まつた。

空の色は、まだ黄色くなりきらない山々の色合いに、ほんの少し似ていた。からすがばばまと羽音を立てて窓を横切つていぐ。上総は南雲を手で招き、バスから降りてくる一年D組連中を指差した。菱本先生を始めとする思い思いの格好をしていた。ひとり、こちらを見て手を振つた男子がいた。隣で南雲は手を振つていた。上総は身を乗り出したまま、ただじつと降車してくるひとりひとりを見つめていた。

その九 集合三十分前のよしなじ

- 1 いきなりふたりつきりのひととき
- 2 反省、および事後処理その一
- 3 おみやげの数々
- 4 事後処理 その二

その九 集合三十分前のよしなじ

1 いきなりふたりつきりのひととき

貴史が戻つてくるのならば、ということで南雲は自分の部屋に戻つていった。あまつたクッキーを半分持つていった。すでに腹の具合は問題ないようだつた。どうみてもあれは仮病じやないだらうか。まだ明るい空の色を眺めながら、上総はタオルケットをたたんだ。一枚、貴史のベットに戻しておいた。

朝とは違う、ひくくくぐもつた声がわやわやと廊下に響いていた。みな、相当歩きまわつたかなにかしたのだろう。隣の方ではドアを閉める、びちつとした音が響きわたつていた。そろそろ来るだらう。長丁場のマイクロバスツアーや、何が起こつたのかをまずは「影のリーダー」羽飛貴史に確認しなくてはならない。たとえ菱本先生に「だだつこの評議委員」だとか言われようが、これは義務だ。

隣の部屋ではすでに話し声が聞こえる。なのに、なかなか戻つてこないのはなぜだらう。女子の気配もかすかにしたのだけれども、おかしい。一応予定では、三十分くらい休憩した後、五時からふたたびクラスミーティングを行うよていだつた。上総がすでに予定を組んでおいた。

宿泊研修二日目の反省および、帰りの予定についてまた話し合つ

予定だつた。

南雲に約束した通り、今夜は徹底して菱本先生のところでボードゲームをやるうといふ企画を、考え中だつた。もちろん上総は参加する気などさらさらなし。でも、野郎連中は乗つてくるだろ。そういうのりのいいことが、貴史もみな好きなのだ。

十分くらいして、やつとノックがした。

黙つて入つてくればいいのに。返事だけした。ドアが開いた。

「ごめん、入つてよかつた？」

思わず上総はベットから飛び降りた。

「清坂氏、あの、どうして？」

美里が橙色のワンピース姿で、するつとドアの隙間から入り込んでいた。後ろ手でドアをぴたつと閉めた。人差し指を口に当てて、「貴史、ちょっと遅くなるつて。菱本先生に呼ばれたみたいなんだ。一応、評議委員としての報告だけ、しといた方いいかなつて思ったの。今、大丈夫？」

良くみると橙とほんのりレモン色が大きく交差している、柔らかい雰囲気の服だつた。見たのは初めてだつた。

「あの、古川さんには断つてきたのか」

怖い下ネタ女王古川こずえと同室の美里には、念を押しておいたほうがいい。やつぱり忘れていたみたいだつた。慌てて両手で口を押された。

「ごめん、内緒できちやつた。あとでまたつっこまれるかなあ」

「わかつた覚悟はしつく。それより、清坂氏、とりあえず今日の出来事だけ頼む。あいかわらず、ひとりで舞い上がつていたのか？ うちの担任は」

美里は答えるまえにぐるつと見渡して、デスクの下に納まつてい椅子をひつぱりだした。別に、ベットの上に坐つたつていの。上総は自分のベットに腰をおろし、足を組んだ。じつと見つめられ、まだ口もとにじ飯つぶがついているのかと思った。かるくぬぐつた。

「立村くん、もう具合、大丈夫なの？」貴史が言つてたけど、相当昨日の夜、具合悪そうだったって

「羽飛は何も言つてなかつたか？」

美里たちの部屋の前で起こつた出来事を、聞かされていないのだろう。表情がいつも通りだということは、とりあえず嫌われていなってことだらう。安心して上総は尋ねた。

「貴史は言つてないけどね、でも、隠し事しても無駄だからね。立村くん」

「隠し事つてなんだよ」

唇の端をきゅっと上げ、美里は椅子を上総の膝元にぐっと近づけた。

「水口くんがみんなしゃべつてくれたからね。どうして何も言わなかつたのよ。私、水口くんたちの部屋の向かいにいたじやない。私が代わりにノックしてあげたつてよかつたのに！ 全く、いつもそなんだから。立村くんつて、自分でみんな責任取るうつとするから、ほんと、いらいらする…」

自分の口の形は、きつと「うそ？」と言つ形だつたに違いない。

「どういふことだよ、清坂氏。すい君から聞いたつて何をだよ」

「だから、おねしょが直つてないから、立村くんが代わりに起こしにいつたんでしょ。でも、菱本先生と鉢合わせして、そのまま倒れたんでしょ。水口くん言つてたよ。廊下の騒ぎで目が覚めたつて」「すい君本人からか？」

予想通り、美里は首を振つた。

「半分はね。でも、ほとんどの説明は菱本さん。バスの中で貴史とふたりで話を聞きだしたのよ」

嫌な予感はしていたのだ。たぶん席からして、貴史と美里、そして古川こずえ、極めつけが菱本先生というあのバス前列で、何かがおこらないわけがない。しかも、比較的三人は菱本先生になつている。上総が極端に機嫌悪くなるのであまり普段は見せないだけだ

つた。

ゆつくり上総は言葉を選びつつ、尋ねた。

「バスの中でなんでそんなこと、聞こうなんてしたんだよ」「だって、立村くんのこと、みんなとんでもない噂流していたんだよ。たぶん知らなかつたと思つけどね。私たちの部屋に忍び込もうとしていたんじやないかとか。とにかく、噂だけはすごかつたんだから」

「女子の間でだらう。そんなの、ほつといてくれたら落ち着くのにやる」

別にいやみを言つたつもりはなかつた。でも美里は敏感に反応した。

「なによ、こつちだつてそんなこと言われたら、いろいろと大変なんだからね！ まあ、立村くんのことだからまた何か、考えがあるのかなあと思つてがまんするつもりだつたんだから。そしたら貴史が、水口くんの方にいろいろ話を聞きだし始めて、そこで、だんだん内容が見えてきて、で、最後に菱本先生がね」

よくわかつた。無意識に言葉が漏れた。

「羽飛、あいつなんでそんなことを」

口をとがらせて美里は上総を遮つた。

「どうしたのよ。立村くん。貴史もちょっとやりすぎだつたんじやないかとは思うけどね、でも、立村くんがまた変なこと言われるんじゃないかつて気をつかつてくれたんじやないの。そんなこともわからんないの？」

上総は思わず、美里の顔をまじまじと見つめたくなつた。

言葉がかちんときたからではない。

自分の噂がどんなものか、気にかかつたからでもない。

上総にしか見えない、タオルケットのうすいものが、すうつと美里の間に挟まつたような、そんな気持ちになつたからだつた。

本当の感情を隠してくれるそんなもの。

気付かないのか美里はいきりたつて続けた。

「言いたいならはつきり言えればいいじゃない！ 水口くんのおねしょのことだつて、恥ずかしいかもしないけれど、うちのクラスの連中はそんなことで笑う奴なんていないと思うよ。それに立村くん、出発から具合悪かつたんでしょ。はつきり言ってくれれば、菱本先生だつてそれなりにがまんしてくれたと思うよ。ただ、いつも立村くんがひとりでわけわかんないことやつてるから、みんなどうしていいかわからないんじゃない」

「なにも今、そんなこと言つことないだろ！」

穏やかに言い返したかった。精一杯、そうしたつもりだつた。でも語尾が強くなつてしまつた。

「それにさ、立村くんのことをどう誤解してたかなんてわからないでしょ。私の部屋に真夜中忍び込もうとして、変なことしようとしてたんじゃないかとか、言つてる子だつていたんだよ。そう思われたつて仕方ない様子だつたつて、菱本先生も言つてたよ。部屋のノブを握り締めてたつて」

「それが本当だつたらどうする？」

美里はあきれはてたよつにふつと笑つた。

「女子の部屋はカギを掛けられるつてこと、聞いてたでしょ。私がこづえがドアを開けたままにしなければ、入れないつてこと、知つているよね。そんなこと忘れるような立村くんじゃないもんね。でも、他のクラスでは立村くんが本条先輩とホモなんじゃないかとか、手当たり次第女子に手を出してるとか、ひどい噂たくさんあるんだから。貴史、きっとそれ聞いてまた、変なことになるんじゃないかなつて思つたんだよ。そのくらい、察してよ」

言い返せない。その通りだ。頭の中ですぐに答えは出でいた。貴史の考え方などとわかつていた。でも、何か言い返したい。考える間もなく、自分の口が勝手に動いていた。

「それは感謝してる。わかつているさ。でも、俺が女つたらしだつて言われるのもう、前からのことなんだからいいけどさ、すい君の気持ちも考えてほしかつたんだ」

「他人なのに、どこまでその気持ちが読み取れるっていうのよ。立村くんは誰よりも水口くんの気持ちを読み取っている自信があるっていうの？ 思い上がりもいいとこじゃない！」

「読み取ってるんじゃない、勝手に感じるんだよ。清坂氏にはわか

つてもらえないかもしない。きっと羽飛も分からないと思つ。でも、少しでいいから想像してほしい。もし清坂氏がたとえば、知られたくないことをみんなの前で暴露されたら、どれだけ悔しい思いをするかって、想像はつくだろ？ すい君だって同じだよ」

美里は少し黙つた。何かを思い出そうとして、すぐに真つ正面に向いた。

「私だつて、少しはわかるうとしてるつもりだよ。立村くんのこと、唇を一瞬噛んだ後、軽く首を振り、言葉を続けた。

「知られたくないこと誰だつてあるものだつてわかつてるし、立村くんが水口くんのことを気遣つてあげてるのもわかる。勝手に私がわからないつて、決め付けないでよ

「決め付けたわけじゃないさ、ただ」

「でも、その代わりにいつも立村くんがとばっちり食つていてると、私も貴史も、いつもいらするんだから。立村くんは自分がまんすればいいと思つてるでしょ。周りの、立村くんの味方でいたいって奴が、迷惑することなんてぜんぜん、考へてないでしょ

よ

「あのや、清坂氏」

さすがにだんだん、腹に据えかねるものがあつた。静かに答えた。

「それって失礼すぎるくらい、失礼だよ！」

「俺が言いたいのは、すい君に言いたくないことを白状させよつとしたことが許せない、それだけだよ」

「でも、言ってくれなかつたら立村くんは卒業するまで、私と変なことしようとしたつてことになつちゃうんだよ。私も言われるし、あんただつてこれ以上スケベなねたでつっこまれたくないでしょ。

水口くんには、かわいがつたことしかやつたなとは思つよ。ナビ、誰も、それだからかおうなんでしなかつたよ。本当のこととは本当だけど万引きしたとかタバコ吸つたとか、そういうことじやないもんね。仕方ないことなんだもん、他のクラスの奴が何か言つたら、きっとみんながばつてくれると思つよ」

わかつていな。わからな。わかつても「うひ」となんて、できないんだ。

田の前でびしひと続ける美里。襟ぐりから鎖骨がくっきりと見えていた。制服を着ているときよりも骨の形がくっきり見えるのはなぜだら?。思つたより瘦せていることに上総は初めて気付いた。うつすらと焼けた肌は、妙につるつると光つていた。こういう女子と、小学校の頃は話したことがほとんどなかつた。仲間に入れてもらつたことももちろんなかつた。なのに、今は自分の「彼女」だ。

「付き合つてない」間柄だ。

言いたいことをすばすば言い放ち、それがいやみにならない。さりげないようでいて、実は誰よりも自分のことを思つてくれている。

今のことだつて、要は上総がこれ以上にじめられなことじようとしてくれた、それだけのことだとわかつていい。だから怒るとなんてできない、はずなのだ。

怒つてはいけない。ただ、あきらめ。

上総は自分に言い聞かせた。

俺の感じ方が異常なんだ、さつきなぐちやんに認めてもうえたと思つてひとり喜んでいたけど、やっぱり、清坂氏や羽飛からしたらおかしいよな。それがやつぱり、普通なんだ。

「もういい。後ですい君に謝つとく」

吐き捨てるようすに、田をそらして上総はつぶやいた。それが精一

杯だつた。まかりまちがつても「ありがとう」とは言えなかつた。

「別に立村くんがばらしたわけじゃないんだから、謝ることないのよ。なんでいつも立村くんは人の顔みて謝ろうとするわけ？ なんも、悪いことしてないじゃない。もっと堂々としたつていいんだよ。変人奇人オンパレードのロ組がどうしてこんなにまとまつているのか、それを作つたのは立村くんなんだから」

「違うだろ、クラスをまとめてるのは清坂氏と、それと羽飛だろ」
まずい、と言つた後で思つたけれども遅すぎた。

舌打ちしてすぐに謝ろうとした。

「ひめん、言い過ぎた」

「本音だつたらあやまらなくたつていいのに。もしかして菱本先生に言われたことまだ気にしてるわけ？ 菱本先生は『冗談でからかつているだけだつて気付かないの？ なんでも真つ正面から受け止めるのが立村くん、勘違いする悪いとこだよ』

言つたことへの反撃。それで当然だと上総は覚悟した。

勘違いする悪いとこだよ、か。

そうだよ。その通りだよ。

俺の感じ方はすべて、勘違いなんだ。

ずっとみんなに言つてきた。わかつていてる。

でも、どうしてもそう感じられない。

どうして清坂氏も羽飛も、そう軽く受け流せるんだ？

受け流せなかつた上総はもう押さえられなかつた。

「わかつたよ。俺の感じ方がおかしいだけなんだ。悪かつた

「またそつやつてひがむんだから。だからひづえにガキ扱いされるのよ」

「もういいよ終わつたことなんだからさ。『ひづえこれからクラスミ

ーティングだら、その時ですべて片付ける』

「また変なこと考えてるんじゃないでしようね」

「俺にとつては普通だけど、清坂氏にとつては異常なことかもしれ

ないだ

「どうして最初から私にわからないうて決め付けるのよ。言つてくれなかつたらわからんないよ、超能力者じやないんだもん。私だつて、立村くんがどうしてほしかわからんないから、私が正しいうつてことするしかないじやない。教えてくれたら、そつしょうつて思うよ。私の本当は、立村くんの本当じやなうつて、そのくらい、わかつてるもん。どうして全然言つてくれないのよー。もうこい、知らない！」

片足で美里は椅子をけつて立ち上がつた。勢い良すぎてばたんと壁にぶつかつた。ポケットを探りながらもう一度上総をにらみつけた。黄色いチェックの包み紙をテーブルの上に叩きつけた。正方形の小さな包だつた。かたつと音がした。

「勝手にしなさいよ。もう、知らないから

振り向かずドアを開け放しにして出て行つた。自然にドアが閉まるのに、少々時間がかかつた。その間上総は呆然と美里の背中を見送つていた。頭の中で、まだ美里の言葉の真意が解読できなかつた。

怒つてゐるのに、やせしい、なのに縁きり宣言のよつた言葉。

2 反省、および事後処理その一

しばらく口を利用ないでいた。痛いところばかり知つてゐるかのように、よく美里の言葉をかみくだけていた。いつもだつたらべツトにもぐりこんで寝るかなにかするんだろつ。でも、起きてゐる上総の頭はすでに、一年D組評議委員として働いていた。優先順位でいけば、しなくちゃいけないことは。

水口へ、あやまることだつた。

もう一度「しおり」の部屋番号表を照らし合わせ、受話器を握り締めた。0発信で部屋番号をダイヤルした。金沢かもしくは水口か。

すぐに出たようすだつた。眠そうな声で「はい」と聞こえた。

「もしもし、立村です。すい君か？」

「え？」

相変わらずほんやりした声だつた。小学生に話してこよみつな気がする。でもあえて、上総は普通にしゃべるよつこじていて。意地だつた。

「あの、昨日、『ごめん。本物』『ごめん。俺が悪かつた

「なんで？」

間の抜けたような声で、水口が答えた。後ろで「誰？」と聞く様子だつた。たぶん金沢だろ。そのまま筒抜けで「立村からだけど」と返事する水口。

「バスの中で、なんというか、無理やり、しゃべらされたんだろ。今、聞いたんだ。俺がいたら絶対そんなことさせなかつたんだけど、約束守つてやれなくて『ごめん』

口の中で繰り返している謝り文句。一度言つたら、こだまのようない何度も響いているよつこえた。気の利いた言い訳が見つからない。しゃべつているうちに自分をぶん殴つてやりたくなつた。なのに、受話器の向こにいる水口の声はほおつとしたままだつた。

「いいよ。起きたし」

「ほんとは中に入つて起こすつもりだつたんだ。なの

「廊下、つるさかつたからすぐ用意めたし、それに」

水口は、トーンの変わらないねむそつな声で続けた。

「菱本先生も電話してくれたから、完全に起きること、できたから

「あのや、菱本先生に話してないつて言つただろ！」

「しかたないよ。だつて、僕のためだつて、言つてたもん

それであるめこまれたのか。

最後に「本当に『ごめんな』とつぶやき、上総は受話器を置いた。

脱力状態だつた。

次に何をすべきか。

付き合い出してから初めての大喧嘩をしてしまった美里に、ビックリすべきか。これが問題だ。

上総からしたら、美里の言い分は真実を突いているところもあるけれど、ただ言い方がもつとあるんじゃないかというのが本音だった。

あんなにわめかなくたつていいじゃないか。そしてもつと分かりやすく言つてくれたつていいじゃないか。

第一、話をすりかえたのは向こうの方なんだ。

俺はただ、すい君に言いたくないことを無理やり言わせたことが許せないと言つただけなのにだ。

確かに俺は神経質すぎるのかもしれないけど、約束を破つてしまふのはやつぱり、許せないことだらう？

それに、俺のためについて言いながら結局は自分のことを認めさせようとしてるだけじゃないか。俺は黙つて頭さげて感謝しなくちゃいけないのか？ そうできないのがおかしいのか？

言いたくないことを言わないで怒られるなんて、そんなのあるかよ。

しかし、そこまで考えるうちはたと、気付いた。このままだつたら、清坂氏に愛想つかされる可能性大じゃないのか。

一ヶ月前だつていうのに。

付き合つたばかりだつていうのに、もう振られるのか？

今までどおりの友達でいられればいいけどさ。

なんかそれ以上の険悪な関係になつちやつたりどつするんだよ。

向こうとは来年もずっと評議委員で顔合わせるの。ずっと無視されたり、地獄だぞ。

それよりなにより、清坂氏としゃべることできなくなつたりどつするんだ。まともに話のできる女子なんて、あと古川さんくらいしか

かいないし、それもみんな下ネタばかりだ。

希望は全くないわけではない。こじれないうちに自分の方から頭を下げる、徹底して謝れば美里は機嫌を直してくれるかもしない。子供の頃から母を通して学んだ知恵だった。母を怒らせた時は「ごめんね、ごめんね」と何度もすがる。もしくは思いつきり反省しているかのようにうなだれつづける。結局は大泣きしてしまい、また怒られるのがパターンだつたけれども。美里とのつきあいはともかく、友達ですらいられなくなるかも知れないといふのは怖すぎた。

3 おみやげの数々

「たーだいまー！ 立村起きてたか？」

とつぴょうしもない声で誰がきたのかすぐにわかった。

ほこりだらけの格好で、貴史はひょいと何かを投げてよこした。平べつたい、手のひらに載りそくなくらいのものだつた。受け止めそこねたらまぬけ。片手で、バランス崩さぬように捕まえた。

「もしかしてみやげものか？」

「その通り。これ面白いんだぜ。開けてみるよ」

言われるままに開いてみると、円型のコースターっぽいものだつた。表面に薄く、プラスチックのようなものが回るように貼り付けられていた。金色の小さなドットがきらきらしていた。

いわば手のひらサイズの、星座盤。

よく見ると円の外に小さく、三百六十五日分の日付が綴られていた。矢印を用いた日の日に合わせると、その日の夜空が読み取れる仕組みとなつていて。

「ありがと。でも羽飛にしてはめずらしきよな。こいつの買つなんてさ」

「昨日お前が寝込んでいた間、夜の散歩に行つただろ。そのときさ、すげえ空の星が近くつてた、もつ、びかびかびかって感じで光つてるんだ。いやあ、青潟の空と違つて思つて、今夜こなもつと夜空をチェックしねばなつてことだ」

自分の分も買つたらしい。わざわざ旅行先で買つこともないだらうに。」

「わかった。今夜は俺も見たいな」

「とにかくすげえぞ。今日も雲がないから、たくさん見られると思うぞ」

上総は枕もとに、星座盤コースターを置いた。忘れないようにしないくては。

「それはそうと、本日の菱本先生は何騒いでた」

「あれ、美里から聞かなかつたのかよ」

「あの、ちょっとな」

口籠もつた。どうやら貴史も、美里が最初に上総へあいにきたといつことを知つてゐるらし。

「あ、どうしたんだよ。お前らまさか、する」としたんじゃねえだらうつなあ

「ばかばかしい」

話を逸らし、貴史にもう一度尋ねた。

「相変わらず、クラス全員でぞろぞろつて歩いたんだうつな。自由行動とかほとんどなかつたんだろ」

「まあまあ。でも、結構刺激的なこともあつたからよかつたんじゃねえか」

「なんだよ、その「刺激的」つてさ」

「あやうく、「青大附中の教師、危うく他校と大喧嘩」つてどこかな」

「なにやらかしたんだよ、全く」

詳しい話を聞くにしたがつて、上総は頭を抱えてしまった。

「みんなで武家屋敷とか、茶室見学とかいろいろ回つていたらさ、

どこかの高校生の集団とばったり顔合わせちまって。中に入ろうとしたら、いきなりそいつら、横入りするんだよ。俺もむかっときて何か言おうかと思ったら、やられた。菱本さん、血が昇つちまって、『お前らビニの高校だ！ 名を名乗れ！』って怒鳴ったんだ。そいつらもあやまりやいいのにな、けんかを買いますって顔するもんだから、危うく火がつくとこだつたんだ』

「あの、それってぞ、D組の連中がちょっかい掛けたわけじゃないんだよな」

「もちろんそうだつて。俺たちはおとなしかつたなあ。菱本さんだけがエキサイトしちまつて、とうとう間に、向こう側の先生がやつてきてしきりに頭下げてたぜ。俺たち、唖然。果然。どうすりやいのつて顔してた」

「これは、本音でいうしかない。

「おいおい、青大附中の恥だつてぞ。あやつ、気付かないのかよ。仮にも教師だつていうのにな。そりや、横入りはむかつくかもしけないけど、けんかを卖るのはやめるよなつて言いたい」

手をむすんでひらひらして、とやりながら上総は話の続きを促した。

「その他になにかなかつたのか？」

「行きがさ、ちょっと渋滞にひつかかつたみたいで、一時間くらい到着するのが遅れたんだ。したら、女子がさあ、トイレ行きたがつてちよつと、そればたばたしてたけどな。美里がうまく治めてた」

「野郎連中はどうだつたんだ？ あの、なんというか」

「やつこりにもあるんではないかと、用意させたペットボトルのことを言つべきかどうか迷つた。

貴史はにやりとしながら上総の肩をかるく叩いた。

「水口がさ、言つたんだよ。『立村がトイレ代わりに使えつて言つてたから、持つてきたんだ』ってさ。あいつ、閉所恐怖症っぽいとこあつただろ。トイレにいけないとか思うと、パニックになつちまうと』。でも、お前に万が一のためにつて言つて含められたのが、そつとうとう効いたらしいんだ。『これがあるから安心なんだ』ってぼろ

つと言つてしまつてさあ

話が読めず、上総はもう一度尋ねた。

「すい君が何言つたつてさ」

「白状しろよ。立村。お前、水口の面倒見るために外ほつつき歩いてたんだろ。あいつみんな、しゃべつちまつたよ。なーんも考えてないつて顔でな。『立村が全部、ペットボトルとか、ねしょんべんのこととか、みんなどうすればいいか考えてくれたんだ』とな

「まさか、あいつみんなしゃべつたのかよ！」

電話口で泣きながら「いきたくない。笑われる、いきたくない」としゃくりあげていたのはゞいのどいつなんだ。全く、俺は何を今までやつてきたんだよ！

「だから俺も言つてやつたんだ。俺も小学校四年まで毎晩、布団に地図を描く生活だったんだつてさ。みんな似たような経験してるから平氣だろ、つてな」

「あ、そつ」
力なくつぶやくのがやつとだった。

そろそろ下でクラスミーティングが始まる頃だった。

評議委員の仕事発動の時間だった。

あと十分くらう余裕があるだろうか。手帳を取り出して予定を確認した。

提案事項をいくつかまとめてある。南雲と約束したこと思い出し書き加えた。夕食後、ボードゲームを菱本先生の部屋でやろう、という案だ。もちろん希望者だけだ。上総は最初だけ様子を見て、途中で具合悪い振りして抜け出すつもりでいる。

貴史には話さないでおいた。

「あれ、なんかあるぞ。お前のか？」

貴史が机の上に残つていた小さい包みを摘み上げた。星座盤コースターが入つていた袋と同じ包みだった。たぶん、同じ店に入ったのだろう。

「ああ、清坂氏が置いてつた」

握り締めた後なのだろう、角が折れていた。貴史は田の前にぶら下げて数回揺らした後、投げるしぐさをした。上総は両手を受ける形にして差し出した。投げずに、ほとんと、手の中へ落としてくれた。

「開けるよ。俺も見たい」

「そんな、俺にくれたものじゃないかもしれないしさ」

「いや、あいつ、古川とふたりでなにやら選んでいたぞ。お前のことしゃべりながらな。この店、土産屋なんだろうけど、珍しいものがたくさんあつて、女子には大受けだつたみたいなんだ。あの星座盤「コーラスター」もなかなかのヒットだつたしなあ」

何度も指差す貴史。デリカシーのないことをしたくない上総。隣に坐つてきて、べたつとくつつかれてしまつた。暑苦しい、汗臭い。まだぐずぐずしていると貴史はさつと、包みをひつぱるしげさをした。

「なあ、見せろよ見せろよ」

なんとなく硬い、金属っぽい手触りが紙の上からした。シールを爪ではがし、そつと開いた。ちやりりと聞こえた。

「キー ホルダー かよ」

貴史が覗き込み、つぶやいた。

「すげえ、あいつらしくねえ。つまらねえ」

わつかに人差し指を入れて、今度は上総が目の前にぶら下げてみた。何も描いていない、列車の切符くらいの大きさ。柄は緑色のタータンチェックだつた。黄色と赤の細い糸が正方形に交差している。ふちは黒い合皮で覆われている。ぎゅっとぎると、心地よく納まつた。

「これだけかよ。すげえさみしいの」

「チェックのところに、あとで名前とか電話番号とか、彫るんだよ」

「ふうん、美里もつと氣の利いた物みやげにするんだと思ってたけ

どな。あ、つそつか。もしかして、今夜、『私』をプレゼントなんて考えているんじゃないだろうな。立村、俺たちの仲で抜け駆けは、ゆるさんぜよ」

ひじで小突いた。

「そんなことするわけないだろ！」

人差し指と一緒に、柄を握り締めたまま上総は立ち上がった。部屋の中をうろうろしないと落ち着かなかつた。なんだか、勝手に手の中が汗ばんできた。ぐるぐると何度も、あいている場所を回つた。「なんか今の立村見てると、ストレスの溜まつた馬が部屋の中をぐるぐる回るって話、思い出すよな」

「ああ、たぶんそうや。ストレスや」

息を深く吸い、立ち止まつた。貴史の方を振り返つた。

「羽飛、一年半の付き合いで免じてひとつだけ頼みがある」

「ほほう、なんなりと申せ」

「いやにやしながら貴史が答えた。

「今から三分間でいい。トイレにいもつていってくれないかな」

「は？ なんでだよ。トイレなんて三十秒もしないうちに終わっちまうぜ」

「だから、あえて、そこを頼む。三分間だけ、俺をひとりにしてくれ」

柄を握り締めたままで頭を下げた。

怪訝そうな顔をして、それでも仕方なさそうに貴史はユーニットバスの中に入った。片手には時間つぶしのつもりか、もらってきた観光案内を持って。

4 事後処理 その二

ばたんとしまるのを確認した後、上総はさつそく受話器を取つた。しおりを取り出して、一番端の女子部屋をチェックする。内線番号は部屋番号と一緒に。0発信で、ゆっくりまわした。たぶん、そん

なに時間経つていないうから、部屋にいるだろ？

一回鳴らすか鳴らさないかで、かちっと受話器のなる音が聞こえた。

「はい？」

瞬間、上総は思いつきり後悔した。

同じ部屋には美里だけじゃないってことを忘れていた。

「朝の漫才」の相方も一緒だつたつてこと。

「あの、古川さん？ 立村だけど」

知らん振りして切るかどうか迷つたが、礼儀を重んじて名乗ることにした。

「なんだ。立村なの？ ちょっと、美里出る？」

部屋にはいるのだろう。でも声は聞こえなかつた。『じゃえの、

「ほり、あなたのダーリンよ。出なさいつてば」

と、調子に乗つてからかうせりふだけが嫌といつほど響いた。隣の部屋、廊下に響きそうだ。こういう時にこそ、「背筋が寒くなる」と使いたかった。

結局、再び話の相手をしてくれたのは『じゃえ』だった。

「悪いんだけど、美里出なつて言つてるよ。あんたら、もしかしてここでけんかしてたりしたの？」

図星だけど、答えるわけにはいかない。上総はすつとぼけることにした。

「そんなことないよ。清坂氏、そこにいるんだろ？」

「いるけど、ねえ。用があるなら私が言つとくけどね」

「あんたに頼んだらどうこいつことになるかわからないだろ。怖い人だ」

「まあ、後で、美里にくわしーく、聞くからいいけどさ。でもせつかくじゃない。『本人の口から、今なんで美里がああふくれてるのを教えてもらいたいのよね。一夜を明かすんだから、私は察するに、美里はこずえにもまだ、上総との口論を打ち明けてい

ないようすだつた。何かがあつたという雰囲気ではあり、隠せなかつたらしい。こずえの性格からして、かなり攻め立てたに違いない。答えてないといふことは、隠したいといふことだらう。はてさて、どう答えるか。時間はない。しかたない。破れかぶれで答えた。

「じゃあ、一言だけ伝えてもらえないかな。さつきのもの、ありがとうひつてさ」

「さつきのものって、何よ何。気になるなあ」「だから单なる御礼だつて」

「美里から何かもらつたの？　ははん、もしかして、売店で選んでいたあれかな？　ね、美里、そうでしょ」

相変わらず声は聞こえない。頷いているか、首を振つているか。想像するだけだ。

「ああ、わかつた。立村、美里に何かしたんでしょおー。部屋に連れ込むか何かしてたんだな。きつと」

「そんなんじやない！」

「ここで声を荒げないですむ奴がいたら教えると言いたい。

「だつてさ、さつき美里が用事あるよつなこと言つてどこかにいなくなつてさ。まだその時は普通だつたんだよ。でも、部屋に帰つてきたとたん、こうだもんね。で、立村からの電話でしょ。これで何かないなんて、絶対ないよねえ。わ、お姉さんに白状しちまいな」

「冗談ぬかせ。挑発に乗らず、上総はつとめて冷静に答えた。

「俺はただ、清坂氏にお礼を言いたいと思つたから電話したんだつて」

「ああら、じゃあ直接部屋に来たつていのにも。つたく、昨日の夜だつて部屋に忍び込もつとしてたんでしょ。菱本先生からゼーンぶ、聞いてるよ」

話が違う。こずえは上総が夜這いするためにやつてきたと思い込んでいるらしかつた。誤解をこついつ時は解きたいけれども、できない。歯がゆかつた。

「ねえ、嘘じやないんでしょ？　真夜中の一時過ぎに、うふふ、し

たかつたんでしょお」

「だからなんでそういう話になるんだよ！　俺は用件があるからかけただけであつて」

「なあに向きになつてるんだか。ほんつと、あんたはガキだねえ。お姉さんは情けなくなるわ」

「じゅえの十八番が出た。

「ばかばかしい」

上総も同じく決まつた相槌を打つた。

「ばあか、知つてるよ。なあにあせつてるのよ。ほらほら白状しなさいよ。美里もなんだか真つ赤になつちやつてるし・・・・・・やだあ、ぶたないでつてば」

受話器の向こうで女子同士の修羅場となつているらしい。けらけらと笑いつづけるじゅえに向かつて、美里の、「そんなんじやないからつてばー、じゅえつてば何調子じこてるのよー。」

ひそひそながら文句を言う様子がうかがえた。

「ほらほら、立村に丸聞こえだつてば。しじうがないなあ。じゃあ伝言伝えとくよ。立村、あんた要るに美里に何を言いたかつたわけ？」お礼？　それとも

「分かつた。古川さんを信じて一言だけ伝えてくれ。わつせは言つすぎた。俺が悪かつたつて」

ほとんどもうやけくそだつた。それだけ伝えて、上総は受話器をゆつくり置いた。置く寸前に、かすかにじゅえの笑い声が響いていたようだつたが、気のせいだらう。

受話器を握り締めすぎつて、汗ばんでいた。べとべとして気持ち悪い。手を洗いたくなつた。

水を使おうと思って、コニシトイタイレに向かつたとたん、中から馬鹿笑いが聞こえた。

忘れていた。

「羽飛、もう終わった。出てきていいよ」

声を掛けるやいなや、ひょいっと顔をのぞかせた。貴史は持つて
いた観光案内のパンフを丸め、思いつきり頭上から叩き下ろした。
よける間もなかつた。

「痛いなあ。やめろよ」

一発目は両手で挟んで受け止めた。

「お前ら、もしかして初めての『痴話げんか』ってやつ、やらかし
たんだろう?」

「そんなんじゃないつてさ」

『痴話げんか』の響きが気持ち悪い。横を向いた。

「つたく、俺のいない間にまあ、やるひとやつてるよなあ。お前も
美里も」

「なんもやつてないつて言つてゐだろー。ただ、キーホルダーのこ
と氣付いたつて」

「じゃあ、なんだ? なあにが、『わつきは言こあがた。俺が悪か
つた』なんだ?」

こつんと三発目、肩にきた。避けられなかつた。

「羽飛、まさかお前、盗み聞きしてたのかよ!」

「こちらが聞くつもりなくとも、お前の声で全部丸聞こえだつて。
お前もトイレに入つてみればわかるよ。みんな部屋の会話筒抜けな
んだぞ。まったく、立村つて、天才なのか抜け作なのか、よくわか
んねえよなあ。ま、気にすんな。あとで美里に、お前が青ざめた顔
して謝つていたこと、伝えてやるからさ。古三に伝言するよつも、
それの方が正確だろ?」

頷いた。否定できない。

「そうだな。たぶん今ごろ、俺が清坂氏にとんでもないことをやら
かそうとして逃げられたつてことに、尾ひれついた状態で、女子全
員につたわつてているような気がする」

その十 クラスミーティングのよしなりと

- 1 女子評議委員からの指摘事項
- 2 ターチャンチェック
- 3 三日田予定変更に関する質疑応答
- 4 一日田夕食後の企画提案

その十 クラスミーティングのよしなりと

1 女子評議委員からの指摘事項

クラスミーティング開始ぎりぎりに「一大広間に下りていった。すでに全員揃つていいようすだった。みな、上総のように神経を使う出来事がそうそうなかつたのだろう。三十分の間に内線電話を二回もかけてしまうなんて、普通ないだろう。貴史と一緒に入つていくと、あんざしている連中が手招きしながら場所を作つてくれた。上総、よりも貴史の顔だろう。男子と女子の坐るところは双方に分かれていた。どことなく、空気が重たい。ちょっとだけよそよそしい。こういうときにはわかりやすい、南雲と奈良岡のカッブルをチエックするが、あの二人は別だということを再認識するにどじまた。相変わらずにこにこ笑いかける南雲に、困つた顔して「ちょっとおとなしくなりなさいよ」言いたげにうなづいてみせる奈良岡。なんだかんだいって、この二人は最高の組み合せなのだろう。美里は相変わらずつんと向こうを向いたままだった。髪の毛を小さくまとめておだんごにしていた。戸口のノブにカバーをかけたような感じだった。上総は無理やり視界に入るよう、わざと隣を通り過ぎた。ぴくんと、肩を振るわれたように見えた。ぺたんと座り込んで、こずえの方を見ながら口をとがらせていた。ほどぼりがさめ

るまでに「どのくらいかかるだろ?」隣の「じゃんがにやにやしながら上総を見上げ、

「まったく、あんたつてばほんと、ガキよねえ」

意味ありげにつぶやく。誰もいなかつたら手帳ではたき倒してやつているだろ?」

「これで全員揃つたか。おい、立村、もうだいぶよくなつたか?」

菱本先生が斜め前の上総に穏やかなまなざしを向けた。

「もう大丈夫です。心配おかげして申しわけないです」

ちつとも申しわけないと思つてこるような口調で上総は答えた。相手にも伝わるよう、視線をそらしたままで答えた。気付けばいい。そのくらいしないと、この先生には分かつてもらえないだろ? 「せうか、少しほは機嫌よくなつたか。せつからだから他の連中の土産話を聞いておけよ。ほら清坂、今日の反省を簡単でいいから、言つてみるよ」

美里に話を振つた。上総との大喧嘩を知らない他の連中が拍手する。

「ほら、あんたのダーリンに教えてやんなよ!」

はたしてどうでるか。上総は片手を握り締めた。貴史がにやにやしながら覗き込んだ。

「さて、美里はどう出るか、だな」

機嫌は直つていらない様子だった。美里はちらりと上総と貴史の方を見た後に、ゆっくりと菱本先生へむきなおりた。

「今日の反省なんですか? まず、みんなに言いたいことがあります。ちょっとだけいいですか?」

雰囲気が「反省」色ではない。

「なんだ、いきなり硬いなあ。清坂どうした?」

「いいんですけど」

美里はもう一度、上総の方をきゅっと見つめ直し、立ち上がつた。

「今日の予定はかなりきつかったんじゃないかなって思います。先生、どうして最初からの予定で通さなかつたんですか？ なんできなり、予定を変更して、山めぐりなんかしたんですか？ すつぐく私、納得いきません」

意味がわからない。上総は貴史をつづいた。

「どういうことだ？ 予定変更つてさ」

「あのなつまり」

貴史が説明する前に、美里がどんどん話しつづけていた。

「私たちが立てた予定では、黄葉町の古い街並みを散歩した後で、それぞれがそれぞれのお店で食事をして、その後で公園に行くことになつてましたよね。ちょっと予定、少なすぎるかなつて思つたけど、無理するもんじゃないって言われたからそうしたんです」

それを進言したのは上総自身だつた。大きく頷いた。

「でもなんで、公園を回つた後で「今度は予定変更して、遠回りして帰る」って言つことはないんじゃないですか。運転手さんも困つたと思います。それに、普通の時間だつたら平気な人でも、二時間も多くのバスの中にはいるなんてことになつたら、困る人だつています。車に酔つた人があんなにいたのはそういうことだと思うんですね」

美里の言葉をつないでみると、どうやら菱本先生のワンマンぶり發揮により、予定がかなり変更となり、バスの中では修羅場になつてしまつたようだつた。女子の一部が大きく頷いた。

「黄葉町はいろんな見所あるつて聞いていたし、私も友達同士で行くんだったらもつとたくさん回れたかもしけないつて思います。でも、人によつては疲れている人もいるし、バスにあんまり乗つていたくなつて人もいるといいます。私、この前本で読んだんですけど、山登りする時は一番体力のない人に合わせろつて書いてますよね。うちのクラスで一番体力がないのは」

ふたたび上総の方を見たが、それ以上何もいわずに続けた。

「そういう人に合わせて作つたのが、今回の計画だつたと思うんです。みんなが樂しいつて思えるようにしたかったからなんですね。で

も、余りにも無理がありすぎたって私は思つんですけれども。みんな、どう思いますか」

菱本先生は腕組みをして考え込んでいた。答えに苦しんでいるのだろうか。上総はじつと美里の顔を見つめていた。何かテレパシーのようなものがいれば、送つてやりたいのに。その通りだ、そうようそうだよ、と言つてやりたかった。他の連中はといふと、ざわざわと

「だわな、あれはきつかったわな」

「でも女子だけだろ、騒いでたのつてさ」

「俺、車に強いから平氣平氣」

の連呼。女子は、口に出さないものの何かを感じたかのようになつづいていた。奈良岡彰子が、女子の数人に頷いて笑顔を見せた。

「菱本先生、私としてはこれだけ言いたいんです」

美里は首を軽くかしげて締めた。

「いきなりの予定変更はやめてください。もし明日、予定変更したいんだつたら、今、この場で決めちゃつてください。みんな、心の準備があるんです。女子の場合、特にいろいろ大変なんです」

その通り、と上総が頷いているのに気付いたのか、美里はもう一度視線を向けた。ぎゅっと唇をかんだまま、頷き返してくれた。

2 タータンチェック

「おい、立村、お前のキー ホルダーの柄、覚えてるか？」

視線を交わすだけでの意思疎通をしている最中に、貴史が割り込んだ。

「氣を剃らされていらだたしく上総は答えた。

「タータンチェックだつてくらいだよ。覚えてないよ」

「お前、自分の相手が何くれたかぐらい覚えとけよ。ほら、美里の頭見る」

「頭？」

お団子に丸めた髪型のおかげか、輪郭がすつきりして、和服を着る人に近い雰囲気が感じられた。橙色のチェックワンピースがなんだかそぐわない。なんとなく、色合いがずれているように思つたのは氣のせいだろう。

「ほらほら、後ろの丸っこいところ、何か見覚えないのかよ」
ポケットを探り出した。握り締めていた後どこにしまったか忘れていたけれど、ちゃんと出てきた。なくさないでよかつた。

「これとどう関係あるんだよ」

グリーンのターランチェック模様。柄のつるつるしたところに目を走らせ、改めて美里の髪形を確認した。次の瞬間、ポケットにキーホルダーがちゃりんと落ちたのを感じた。

「なんで。

なんで俺は気付かなかつたんだろ？

変なところで鈍感なんだよ、全く。

「だろ、すっかり機嫌直してるだろ。あいつ」

拳骨で腕をとんとんと叩きながら、貴史がささやいた。

髪のお団子を包んだアクセサリーは、同じグリーンのターランチェック模様だつた。そつと手の平に隠して確かめてみる。同じ、黄色い色合いが混じつっている柄だつた。

「そういうことか。あいつ、露骨にペアルックするのが嫌だつたんだな。で、さりげなく、おそろいを狙つたつてわけかあ。な、立村。嫌いな奴に、普通そういうこと、しねえよな。するわけねえよな」

口にはしない代わり、再確認していた。

美里の髪型は、三十分前に見た時とは異なつていた。

たぶん、大喧嘩した後に、髪型を直したのだろう。

あえておそろいの髪飾りをつけてきたつていうことは。

「なあに一人で真っ赤になつてるんだよ。ほんつと、立村つてばボーカーフェイスしているくせに、純だよな」

よかつた。本当に、よかつた。

上総は立てていた膝を替え、小さくため息をついた。

3 三日田予定変更に関する質疑応答

菱本先生がやがて反省したのか、発言をした。

「わかった。悪かった。今日はお前たちにかなり無理させたつてことだな。黄葉町というのは、奥の方に行けば行くほど、雰囲気が秋らしくなってきていいと聞いていたから、お前たちにも一度見てほしかったんだ。でも、やはり無理はできないな。わかった。清坂。いきなりの予定変更はしないよ」

美里に近づいて、軽く頭を撫でた。ぞつとする風に美里は頭を振つた。

「先生、辞めてください。手、洗つたんですか

「そんな嫌な顔するなよ。愛情表現だぞ」

側で、

「美里だつたら別の相手で愛情表現してもらえるもんね」と声がかかる。坐つたままで足蹴りをしている様子だつた。上総は知らん振りを決め込んだ。

「じゃあ、清坂の反省を元に、明日の予定を立てたいんだが、いいか」

返事はない。みなうつむいて暇そうに指遊びをしていた。美里の言う通り、本当に疲れていたのだろう。貴史をつついて指差してみると、外国人のように肩をすくめていた。そういう、ハードなバス道中だつたに違いない。

菱本先生の発言はさらに続いた。

「今日、たまたま食事をしたところで、A組の狩野先生と顔を合わせたんだ。羽飛、お前たちも一緒だつたから分かるだろ」

隣の貴史は「はい！」と元気に手を上げて立ち上がつた。

「なんか、臨時の合宿してるって言つてたよな、先生。女子二人連

れててや、まるで「トートトジやねえかってや」

「おちやらけるなよ。とにかくだ、狩野先生が言つては明日、美術館に寄つた後に帰ると話していたんだ。偶然だなあ。僕たちが昼飯食べるところがすぐ側なんだ。立村、そうだつたな？」

頭の中にインプットしたしおりをさりとめくり、上総も答えた。

「はい。十一時に羽原公園にて写真撮影と昼飯を食べる予定にしています」

「羽原公園から少し離れているんだが、その近くなんだよ。明星美術館は、狩野先生もその三人と一緒に美術鑑賞をした後、青湯に戻るらしいんだ」

話が読めず、上総は何度も貴史の腕をひっぱり説明を求めた。しかし全く相手してくれなかつた。

「せつかくだつたら、そんな少ない人数でちんまりやるよりも、大勢で盛り上がり方がいいだろつということで、思い切つて場所を羽原公園から、直接美術館に行くといつのはどうだろつ？ どうだ、みんな？」

つまり、菱本先生は三日田の予定「羽原公園にて食事プラス写真撮影」を今のうちに変更し、「A組女子三名プラス狩野先生」と一緒に明星美術館にて合流したいらしい。

べつにいいんじゃないかとは思つた。羽原公園にどうしても行きたかったわけではない。ただ帰り道、弁当屋さんがたくさんあって、食べるに困らない場所ということで決めただけだつた。運転手さんには申しわけないとと思うけれども、その辺は臨機応変にやつてくれるんじやないだろつか。

上総はぼんやりと聞いていた。さらに続いた。

「だが、ここで問題なんだが」

言葉を切つて、ぽりぽりと頭をかいた。

「狩野先生アンド女子三名にまだ、その話をしていないんだなあ。実は」

だつて、昼に会つたつて話したばっかりじゃないか！

貴史の背中を思いつきりひつぱたいてこすらを振り向かせた。

「なんだよいつたい。菱本さんの話聞いてりやわかるだろ」「無視だ。全く頭に来る。

「一応、お誘いはしてみたが、狩野先生は遠慮深いというかなんど、いうか『無理なさらないで結構ですよ』とのことだったんだ。でも、せつかく近くに来るんだしな。大勢で盛り上がる方が楽しいだろ。な、羽飛」

貴史に相槌を求める菱本先生。上総の方は一切無視だ。

「うん、まあ、そうだよな。先生、じゃあいきなり抜き打ちで誘うのか？ 女子三人も」

「そうだよ。たつた三名での宿泊研修なんて淋しいだろ。だつたら、2Dのあつたかいメンバーと一緒に楽しいひと時を過ごしてもらつほうがいいだろ。もし羽飛だつたらどう思う？」

首をひねりつつも貴史は賛成の印に両手を上げた。

「やつぱし、淋しいのは可哀想だよなあ。俺、A組のことよくわからんけど、でも、せつかくだったら先生の言つ通りに美術館直撃、賛成だなあ」

「じゃ、拍手で決めよつ。賛成のもの、拍手をひとつ

菱本先生の案は確かに面白い。

でも、どこかがひつかつた。咽の小骨が取れなかつた。

どうしてかわからない。上総は一人で首を振つた。

違う、何かが違うよ。

拍手可決が終わるまえに何かを言つたかった。

「いいですか、菱本先生」

向き直り、上総は正座しなおした。手を動かそうとしていた菱本先生は、片目だけきつとにらみつけ、すぐにもとの笑顔に戻して返事した。

「なんだ立村、また何かあるのか？」

「いいえ、質問をいくつかさせてもらつていいですか」

「ああ、わかることだつたらなんでもいいぞ」

息を大きく吸い込み、まずはひとつめの質問をきました。

「なぜ、A組の女子三人だけ、別の日に宿泊研修を行うことになつたんですか。それなりに事情があるんではないかと思います。確かに僕が聞いているところですと、A組の宿泊研修は先週の月曜から水曜だつたはずです」

「そうだ、立村の言う通りだ。でも、どうしても出られなかつたらしい。お前宿泊研修出られなかつたら淋しいだろ？」

「狩野先生は、一緒にやろうつていうのを断つたんですか」

「ああ、でもな、立村。狩谷先生はおだやかな人だから、気を遣つてくれたんだ。いきなりA組の奴が入つてこられると迷惑なんじやないかつてな。でもそんなことないだろ。2Dの連中は、そんな心の狭い奴らばかりじやないよな」

賛成、と叫ぶ奴がいた。近くにいたら頭をはたいてやりたかった。暴力行為にはいたらず上総は質問を続けた。

「もし、A組の人が一緒に入りたがつているならば僕は全く問題がないと思つています。でも、狩谷先生はそうしたくないとおつしやられているということですから、それは無理にすることないんじやないでしょうか」

努めて穏やかに伝えたはずだった。

青大附中2年D組評議委員としてのプライドを持つて。

「そうだな、立村。お前はそう思うだろうな」

つぶやき加減に聞こえた。まずい、菱本先生に火をつけてしまつたらしい。上総は身構えた。片膝を立て、じつと菱本先生の顔を見据えた。視線がぶつかり合つた。相手は目をそらさなかつた。意

地で上総も見つめ返した。

「だが、よく考えてみる。すぐ側に同じ学校の、同じ学年の奴らがたくさんいるのに、たつた三人で食事をしなくちゃいけないA組の子達のことも考えてみる。淋しいぞ」

「どうして淋しいと決め付けられますか」

目が壊れそうなほど力が入っているのが分かる。膝に組んだ手も汗ばんでくる。女子の数人が

「また、立村くん言つてるよ」

とささやいているのが聞こえる。空気がまたマーブル状になり体を包んでいるようだ。熱がない分苦しくない。にらみ返せるのが救いだつた。

「立村、お前はそういうことになつても淋しくないかも知れない。ほつといてほしいのかも知れない。それは人それぞれだろう。でもな、A組の人たちは本当に立村と同じ感覚を持つているだろうか？みんながみんな、立村と同じようにひとりでいたいと思っているとは限らないんだよ」

普段は挑発に乗らないよう心がけている。

菱本先生相手でも同じことだつた。

上総は冷静沈着をモットーに、さらに質問した。

「それでしたらせめて、狩野先生のところに電話をするか何かして、もう一度確認を取つた方がいいと思います。いきなり待ち伏せされると、びっくりしてしまい何がなんだかわからないと思います」

「そうだな、お前結構不意打ちされると、パニックになる性格だもんな」

菱本先生の口元に再び、笑みがこぼれた。馬鹿にしているとしか見えなかつた。こめかみのところがちりちりいたくなつたけれどがまんした。

「だが、狩野先生は今夜、別の家にいるんだそうだ。みんな、知つてるか？ 狩野先生の実家な、黄葉町から少し山に入つたところら

しいんだぞ。いいなあ、そこで美味しい山菜料理を出してもしてやるんだそうだ。いいなあ

「それならそこに電話すればいいんではないでしょうか」

上総は食い下がった。自分でわからぬ。とにかく、やめさせたい、その一念だけがかあと頭の中に燃え広がっている。どうしてなかすら見当がつかないのに。

「あんな、立村。お前の方こそ、どうしてそんなにみんなの盛り上がりに水を差したがるんだ？　よく見てみる。D組の連中なんてみな、面白がってるぞ。お前がまだだをこね始めたつてあきれてるぞ。本当に、お前、評議委員のくせしてガキだなあ。何が嫌なんだ？　言つてみる」

周りの空気がせせら笑い混じりにたゆたつてているのはわかっていた。いつもそうだった。ロングホームルームの時に上総が壇上に上がり発言している時、菱本先生はいつもあきれ顔で「お前は本当にガキだなあ」というわけだ。かつとなつて殴りたくなる。

「別にそういうわけではありません」

「じゃあ、どうしていつも、先生につつかかるんだ？」
答えられなかつた。答えはあるけれど、言つわけにはいかなかつた。

黙つていると、服従したように見えたのだろう。さつそく拍手での可決に入った。もう何も言えず、上総はうなだれた。唇を血が出るくらいぎゅっとかんだ。

「それでは、もう一度。賛成の連中はみんなで拍手しな。ほら、立村にもわかるようにな」

周りを見はしなかつた。隣で貴史が派手に手を打ち鳴らしている。前方の方では美里とこずえも笑いながら指先を動かしている。ほぼ全員の拍手だつた。

「ほらみる、わかつたか立村。お前が思つているほどうちのクラスの連中は神経質じやないんだよ。安心しろ。気配りするのもいいが、いつも余計な心配ばかりして、やる気をそぐ方がもつとまづいこと

なんだ。少しは勉強になったのか？」

立てた膝を数回軽く叩いた。上総は唇をかんだまま、じつと畳を見つめていた。田を数えたかった。答えるとまたとんでもないことになりそうだった。せっかく身体の調子が元に戻つてしまつたのに。今度は感情の方が病気になつてしまつたようだった。

「どうしたんだよ、立村。黙つてればいいのになあ

「つるさいな」

吐き捨てた。貴史の顔を見るのも嫌だつた。とにかく、あとでこのもやもやが何かを突き止めよう。何はともあれ夕食後、だ。

4 一田田夕食後の企画提案

「ぐつと瞬につまつたものを飲み込んだ後、上総はもう一度手を上げた。

「先生、もうひとつ、別のことで発言していいですか」

「おいおい、まだかよ」

すつと顔を上げた。表情を隠した。菱本先生は明らかにうなざりしたようすで上総を手で制した。

「簡単に言えよ」

「違うことです。夕食後の提案なんですが、クラスでボードゲームをやろうという案があるんですが、どうでしょうか。大広間でもいいですし」

そこで言葉を切つた。菱本先生の出を待つた。確か大広間は食事後、すぐ出て行かないといけないはずだった。

「大広間はつかえんぞ」

「それだったら、提案なんですが、菱本先生の部屋つていうのはどうですか？ せっかくだったら、最後の夜だから盛り上がりたいつていう意見もありますし。申しわけないんですが、先生と一緒にこういうのはどうでしょうか」

感情のこもらない冷たい口調だとわかっている。とにかくむかむかするし、押さえるのもかなりしんどかった。でも、南雲との約束を考えるところで提案しておきたかった。

「ほほう、俺の部屋でか」

「一番広いし、それに大広間よりも先生の部屋の方が、落ち着くんじゃないですか。もちろんそれは、出入り自由という形をとればいいと思います」

膝を抱えたまま、上総はすらすらとしゃべりつけた。直前までぶつちぎれそうになっていたのにだ。

「ボードゲームってあるのか？」その前に

「一応、ボードだけは持つてきました。駒はその辺にある色紙でそれぞれが作ればいいと思います」

上総はすろぐを複雑にしたタイプのボードゲームの名前をあげた。プレーヤーが中学に入り、授業、運動会、部活、恋愛の経験をしながら成長していくという、いわば人生ゲームのようなものだった。上総が気に入らないのは、その中に「委員会活動」が一切入っていないことだった。もらひものだから一度もやったことがない。

「なるほどなあ、夕食後か」

「あとで、先生のところにボードを持つていきます。あれだと大勢でもできますし、他の人が別のボードゲーム持つてきていれば、そちらと二分割にすればいいことですし」

息を吸つて、上総は周りを見渡した。

「もしあれなら、手を上げてもらいましょうか」

「いや、いい。立村、それ面白いな。みんなでやるのか。たまにはお前も評議委員らしいことを発言するな。少しは大人になつたか？」まぶたを軽く閉じ、息を吸い込んだ。

それなら決をとろう。

「それでは拍手で、夕食後のボードゲーム大会に賛成の人、お願ひします」

あつけにとられた格好の連中だったが、いきなり手を打つ奴がい

た。ぽんぽんぽんと、リズミカルだった。南雲だった。顔を見ると、相変わらずにこにこと、青空一杯の表情をしていた。つられるように他の男子が一人、一人と手を叩き始めた。そして最後に女子に波及していった。

「よし、決まったな。わかつた、じゃあしかたないなあ。ゲームに勝つた奴には、なにかご褒美を考えるとするか。よし、わかつた！」
単純な人だ、と上総は冷たく見返した。

やっぱり、「みんなで楽しく」が好きな先生なんだ。菱本さんは。

その十一 下準備をめぐるよしな」と

- 1 白菊のテレホンカード
- 2 たよりになるのはおないどし
- 3 数学の先生が好きな理由

その十一 下準備をめぐるよしな」と

1 白菊のテレホンカード

あまり人をにらまないよう、に、箸の先をかじりすぎないよう、に、あえて菱本先生および女子の方を見ないように。いろいろ心がけながら夕食を終わらせた。なんとなく女子同士の間に流れる空気が、べとついているよくな気がしたけれど、そんなのは女子評議委員にまかせとけばいい。いつも行動を一緒にする連中からは、散策にかんするいろいろな出来事の説明を受け、ふんふんと聞いていた。あえて菱本先生に噛み付こうとは思わなかつた。

次にすることが、決まつていたからだ。

部屋に戻つてからかばんの奥から、「あこがれのハイスクールライフ・どきどきゲーム」のボードと説明書を取り出した。親戚からもらつたもの。クラスの連中にも声をかけて、すごろくとかボードゲームとかカルタとか百人一首とか、そういうものを持ってきてもらうよう頼んでいた。

食事中に確認したら、すでに三名がその類を用意してくれていた。自分も入れて四つ、そういうゲームがあれば、三十人の2D連中はきつちりと分かれてもりあがれるだろう。その中に割り込むのが

おそらく、菱本先生だらう。たぶん、みんなで盛り上がり盛り上がるから機嫌がいいだらう。

「三十分後に菱本先生の部屋へ集合。ゲームも持参のこと」内線電話で連絡を、男子にのみ入れた。窓のカーテンは開けたままだつた。青みが残る藍色。夏の空。星はまだ見えなかつた。上総は貴史がくれた、星座盤コーナーを掲げてみた。

なにはともあれ、一番星を探せつてとこか。となりでテレビアニメに見入つてゐる貴史には、聞こえないようにつぶやいた。

「ちょっとジユース買つてくる」

返事はなかつた。そりやそりやそりやそりや。貴史の見ているアニメは例の『砂のマレイ²』だつた。たぶん美里といづれも食い入るようにして観てゐることだらう。

ロビーに下りた。誰かがいたら黙つてジユース買つて帰るつもりだつた。

幸いいなかつた。

不気味なくらい静かだつた。

フロントには手鈴が置いてあるだけ。当然、となりの公衆電話も、誰もつかつてはいなかつた。

上総は財布を取り出した。ほとんど中身が小銭のみだつた。カードを入れるところを触ると、度数が半分くらいしか残つていないテレホンカードを見つけた。白菊のイラストだつた。この前父が葬式でもらつてきたものだつた。

受話器を取る音が響く。周りを見渡し、滑り込ませた。

真つ正面には階段が見えた。手帳のアドレスを探して、ボタンを押した。

電話に出たのは本人だつた。2A男子評議委員。同じじへ一年連續持ち上がりである。ほつとして名乗つた。

「あれ、立村、今日つて宿泊研修だろ？ 黄葉市だろ？ どうしたんだよ？」

評議委員同士、お互のクラスがどうこうといふに行くかをすべて把握済みだつた。上総に限らず、評議委員としての義務だつた。本当は菱本先生に関するぐちをこぼしたことだつた。でも手元のテレホンカードは度数が少ない。しかも、勢いよく減つていつている。やはり遠距離通話になつてしまふんだろ？

「申しわけない。テレカが切れるまえに用件だけ聞いていいか？」
「いいけど、土産なんかよこせよ。食い物がいいな」
「なんなりとご要望にこたえるから、それより」

上総は息を整えて、ゆっくりと話した。

「A組の宿泊研修は先週だつただろ？ その時何か変わつたことなかつたか？」

「変わつたことつたつて、もともとうちは団結力ないからなあ。ふつうに宿とつてふつうに盛り上がって、それで終りだよ」

「その時、もう一度合宿やうつて話になつた奴とかいなかつたのかな。例えばさ、狩野先生の家に泊りに行こうとかそういう話になつたりとか

「別にうちの担任、クールだから、そんなべたべたしたことしだがらないとは思う。けどな」

言葉を切つて、A組評議委員はためらつてつぶやいた。
「噂には聞いてるだる。うちのクラスから退学する奴がいるつて

「退学？」

そういうえば貴史も前の日はさうこいつをちりりと口にしていていた。ぴんとくるものがある。

「もつと詳しく聞きたいんだけど、急いでしゃべつてくれるといい。ほんと、テレカの度数がまざいんだ」
「せわしないやつやなあ」

わざとのんびりした関西弁をのぞかせて、あとはふつうどおりに話はじめた。

「一年の時から、名簿には載っているんだけどほとんど顔を出したことがない女子っていうのがいるんだ。俺も顔見たこと、ほとんどないな。女子の何人かが遊びに行ったり、うちの担任が様子を観にいつたりして、なんとか一年には進級したんだけど、もう全く、机だけの存在」

「なんか噂には聞いたことがあるな」

「だろ？ でも、夏休みいっぱい青大附中をやめて、公立の中学に戻るんだと。結局、雰囲気が、合わなかつたつてことらしいんだ」「当然のこと聞くようだけど、その子は宿泊研修には来なかつたんだな」

「当たり前だつて。ただな、うちの担任も氣を遣つたんだろうな。その女子のために、仲のいい女子ふたりと一緒に、どこか旅行しようということを持ちかけたらしいんだよ」「話のピースがぴたつと当てはまつていく。

「女子三人と狩野先生とか」

「狩野先生の実家、黄葉市だろ。せつかくだつたらつてことで」「でも担任の家に泊まるなんてうれしいもんか？」

「なぜかわからんけど、狩野さんにはなついてたみたいなんだ」上総はカード度数の減り方をちらちらチェックしながら、電話の向こうに菱本先生の「みんなで一緒に遊びましょう」プランを伝えた。

「せつかくD組の連中がこんなにいるんだから、狩野先生と一緒に遊びましょつてか。おいおい、それはまずいぞ、立村

思つたとおり、A組評議委員の声は曇つた。

「だよな」

「当たり前だつて。ただでさえあの女子、他人と口利かない奴だつ

たんだぜ。仲のいい女子一人以外とは全くしゃべらないんだぜ。よく狩野先生の誘いに乗ったよな、って俺たちも不思議がつてたんだ。

たぶん、集団でわあっとやるのが嫌いなんだろうな

「だろうな、話聞いてる限りはそう思つ

強く頷いた。

「もし狩野先生」一行と会流することになつたら、うちのクラスはうるさい連中がほとんどだから。特に女子はな

「あ、清坂とはどこまでいつたんだ？」

そういう余計な話題で度数を減らさないでほしい。上総は無視して続けた。

「その人にとっては、地獄だろうな。A組評議としての」意見をいただきたい」

「別に俺はその女子がどうのこのひわけじやねえけどなあ」前置きした後、答えた。

「ただ、俺だつたら絶対止めてほしいって思つよな

「そんなことされないほうが、絶対嬉しいよな

強気で上総も確認した。

「絶対、絶対。もし俺とかが仲間と一緒にいるといつんだつたらすげえ盛り上るだろとは思つ。でも、あの登校拒否少女は絶対に嫌がると思うなあ」

ぶうぶうと、カード度数が切れる音。

「悪い、ありがとう。ご期待に添えるよつにやつてみる」

「幸運を祈る。グットラック」

同時にカードが出口から舌を出した。ぴいぴい泣いている。なだめるために引っこ抜いた。ざまあみろだ。

3 数学の先生が好きな理由

だいたい自分の思つていた通りだつた。

以前から、A組にひとり、登校拒否をしている女子がいるとは聞

いていた。顔も名前も知らないが、入学してからすぐに学校に来なくなつたという。担任の狩野先生が心配して何度も家庭訪問したらしいが、効果は全くなかったという。

よくも、一年に進級できたものだと思う。

青大附中の場合、出席日数をかなり細かくチェックされるので、みな休む時は日数を計算しておくものだつた。上総もしおりゅう熱を出して休むことが多いので、その辺は神経を使う。

その後一年に進級したはいいが、相変わらず学校には来ない有様。結局、貴史が話していたように「夏休み明けに退学」するらしいということになつたそうだ。

A組評議が話していたとおり、絶対に宿泊研修なんかには行きたくなかつただろう。また、狩野先生になついていたからということによくくつついでこれたものだとも思つ。その辺の事情は想像することしかできない。

ただ、気持ちはわからなくもなかつた。

少なくとも、狩野先生の方がずっと、その女子のことを気遣つてやつてゐるような気がしてならなかつた。

ほとんど顔も知らないクラスメートとバスに閉じ込められ、神経を使い続けて息を詰まらせてしまつ。もしくは話の合わない連中と一緒にの空気を吸いつづけなくてはならない。登校拒否しているということで、好奇の目を向けられるかもしれない。いじめることはないだろうが、それでも言葉の端々に無意識の刺を見つけるかもしれない。

上総からしたら、それはちょっとと考えればわかることだと思つた。しかし、菱本先生を中心とする連中には想像もつかないことらしい。みんなで楽しく盛り上がって、素敵な思い出をつくりてやることが、その当人にとつて幸せなことなのだと決め付けている。

狩野先生は一年数学の担当だつた。年はたぶん菱本先生と変わらないくらいだらう。銀縁めがねで細面の、いかにも理系、難しい数字を使って勉強してきましたといった風だつた。大学の講師といつ

た方が近いかもしれない。とにかく熱血漢の菱本先生に比べると、はるかに物静か、生徒ひとりひとりに「さん」をつけて呼ぶ。それがいささか他人行儀に感じられたのだろうか。A組は団結力の必要な行事にはめつきり弱かつた。ひとりひとりが個人主義という考え方の持ち主だと、評議委員は言うけれども。よく「D組はいいよね。菱本先生のクラスって毎日笑いが絶えないって、楽しそうだもん」という声が出るのは、大抵A組からだつた。もちろん上総は反論するのが常だつた。

「俺は狩野先生の方が何十倍もいいな。余計なこと言わないからさ」とすると大抵の連中は言い返す。

「あんな、狩野先生、お前の天敵、数学教師だぞ」「うん、数字が嫌いでも人間は嫌いじゃないから」

確か一年に上がつて最初の数学小テストの時だつた。

数学の点数は基本的に見ないようにしているので覚えていないが、いつものように赤点のはるか下だつたはずだ。さっそく、個人面談室に呼び出された。思いつきり絞られるのだろうと覚悟して息をとめて入つたところ、狩野先生は日本茶を出してくれた。感情を不要に揺らさぬ風に、穏やかに。

「立村くん、本当は数学よりも英語をもっと勉強したいでしょ」「いきなり話が飛んだので口が利けなかつた。

「この前、君の英作文を見せてもらいました。うちの大学でもこれだけ書ける人はいませんよ。僕もここまで綴れるかは自信がありません」

たいしたことじやなかつた。英米文学に関する簡単な論文を英語担任から渡され、その感想を好き勝手にかけといわれたのででっちあげた代物だつた。

「立村くん。僕は数学の教師だけれども、君が語学や文学に長けていることはよくわかります。伝わってきます。だからその才能を伸ばしてほしいと思っています。ただ、そのためには最低限の数学知

識をマスターしてほしい。理解しろなんていいません。難しい問題を解けとまではいいません。ただ、問題のパターンを暗記してください。ひとつ目の問題の解答集、それを丸暗記してください。それで十分です。英単語や英文を暗記するのと同じ感じで、何も考えないでただ丸暗記でかまいません」

使用していた問題集の解答集を「コピー」しておいてくれたのだろう。渡してくれた。

「では、来週から、小テストの時はこの問題の答えだけを暗記して、渡された答案に書き抜いてください。君には問題は出しません。とにかく、そういうパターンなんだってことだけ、覚えれば大丈夫ですよ。他の人がなんと言おうとも、立村くん、君は優れた能力を生まれ持っているのだから、それを信じてください。自信を持つていいんですよ」

呆然としたまま解答集を持って頭を下げたことを覚えている。

その後中間期末の試験をのぞき、上総に与えられたテスト用紙はみな、問題集の丸暗記部分を書き写すことのみだった。一部女子からは

「なんか立村くんだけずるしてるんじゃないの」

とさわやかれたけれども、誰もが上総の数学能力のレベルを理解していたので何事もなくすんだ。

特筆すべきこととして、狩野先生のおかげでなんとか、一学期の評定は赤点から逃れることができた。上総の青大附中成績表において、数学の評定を黒い文字で綴られたのは初めてだ。

たぶん貴史や美里から見れば、他人行儀な存在感のない先生として映るのだろう。実際、A組の生徒達とも距離をあいているような感じだという。プライベートな話題もほとんど出さず、進路のことや勉強のことについて、やはり物静かに語るだけだという。

「うちの担任、とにかく俺たちに対して無関心。この前うちのクラ

スでさ、中体連の陸上800メートルで記録だした奴いるだろ。ふつうだつたら大絶賛するだろ？ すごい奴だと誉めてやるだろ？

なのにさ、「よくがんばったね。おめでとう」の一言。奴はもう舞い上がってるんだからさ、もつと誉めろよ育てろよって、俺言つてやろうかと思つたぜ」

A組評議委員が委員会終了後、話していたことがある。

「いいじゃないかよ、十分だ。それだけ誉めてもらつてまだ物足りないのかよ」

あきれて上総がつぶやくと、

「立村お前、菱本先生だつたらどうだ？ 一時間くらい実況中継やつてくれるんじやないか？ それこそ青大附中の大スターつて扱いしてくれそうだよな。あいつはそれを期待してたんだよ。なのに、つらあつとした態度で一言だけだぜ。やる気なくするぜ」

「俺がもしさいつと同じ立場だつたら、大会の次の日は学校休むな。D組担任のうつとおしい言葉なんて一切聞きたくないもんな」

話は平行線を辿つたことを覚えている。

しかし、單なる無関心な教師が、救いようのないくらい数学能力の劣つた生徒に対して、あれだけ心配りしてくれるものだろ？ しかも、狩野先生は上総の能力が語学に秀でていることを、かなり事細かに知つていた。後日、他の連中に確認したところ、上総ほどではないにしても数学で苦労している男子もう一人にも、似たような呼び出しをかけて、そいつに向いた問題集のコピーを渡してくれたという。同じように、相手の得意分野を誉めた後に、A組の担任がである。D組の生徒に対してである。

もしかして狩野先生は、と上総は聞いてみたかった。

俺と同じ感覚を持つていてるんじやないですか？

隣りで悩んでいる相手のことが、勝手に伝わつてくる、そんなどうしようもない感覚を持っているんじやないだろ？

俺が、南雲の事件の時に貧血起こしたような、あんな息苦しさを。

もし、やうだとしたら、と仮定してみた。

何が理由かはわからないが、学校に来たがらない女子に對して、狩野先生はいろいろな手をつくしたらしい。A組評議委員からもその話は聞いていた。しかし、結局退学ということになつたわけだ。宿泊研修には当然参加したくなかっただらう。でも、せめてその女子にいい思い出を作つてあげたいと思ったのではないだらうか。想像してしまつのは、たぶん上総だつたらそうしようとしたと思うから。できるなら、仲のいい女子ふたりくらい連れて、心おきなく最後の思い出を作つてやりたい。やう思つのは、上総にとつて自然だつた。

なのに、菱本先生を始めとする一年の組軍団が、淡々としたひと時をぶち壊しにくるとしたら、上総だつたら絶対に断るか逃げるかするだらう。その女子が纖細な性格だつたらなおさらのこと。

ここで気付いた。

『無理なさりないで結構ですよ』って、言つたはずだよな？

それつてつまり。来るなつてことだよな？

俺の感じ方つてやつぱり、変か？

狩野先生、断つてたじやないかよ！

遠慮深いからとか言つてたけど、あれは遠慮じゃない。はつきりしたい拒絕だつて。

あの野郎、そこまで。

上総はテレホンカードを片手で折り曲げた。白い菊の柄がまつぶたつに分かれていった。葬式でもらつたというカード。この菊を、菱本先生に供えてやりたかった。ごみ箱に投げ込み、走るように部屋へ向かつた。

その十一 「夜の帳のよしな」と

- 1 ゲームにいそしむ若人たち
- 2 機密情報用手帳
- 3 信頼できる情報筋情報
- 4 もうひとつの夜
- 5 作戦会議

その十一 「夜の帳のよしな」と

1 ゲームにいそしむ若人たち

相変わらずテレビにかじりついている貴史を連れて部屋を出た。三つ折りにたたんだボードゲームを抱え、隣りの菱本先生部屋に入ると、すでにクラスの連中はみなたむろつていた。菱本先生だけがどこが出かけたようだつた。トランプを持つてきている奴もいれば、女子で占い用のカードを広げているのもいた。ひとり部屋だから狭いはずなのに、みなベットやらじゅうたんにそのまま座つたりしていたので、二十五名無事、納まつていた。もっとも女子の幾人かは、具合悪くて寝ているらしい。そりやそうだろう。美里じやないが、相当大変だつたらしいから。

「ほつといてあげなさいよ、ね、美里」

上総の方を見ながら声をかけるのはこずえだつた。

「そこまで俺が常識なしと思つたか」

「小学生の常識はあるかもしれないけどね、ほんつとあんたつては

弟だもん」

「悪かつたな」

流して上総は人数を数えた。正確ではないが、二十五人くらい。ボードゲーム別に十人、十人、五人と割り振つてみた。男女混合で、わりと仲のいい連中を中心に独断で決めた。一応、貴史と美里とこずえ、この三人は同じグループにした。自分は南雲たちと同じところに入ったが、それは訳あってのもの。貴史がぶうぶう文句を言つているようだつたがいつものように、無視した。駒を、手元の要らない紙でこしらえたり、カウント表を用意したりばらばらしながら結局、菱本先生が登場したのは二十分後だった。

「先生、遅すぎ!」

「じずえがすつとんきょううな声で叫びむかえた。

「なあに言つてるんだ、古川。これみたら、許してくれるだろ?」

見ると、両手にはペットボトルのジュースに大きなケーキ箱。さらに白い袋に入ったお菓子込み。人数分は余裕であるだろ?。

「あ、食べたい早く早く!」

「お前らほんと、色気よりも食い気だなあ」

甘いものが大好きな女子一同は大騒ぎしているけれども、男子はひたすらゲームに熱中していた。菱本先生を待つのも面倒で、上総の一存、さつさと開始してしまつたのだった。

「おい、立村、もうやつてしまつたのか」

「はい、先生が遅いものですから」

つらつと答えてやる。上総は小さなさっころを振りながら、駒を進めた。南雲をちらりと見やつた。

浮かない表情だ。

わざと、奈良岡彰子を貴史たちと同じグループにまわしたからだろうか。

ちゃんと考へはあるつていうのに。

他の奴の番の間、上総はささやいた。

「なぐちゃん、このゲームが終わつたら、俺は抜ける。それが合図だ」

「今更なんだよ」

「俺のこと、もつ志られたのかよ」

「ちつと舌打ちをしてみせる。

「具合悪い振りして、お前も抜けろよ。どうにか相手には連絡つけて、さつさと抜け出しちゃえよ」

「お前本気かよ」

南雲の顔はだんだん、緊張で引き締まってきた。上総が本気で言つていると、この時まで思つていなかつたのだろうか。ちょっとしやくだった。背を向けてペットボトルからジュースを組んで飲んだ。窓から風が入つてきているはずなのに、やたらと暑苦しかつた。

そのお相手である、奈良岡彰子の方を眺めやる。

意外や意外、結構盛り上がつてゐるようすだ。男子たちはルーレットを回す前になにやらあやしげなポーズを取つてゐる。貴史が座禅の時するような感じであぐらをかき、手を合わせてゐる。奈良岡はにこやかに拍手してやつてゐた。何か意味があるのだろうか。わからなかつた。ゲーム盤の駒がどこまで進んでいるか見ると、黄色い折鶴が一羽、ゴール手前に留まつてゐた。

「ほら、そろそろ誰か上がるみたいだよ」

「ああ、そうだなあ」

「なぐちやん」機嫌斜め。

なんとかは言つまでもあるまい。

横目で口を尖らせている南雲を無視して、上総は自分の駒に目を向けた。

上がりにはまだ時間がかかりそつた。

もうひとつグループで「おっしゃああー」と叫んでゐるのは菱本先生だつた。きちんとプレスされたベットの上に、トランプもどきのものを広げて何かやつてゐる。ぶたのしっぽだらうが。

なんとか三番目になつた。ゲームの進行状況をぞつと見ると、貴史たちのグループはゲームが終わつたところでだべりに熱中して

いるようだつた。もう一度やるのも、面子変えてからでないと、つてことだらうか。美里と貴史のふたりが相変わらず騒いでいるところ、奈良岡彰子と古川こづえが割り込んで、けらけら笑っている。会話の内容は聞こえなかつた。

「ではもういちど組替えするからじゃんけんするか」

「もういいよ。あとは何となくで」

美里の声だつた。

「先生、今度はこつち来いよ」

貴史が誘つている。

「わかつた、しつかし俺が中学生になるのかあ。羽飛たちと同学年かあ。若いよなあ」

ちらつと上総の方を見やるが、何も言わなかつた。上総も無視した。

南雲が何をしているか様子をつかがうと、なにやら雰囲気が甘くない。

奈良岡に向かつて何か、真面目な顔でまくし立てている。いつもとは反対にこやかな奈良岡の表情が気にかかつた。アンバランスだつた。どうしたのだろう。気にはなつたけれど、言つことは言つたし、上総はそつと部屋を抜け出した。ちらつと南雲がドアの方を見たけれど、それも無視した。

空気がにじつている。やたらと汗臭くて、早く部屋から抜け出しあつた。何度経験してもなれない集団の雰囲気。上総は素早く部屋に戻ると、バックから手帳を取り出した。

秘密の計画および、二年D組に関する細かいことがすべて綴られている。

父からもじつたものだつた。結構分厚い。

2 機密情報用手帳

一番後ろの何も書いていないメモ欄に、ボールペンでしつかり書いた。

朝九時にバス出発。その後最初の予定では「羽原公園 十一時到着」の予定だつた。しかし、そこから離れた「明星美術館」なるところがあつて三十分くらい長くバスに乗ることになる。

予定を決めるのは菱本先生だ。いくら評議とはいえ、所詮自分は中学生なんだということを思い知らされた。いくら評議委員ふたりにまかせられたとはいえ、最後のチェックはみな菱本先生の手によつて行われた。どうして、マイクロバスの予約までやらせてもらえなかつたのだろう。ホテルの予約電話だつて掛けたかつた。全部細かいことを経験したかつた。予定を立て、ホテル名を挙げ、バスの席順を決め、しおりをつくり。自分では精一杯やつたけれども、結局細かいことは菱本先生が片付けた。

たぶん、明日の朝、予定変更なども菱本先生が仕切るのだろう。わかっている。担任は二十才以上の大人。自分は結局中学一年生。

どうすればいいんだろう。

このままだと黙つっていてもそつなつちゃうよな。

俺の方には十分過ぎるくらい、予定変更を阻止する理由があるのにな。

結局ガキのままかよ。

「予定変更」に何度も下線を引つ張つた。ひとつひとと、つぶやいた。

「本条先輩、本条先輩、本条先輩……」

呪文のようだつた。クラスの出来事で困り果てた時、上総は無意

識のうちに「本条先輩だつたらどうするか」と考えるのがくせだつた。美里にも「立村くんつて、いつも本条先輩にべつたりだよね」と言われる。本条先輩の頭脳が、自分の中に入つてくるような気がした。呪文を唱えれば、担任よりもいい案が見つかりそうだつた。上総はもういちど、息を吸いなおした。つぶやいた。

「本条先輩だつたら、どうするか、だよな」

ベットに腰掛け、カーテン開け放しの窓を眺めた。

さわさわと響く木々のざわめき、その間を縫つて、針をつきさしたような星がひとつ、見えた。枕もとのコースターをもつて、日にちを合わせ、窓辺で掲げた。生の目で見据えた。取り落とし、腰が抜けそうだつた。

「あんなの、星じゃねえよ……」

星座盤なんて役立たなかつた。上総の目の前に繰り広げられたのは、青湯で見慣れた分かりやすい星じゃなかつた。黒い紙に針を何千本と突き刺したような、白い光の束だつた。突き刺されそうだつた。あいている片手を握り締めた。勝手に声が出るのはなぜだろつ。

部屋の中でひとりいるのが、上総は突然怖くなつた。

樽の中に詰め込まれ、銀の剣に打ち抜かれた海賊の気持ちに近いかもしれない。

自分の中にあるなにかを、星たちが処刑しようとしている。

幾千もの刀にも見えた。

「あんなの、星じゃねえよ……」

上総は窓を締めた。がたがた震えてくるのがわかる。とにかくこの部屋から逃げ出したかった。手帳を抱え、廊下に出た。隣りの部屋では笑い声が漏れる。あの部屋以外のどこか、星の見えない場所に行きたかった。

階段を下り、ロビーに向かつた。

3 信頼できる情報筋情報

もつと誰かうひついていたと思つたのだが、予想に反して気配全くしなかつた。ポケットには財布を入れたままにしていた。じゅら 錢ばかりなので、重たい。本当はテレホンカードがほしかったけれど、さつき使つてしまつた。上総は時計を見て、遅すぎないことを確認した。本条先輩の家は四人兄弟ということで、両親がいない。なんでも両親が諸般の事情で引っ越ししているのだそうだ。気を遣わないですんだ。

小銭入れを開いてみたところ、幸い十円玉はたくさん詰まつていた。ほつとした。上総は素早く公衆電話を占領し、十枚一気に硬貨を流し込んだ。

すぐに電話口にでた本条先輩へ、硬貨の落ちる音を気にしつつまくし立てた。普段の「沈着冷静」なんて、金銭的問題には負けてしまつ。とにかく、時間がない。言葉を挟む間もなく、たぶん受話器の向こうでは頷いているのかあきれているのかなにかしているのだろう。上総にはそんなこと考へてゐる余裕なんてなかつた。

だから遠距離で宿泊研修やるなんて、嫌だつたんだ。

よりによつて小遣いのない時に限つてさ。

「お前、俺にも一言くらいしゃべらせろよ」

「すみません」

一通り話しあつて、上総は大きく息をついた。ちょっとした沈黙すら、もつたいたなくていらはす。片手で小銭入れをいじりながら、十円玉、百円玉を探した。くやしくらい薄っぺらい、一円玉五円玉ばかりが多いのはなぜだろう。ゆつたり間を置く本条先輩の言葉がいらだたしかつた。

「A組のニー宿泊研修に紛れ込もうとする菱本先生のことによくわかつた。お前がそれにぶつちぎれてぶんぬぐりたい気持ちだつてこ

ともよくわかる。でもな、肝心なことってないだろ

「なんですか、肝心なことって」

「つまり、お前が何をしたいかってことだよ。それがわからねえと、立村、俺は何も言えないと。確かに、菱本先生の「寝込みを襲う」やり方は無謀かなあという気がするが、でもまあ、そんな立村ひとりが目くじら立てなくともいいだろ？」

この人も一緒か。ちゃりちゃり落ちていく十円玉の音に腹が立つた。

「じゃあいいです。もう頼みません」

「なあにお前すねてるんだ。おい、切るなよ」

「だつたら、本条先輩言つてください。もし俺の立場だつたら本条先輩はどうしますか？　このまま黙つて見過ごしますか？　うちの脳天気な担任の言つ通り、黙つて美術館に向かって、いやがる狩野先生ご一行に襲い掛かるのがいいと思うんですか？」

「あんな、お前が嫌なだけなのかもしれないぞ。相手はそれほど嫌がつていのいのかも」

言いかけている本条を遮つた。

静かなフロントに声が響いて、自分でもびっくりした。

「嫌がらないわけない！　なんでわかつてくれないんですか！」

そつと周りを見渡して、誰もクラスの連中がいないことを確かめた。

「何怒鳴つてるんだよ」

「もういいです。切れます」

「ほらほら、何一人で切れてるんだよ。わかつたわかつた、立村、俺だつたらどうするかってことを言えば、お前泣かないですむんだな」

思わず受話器を切つとした瞬間に、本条先輩は優しい声を出した。どきりとしてすぐに耳に当たた。

「誰が泣くかって！」

「ほらほら。言うから聞いてろ。もし俺だつたらな、第一段階とし

て菱本先生に話を付けに行く。ああいう一直線のタイプは、純情な顔してひたむきに説得すればつましくパターン、多いんだ。俗に言つ「泣き落とし」つて奴か

ぞつとする。上総は瞬時に却下した。

「あいつの前で泣きまねするなんて、死んだつていやです」

「演技しろよ。ポーズくらいしろよ。ま、それが嫌なら第一段階。誰か仲間を集めて、途中で具合悪くなつた振りをするとか、トイレに行きたいといつて騒いだり、忘れ物をした振りをして、バスを止めたり遅らせたりする。お前車酔いは慣れてるだろ」

仲間、それは無理だつた。頼むとすれば貴史か南雲だが、どちらも協力してくれそつにない。貴史は先ほどのクラスミーティングをみても分かるとおり、菱本先生の計画変更に大賛成だつた。南雲も話せばわかつてくれるかもしれないが、所詮夏の青空を気持ちいいと感じる、ずれがある。

第一、何を頼んでやつてもらえればいいんだろう。ひと演技して、バスを遅らせて、時間稼ぎして、美術館に到着できなによつてするつてことだらうか。

「無理です。俺ひとりでやらないと、意味がないです」

本条先輩に腹を立てるのは理不尽だと分かつていても、止まらなかつた。

「つたぐ、お前、何ひとりで反抗期やつてるんだよ」

また十円が、ちゃりんと落ちた。

「ひとりで反乱やらかして、うまくいくと思つてているのかよ」

「思いません。でも、ひとりでやらなくてはならないつてこともわかつています。同じ考え方の奴なんて、今誰もいないんだから」

があつと、雑音が響いた。歯を食いしばつて本条先輩の言葉を待つた。一言でもいい。何でもいいから、ひつかかりがほしかつた。本条先輩はいつも、さりげない言葉で上総にヒントをくれることが多かつた。

「ひとりですねるなよ。あのな、お前、本当に誰も味方がいないの

か？」

「そういうわけではないけど、でもいません。今回に限っては」「じゃあ作れ。去年俺がそういうことをするなら、まずはバスの運転手のにいちやんを狙う。俺の時、運転手のに一いちやん、いい奴だつたんだ。三日間、かなり俺の無理な注文を、うしのの担任に気付かれないようにやってくれたんだ」「どういうことですか？」

初耳だつた。まだ、その運転手さんが本条先輩の時と同じ人とは言わずに置いた。

「ま、もう時効だろ。例によつて女子がらみだ」

「どいかの女子高生に声かけて騒ぎになつたんですか」

「いや、ちょっと違う」

深いため息をつき、本条先輩は小さくわざやいた。

「バッティングしちまつたんだよ。俺のあれが」

「あの、つまり、本条先輩」

「やつ、両方が顔を合わせちまつた」

本条先輩の話をかいつまんで聞くに、つまりは「本妻と愛人」が顔を合わせてしまい、かなり緊張した空気が流れたという。その辺はさすがにあいまいにぼかす本条先輩だが、結局運転手さんに頼み込んで早く出発してもらつたという。本當だとしたらこれはすごいことだ。ふつうバス会社の運転手さんは、そんな勝手な行動ができると思えない。ちゃんとスケジュールが決まつていて、その中で行動すると聞いている。本条先輩はそれこそどうやって運転手さんを説得したのだろうか。

「それこそ、泣き落としですか」

「彼の、ささやかながら感じているであつて、青春時代の思いに訴えかけるように、名優本条里希一世一代の名演技を見せて、結局手伝つてもうつたつてわけだ。ま、お前も俺の跡を継ぐ氣あるならば、そのくらいの演技はできるだろ？」

残念ながら本条先輩の名演技を再現しても「うつ」とはできなかつたけれど。

「さすが、『赤穂浪士』の主役を勤められるだけの名演技」「松の廊下の刃傷沙汰をあれだけリアルに演じられる立村にはかなわねえよ」

お互い、恥ずかしいことの多かつた「ビデオ演劇・赤穂浪士」のことをちょいと持ち出してみた。

演技か。

一世一代の名演技か。

あの本条先輩がそこまで追い込まれていたのか。

今抱えていいる問題に比べたらずつと本条先輩の話、軽いけれどでも。

それでもか。

見えてきたものがある。上総は口の中で「演技、演技」とつぶやいた。

「そうですか、演技ですか」

「ま、その時はたまたま俺がうまく演じきれたから運転手の一ちゃんも大目に見てくれたのだろうけど、お前がそれをやつてうまく行くとは思えない。第一、どうなんだ？ 運転手は若いのか？」

しばらく沈黙した。答えるべきか否か。

「言つてましたよ。本条先輩って、礼儀正しそうな奴だったって

「はあ？」

「やたらと煙草を吸つこと以外は、すぐいい人です」

「おい、もしかして」

「そうです、本条先輩の過去をよく知つてゐる運転手さんのようにす

す

「ほおつと、長いため息。と同時にぽんと手を打つらしき音。

「そつか、あのに一ちゃんか。お前よろしく言つとけよ」

「もつと詳しく聞けばよかつた。先輩の知られたくない過去をもつ

と握れたのに」

指先で小銭入れの十円玉をかき回しながら、上総は答えた。女関係の華やかな本条先輩だから全く何も無かつたとは思えないにせよ、そんな楽しい事件があつたとは。まずいネタを知つておくと、あとあと助かるものだ。ジューースを一本おごつてもらえたり。本當はもつと詳しい状況を聞きたかった。悲しいのは財布の中身だけだった。「先輩、あとで教えてください。今後の参考にしますから」

「おいどうした。何あせつてる?」

「ないんですよ。十円が」

本当にまずいことになつてきた。指先に触れるのは、ちりちりした一円玉ばかりになつてきた。

「先輩、ちょっと待つてください。もつ一度電話します」

「早くしろよ」

こつたん受話器を置いた。十円一枚だけがかちやりと落ちた。からつじて残つている。しかし、これだけでどうやつて話せつていうんだろう。金の貸し借りは友情を失うからやめとけど、父には言われているけれどもしかたない。貴史が南雲を頼つて五百円分のテレホンカードを分けてもらおう。

4 もうひとつ夜

ちくりと首筋に刺激が走つた。蚊に刺されたらしい。痒いのをがまんしながらひよいと階段の方を見上げると、なにやら人の気配がする。じつと見据えてみる。音にはならないけれど、なんとなく熱がふうふうと流れてくるような感じ。何度か目をやつしてはそらし、そらしては見たり、をくりかえした。

やがて、カーキ色の裾らしきものがちらりとのぞき、上総の真つ正面に立ち止まつた。

「奈良岡さん?」

間、約三メートルもない。奈良岡彰子が無表情で上総の様子を見

つめていた。

隠れたいけれど、気付かれたからどうしようもない、そんな表情で。

もう一度、上総は声をかけた。

「どうかしたんか」

はにかむように軽く首を振る奈良岡の様子が気になつてしかたなかつた。

「もしかして、電話使うのか？」

しかたない、という風にもう一度奈良岡は首を振つた。

「なんでもないよ。立村くんも早く、部屋に戻りなよ。羽飛くんたちが待つてるよ。探してたよ」

「あとで戻るけど、電話使わないなら、俺まだかけるところがあるから。どこか行くのか？」

そこまで言いかけたところではつと気付いたものがある。

上総に訴えかけるようなまなざしは、電話のことじゃないかもしれない。

汗ばんだような奈良岡の頬はてかてかと光っていた。ふと見ると、唇の色がライトのト、ぬめりを帯びていた。女子がよく使う、「光るリップクリーム」というのがあるらしい。それだろうか。

ああ、もしかしたら。

鈍感な自分が馬鹿っぽく見えてしかたなかつた。

南雲をけしかけたのは自分だつてことを、今の今まで忘れていた。

ひとつ深呼吸をした後、上総はじつと奈良岡の目を見据えた。

「あのせ、奈良岡さん。今、テレカ持つてる？」

「持つてるけど、それが？」

「口止め料に一枚ほしいんだけど」

笑わないように頬骨に力をこめながらをやいた。

「もちろん、学校始まつたらちゃんと返すから。頼む」

しゃらへきよとんとしていた奈良岡だが、これらにこしてい
るつりにおかしくなつたのだろう。いきなり笑い出した。

「立村くんつて、やつぱり本当は、変だよ。みんなの言つとおりだ
ね。最高、おかしそうねー！」

「みんなつて誰だよ」

「『口止め料』なんて言いく出すなんて、もう最高！ そのキャラク
ター、もつと学校で出しなよ。もつたいないよ。」伊豆えりちゃんと漫
才やつてるだけじゃ」

「のせばさばしていい、誰にでも笑顔でいいところを見つけよう
としてくれる、そういうところに南雲は惚れたのかもしれない。奈
良岡は笑いが止まらないといった風に、ポケットからファンシー系
の財布を取り出し、テレホンカードを抜いた。白い猫がボールにじ
やれている写真入りだった。

「じゃあ、これは、おひねり。返さなくていいよ。全部使っていい
からね」

両手を合わせて一礼した後、受け取った。

「おひねりか、まあいつか」

敬礼をおどけた後、手を振りながら奈良岡は玄関を出て行つ
た。一瞬、ドアを開ける時に立ち止まつたが、すぐに闇へ姿を消し
た。

5 作戦会議

たぶん外で南雲と待ち合わせをしているのだろう。南雲が奈良岡
に上総のことなどをどう説明しているのかは知らないが、いわゆる一年
D組の昼行灯扱いというわけではないだろう。上総にふつうの会話を
を笑顔で振つてくれる、数少ない女子のひとりではあつた。

「ありがたやありがたや」

もう一度両手を合わせた後、上総はテレカを滑り込ませた。

「おお待つてたぞ、何やつてたんだ？」

「もう大丈夫です。それよか」

「いくら手付かずのテレカがあるとはいえ、度数が減つていく頻度は一緒だ。赤いデジタル文字を見つめるのは忘れなかつた。

「本条先輩を助けてくれたその運転手さんには、どういう演技をしたんですか？」

「演技つたつて、とにかく困つた困つたつて頭を抱えていただけだ。うちの担任は相手にならないからな。それに一ちゃんとは三日間一緒にだつたからさ、結構話もしてたんだ。休憩時間も一緒に弁当食つたりしてたからな。その時に、『何かあつたんですか？』と聞かれて、一緒にいた奴がべらべらとしゃべりまくつて、ああ、それじやあ、つてことになつただけだ」

「先輩それつて演技じやないでしょ。本氣で悩んでいたんではな

いですか」

「大人を泣かせるには、思いつきり大げさに悩む方が効果的なんだ！」

「言い訳なのか、それとも本当なのかはわからなかつた。上総は話を促した。

「それで運転手さんは、鉢合わせ寸前にして、大急ぎでバスを発車させてくれたつてわけですか」

「話わかるぜ、あのに一ちゃんは」

「それ以上言わなかつたところみると、先輩としての威厳が傷つきそうな内容だつたに違ひない。上総は心に決めた。絶対、あとで聞き出してやる。ジュース一本分はおごらせてやると。

「だがな、立村。あくまでもそれは俺がやつた時の場合だ。俺と違つてお前、押しが弱いだろ。人を説得するなんてうまいことできな

いだろ？」

「やれつて言われたらやりますよ。冗談じやない」

「とかなんとか言って、実は腰が引けてるくせにな。とにかく、お

前が俺と同じことやつてうまく行くとは思えないが。もし俺だったら、美術館の手前でいつたん理由をつけて下りしてもらつ。逃げるかもしくは道に迷つた振りをして、さっさと美術館に入る。2Aの連中四人か？ そいつらを探しまくる。探ししまくる。相手を見つけたらすぐに「注進」「注進して、さつさと帰るように促す。相手らが納得して姿を消したら、あとは言い訳つくりでバスに戻るか、もしくは電話を掛けて謝るかどちらかする。ま、そうなつたら担任ににらまれることは覚悟だな」

「慣れます。 いまさら何も」

つらつとしたまま上総は答えた。

「問題は、どうやってバスから降りるかだ。お前だつたら、車に酔つて今にもへどをあげそつだとかいいながら、頬み込むか、あとはトイレががまんできないとかいつて担任に泣きつく。もしくは忘れ物をしたとかいつて、一度戻つてもらうか。でもこれはリスク一だよなあ。立村、そこまで恥をさらす勇気あるのか？ ないならやめとけ。ただでさえ恥の多い人生歩んできてるんだ、これ以上は嫌だろ」

「嫌に決まつてます。 でも」

口には出さない。ひとつ思い浮かんだものがあることを。

本条先輩はさらに話し続けた。

「お前が降りた後に少しだけ、別の場所で待つててもらえないかと頼んでおいて、向こうがOKしてくれればなおいいな。でもなあ、その美術館の位置関係がよくわからねえなあ。俺なら、素直に菱本先生に頭下げて、やめてもらつよう頼むのが手つ取り早いような気がするぞ」

「できればとつてやつてますよ。本条先輩。 できないから」「やつて、電話掛てるんです」

「で、お前は何をやりたいんだ？ まさか、俺と同じことを考えていたなんていわないだろ？」

しばらぐ口をつぐんだ。度数が減つていくのが目立つけれどもしかたない。

「本条先輩。決めました。ありがとうございます。先輩の案、そのまんまいただきます」

「いたくつて、何をだよ！」

「これから、美術館の位置関係を調べます。フロントから地図もらつてきて見てみます。それから、運転手さんに明日、話してみます」「ちょっと待て。お前、自分で何言つているのか理解してないだろ」「します。これしかなってわかりましたから」

本条先輩の声は低く、じすを聞かせるような感じに静まった。

「立村、下手したら停学くらうぞ」

「呼吸おいて、ゆつくりと上総は答えた。

「どうせ退学にまではならないでしょ。先輩がいまくつしているんだつたら」

黙りこくつた本条先輩はさらにスピードを緩めて、つぶやいた。
「じついう甘い考えが、お前をいつもどつぼにはめていくつてこと、理解してないだろ。だからお前はガキだつて言つんだよ。全く」

受話器を置いた。カードはまだ半分くらい度数が残つていた。小さな穴があいていた。猫の手のところだつた。あとで奈良岡に返さなくてはならない。上総は自分の部屋に戻つてからすぐニ、窓の外を眺めた。毎間に南雲と一緒に覗き込んだ池が見えるはずだつた。空からは針山のような痛すぎる星が降るようだつた。もう南雲は来たのだろうか。上総が電話を掛けている間は出入りした気配がなかつたけれどあいつのことだ。わからない。闇の中で、ふたりは何を語りあつていいのだろう。青空の下飛んでいった白いはぐれ鳥、その話もしているのだろうか。わからなかつた。上総は人影のないのを確認した後、さつとカーテンを閉めた。遮られると、ひとりで怖さのあまり震えそうになることもなかつた。

あの星空を、ふつうの人はきれいだつて言つんだ。
あの星空を怖くないと言えるな。まじな。
俺はこんなことしないですむのにな。

「一スターを裏返しこした後、上総はベットの上でまつ一度手帳を広げた。

思いつづまま、ただひたすら思つこつしたことを見つけていた。
頭の中もてんてんと細かい星が撒き散らされているようだつた。
言葉がどんどん飛び出していく。じつすればいいかが形作られてくる。

隣りの部屋ではまだ盛り上がる声。まだ貴史は戻つてこなかつた。
橙色の灯の下、書きつづけているうちに体がだるくなり、瞬きしないと辛くなつてくる。横になり、読み返しているうちに輪郭がぼやけてきた。

かすかに誰かの声が、会話するかのように聞こえた。

誰かが「立村くん」「立村、起きてるか」と声をかけてきたのは記憶してくる。答えようとしたけれど、言葉が出ない。いつか声そのものもぼやけていたのはなぜだらう。

その十三 三田田発までのよしなじと

- | | |
|---|-----------|
| 1 | 三田田 朝の目覚め |
| 2 | 朝食前の様子見と |
| 3 | 計画実行第一段階 |
| 4 | 計画実行第一段階 |
| 5 | 計画実行第三段階 |

1 三田田 朝の目覚め

……まずは運転手さんと一人つきりで話をするチャンスを作ろう。ああ、でもその前に俺の席を替えないといけないや。それの方があと動きやすいから。そうなるとあの野郎と隣り合わせになるつてことか。むかつくけれど、しょうがない。きっかけはどういう風にしようか。俺と菱本さんとの戦いが激化していることを、うちのクラスの連中はみんな知っているんだろうな。ま、それでもいいか。今日一日は黙つて頭を下げた振りをしとけばいいか。本条先輩も言つてたもんな。なんてつたつて、「泣き落とし」が効果的なタイプだもんな。ああ忘れてた。狩野先生たち、その時間にちゃんと、美術館にいるつもりなんだろうか。もし俺が抜け出していつて見つからないうちに、菱本さま「一行と遭遇したなんてことになつたら間抜けすぎる。どうにかして、俺が先に見つけ出さなくちゃいけないんだ。さてどうするか……。

三日間、好天に恵まれたといつてになるのだろう。目覚めて力一テンをすかした光はまばゆかった。隣りで寝ている貴史はあお向けていびきを描いていた。上総は時計の文字がまだ五時半といつこ

とを確かめた。顔がべたべたするのは昨夜顔を洗わないで寝たせいだろう。気持ち悪くて、なんとなく焦げ臭いにおいがした。着換えも忘れていた。めんどうだけシヤワーをあびてすつきりしたかつた。

枕元には手帳が閉じたまま置いてあった。読みながら眠つてしまつたらしい。貴史が部屋に戻つてきたらしい気配は感じたけれど、答えられぬままだつた。どのくらい盛り上がつたのだろう。考えてみると貴史とは今回、一度もオールナイトで語り合つていない。からかわれないですんだのが楽だつた半面、ちょっとだけ申しわけない気もした。

シャワーを浴びて制服に着換えた。猛烈に腹がすいていた。南雲とわけたクッキーをかじりながら、ネクタイを締めなおした。死にそうな状態でふらふらしていた一日、二日目と違い今日は全身に気合がみなぎつているような気がした。なんでも今日なら出来そうだった。数学の宿題にも取り掛かれそうだった。古川いづえとの「朝の漫才」もするどころかみができそうだった。

「あれ、立村、もう起きてるのかよ」

「ああ、なんか暑くてさ」

寝返りを打ちながら貴史は上総の方を見た。

「お前どつかに行つちまつから、俺とがが探してたんだぞ。何してたんだよ」

「悪かった。ちよつとうちに用事があつて電話してたんだ」

本条先輩の名前を出すとつこまれた時言い訳できない。「まかした。

「ふうん、お前もしかして、もつひとりの彼女に電話してたんじやねえの？」

「もうひとりつて、誰だよ？」

尋ね返した。

「ほら、一年の、やたらと胸のでかい子。ほらほら、評議委員会の

「ああ、杉本のことを聞いたるんか？ 違ひつて。俺、そんなに器用じゃない」

さりと流してから気が付いた。

そうだった。情報を流してくれたA組男子評議委員、本条先輩、それと杉本梨南に土産を買うことを忘れていた。「もうひとりの彼女」なんてことは絶対無いけれど、一番ひいきしている一年の女子評議委員であることは確かだった。財布の中身が電話代でほぼからつぽになってしまったことも気が付いた。

「羽飛、悪いんだけどさ。借金申し込んでもいいか？」

「へへ、どうしたんだよ。立村金持ちのほんほんの癖して」

「じいがだよ。俺の財布の中身、見せてやろうか？ 一円玉と五円玉のオンパレードだ」

見たがつてもいないのに、わざわざ財布の小銭入れを開いて見せてやつた。

「ほんとだ。白い小銭ばかりだ」

「だろ。でもや、評議委員会に土産買わないと、俺は明日の太陽挙めない」

ぎやはは、と体をひねらせながら貴史は笑い転げた。

「そつかそつか。分かった。五百円だな」

ねそべつたまま財布を捲し、五百円硬貨を差し出した。

「ありがたい。始業式の日にちゃんと返すよ」

黄葉市限定のキャラメルが売っているといつのを父から聞いていた。一百円ぐらいだつたはずだ。それを一箱買っておいた。

2 朝食前の様子見と

七時。朝食のため食堂に集合した。集まりが遅い。さつさと座つて、箸をつけるのを今か今かと待ちつづけていたのに、なかなか揃わない。

一度よそつてもらつた味噌汁を、一度戻して待っていた。

「何時までゲームやってたんだよ」

「一時過ぎまで騒いでたぜ。俺は途中で抜けたけど」

「なんだ、羽飛だつて人のこと言えないくせにな
ちょっと意外だつた。枕もとで声をかけてくれたのはやはり貴史
だつたのだろう。もう一人の「立村くん」と呼んだ相手が誰だつた
かのかは聞きそびれた。なんとなく見当はつく。でも言つてしまつ
とかえつてまずいことになりそうだつた。貴史の方も、それ以上は
何も言わなかつた。時計をちらちら見ながらぼつりと「腹へつたあ
とつぶやくだけだつた。

上総が一番気になつていたのは、南雲と奈良岡のカップルがどう
いう顔をして入つてくるかだつた。

結局南雲と落ち合つただろうか。確認できなかつた。一時過ぎま
で菱本先生が部屋で騒いでいたことだと、よっぽどのことがないはずだ。
ない限り、二人のランデブーは気付かれていらないはずだ。
なぐちちゃん、どうだつたんだろ？

あとで定期入れ、チェックだな。

眠気の覚めない顔で、女子グループがまとまつて入つてきた。

くぐもつた声で「おはよう」と声を掛け合つもの、返事を期待
していない風だつた。なんだか昨日から女子の様子がおかしい。美
里に早い段階で聞いておけばよかつたと思つ。例の大喧嘩をやらか
した関係でわからずじまいだつた。貴史に相談すれば、うまくとり
なしてくれるのだろうが、プライドがある。そんなのいやだ。

「おはようー あんたら早いねえ

わざわざ上総たちの後ろを通り過ぎていくのが美里とこずえだつ
た。おおよその女子グループとは別行動だつた。こずえの「あねー」つ
ぽい口調にちょっとほつとした。変わっていなかつた。

「頼むから早く座ってくれよ。おあずけ食つて死にそんなんだ」

つんとして無視したままの美里。視線をそらして上総はこずえに

返事した。

「へえ、おあずけねえ。そつかあ、美里にむおあずけ食つてるんだもんねえ。朝からそんなにむらむらしててどうすんのよ」

「古川さん、目の前に食べ物が並んでいるのを一十分間じつと見つ

めている俺の立場を考えてほしい。食えてるんだって」

「なあにが食えているのよ。ま、わかるけどね。一人つきりになるチャンスがいくらでもあったのに、なーんもできなかつたあんたの気持ちもね」

話がかみ合つてないのはいつものことだ。

「ばかばかしい。とにかく早く座れよ」

「まったく、あんたはガキだねえ」

隣りで貴史が笑いをこらえている。つづむいている。鼻先が卵の殻にくつつきそうなほど、テーブルに顔を近づけている。卵をひよいと奪つて、上総は自分の皿に乗つけた。何も言わない美里の後ろ髪をちらつと見た。髪型は昨日と同じだつた。同じ柄のドアノブ風髪飾りだつた。

「あんな、立村」

卵を取り返した後、貴史がささやいた。

「本当に昨日の夜、気付かなかつたのかよ」

「何がだよ」

「あいつ、お前のまぬけ面見ながら、しばらく部屋にいたんだぞ」

「いたつて、どこにだよ」

「まだ気付かねえのかよ」

あきれたように貴史は卵の殻を少しずつはがし始めた。

「古川の言うこともまんざら嘘じやねえなあ。お前つて肝心なところでチャンス逃してるんだぜ。少しほはスタミナ蓄えろつていいたくなるなあ」

「チャンスつて、なんだよ。まさか、おい」

「たぶんお前が今考へてることと一緒に」

頭の中にもう一度、声がよみがえった。

……立村くん。

まさかあの時。

上総は前の方に座つて、美里に視線を向けた。

他の女子としゃべりながら、飯を盛つていた。制服姿で襟元のリボンが揺れていた。誰かの分を渡すためかぐるつと見渡した時に視線がぶつかつた。

目で訴えるしかできない。上総は一瞬だけじつと見つめ返した。すぐにそらした。しうを小皿に注いでいるのに集中しているふりをした。

南雲はやはり最後だった。奈良岡とは別々に来たようだった。相変わらずさわやかな顔をしていた。いつもよりも髪型が艶やかだった。額をオールバックにしているのは初めて見た。女子の一部が「髪型変えてるよ、かつこいい！」とつぶやいていたのが聞こえた。

「どうした南雲、今日は決めてるなあ」

いつのまにか来ていた菱本先生が、感心したような声を上げた。この先生、南雲には甘い。

「すんません。気分を変えたかったんですね。どうすか。似合いますか」

「別に似合わんとは言わないが、これでまた他の女子にあきやあいわれるな」

「罪な男ですみません」

側で

「彰子ちゃん、惚れ直したでしょ！」

とつぶやく声がする。よく耳を傾けると、いすえのようだつた。奈良岡はいすえの肩を軽く叩いて、たしなめるような表情を見せた。気持ちがわかる。上総はそれ以外の何か変化がないかどうかを観察してみたが、見出せなかつた。

「では、これで全員揃つたな。では、いただきますー。」

「いただきます」

もう何も考えず、生卵をかけて、海苔をつけ、ご飯をかきこんだ。隣りの貴史がけげんそうな顔をしているが、そんなの関係なかつた。こんなに気持ちよく食べられるのは久しぶりだつた。おかげりまでしてしまつくらいだつた。よそつた時にまた美里と田が合つた。

3 計画実行第一段階

他の連中がどう思おうが関係なかつた。

シャワーを浴びて頭をすっきりさせた時から、この日だけは勝負をかけよつと決めていた。一眠りしたせいか案は頭の中に溶け込んでいき、田覚めと同時に完成していた。

キーワードは「演技」。

あの本条先輩が、恥をしのんで運転手さんを泣き落としたらしい。残念ながら詳しい状況は理解できなかつた。相当追い詰められていたらしいし、本条先輩は手段を選ばないだらう。

手段を選んではいけない。

停学になるやもしれぬ方法を取るなんて、正直などひる、怖い。本条先輩には強がつてみせたけれど、もし退学になつたらと思つと、体が震えてくる。

公立に戻されるのだけは嫌だ。

貴史、南雲、美里たちから相手にされなくなるかもしけない。上総の感じていることを理解してくれないだらう。きっと夜空の星を素直にきれいだと感じる人々だ。恐怖のあまり部屋から逃げ出してしまつた上総のことを笑うかもしけない。

それ以上に、こんなことをしようだなんて、思つ上総のことを軽蔑するかもしけない。そう思える自分だつたら、きっと楽だつたらう。

今の上総はそうできなかつた。

貴史、美里たちよりも、顔を知らないA組の女子の感情の方がずっと近かつた。きっと針山のよつた星で突き刺される恐怖を感じているに違ひない。針には絶対になりたくなかつた。

戦いだ。

お茶をすすり終わつた後、菱本先生の方をちらりと眺め、つぶやいた。

「先生、いいですか」

「じちそうさまの挨拶寸前に、上総は立ち上がつた。

「どうした立村。もうすっかり元通りになつたようだが」

「提案があるので」

文句を言いたいのかとばかり、菱本先生はげんなりした顔を見せた。

「もうお前のわがままは聞かないぞ。とにかく、明星美術館に行くのは決定だ」

「それではありません。今日のバス、乗る時の座席なんですが」

一呼吸して唇をほんのわずか、開いた。こつすると笑つてゐるよう見えるのだそうだ。三十人の面子をさあつと見渡した。美里、こずえ、そして南雲、隣りの貴史、顔を見上げてゐる。

「提案したいことがあります。一日間ずっと同じ席ということもあつて、窓際に行きたいとか、席をちょっと替えたい人とかいると思ひます。特に昨日は、車酔いで大変だつたとも聞いてます。そこで」

言葉を切つて、もう一度菱本先生に頷いた。

「今日座る席を、希望者は好きに選べるようにしたいと思います。もちろん替える必要ないとすれば、そのままでいいんですが、ちょっと窓際に行きたいとか、前の方がいいとか、そういう人がいるようだつたら、どんどん替えてください」

茶碗の音に混じつてかすかにざわめいた。

「おいなぜだ？」

菱本先生は怒っていない。意味がわからないようだった。

「今日も予定変更するつてことですから、きっと長時間乗ることになるとと思います。そうなると昨日体調を崩した人とかは、別の席に座つて気分転換したほうがいいと、僕自身が思うからです」

全く嘘ではない。旅行する時、酔わないようにして親が配慮してくれたのを覚えていた。

「ほほう、経験か？」

「そうです」

はたして他の連中はどういう反応かを探つてみた。女子はみな、

顔を見合させて、次に上総の方を見上げて

「何言つてるの？ 立村くん」

といつ感じだつた。そんのはどうでも良かつた。次に男子グループそれぞれだが、こちらはむしろ、話を聞いていない奴の方が多い。席から早く立ちたいのに、といわんばかりに箸を叩きつけている奴もいるし、あぐびしているのも。最後に隣りの貴史を見た。うさんくさそうに上総を見上げて一言、

「そんなん俺から離れたいのかよ、淋しいぜ」

あえて笑顔で答えたい。

「羽飛には淋しい思いなんてさせないから、安心しろよ」

「けつ！ 気持ち悪いこというよな」

結論。みんなどうでもいいことらしく。

「菱本先生、いいですか」

菱本先生も面倒くさそうに答えた。

「ああわかった。どうせみんなそんなことどうでもいいだろ？ まあ、変わりたい奴がいたら、変わればいいし、別にそのままでよければそれでいいぞ。や、さつさと出発準備しろよ」

大きな声で一斉に「じかそつさまでした」の挨拶をした後、一気に椅子のぶつかり合音がはじけた。上総の提案なんてすでに、ざわめきで消去されたようなものだつた。貴史だけが妙にむすつとし

た顔をしているだけ。上総はさつたと部屋に戻った。忘れ物がないかどうか、あらためてチョックしなくてはならない。計画その一階は完了した。

4 計画段階第一段階

「たいしたことじやないよ。子どもの頃から俺、車に酔いやすくてさ。その時にうちの親とか親戚とかが、『同じ席よりも違う席にどんどんかえていった方が車に酔わなくていいよ』って言われてさ。ほら、昨日羽飛が話していただろ？ 女子がひどく車に酔つて大変だつたらしいつて。自分でも経験してるけど、あの時の後遺症つて結構響くんだ。それならさ、気分変えて別の席にかわつたりすれば、今日の長丁場乗り切れるんいかなつて、そう思つただけなんだ」私服および、ボードゲームをかばんにつつこみながら上総は言い訳した。貴史のくそ真面目な、

「お前何たくらんでるんだよ。言えよ。言えよな」

責めるまなざしに耐えかねたといつのもある。

「まあな、昨日のバスは確かに修羅場だつたからなあ。美里も相当苦労してたし、奈良岡のねーさんも大変だつたようだしな」

「奈良岡さんもつて」

「ほら、言つたろ。女子がトイレがやばくなつて降りたがつてたつて」

「ああ、そんなこと言つてたな」

「そんとき、ねーさんがいろいろ面倒みてやつてたみたいなんだ。さすが保健委員。美里は前だろ？ 連絡取り合つたりしてたんだ」あまり深いこと聞いてはいけない内容のようで、上総はそこで打ち切つた。

「どちらにせよ、きれいなネタじやないよな」

「席を替えたい奴は替えればいいけど、まさかお前、俺から離れた

いなんてそんなこと言わねえよなあ。俺とお前は、入学式からの長い付き合いだろ？ な、わかつてゐよな」

ぐいっと、片腕で首を締め付ける貴史。苦しくて外そうとしたけれどなかなかうまくいかない。腕力は貴史の方がはるかに上だった。降参の意、三回ベットを叩いた。

「まいつた、やめろつて」

「じゃあ、本当のことを言えよ。何たぐらんでるんだ？」

呼吸が楽になつたところで、上総はふたたび笑顔をこじらえた。「実はひ、ちよつと今日中にやりたいことがあつてさ」

「へ？」

「絶対に言つなよ。羽飛、お前だけに言つんだからな

「なんだよなんだよ」

手帳の中にある秘密の計画だつた。第一段階突入ゆえの演技その一だつた。

「もう羽飛にはばれてるからしかたないけど、俺と清坂氏とのこと、もう聞いてるだろ」

「そりゃあ、あれだけ騒げばなあ」

「一スターをしまうのを忘れていた。手に取つたままもて遊び、続けた。

「なんとか、始業式までにけりをつけたいんだ」

「けりつけるつてなんだよ。まさかお前ら……」

別れたいとかいうんじや、と言つたげに顔をしかめる貴史。違うとゆつくり首を振つた。

「その反対。向こうの考えが、正直なところ俺は読めない。よりによつて古川さんを通して誤解が誤解を招いているところもあるみたいでさ」

「まあまあ。女子の間ではす「ことになつてゐるはずだなあ」

「もつと言つなら、清坂氏と一番仲がいいのは、古川さんだつていのちもまた確か」

「つぬせえ同士、全くだ」

「」で上総は声を潜めた。真剣そうに見えるより、田に力をこめた。両手でコースターをつまんだ。

「羽飛、悪いけど俺と古川さんを隣同士にしてもらえないか」

「なに?」

響くすとんきよくな声。絶対隣にいる菱本先生にも聞こえているはずだ。今度は上総の方が肩から貴史の口をふさぐように抱きいた。

「で、俺がいた席には清坂氏を置いてこにこしてもらいたいんだ」

「美里とお前が席を交換つてことか。お前、いつたい」

「俺は今日一日使って、古川さんにじこますつて、なんとか無事につまくいくよつ頼むつもりなんだ。あの人ははつきり言つて、俺の『姉さん』だしな。そこで羽飛もつひとつ、頼みがあるんだ」

「なんだよ」

片腕で貴史の首を抱えたまま、上総はわざと耳もとにされやいた。「あとで本当に謝るつもりだから、それまでつまくじまかしてもらえないかな」

「お前が悪いってか」

「まあいろいろあるんだけど、今、話すとまたどろぬになつそうだ。車の中だと帰つて話がわけわからんことになりそくなんだ。俺もそこまで、ひじことしたくない」

上総の耳もとに聞こえるのは、貴史の呼吸する鼻息。わざとからに締め付けた。

「な、頼む。一生の頼みだ」

さつきの上総のよに離せと騒いだりはしなかつた。黒田がちろつと動いたのを見た。腕に噛み付く真似をして、ゆっくりと手首から外していった。ぎゅっと握つたまま。

「つたく、だから昨日お前、起きてればよかつたんだよ。美里、ち

やんといこじで外見ながらしゃべってたんだぜ。ほんとにふたりつくりで、しゃべればよかつたんだぞ。全くお前ら、かみ合つてねえよなあ」「

握った腕を軽く振つた。

「しかし、なんで三日間、美里とばっかり俺がしゃべつてねえんだよ」

OKのサインだつた。げらげら笑いながら、ベットの上を転がつてじやれ続けた。

5 計画実行第三段階

部屋の中でふたり馬鹿やつたのは旅行中最初で最後のよつた氣にする。目的を達した後、さつさと鍵を持って出たのが九時近くだつた。みなきちんと制服姿に戻つてゐるのが、いかにも学校行事といふ感じだつた。かすかにせみの声が聞こえる程度で、夏用の長袖ブレザーを羽織つても暑苦しくない。空につつすらとうろこ雲が延びていた。理科の授業で確か、天氣が悪くなる前触れだと聞いたことがあつた。縁起悪い。貴史以外のクラスメートと一緒に、来月封切りの洋画情報についてしゃべつていた。アクションものらしい。九月に入つてから一緒に行こうという話にまとめた。

「全員揃つたか？ 立村、勘定してみろ」

美里の方をあえて見ないまま、男子の肩ひとりひとりに手を置いて、十五人全員揃つてゐることを確かめた。女子の方はすでに点呼が終わつてゐるらしい。

「忘れ物ないな？ ジャあ、最後に、ホテルのみなさんにお礼の言葉、さん、はい！」

「ありがと「ございました！」

ロビーで派手な声を張り上げるのもどうかと思つたが、菱本先生をこれ以上不快にさせていいことないので、指示に従つた。笑顔で送り出してくれたスタッフの方々に頭を下げた。外に出た後、

もう一度振り向いて、今度は自分から質問を投げかけることにした。

「ところで、席を替えた人ってどのくらいいるか？」

「そんなのどうせ、乗っちゃってからでいいだろ」

理由を知つていろと思つてゐる。貴史がたしなめるような口調で言つた。

「ああそうだな。じゃあ乗っちゃうか」

ずっと気になる美里の方に視線を投げた。相変わらず冷静なまなざしで上総の方を見ていたようだが、

「じゃあ、女子で後ろの方に行きたい人から先に乗つてね」と声をかけた。昨日のゲーム大会に参加しなかつた女子三名ほどが、先にバスへ乗り込んでいった。続いてどんどんばらばらに乗り込んでいく。最後に美里、貴史、上総、こずえの順に入ろうとした。決まつているとおりの席に付こうとした時、貴史がいきなり美里の腕を軽く引っ張つた。

「なによ、貴史、どうしたのよ」

「お前は俺の隣りに来い。立村のいた席だ」

「え？ どうしうことよ！」

慌てるように貴史、こずえ、最後に上総の顔をにらみつけた。かなり怖かった。話をするとなればなるほど目に見えている。上総は素早くこずえに振り向いて、もう一度笑顔をこしらえた。

「と、いうわけで。悪いんだけど、隣りに行つてかまわないかな。

古川さん」

「は？ 立村、あんた何考へてるわけ、美里を取られたから、だからに？ 私を身代わりにしようつて奴なの？」

混乱しているこずえの様子が手にとるようにわかつた。複雑な気持ちを押さえられないのも想像がつく。同じ席替えだつたら、美里と上総、こずえと貴史、このパターンであつてほしかつたのだろう。気持ちはわかる。でも、そうするわけには行かない。

「ことん、やるしかない。

演技だ、演技。

怪しまれまいよつに。

たぐらんでいるように見られないよつに。

貴史にだけわかるように頷いてみせ、上総は昨日まで美里の座つていた窓際の席を陣取つた。運転手さんに笑顔のまま挨拶をした。相変わらず煙草の箱は脇に積んであるけれども、やはり温かい笑顔のままだった。

「今日も一日、よろしくお願ひします」

「体調、大丈夫ですか？」

誰かが上総のことをしゃべつたらしい。頬が赤くなつそつで、うつむきながら、早口に答えた。

「すみません。大丈夫です」

隣りでむつとした顔のまま缶ジュースを取り出したこずえに、上総は手持ちのキャンディーを取り出した。まずはご機嫌伺いだつた。「まあ、こういう機会でもなれば、古川さんとふつつの会話もするのではないかからさ」

赤いドロップを片手で受け取り、こずえは口にほおりこんだ。

「立村、あんたさあ、美里とけんかするのはいいけれど、私の方まで害を及ぼさないでよね。まさかあんたさあ、美里にやきもち妬かせようという、女々しいこと考えてるんじゃないでしょうねえ」

「なわけないだろ。ばかばかしい。俺は単に、古川さんともつとお近づきになりたかっただけであつて」

必死に笑顔で接する上総だが、なかなか難しい。ようやく通路の席に菱本先生が乗り込んできた。前の四人が面子交代といつひとで、思わずたじろいだ様子だった。

「おい、立村、お前今度は古川にのりかえたのか？」

「そういうわけではないです。気分転換です」

冷静沈着、演技だ演技。

心中繰り返す呪文のような言葉。

「それで、こちらはいつもおふたりさんか」

「先生、何また誤解してんですか！ 何考えてるのよ貴史！ あ

とで白状しなさいよ。なんであんたと最後の最後までくつついてなくちやいけないのよ」

「まあ、それは最後にわかることだろ。な、立村」

へらへらしながら貴史が上総に語りかけてくる。上総と貴史が一緒にたくらんだといふことに気付かれてしまったようだ。美里が目を三角にして貴史にまくし立てている。あえて上総の方を見ないのは美里の意地か。誤解されているとはいえ貴史には心から感謝しないではない。なんとかして美里と仲直りしたいから、あえてそういうこつまどりのひじい手段を取つたのだと、勘違いしてくれている貴史。

でも明日から、絶交されるかもな。

当然のことを探はしているんだ。

後悔なんてしない。絶対に。

走り出したんだから。

上総はこげえの方にむづくつとネタを振り始めた。

こつなつたら、「朝の漫才」であろうが、「夜のおかず」であろうが、なんでもいい。こととん付き合おう。

「あのさ、古川さんの弟って、そんなんに俺に似ているか?」
時が来るまでは。

その十四 計画遂行までのよしなじ

- 1 バス前列懐柔作戦
- 2 計画実行第四段階
- 3 先手をとられて
- 4 計画実行第一段階
- 5 一世一代の名演技を

その十四 計画遂行のためのよしなじ

1 バス前列懐柔作戦

「一般的に女子同士つて部屋の中でどういう話してる？ 例えばさ、やつぱり音楽のこととかテレビのこととか、そういう感じなんか？ 俺たちだとやつぱりが、本とか、あとそりだな、洋楽のインストロメンタルとか」

「無理してるの見え見えだよ、本当にあんたガキなんだから」

約一時間の間、テンションを高く保つため、自分の持てる力を振り絞りしゃべりつづけてきたけれど、さすがにずえにはかなわなかつた。通路にいる菱本先生は相変わらず貴史、美里としゃべつているけれども、一寸のよくな盛り上がりには欠けている。窓際で貴史と笑顔で語り合っている美里。じくじく自然に見える。でもたまたま、上総の方をのぞき込んではすぐ目をそらす。貴史が菱本先生の間に入つて、昨日の「間一髪・高校生との修羅場」を再現してみせたりと、一列目に限つてははしゃいでいる、かに見えた。黙つていると車に酔うだけでなく、計画がばれてしまつ。

演技と言ひ聞かせていた。

「ひずえもさすがに三田田となつては疲れていたのかもしれない。はいはいと流す程度で、まだ強烈な下ネタを振つてはこなかつた。「どうせ男子のしゃべつてることって言えれば、エッチネタばかりでしょ。知つてるよ。そのくらい。羽飛たちといつたい何盛り上がつてたのさ。まさか、工口本なんて持つてこなかつたでしょ?」「定義はなんだよ。写真集か?」

普段なら「ばかばかしい」の一言で無視することながら、今回はそもそも行かない。話に乗つてきた上総を再び、あきれるようなまなざしで見て、ひずえは反り返つた。

「あんたひそかに、本屋で売つてないエッチ本持つてるつて聞いたことあるよ」

「誰だよそんなこと言つたのは。第一証人いるのかよ」

「一年の三学期くらいかな、本条先輩と、もういつこ上の評議委員の先輩が教室でなんかしゃべりながらエッチ本をあんたのために、選んでいたの、見たことあるんだから。美里には言わないであげたけどさ」

思ひ当たる節がある。どうぼにはまりそうだ。でもやめられない。上総はひずえにしか聞こえないように、周りを気遣いながら、

「結城先輩とだろ。まあいろいろあるさ」

「へえ、否定しないんだ。つたぐ、あんたも変なとこだけ大人になつたねえ」

「姉さん、実際の経験はどうなんですか、古川さん」

間を持たせるために、もう一回ドロップの缶を振つて差し出す。当然の「とく受け取る」ひずえ。田代とく見つけてか貴史も、菱本先生の前を遮るよつて手を伸ばしてくる。緑色のドロップを二つ、落とした。

「お、一粒もくれるのか」

「お隣りさんに渡してくれ」

そのお隣りさんたる美里は、完全に無視の姿勢だった。貴史が美里の肩をつついて、

「ほら、立村からの差し入れだ」

と指差しているのだが、一切返事をしない。仕方ないかのよう

貴史が一粒、一気に口にほおりこむ。

「騒いでるのって、うちらだけだよね。後ろの席なんてもう、静か

だよ。美里、もうカラオケ大会やらないの？」

「こずえは上総の相手をするのにつんざりしたかのよう、大声で

尋ねかけた。

「やるわけないでしょ！ 騒ぎたい人だけ騒いでりやいいのよ！」

貴史とは、何気ない拍子に笑い声が出る。こずえは振り返り、ち

ょつとだけ素の表情に戻る。上総と漫才かましている時とは違う、ち

淋しげなまなざしだった。気付いていた。

羽飛の奴、本当に一年の女子と付き合つ氣なんだろうか。

一学期になつてから結論出すつて言ひてたよな。

古川さんは、傷つくだろうな。

こんなことさえなければ、俺は古川さんと羽飛を隣同士にしてやつただろうな。残酷かどうかわからないけれど。俺は清坂氏と、さんざんひゅうひゅう言われることを覚悟すると。きつと喜んでもらえるつて宿泊研修の計画を練つてきたんだ。

結局俺は役立たずのまなんだ。

菱本先生の言う通り、自分の能力を超えたことばかりやろうとして、失敗してくる情けない奴なんだ。

「ほら、もう一個やろうか」

「いらないよ。もつと美味しいものだつたらいいけどね」

田を閉じていた菱本先生がはたつと身を起こした。

「配りたいなら俺にもよこせ。立村、今日は一段とハイテンションだな。夜、いいことでもあつたのか？ 昨日はロビーで長電話してたつて噂聞いたが。秘密の恋人でもいるのかな？」

息が詰まつた。口の中のつるつるしたドロップを飲み込み損ねて激しく咳が出た。こずえが露骨に身体を離した。吐かれたら困るとも言いたげだった。

「お、図星か。じゃあ、立村の相手について追求してみるか。昨日は羽飛と清坂の関係についてたっぷり聞かせてもらつたしな。古川、お前も聞きたいだろ?」

「強くうなずく」
「うえ。いきなり顔をのぞき込んできた。

「そうだよねえ、浮気してるんだあ。美里だけじゃないんだあ。本条先輩の真似してるつてことかなあ?」

違う、違うと首を振るのが精一杯だつた。貴史と美里の席を見るのが怖い。何かともない勘違いをされているような気がする。息を整え、こずえの方にだけ顔を向けた。菱本先生は当然無視した。「あのな、人が電話しているだけで勝手な想像するのはやめろよな。俺にだつてうちつてものがあるんだ」

「へえ、ホームシックにかかっちゃつたの?」

「だから違うつて。たまたま本条先輩に用事があつて」

「あ、わかつた! 本条先輩に女子の口説き方を緊急レクチャーしてもらつたんでしょ。本条先輩、すごいよね。ふたり彼女がいるんだよね」

はたして担任の近くで色恋沙汰の話題を振つていいのだらうか。上総は「まかすこと」にした。

「知らないってさ。評議同士いろいろ報告することがあるんだよ」

「報告つてなになに? ははん、美里との喧嘩で、仲直りできるかどうか相談してたのかなあ」

「関係ないだろ!」

次の台詞に上総は危うく叫びそうになつた。

「そりかお前ら、夫婦喧嘩してたのか。熱出してぶつ倒れるくらい落ち込んでたんだな。清坂、どうする? 許してやるか? 羽飛のところに戻るのか?」

「いいかげんにしてください! 先生には関係ないでしょ! だい

つ嫌い!」

もう何を言い返しても無駄だ。上総はおとなしく、窓を見ながら次の会話を何にするか考えた。外の景色は山々からだんだん、赤い

三角屋根、平べったい青い屋根、四角い建物に置き換えられていく。見慣れた青潟の空気が空から降りてきた風だった。

あと一時間もない。計画実行第四段階に突入だ。

2 計画実行第四段階

明星美術館までは思つたよりも遠かつた。予定では十時半に休憩が二十分入り、十一時半に明星美術館に到着だ。前日調べた「明星美術館案内」によると、かなり広い。名の知れた有名画家が揃っているわけではないのだが、ひとりだけ地元出身の著名な画家がいるとか。個人画所蔵の保管スペース扱いされているらしい重要なことはただ一つ。

いかにして先にバスを降りるか、だ。全く地理勘のない場所というのが、さらに頭を悩ませる。

降りたはいいが、すぐに美術館にもぐりこめるかどうかというのも問題だ。裏門から入ればすぐだとは思つ。入場料も三百円だ。貴史から借りた分でぎりぎり貰える。一年D組連中が到着するまでのわずかな間に狩野先生を探し出すことができるだろつか。天気がいいからきっと芝生で弁当を食べている可能性もある。美術館内で鑑賞しているかもしれない。美術館内の喫茶店で何か食べているかもしれない。

考えれば考えるほど、わけがわからなくなる。

「ほらほら、立村、無理して騒いでいるからエネルギーなくなるんだよ」

貴史と美里たちが降りた後、上総も立ち上がつた。隣りのこずえが大きなため息をついて見上げた。菱本先生もいない。運転手さんがいるだけだ。本当はこずえがいなくなつてから運転手さんに、時問をもらおうと考えていた。

「先に下りれば」

「はいはい。あまり無理するのは身体によくないよ。わが弟よ」

見抜かれているのか。

へらへらしてごまかすしかなかつた。

「ありがとう、やつぱり持つべきものはお姉さんつてとこか」

「じずえが降りた後、上総は通路に立ちざつと見渡した。まだ誰も酔つて苦しんでいることもないし、意外なほど静かだつた。トイレに寄ればすぐに戻つてきてもかまわない。お土産を買う場所がかなりあるので、時間をつぶすにはちょうど良かつた。

「一服、といつた風に運転手さんは煙草の封を切つた。

「昨日は、」迷惑かけてしまつてすみません」

話のとつかかりとして謝つた。詳しいことは知らないが、修羅場だつただけは聞いている。評議委員としての礼儀だと思つた。

「いや、ちょっと時間がかかつたから仕方ないですよ」

「本当は僕がきちんと、クラスをまとめないとけなかつたんだけど、本当にすみません」

「」やかに運転手さんは首を振つた。上総が降りてからでないと動きようがないようだ。ひとまずトイレに行つてきてから、もう一度アタックだ。一礼して外に出た。ガソリンのにおいが、バスから離れるにしたがつて薄れていつた。

エンジンがかかつてているのは頭の中だけ。心臓の音がこめかみに響いていた。

することをすませるとすぐにバスに戻つた。一日目の休憩時間では、運転手さんは近くのベンチに座つて煙草を吹かしていた。風がかすかに揺らいでいるせいか、煙が消えていた。声をかけようとする前に、向こうから笑顔で招かれた。かすかに頷き、ベンチを軽く叩いた。紺の帽子でぱたぱた仰ぎながら、煙をよそにやつた。

「すみません。少しだけいいですか」

上総は奥歯同士がちょづといじ具合に合つよつて、かみ締めた。笑顔に見えるのだと、小さじころ母に仕込まれた。表情で勝負をか

けるときは必ずこうしていた。上総の計算を気付いているのかないのか、運転手さんはやさしい表情で空を見上げた。

「クラスの学級委員つていうのは、大変ですよ。僕も経験がありますからね。担任の先生たちはみな、クラスをまとめるとか、協力させろとかいうけれど、簡単に出来たら中学生じゃねえよって、いつも思つてましたからね」

嘘じやない気持ちで、頷いた。

「でも、青大附中の運転を担当することが多くなつてから、やはり違うなあとつうんですね。僕はふつうの公立だったから、青大附中というと超ヒーリーの集団だとばかり思つてましたが」

「青大附中の宿泊研修つて、いつも担当されて、おられるんですか？」

少し安心しつつも、タイムリミットー十分以内といつに上総は、焦りを覚えた。

「修学旅行や遠足なども、いつもそうですね。毎回、といつわけではないですが、やはりガイドとかも学校別に専門の人がいたりします。日時なども選びますが僕は学校関係を担当することが多いですね。ここ三年は青大附中さん中心かな」

詳しい事情は意味不明だった。単に青大附中の宿泊研修はなれているつてことだらう。上総は相槌を打ちながら、話を切り出すタイミングを計った。菱本先生や貴史がもどつてこないうちに。

「おととい、やはり青大附中の宿泊研修で、礼儀正しく、やたらと仕切り屋の評議委員がいた話してくれましたよね」

「はいはいはい、覚えてますよ。あの時は面白かったなあ。思い出話になることがどつさりますよ。言えないけれど、先生なんて田じやないつて感じで盛り上がつていたことを」

本条先輩のクラスは本条里希色に染まつていたのだらう。楽しそうにあれやこれや思い出そうとする様子だった

寝ている間に考えた言葉を上総はなんどか繰り返した。

本条先輩に対してもしてくれた何かを、どうか上総にもしてほしいということを伝えればいい。明星美術館の裏口で、僕が騒ぎを起したら、すみませんが下ろしてもらいますか？ 決して悪いことをするわけじゃないんです。ただ、どうしてもしなくてはならないことがあるんです。言うだけでいい。

でももし、問い合わせられたらどうじより？

両手を握り締めた。こつこつとベンチの端をたたいた。不思議そうに運転手さんが上総の方に首を傾げた。

チャンスだ、話そう。

唇を何度も動かした。

「あの、それで」

途中で言葉が出なくなってしまった。

身体の方が勝手に言葉を吐き出させてくれなかつた。

早く、何とかしなくちゃいけない。

でも、どう切り出せばいいかわからない。

断られるかもしれない。

菱本先生に告げ口されるかもしれない。

手の平に汗をかいていた。さつきトイレに行つてきたくせに、また行きたくなつてきそうだつた。本条先輩に昨夜言われた、「俺と違つてお前、押しが弱いだろ。人を説得なんてできやしないつて」

という言葉、耳を離れなかつた。

肝心要のところで出てきてしまつ、弱虫な自分がいる。

散々計画を立てておいたくせに、腰がひけてしまつ。

絶対やると決めてるのに、腰碎けの自分がいる。

上総は半開きのまま唇を動かした。

気付いていないのだろうか。運転手さんはさりに続けた。

「すういですよね、あの、本条くんだつたかな？ 女子にもかなり

もてるタイプですね。頭も切れるし、さという時には頼りになるなあ。僕が青大附中の評議委員といつのに关心を持つようになったのは、あの時からです。単なる学級委員と違うんですね。本当にクラスのことを考えて、懸命に努力して、それでひっぱっていける人がなってるんですね」

田の前にふうっと、評議委員会中教壇に立つて黒板を叩いている本条先輩の姿が田に浮かんだ。評議委員長。来年はたぶん、自分が評議委員長になるはずだった。重ねてみようとした。できなかつた。「先輩は、評議委員長なんです。すごい、本当にすごい人です」「君だつて、一生懸命にクラスのみんなを気遣つていいじゃないですか。自信もつて大丈夫ですよ。立村くん」

苗字を呼ばれたとたん、掛け金が自分の中で外れたような気がした。

違う、俺は本条先輩みたいになれない。

運転手さんの言葉が上総の中にはぶづぶづ突き刺さつていつた。

俺は本条先輩みたいに、なんて、出来ない。

本条先輩の言う通りだ。

さつきまでは堂々と演技して泣き落とそうとして、覚悟していたくせに。

もう限界だつた。

菱本先生のように気持ち悪いやせしさで撫でまわされた時も、貴史に問い合わせられた時も、南雲の前でも、なんとか人前で泣かないように耐えられた。絶対に学校では泣かないようにしようと、毎日誓つて通つていた。自分の記憶している限り、人前で泣いたことは中学に入つてから全くなかった。男のくせに女々しいと言われたくなかった。

自分がまだまだ、小学校の頃と同じ泣き虫だつてことは、一番よくわかっている。上総の部屋にかかっている鏡、ベット、机みな、口が利けたらきっと証言するだろう。

咽からこみ上げてくるのは熱い塊のよつたものだった。頬によじ登つてくる。

「どうしたんですか？ なにか、嫌なことがあつたんですか？」

声はまったく変わらない、穏やかな調子だった。

「俺はそんな、青大附中の評議じやない。本条先輩のようになれない。本条先輩のようになんて」

顔を隠すとかえつて泣いていることを認めるようでいやだった。ベンチの板を両脇握りしめた。支えがほしかつた。自分の声が震えているのが分かつた。

「今日これから、明星美術館に行くということ。俺は絶対やめさせたくて。昨日の反省でその話が出た時、俺は反対したけど、結局、ガキ扱いされてしまつただけで」

話したところで咽が詰まつた。運転手さんの顔を見上げることができなかつた。一気にしゃくりあげてしまいそうだつた。背中をさすつてくれた。軽く、とんとんと叩いてくれた。

「どうして、反対したんですか？」

尋ねると同時にまた、首筋をさすつてくれた。薄手のシャツから直接響いてきた。

「たぶん俺が神経質すぎるだけだと思います。他のクラスの先生と女子三人が、別行動で明星美術館に来るから、一緒に合流しようつて菱本先生は考へてます。ふつうだつたら、面白い、と盛り上げれるかもしれません。でも、その三人がなんで旅行しているかを考えないで、ただ、集団でいればいいからつて決め付け」

頬に勢いよくつたうものがあつた。止められなかつた。目をこすつたが効果なかつた。つばでこすつた時に感じる、匂いだけだつた。

「旅行の目的はなんですか？」

「退学する女子がいるからお別れ会らしこつて聞きました。青大附中にもういたくないから、退学するつてことらしいです。ひつそりと誰にも気付かれないようにしたいのが本音だと思います。俺だつ

たら絶対そうする。菱本先生はそんなことを全然考えてくれない。どうしてか、どうしてかわからないけど、退学する女子の気持ちを全然考えないで、ただみんなと一緒に盛り上がりばかり、そればかり。クラスの連中もみな、同じ考えみたいで、俺の考えはただのガキっぽいわがままだつて言われ」

歯を食いしばった。ますます自分が壊れそつだつた。

「そつなんですか。いきなりの予定変更が多い先生だと思つていましが」

考え込むよつた口調で、運転手さんは手を離した。

さほどの時間でもなかつたのだらう。運転手さんがポケットティッシュを一枚くれたので、目をぬぐい鼻をかんだ。目のところがすうすうする。きっと目が充血していく、恐ろしい形相だつただらう。

「落ち着きましたか？」

「はい。すみません」

上総がこつとう状態になると、相手はひくか怒るか慰めるかのどちらかだつた。運転手さんはどちらでもなく、変わらぬ笑顔でずっと見守つてゐるだけだつた。

「もう一度、バスの中で説得しますか。先生を」

「いいえ」

今度はきつちつと唇をかみ締め、首を小さく振つた。

「もうこまさらどうしようもないです。ただ」

顔に涙の後が残つてゐるかもしない。顔を上げ、目一杯の力で運転手さんを見つめた。吸い終わつた煙草を灰皿の上につぶさぬまま置いていた。

「裏門のところで、僕だけ降ろしてもいいことがありますか」

「裏門？」

ひょつと、手を浮かせた。

「明星美術館には確か、裏門と表門というのがあると聞いたことがあります。僕ひとりが先に入つていつて、あとから菱本先生たちが

表門から入つていいくつてことは、できませんか」

空をもつ一度見つめなおし、運転手さんは唇を尖らせた。時間が
ない。一人、また一人とバスに乗り込もうとする女子の姿が見えた。
美里、こずえももどつてきたらしい。土産らしきビール袋をぶら
下げていた。

もう心臓はとくとく言わない。涙で洗い流した。

もう望みは断たれる。

菱本先生が戻ってきた。缶ジュースを握りしめていた。

「どうした、立村、お前も早く乗れ」

「わかりました」

怒鳴り返した。もう一度、運転手さんの顔を見つめた。

「無理ならいいです」

立ち上がった。同時に運転手さんは上総の方にポケットティッシュ
ユ一枚差し出した。

「拭いてから席に戻つた方がいいでしょう」

3 先手をとられて

最後に乗り込むと、前列四人がなにやら会話を止めた。上総の顔
を見上げては何か言いたそうな様子で、飲み込まなくてはという風
に。他の連中はちょこちょことお菓子をつまんだりしていた。ジュー
ースを飲む奴もいた。窓際の席に戻つてガラスの向こうを眺めた。
前髪が思いつき乱れていた。ガラスに映つていた。

「あんたも典型的な反抗期だねえ」

「こずえがぼそつとつぶやくと、隣りの菱本先生に話し掛けていた。

「ねえ先生、明星美術館にほんとに、A組の人たちいるんですか?」

「ああ、確か十二時半くらいには青湯に戻るつて話だつたからなあ。
明星美術館は中身がたいしたことないわりに、座るところがたくさん
あるんだ。天気もいいし、ハイキングかわりに使つたりしている
らしいぞ」

「あ、じゃあさあ、バレー・ボールとかできねえのかなあ？」

貴史が耳ざとく、しゃしゃり出る様子。

「許可を得ないとな。春には花見の時に使つたりしているんだから弁当を広げるくらいはかまわないだろ？」「

「じゃあ、お弁当はどこで買うんですか？」

美里の声だ。神経に響く。聞かないふりして窓を見つめつづけた。

「俺がちゃんとその辺は手配してあるから安心しろ。美術館に直接届けてもらうように頼んであるからな。人数分三十人」

これは初耳だ。会話に混じつてもつと詳しく聞きたかった。そつと振り返ると、四人の視線が上総一点に集まっている。ぎょっとした。

「なんですか、いつたい？」

「お前、昨日大反対してたよなあ」

菱本先生がにやりと笑った。

「ほんとは、俺をもう一度説得したかったんだろ？」「

首を振った。まぬけに見えたかもしれない。言葉が咽にひつかつたつて出てこなかつた。

「朝から変だとは思つてたんだよなあ。立村があんなにばか見たく明るいのは見たことないつて、羽飛も古川も話してたからな。でもな、世の中はそう甘くないんだぞ。さつき、美術館の方に連絡して、弁当を三十個、用意してもらうようにしてあるんだ。お前のことだ、また『いきなり集団で弁当を広げるのは問題があるんではないか』とか言い出しそうだつたからなあ。悪いが、先手を打たせていただいたつてわけだ。あきらめる。潔く」

信号でいつたん停止している。ちらつと、運転手さんが上総のいる方に視線を投げ、すぐに元に戻した。全身に鐘の音が鳴り響くようだつた。表情だけは変えくなかった。唇を噛んだまま、菱本先生、こずえ、貴史、最後に美里の顔を見つめ返した。さつきまでけらけら笑いこけていた三人が、上総の様子にただならぬものを感じたのだろう、様子をうかがうような見上げ方をしていた。

「別に、そんなこと考えていません」

「そうか。ならよし」

菱本先生は三人の顔をひとりひとり眺め、ほっとしたように伸びをした。やりきれない。他の連中も上総とのやり取りに決着がついたと思ったようで、ふわあつとため息が漏れてきた。緊張していたのかこづえも、やつとジユースにストローを差し込み、すすつと飲んだ。

「いいじゃない、美術館に行くくらいさ。立村、あんたつて変なところで頑固だからねえ。誰も絵を見たいなんて思ってないよ。みんなで盛り上がるうつでだけじゃない。あと一日もないんだよ」

アーモンドの入ったチョコレートをひとかけら差し出して、

「いいこと教えてあげよつか」

「なんだよ」

「さつきね、美里がね、あんたのこと探してたんだよ」

今度はささやき声、美里たちにはもちろん、菱本先生にも気付かれない声だった。

「何があつたか知らないけど、あんたももう少し大目に見てやりなよ。美里昨日なんですよく元気なかつたんだよ。昼行灯つて言われていても、美里にとつてはあんたが一番なんだから。ほら、バスの中で昨日ばたばたしたでしょ、美里言つてたんだから。『立村くんがいたら』って」

「俺がいたらもつととんでもないことになつてたよな」

吐き捨てるよつにつぶやいた。チョコレートをそのまま口に放り込んだ。

「ほらほらまたいじける。立村のことを見ただけは、ちゃんと『評議委員』として認めてるんだから。貴重な相手と縁が切れるなんて、もつたいないよ。やつと仲直り、しちゃいな」

菱本先生は上総に「担任」としてのだめを押しておきたかったのだろう。大人には逆らえないものだということを、教え込みたかった

たに違いない。来年青大附中の次期評議委員長を任命されることもあつて「これ以上天狗になるなよ」と言いたかったのかもしれない。教師に逆らつてはならない、わがままを言つてはいけない。みんなと協力しあつて、中学生らしく努力しなくてはならない。

でも、と、上総は思う。

何にもわかつていらないんだ。

何に腹を立てているのか、なんもわかつてない。

美術館に行きたくないからじやないんだ。

いきなりの予定変更に頭に来たからでもないんだ。

突然、運転手さんがバスガイド用マイクを手に取つた。

「それでは明星美術館に向かいます。あと三十分くらいですが、裏門の方を通つていきます。進行方向左手側が入り口ですが、バスは表門の方から入ることになります。混んでいる可能性もありますのでよろしくお願ひいたします。裏門に近づきましたら改めて連絡します」

マイクを通すと、運転手さんの声は堅かつた。上総の側で話してくれた時とは違い、伝えようとしているかのようだつた。耳もとに響いた。

「いきなりアナウンスしてくれるなんてね」

向こう側で貴史と美里が不思議そうにしゃべつている。

「今までこんなことなかつたよね」

「サービスかな」

誰も気付いていない。

菱本先生も、他の連中も。

気付いているのは、俺だけだ。

上総はもう一度運転手さんの手元、およびハンドルをじつと見つめた。念が通じるとするならば、ありがとうと伝えたかつた。知らんぷりして運転に専念している。上総にティッシュを渡してくれた手。手袋で覆われている手。馬鹿見たく泣きじやくつてしまつた時

に、落ち着かせるよつとすつてくれたものだつた。

ありがとうござります。

たとえ、もう一年D組から追い出されたつていい。

俺は、自分の中の感じるものを信じて、計画を実行してやる。

市街地に入った。道路はほとんどコンクリートで舗装されていた。朝のすがれた空気が残つてゐるせいか、入つてくる風は冷たかつた。振動がきついのはいつものことだけど、こずえに頬み込んで窓を広くあけさせてもらつたので、それほど酔わずにすんだ。

「めずらしいねえ。あんた一田田吐きそうな顔していたくせに。ほら、エチケット袋、いる？」

「大丈夫。古川さんと話していると刺激的で、なんだか楽だよ」

「ははん、この夏で成長したんだねえ、わが弟よ」

「ばかばかしい」

上総はちろひちろと向こう側の貴史、美里コンビを眺めながらつぶやいた。

最初はいやがつていたくせに、あつと/or>う間に一人の世界を作り出している。髪につけた布のターランチエックが目に入るたび、時計の針が進むたび、こずえの言葉を聞くたび、ためらつた。やらかしていいのか。

本当に後悔しないのか。

すべてをなくしてしまつだらう。

停学だけでない、退学になつたうじようか。

悪夢漂う本品山中学に転入になつたら、また地獄の日々が始まつるのだろうか。かつて上総のことを散々おもちゃにした連中と、また戦うのだろうか。それもよし。小学校時代の泣き虫じゃないのだから。やられた相手には徹底してやり返すことを覚えた。一度は自分の味方でいてくれる人がいることも知つた。信じられないことだけ、自分のことを好きだといつてくれた女子だつていたことも。

上総は左ポケットに指を差し入れた。金具っぽいものを探り当て、指にはめた。いつ美術館裏門に差し掛かるのだろう。アナウンスを待つた。

運転手さんが手にマイクを取った。電気が走る。ポケットの手をぎゅっと握り締めた。

「みなさん、そろそろ明星美術館に差し掛かります。あと五分くらいでどうか。田の前に白い円錐のようなものがたくさん並んでいる道が見えます。そこは狭いので、少しうっくりめにスピードを落としていきます。一方通行です。少し時間がかかります」

声は抑え田だ。アナウンスというよりも、脅迫しているような響きだった。

「それはそれはすみません。そつか。明星美術館つてな、ほとんどひとりの画家しか入っていなってきいたからなあ」

菱本先生の間の抜けた声を耳にしながら、上総は表情を悟られぬよう窓ガラスに向けた。力いっぱい開いた。勢い余つて全開になってしまった。ぎゅうと風が車内に落ちた。

「ちょっと、立村何やつてるんだ」

「す、すみません。ちょっとなんとなく」

嘘がつけないのが悔しい。勢いよく左手を外に出した。すでに一方通行の道に入っている。細い通りには運転手さんの話していた白い円錐形のオブジェが大小取り混ぜて飾られていた。現代美術なのだろうか。そんのはわからない。中にはどがつたところの先をきゅつとひねつて、クリームケーキのような形をこしらえているものも並んでいた。

狭い通りをバスが走るなんて、本当は無謀なはずだ。ふつうは絶対、しないはずだ。なのに。

奥歯をかみ締めた。

腰を浮かし、片手を開いてすぐに握り締めた。

手を引っ込めた。

ポケットにもつ一度戻してから心地つぶやいた。
演技開始だ。

5 一世一代の名演技を

「どうしたのや。立村、責めた顔をしてさ」

「とんでもないことになってしまったかもしねない」

「えがすとんきょうな声を上げた。

上総の手ががたがた震えているのに眞付いたらしく。右手は浮いたまま脇に置いていた。

「今、とんでもないものを落としてしまったかもしねない」

「はあ~」

「どうしたや、本当にまことになってしまったかもしねない」

「なあに落としたのよ」

最初のうちは冗談めかしたようになじりしてくれた。まづい。上総はもう一度、唇をかみ締める風にして、口ずえを見上げた。母に頼みじとをする時、小さい頃よくじやつたものだった。

「古川さん、恥をしのんで言つよ。俺、たぶんこれから生きていけないかもしねない」

「何大げさな」と言つてゐる。美里に言こなよ、そんなこと

「お姉さん、あんたにしかじうことは相談できないんだって!」

ゆるゆるとスピードが落ちる。隣りに自転車が危うくすり抜けていく。死角に入つてこきそりだつた。声をせりに上げせつぶやきつづけた。

「さつき俺が手を出してた時、眞付かなかつたんだけど、指にひつかかっていたらしいんだ」

「何が? 鍵がなんか?」

「限りなく近い」

早く気付いてほしい。ぐつと眞合を込めて上総は答えた。

「キーホルダー、つて知つてゐだろ?」

「キー・ホルダーって、鍵じゃなければいいじゃない。どうせあんた、美里からもらつたのがあるでしょ」

「その肝心要の、もらつたばかりのキー・ホルダーなんだって！」

反対側の美里がぎょっとした表情で上総の方を覗き込んだ。

一緒に貴史も重なつた。

最後に菱本先生が身体を折り曲げて、尋ねてきた。からかい調子を隠しているかのように。

「おい、お前、もしかして彼女からもらつたものを外に落つことしたなんていわないよなあ？」

一番心配しているように見えるのはこずえだけだった。貴史と美里の表情はさほど変わっているようには見えない。

勝負は、菱本先生とこずえの一人に賭けるしかない。

上総は見切つた。勝負に出た。

「菱本先生、申しわけありません。理由を聞かないでください。僕が悪かったと思つてます。僕がさんざんわがままを言い続けた天罰だと思つてます。だから反省します。だから、「何いきなり自己批判してんの？ 顔色真つ青だぞ」ちょっと立村、あまり私の足のにおいかがないでよ」こずえの膝に頭がつくくらいに、上総は頭を下げた。

「さっきの裏門のところで、たぶん落としたんだと思います。今から、拾いに行かせてください。お願ひします。ばかみたいなことを最後の最後でやらかすなんて、しょせん、僕の程度はそのくらいしかないと思つてます。菱本先生にばかみたく反抗してた自分が、馬鹿だとつくづく思います。だから、お願ひします。自分のわがままを押し通したりしません」

菱本先生が背をそらした。上総も自分のことばが菱本先生にどういう感触を与えていいのか、見当がつかなかつた。かなり驚いていることは確かだろう。全くの大嘘をついている自分。全く反省なんをしていない自分。

突き動かしてこるのは、降りなくちゃいけないと、いつ気持ちだけだ。

後ろの方にいる連中が少しづねめを出した。

女子の声で

「どうしたんだる、立村くん、また切れてしまつたのかもよ」

男子の声で

「なんで立村の奴車から降りたがつてゐるのか？ 腹の具合でも悪いのか？」と。どう誤解されるだつて。一学期、どうこつね氣の中過ごすのだらう。バスの中の不穏な空氣。まんま、教室に流れるというのも覚悟の上だ。上総はただ、ひたすらに泣きそつた顔をじっしらえながら繰り返した。

「お願いします。裏門のところまで走つて戻ります」

「お前、こんなところで降りるのは無理だぞ」

貴史も間に入つて、ぶつとばす調子でかき回した。

「ばかやうつ、何やつてるんだよ。よつによつてあれを落としたのかよ」

「羽飛わかるか？」

「わかるつてよ。あんなに立村、宝物みたく扱つてたくせにな。ほんつと馬鹿野郎だぜ」

美里の表情はあえて見なかつた。壊れなくなつた。エスカレートすると、また泣きじやくりそつだつた。泣き落とした。運転手さんを前に思いも寄らない「泣き落とし」をやつてしまつたこと。ハーピングだつた。

鼻をすすり上げ、もう一度、菱本先生の顔を見上げた。言葉を發しそうとした、

「先生、こいつ何とかしてやるつて。こいつな、たぶん美里からもらつたキー ホルダーをさ、すげえ喜んでたんだ。そりや、落としたらパニックになるつて。降りられねえのかなあ？」

天の声なり。

「な、そうだろ? 立村」

上総はゆつくりと貴史を見据えた。

言葉を貴史にぶつければ、すべてが嘘になってしまつ。嘘を重ねていけばもう一度と、友達でいられなくなる。あこがれていた、ふつうの友達でいられなくなる。

自分の中の掛け金が外れそうでぎしきし言つている。

菱本先生を相手にペラペラやるのはかまわなかつた。自分を最初から相手にしていない連中だつたら、何をやつたつて後悔はしない。貴史と美里は別だつた。入学式の時からずっと、仲のいい友達だつたのに、自分が受け入れられないというただそれだけで、裏切つてしまふなんて。首を締められたら息が苦しくなるんだろう。言葉が途切れてしまうんだろう。本当は自分が何を考えているか、いやといふほど分かつてゐるのに。青大附中の居心地の良さに甘えている自分がいる。

「羽飛、頼む」

搾り出すのがやつとだつた。美里は微動だにしなかつた。上総が観察しなかつたせいかもしない。一緒に貴史が菱本先生の腕をゆすつてくれた。

「あの、もしよければ、裏門まででしたら戻れますよ
ゆるゆるしていったバスが止まつた。運転手さんが、いかにも聞いていましたよ、という態度で振り向いて、菱本先生に声をかけた。上総の方をそつと流すように見て、笑顔でだつた。

「大馬鹿もんが。つたぐ、お前はほんとにガキだつていうんだよ」
軽く頭を叩かれた。じぱらく苦みばしつた表情のままだつた菱本

先生は、「うん」

と両膝を叩き、運転手さんに答えた。

「すみません。うちの馬鹿息子のために、ちょっと裏門まで戻つてもらえますか?」

泣く寸前まで行つていただはずだつた。力が抜けた。いすえの膝元

に手がすべり、思いつきりはたかれた。

「なあに、すけべなことやつてるの。ほんとあんたつてガキだよ。なさけない！ 立村、本当にあんた、泣きそつた顔してるよ」

「わかつてくれればいい」

「こいで崩れてはいけない。自分に言い聞かせた。

菱本先生にもう一度、演技をしなくては。

「ありがとう」ゼコます。ほんとに、「めんなさい」

苦い味のする言葉を搾り出した。咽がひりひりしてきた。振り返つて窓から様子を見ると、バスはいつたん大通りまででて、もう一度円錐の待つ裏門に戻るらしかった。

「裏門は、まつすぐ走ればすぐですよ」

運転手さんのマイクの言葉に頷いた。美里の様子は全くつかがえなかつた。貴史の

「ほら、俺に感謝しろよ」

と言わんばかりの鼻高々な顔だけがはつきり映つた。

「ずえだけ胡散臭そうな目で上総の方にささやいた。立村、本当に美里のキー ホルダーを落としたわけ？」

「でなかつたら恥ずかしい真似しないって」

「あんた、本当にほんと？」

じいじと見つめ返されて上総も答えに困つた。

「だつたらどうだつていうんだよ」

「つてかさあ、そんなにあんた、美里のこと、好きなわけ？ 『ぐくふつうの顔して美里としゃべつてたじやない』。キー ホルダー落としたくらいでそんな慌てるのつてどうかと思つよ」

「そんなわけないだろ！」

ぼろが出るのはまずい。会話をシャットアウトすると、上総はバスが留まるのを待つた。もう一度廻ってきた場所には、白い円錐形のオブジェが並んでいた。道を示すように点点と並んでいた。一方通行の道のりだった。

「この辺か？ 落としたところは

「そうです」

「もし見つからなかつたら、あきらめて戻つていい。他のみんなに
ちゃんと謝るんだな」

「はい」

小路に入る寸前のところで、バスが留まつた。

菱本先生の小言を聞き流して立ち上がつた。上総の方を見ながら
げらげら笑う集団が後ろにいる。

「なあに、ばかやつてるんだよ、立村の奴」

「あいつもやつぱり、惚れてる女には弱いんだなあ」

「美里ちゃん、愛されてるよね」

いつもだつたら聞くに堪えない言葉ばかりだらつ。気が狂いそう
になる言葉だらつ。もう一度と、戻れないこの世界。評議委員とし
てのプライドを捨てた瞬間。頭の中をよぎる美里と貴史とのおしゃ
べりの時。すべてが終わつた、そう思つた。

タラップに立ち振り返つた。運転手さんはやはり、休憩所の時と
同じ笑顔だつた。ありがとうと言いたかつた。遮られた。

「降りたらバスは、まつすぐ、表門から入りますからね。まつすぐ
ですよ」

急いで、裏門に入れといふことだらうか。

上総は頷いた。ポケットには財布だけ忍ばせていた。空氣がぼわ
っと暖かくまとわりついた。

「わかりました。ありがとござります」

ドアが折りたたまれた。飛び降りた。

振り返らなかつた。ネクタイが肩に流れていく。走り出した。同
時に後ろの方のバスがゆっくりとバックして、とろとろと走り出し
ているのがわかつた。左側を通り過ぎていつた。わあつと窓からか
すかなざわめきが聞こえた。上総の名前を呼ぶ声も聞こえた。上総
はひたすら、丈の長い雑草と円錐に囲まれた歩道を走り抜けた。

その十五 明星美術館でのよしなごと

1 探し探して

2 我、目的を完遂せり

3 『樂屋裏』

4 それぞれの事後処理

その十五 明星美術館でのよしなごと

1 探し探して

雑草が縁に生い茂る道。白い円錐形のオブジェが指示示す場所は直線、百メートル先だった。最初の五十メートルを全速力で走ったのはいいが、クラスで四番目の中途半端な脚では無理だった。いつたん呼吸を置いて走った。バスはすでに見えなくなっていた。ようやくたどり着いた煉瓦畳の道に入る。向かって左側には芝生が滑らかに伸びていた。菱本先生が話していた通り、虹色のビニールシートを敷いて語らっている家族連れが目立つた。大きな風見鶏がにらんでいる鋼色のゲートをくぐり、上総はまず、四人のかたまりを捜すこととした。

銀縁めがねをかけている、瘦せ型神経質そうな男性。

同じ年の女子三人。

見つかりそうだった。

芝生を一通り巡った後に、美術館に入ろうと決めていた。幸い、貴史から借りた五百円があるので入場料はなんとかなる。時計を見ると、ちょうど十一時半を少し過ぎた頃だった。運転手さんがたぶんわざと時間稼ぎをしてくれたのだろう。

「時間がねえよ……」

煉瓦置からざぐざくと、上総は芝生に乗り込んだ。奥には白い倉庫のような建物がどかんと建っていた。玄関のガラスが光を跳ね返していた。美術館に来たという気がしない。工場見学で行ったことのあるパン工場を思い出した。

四人、四人、と人の顔をのぞき込んで早足で廻った。たくさんいるわけでもないのにどうしてだろう、見つからない。バトミントン、ドッヂボールに興じている親子連れに頭を下げながらすり抜けた。早く見つけないとまずい。ゆっくり遠回りしたとしても、バスなんだからそろそろ到着している頃に違いない。もしかしたら降りているかもしれない。菱本先生を始め、貴史たちは猛烈に血を昇らせているのは想像に難くない。狩野先生たちを見つける前に捕まつて怒鳴られるのだけは避けたかった。頭の中から血が退いていく。わんわん響き出す。

すべては上総の頭の中で出来上がった想像でしかないと、わかっているし言われるに違いない。菱本先生の言つ通り、自分で決め付けているだけで、他の人たちは何にも思っていない。

切つて捨てられるだろう。誰もわかつちゃいない。自分の中に響く言葉だけを信じて計画を立ててきた。

「どこ行つたんだよ。いつたい」

独り言だけが増えていく。薄いジャケットが暑苦しくて脱ぎ捨てたかった。こんなんだつたら、脱いでバスの中に置いてくればよかった。

脱ごうとした。左のポケットが重たいのにはつとした。手を入れた。金具らしきものが、人差し指にひつかつた。

そつと引っ張つてみる。ちょうど握つて隠れる程度の、小さなもの。黄色い線の入つたターナンチェックがちらついた。

一緒に思い出すものは誰かの髪飾りだろうか。ドアのノブのよがなものだつた。

切符に似た長方形の、プラスチックだつた。もし落としていたら、

名前をローマ字で彫りこんでおくことなんて、できやしないだらう。鍵をぶら下げておくことなんてできやしないだらう。

まだ美里に礼を伝えていない。

上総はキー・ホルダーをひっぱりだして、田の前にぶら下げた。手鏡のように手のひらを見つめた。中指にちよつとぶら下がつたままの、ターナンチェックキー・ホルダーがぴたりと納まった。

もしも菱本先生が怪しんで尋ねてきたら、本当に外から落とすしかないだらう、とは思つていた。そんなへまは絶対にしないと決めついた。すぐに外へ手を出して、振りをした後に握つてポケットに戻した。

「こずえには見抜かれそつだつたけれども、最後まで『まかせた。そんなへまするもんか。

「誰が落とすかって！」

思いつきり叫んだ。

弁当を広げている群れががやがやしているせいか、誰も気にとめない様子だつた。声はふかふかした雲にすべて吸収されてしまったのかもしない。夏の光線に溶けてしまつたのかもしない。頬に降りかかる午前の太陽。まぶしかつた。白かつた。気持ちよかつた。もう一度廻つてみていなかつたら、今度は中に突撃だ。

四人だけといふのにこだわつたのがまずかつたのかも知れない。もしかしたら家族の人もいるかも知れないし。

今度は早足で敷物の間を縫つていつた。美術館の中に入つたとは、どうしても考えられずさらにいふなら、中の喫茶店でお茶をするとも思えなかつた。絶対この中にいて、お弁当を広げようとしているはずだ。素早く予定変更を行い、上総は呼吸を整えた。

もう一度芝生の上を眺めた。

左手をぎゅっと握り締め、目に力をめいっぱいこめた。

半径五メートル、十メートル、十五メートル。何度も見渡してい

ると、なんとなく頭の片隅に赤いものがちらついた。視界の隅、だらうか。気になつて、身体」とと斜めにねじつた。一番奥に、神社の鳥居が右半分壊れたようなものが飾られていた。現代美術の最たるもの。上総にはその良さがたぶんわからないもの。門に納まるように、家族連れらしき一組が座り込んでいた。滑り台の変形のよう赤いオブジェ、影にひつそり背中を向けている集団がいた。めがねをかけたシャツ姿の男性ひとり、同じ年の女子が三人、そして、花柄のふわふわした服を着た女性が、ひとり大きなバスケットを開こうとしていた。

ひとり、ふたり、さんなん、よにん……、五人。

合計五人だつた。

間違いない。

見つけた。間に合つた。

片足をうまく使い、上総は弾みをつけて走つた。足下の芝がつるつるする。転びそうだ。

2 我、目的を完遂せり

人のいないところをわざわざ選んで座つてゐるくらいだ。誰かが駆けて来るのを見たら、そりや驚くだろう。

女子のひとりと、目が合つた。

バスケットを開いている花柄ドレスの女性にしがみつくように、見つめ返された。驚かせてしまつたようだ。

息を切らせながら、上総は敷物の芝生に、片膝立ててしゃがみこんだ。

「狩野先生、いきなり申しわけありません。2Dの立村上総です」言つたところで咳き込んだ。気が付かない振りをしていた心臓が、ぱくぱく言い出した。右手で雑草を握りしめ、振り返つた銀縁めがねの男性に向かい表情を伺うのが精一杯だった。

「立村くん、大丈夫ですか。顔色が悪い」

かなりびっくりしているようだつたけれども、狩野先生の口調は落ち着きを失つていなかつた。女子三人が上総の方をにらみつけ、そそそつと隅の方に場所をずらしていた。なだめるように、花柄のドレスを着たあどけない感じの女性が肩をぽんぽんと叩いていた。

大丈夫、大丈夫という風に。

「そういえば、二年D組の宿泊研修は、今日が最終日でしたね」

「今からうちのクラスの連中が、美術館に来ます」

上総は白い建物に指を差しながら続けた。

「今ならまだ、間に合います。場所を移つてください」

女子たちの様子はさらに不安そうなまなざしに変わつていつた。三人のうちひとりは顔を見たことがあつたけれども、あの二人は見覚えなかつた。たぶん上総のことも知らないのではないかと思つた。ぶしつけにじろじろ見るしか、今は出来ないのだろう。女子三人の視線が痛かつた。寄るな、近づくな、言いたげにかたまつていく。

「立村くん、それは菱本先生からの指示ですか？」

「僕自身の意志です」

初めて、狩野先生の表情が険しく変わつた。

銀縁めがねを軽く押し上げ、外した。めがねなしの狩野先生の顔を初めて見た。いつか雑誌で見た若手歌舞伎俳優の、化粧をしていない顔にそつくりだつた。つるんとして、それでいて真摯なまなざしと薄い唇。

「かの二、うちのお嬢さんたちを車に乗せてくれないか。場所替えだ」

花柄ドレスの、ふわふわパーマをかけた女性ははつとしたように狩野先生を見つめた。片手でバスケットに、出しかけていたサンドイッチや揚げ物などをしまい始めた。手伝おうとする女子のひとりに、やさしく手を触れ

「さ、早く行きましょ」

と笑顔でささやいたのが聞こえた。

「僕もあとで行く」

言葉少なに指示をした後、狩野先生はゆっくり上総の方に向き直つた。

「立村くん、菱本先生の合意あつてのことですか」

「いいえ、今、裏門から無理やり入つてきましたけれど、D組の人間は表門から入つてくるはずです」

急に変わつた狩野先生の口調が怖かつた。

かのこさんという女性に指示を出して、引き上げる準備をしていたということを考えると上総の読みが異なつていたわけではないだろう。花柄ドレスのかのこさんは、上総の方に心配そうな視線を投げながら、バスケットを抱えた。女子三人はみな、靴を履いてぼおつと立ちすくんでいた。言葉は出てこなかつた。しゃがみこんでいる上総を、犬じやないかと言いたげな顔で眺めていた。退学するのがどの子なのかはわからない。べたつと三人で、おびえている風にくつついている。

「では、かのこ、頼むよ。敷物だけは僕が持つていいくからね」

かのこさんは黙つて頷き、

「さ、行きましょう」

と女子三人の背中を押した。早足で離れ、五メートルくらい離れたところで一気に走り出した。指差しているようすだと、近くに車を駐車しているのだろう。

黄葉の近辺ではかすかだつたせみの声も朗々と響き渡る。女性の気配がなくなり、上総と狩野先生の二人だけが向かい合つていた。言つことを伝えた以上、上総はもう何も口にすることができないままだつた。力が抜けていく。膝をついていたせいか、緑色の汁らしきものがスラックスにべつたりくつついていた。つま先をぺたりとつけ、膝を抱えたまま、狩野先生の言葉を待つた。汗が渇いて頬がひりひりした。

「立村くん」

「一言、ゆつくつと発せられた。

「どうして、僕に連絡しようと思ったのですか？ 菱本先生にはきちんと話をしておいたはずですが」

「知っています。狩野先生がうちのクラスと合流するのを迷惑だと思つてのこと、わかつてます。うちの菱本先生に通じてないんです。どうしてかわからないけれど、絶対にみんなで楽しい思い出を作つてやろうつて、そればかり考えているようでした。僕もその辺はよくわかりません。でも僕がA組の人たちだったら、絶対に耐えられないことだから」

狩野先生は何度も頷きながら聞いてくれた。

「後で菱本先生にはあやまります。覚悟はします」

「覚悟つて？」

「例えば停学とか、と口にしようとしたが出来なかつた。

大げさすぎる、と言われそうで怖かつた。

狩野先生のことを、二年次数学の授業を通してしか知らないわけなのだから、本当のところは分かる由も無かつた。菱本先生よりはずっと、上総と同じ感情を理解してくれるんじやないかと信じた。すべての思いをぶちまけてしまつたら裏切られた時、何倍もの打撃を受けそうだった。あとはたくさんの罵声を待つだけだとわかつているだけに、言い訳は絶対したくなかった。

「後悔はしません。ありがとうございます」

今度は狩野先生が逃げる時間がなくなつてしまつ。上総は立ち上がりうとした。狩野先生がやつと表情をやわらげた。一学期、数学の小テスト後呼び出されて、お茶を出してくれた時と同じ微笑だつた。

「立村くん。誉められたやり方ではないけれど、気持ちは僕が彼女たちの分も受け止めます。今日のことは、自分で責任を取る覚悟を持つていますか」

「もちろんです」

「今度こそ、停学、退学という言葉を使おうとした」

「立村くん。君はこれから、鋭すぎる自分の感覚を飼いならしていくすべてを、覚えていけばいいんです。数学の問題と同じです。自分の感覚を大切にすることと、守るために問題の答えを暗記してゆくこと、それは一緒なんですよ」

「感覚を飼いならす」

「自分の中にはどういう感情があるか、じつと見つめていけばいいんです。君にはいわゆる『ふつう』の人が持っていない、フィルターのかかっていない感情を受け止める能力が備わっています。だから、来てくれたんでしょう。今度はもっと『ふつう』の人たちを刺激しないような方法を見つけるためのマニュアルを覚えていけばいいんです。時間は掛かるけれど、大切なものを守るためにには少しずつ」

「先生、いつ、そういうことに気付かれたんですか」

「そうですね、大学を卒業する頃かな」

狩野先生は片手を差し出した。わからずぼんやりしていると、上総の右手をそつととつて、軽く握手した。

「ありがとう」

幽靈になってしまったようだった。足下がおぼつかなくなる。痺れた感覚が残っていた。上総はもう一度狩野先生の目をじっと見つめ、一礼した。背を向け、ゆっくりと建物に向かって歩いていった。もう、走る必要はなかった。

3 『樂屋裏』

裏口からも入場券を買つことができた。たぶん問題ないだろ。一応は館内に入つてうろうろするようなこともバスの中で聞いていたし、ということとで上総は三百円払いロビーに入った。

もう表門からみんなが入つてくる頃だらう。上総のいきなりの逃亡劇に絶句しているか、もしくは激怒しているか。大目に見てくれるなんてことだけは、絶対にないだろ。あとで菱本先生にけじめをつけなくてはならない。言い訳しないで怒鳴られよう。念じながら

らざりと油絵をながめていた。壊れた鳥居のようなオブジェのイメージで、てっきりわけのわからない現代美術の集合体かと予想していた。

飾られている絵はほとんどが油絵で、花やら建物やら、『レバーレ』わかりやすいものばかりだった。油絵は遠くでみるときれいだと思えるのに、どうして近くでみると汚く感じてしまうのだろう。貴史や美里には言つたことがない、正直な感想だった。

ロビーには、青大附中の制服を見かけなかつた。

ひとりの画家中心とは聞いていた。さすがに埋め尽くせなかつたのだろう。思つていたよりも違う名前の画家が多かつた。ささつと眺めるだけにした。芝生の上には人が集まつていたのに、館内はこうも静かなのだろう。

肩に引っかかつたままのネクタイを下ろした。

座つている館員の女性が、不思議そうに上総の顔を眺めていた。外は暑いのになぜひざ掛けをしているのだろう。居心地悪くなつてすぐに離れた。

もつ、狩野先生たちは車に乗り込んで移動しているだろうか。

かの『さん』といつ、ふわふわした花柄ドレスの女性は、狩野先生の奥さんなんだろうか。

A組のおびえきつっていた女子たちは、自分のことをじつ思つただろうか。

なによりも、D組の連中はいきなり飛び出した自分のことを、どう受け止めているだろうか。

さあつと絵を流して観てゐる時に感じるやすらかな空気が心地よかつた。絵が好きな人はもつと詳しいことを知つていて、説明したり、感じたりするのだろう。貴史や美里はきっと、感じたことを語りまくつたりするのだろう。そのたび上総は落ち込んで、ひとり

で美術書をひもといては自己嫌悪に陥っていた。どうしてここにつらと同じ感覚で、絵を見られないのかわからなくて、悔しくて。

ただぼんやりと穏やかな空気を感じているだけよかつた。

印象派とか現代美術とかどうでもよかつた。

フィルターのかからない感情を見つめていたかつた。

一階展示室の階段を上がり、上総はぼんやりと眺めていた。一階がありがちな風景画中心だったとするならば、人物や動物、馬などのわかりやすい絵が多かった。上総に合つのはこの空気だろ。少しゆっくりめに歩いていった。でも歩は留めない。

真っ黒い馬の全身図、ピアノを弾いている金髪の少女、留字をしている少女。女性を描いたものがほとんどだった。社会科で鹿鳴館について習つた時、見せてもらつた写真に載つてているようなドレスをみな纏つていた。

畳三枚分の大きさで、金の派手派手しい額縁に囲まれている一枚の絵が、突き当たりの展示壁につるされていた。一番のメインらしい。ここにもひざ掛けをかけた館員が座つていた。足が止まつた。

『樂屋裏』と、金の文字が掘り込まれていた。吸い込まれるように見つめていた。

どのくらい時間が経つたのだろう。呼び戻す声が聞こえた。聞き覚えのある、心が痛くなりそうな声だつた。

「この絵が好きか」

振り返れずに、上総は頷いた。

『『樂屋裏』はこの画家の最高傑作として有名な作品だ。ある日本舞踊家の舞台裏にて、『幻お七』という舞踊を観賞した時のものだそうだ。どういう舞踊か、知つているか?』

もう一度頷いた。

うちに並んでいた小説のひとつに、「近松物語」が入っていて、かなり前に読んだことがあった。惚れた男に会いたいゆえに放火した挙句、火あぶりの刑に処せられた八百屋お七の物語を、あらすじだけは知っていた。

「ばかばかしいことだとはわかっていても、お七は惚れた男のために禁じられたやぐらの太鼓を叩こうとしたんだ。それがどんな罪になるかも知らんうちにな。結局それで火あぶりの刑になるわけだが、お七は後悔しなかった。そこまで思いつめることのできるお七はすごいことだと思う。だがな」

後ろの人物は言葉を切った。近づいてくる熱気のようなものに身体がじわじわした。

「火事のために家族を失った人たち、なによりもお七を育ててきた家族の悲しみはどんなものだつたか想像つか? 一時の激情で自分を滅ぼし、周りの人たちを傷つけ、それが美しいだけですむと思うのか?」

やつとの思いで言葉を搾り出した。

「停学は、覚悟します」

肩を掴まれ振り返った瞬間、ふわっと身体が浮いたようになり、腰からすとんと落ちたことは覚えている。頬に響いた音と耳に響いた激音は、入り交じつていて何がなんだかわからなかつた。からうじて両手で身体をささえ見上げた絵は、水色と赤の交互に入つた衣装と、時代劇の鬘をかぶつている役者が、羽子板を抱きしめて崩れ落ちている図だつた。真横からのアップで描かれていた。それを囮む黒子が三人ほど。まだ響いている耳鳴りを押さえるようにして、上総は菱本先生の顔をにらみつけた。上げた手はまだ震えているようだつた。ぎゅっと唇をかみ締め、上総の腕を引き上げた。

「来い、弁当はこっちだ」

仰天している館員の女性に「すみません、うちの息子なんで」と頭を下げ、菱本先生は上総を引きずるように階段まで連れて行つた。

横顔をのぞいた時、鼻をすすりあげるように天井を見上げているの
にぎょっとした。

4 それぞれの事後処理

その後のことはほとんど覚えていない。館内からひっぱりだされた後に、無理やり頭をクラス全員の前で下げさせられ、弁当を押し付けられたことくらいだろう。とにかく、泣かなかつたことだけは確かだつた。青大附中の制服姿の集団。うろうろと芝生の中をさまよい、それぞがベンチ、敷物を敷いたりして弁当を広げていた。塩焼きチキンがたつぶり入つた、ほかほか弁当だつた。サービスに煎茶のパックもついていた。

誰の輪にも入る気になれず、貴史とも顔を合わせられず、ひとりでベンチに座り膝に広げた。頬がまだひりひりして、奥歯の感覚が鈍くなつていてる状態で、言い訳するのもみつともなかつた。さすがに菱本先生は寄つてこなかつた。走り回つたせいかおなかはめちゃくちゃ空いていた。さつそく食べることに専念した。

クラスの連中たちの反応を見るに、ある程度どういう目的で上総が動いたのか、想像はついていたようだ。決して腹を下して間に合はないとか、本当に美里のくれたキー・ホルダーを落としたのか、そういう理由ではないということに気付いているらしい。

証拠に、あちらこちらから

「A組、やつぱり逃げられたな」

「立村つて思つたより足が早いんじゃないの」

割り切つた会話が聞こえている。

その辺は安心した。菱本先生も気付いてくれたらいい。どうせ来週から一週間くらい、停学だらう。もしかしたら高校に推薦してもらえないかもしない。

きつい一発を食らつたのにも関わらず、頭はすつきりしていた。めずらしくひとりぼっちでいるのに、淋しくなかつた。

「そり貴史たちのグループの様子を見ると盛り上がりはいるようすだった。貴史だけがむすつとして割り箸を噛んでいる。上総のたぐらんだことを見抜いている可能性が高い。もう、友達でいるのは無理だらう。前から重々覚悟していたことだ。

もうひとり、気になる美里たちを探す。

女子グループは思ったよりも細かく分かれていた。最近の傾向として、美里は「ずえと奈良岡彰子、その他数名と遊んだりすることが多いようだ。女子同士派閥が出来てきているようだつた。今日のところは上総に背を向ける格好で、「ずえと話をしている。

「ずえが

「立村のことを見ているんだよ」と言つたけれども、今回の逃亡劇でその思いも覚めただらう。同じく、覚悟の上だつた。

上総は弁当の蓋を閉じて、ごみ箱に捨てた。カラスが残飯を漁ろうと、羽跳ね回つてゐる。つつかれたくないのと場所をずれた。乗車時間まで、ぼんやりとしていたかつた。

「つちやん」

振り向くと、南雲が相変わらずさんさんとした笑顔で立つてゐた。こいつだけだ。上総のことを自然なまなざしで見てくれる奴は。上総は表情を変えず、答へず、じつと見上げた。

「昨日は、ありがとうございました」

「目的は果たせたか?」

「うん、もちろんだよ」

照れのない、あつさりした答へだつた。

「じゃあ、定期入れ見せろよ」

「ほいな」

ポケットから黒い定期入れを取り出し、すいと渡してくれた。

見た目、気のせいか薄かつた。

開くとやはり四月現在まだ乱れていらない格好の南雲写真が納まつ

ていた。緊張したような、歯を食いしばった様子。表側にはバスの定期券、これはおととい確認したことだった。

つぎにカード入れを指先で触つてみた。

貸しレコード店のメンバーズカード、テレホンカード、名刺型力レンダー、たくさん紙切れは入つてているけれども、もつと膨らんだものは見つからない。

なぐちゃん、まさか。

あの闇の中で。

でも外だつて、まさかだよな。

思わず奈良岡彰子の姿を探してしまつ。すぐに南雲の顔をうかがつてしまつ。最後にもう一度カード入れの上をなぞつてみるが、ない。

「なーに、悩んでるのかな、りつちゃん」

いたずらつぽく南雲はしゃがみこんで上総の顔を横からのぞいた。

「悩んでなんて、ないけどぞ」

「あるべきものがないつて顔、してるなあ」

「まさかお前」

見つめすぎて手がお留守になつた。ゆるんだ指先にぎゅっと押し付けられるものがある。かしゃりと、ビニールっぽい音がした。

「大丈夫、未使用さ」

両手で手の中の、正方形包を覆い、上総は楽しそうに手を振る南雲を見送つた。もちろん定期入れは取り返された。残つているのは透明ビニールに包まれた丸いゴムだつた。俗にいうコンドーム。持つていてのを見られたらたぶん、違反カードの一枚一枚は切られるだろう。評議委員の面目も丸つぶれだ。

ひとりでよかつたと思つ。

そつと左ポケットにしまいこんだ。

、集合の時刻となり、みなそれぞれにバスに乗り込んだ。全員整列の後に乗り込むやり方でなくて、本当によかつたと思う。特にとん

でもないことをやらかした後だけに。上総が戻つてくると、すでに席についている連中がひゅうひゅうと騒ぎだした。

「おいおい、お前なあに、発作起こしてるんだよー。」

「立村ストレス溜まりすぎなんじやねえの？」

「つたく、常識外れることもたいがいにしりよなあ」

声ではつきり聞こえる分は潔く受ける

まだこずえはもじつてきていなかつた。すばやく窓際に座り込み、窓を眺めていた。運転手さんの姿もまだ見えない。貴史も、美里もいなかつた。

次に戻ってきたのは菱本先生だつた。殴つた後といつのもあつてか、言葉は少ない。

「大丈夫か」

じつと見下ろす感じだつた。どう答えればいいのだらう。頷くしかなかつた。

「すみませんでした」

「まあいい」

そのうちにまたひとり、ひとりとばらばらに戻つてくる女子の集団がいた。たぶん中に美里がいたのかもしれない。こずえが帰つて来たところをみると。でも声がなかつた。こずえだけが腰を浮かせて貴史、美里たちに身振り手振りをしていくよつすだつた。背中で大体わかるものだつた。

「もう、どうだつていいでしょー！」

一言だけ美里の声が聞こえた。

最後に運転手さんが戻つてきた。初めて上総は人と目を合わせることができた。ちらりと上総の方を見てほつと安堵の表情を浮かべた。

「すみません」

同じことばかり言つてゐる。自分の身体は目に見えないロープで縛られている。さらし者のようにだつた。

「では、青大附中までノンストップで行きます」

再度、アナウンスが流れた。エンジンの掛かる音。窓から流れる風、クーラーの入り交じった埃っぽいにおい。やたら汗臭い空気。行きのバスにはないものばかりだった。上総はもう一度、貴史と美里に目を向けた。もう一度、振り向いてほしかつた。でも一人はなにやら深刻そうに語り合つてゐる。顔を見せなかつた。表情も隠したままだつた。菱本先生は目を閉じてゐるままだつた。

「ほら、一口飲みな」

ひょいと、差し出してくれたのはこずえだつた。

ちいさなオレンジジュースの缶にストローを差し込んであつた。

「まだ私口つけてないからね」

こずえは制服のリボンを結びなおすしげさをしながら、うんと伸びをした。その間一氣にすすつて、隣りに返した。

「ありがとう。さつきは『めん』

「あやまるのは別の相手でしょ。つたく、あんたつてほんとガキなんだから、と続かなかつた。

「得な性格なんだから」

意味がわからなかつた。その後黙つてしまつたこずえは、ストローを抜いて直接ジュースを一気飲みしてゐた。甘いものがちょうどほしかつた。ふうっと力が抜けていき、窓際に頭を乗せたまま上総は目を閉じた。

「立村くん、立村くん」

今度は夢ではなかつた。だるくなつてやたらと頬が腫れた感覚が残つていた。目やにがたまつてゐるよつだつた。

「いいかげん目を覚ましなさいよ。ほら

「清坂、氏？」

窓からのぞくと、すでに一年D組の連中はバスから降りて一同整列の準備をしていて。見慣れた青大附中の真っ白い校舎が見えた。わかっているけれど怖い隣りに目を移した。

美里が、やつやかんで「さあね」のこた席に座っていた。

「古川、さんば？」

「降りたに決まってるでしょ。ほり、最後の挨拶と確認は評議の仕事だつて、立村くん言つてたじやない」

「ひしづと責め一方の言葉で叩いてくる。

「うだつた、評議委員として最後に、バスの中をチェックして、ごみが落ちないかを調べるよつにとつう風に組み込んだはずだつた。言い出したのは上総自身だつた。

「あのや、清坂氏」

「あとで言つて詰たつぶり聞かせてもうつからね」

言おうとしたのを遮つて、美里は一番奥の席をとんとんと叩いた。「誰よ、こんなといひに缶置きっぱなしにする人。南雲くん？ ああ、今度はなによ、空のペットボトルなんて持つてこやせるからみんな捨てるじやないのよ。全く、何考てるのよ、本当に」「独り言」といふよりも、一人で上総に聞かせるよつこじやべつといふ。嫌味の嵐だつた。

「「」めん

「わかつてゐなら、早く手をさつてよ」

くぱりついた体を起こして、上総は男子側の「」みを拾つて歩いた。また南雲の定期入れが落ちていないかもチヨックしながら、そつと運転手さんの側によつた。停止させて、エンジンを一度切つている様子だつた。

「あの、すみません。やつきは」

美里に気付かれないように、小さな声で、

「つまくこきました。ほんとに、感謝します」

運転手さんも帽子を脱ぎながら、あらうと美里の後姿を見つめつ

つ、

「今回の実感を一言で言つと？」

「呼吸おいて答えた。

「我、目的を完遂す」

「お見事」

今度は上総の方から手を差し出した。ぱぱりと音がした。やわらかい笑顔がいつのまにか、堂々とした男の共感に変わっていたかのようだつた。ぎゅっと握り締めた。

「がんばれよ」

「はい」

ビニール袋のじみをぶら下げて、上総は素早くタラップを降りた。待ちかねている菱本先生は戸惑つたようすだつた。

「先生、バス内のチェックは終わりました。あとは点呼だけです」

「わかつた、早く数えろ」

いつものように男子連中の肩へ手を置きながら「いや、こい、さん」と声を出して数えていった。

貴史の肩に触れた時、何か言われるかと、緊張した。

下を向いたまま答え一つ返さなかつた。

点呼OKの報告をした後、上総はすぐに整列した。貴史のひとつ前だつた。

皆疲れ果てていたこともあり、菱本先生の挨拶は一言

「お疲れさん。明日はちゃんと学校に来いよ」

だけだつた。みな、自転車を置きっぱなしにしていたのでそこには群がつていつた。上総も向かおうとした時、ぎゅっと肩を捕まれた。貴史だつた。

「なんで落としてねえキー ホルダー、落としたなんていつたんだ?」

「ごめん。今はちゃんと持つてるから」

「そんなこと聞いてるんじやねえよ。立村。お前、俺に一体何させようとしたんだ? お前、俺に言つたよな。ほんとの目的が美里と仲直りするためだつて」

「大嘘だつた。言い訳できない。上総は黙つた。

「要はお前、俺に嘘ついたつてことだろ。答えろよ」

「その通り。殴つたつていい」「ばかやう」「ひ

貴史の手がネクタイを掴んだ。苦しくて前かがみになった。され
るまでこようと今は決めていた。

「じゃあなんだよ。本当の目的つて」

「ごめん、それはいえない」

「なんで言えねえんだよ！」

上総は数回ひつぱりまわされた、突き飛ばされた。抵抗はしなか
つた。周りに野郎連中は見えなくなっていた。女子の数人が遠巻き
に眺めているだけだった。仲裁に入られないうちに一発殴ればいい。
立ち上がった。

「言えないんだ。覚悟はしてる」

「つたく立村のばかやう。何考てるんだよ。俺、お前の考えて
ることが全く読めねえよ！」

手が緩んだ。怒鳴った。

「どうして何に言わねえでなんでもやつちまつんだよー。ほんとお
前、停学になつちまつだぞ」

「覚悟の上を」

「俺が手伝えねえと思ったのか？」

「本当にごめん」

鸚鵡返しにくじかえすだけだった。自分の顔が能面になつていく

のがわかった。貴史はあきらめたのだろう。もう一度

「ばかやうつー！」

とつぶやき、自転車置き場に走つていった。しばらく立ち止まつた
まま上総は見送つていた。

ちよつとだけ信じられない言葉が混じつていて、ショックでふら
ついていた。

「ほんとお前、停学になつちまつだぞ。」

貴史から飛び出した言葉は絶交宣言ではなかつた。たまらなく羽
飛貴史のままだつた。上総の覚悟をあつさりと遠のけてしまう貴史

が怖かつた。

その十六 あとがたづけに関するよしなじと

- 1 戦後処理前夜
- 2 一年生廊下にて
- 3 虫たちの見たあの日
- 4 戦後処理

1 戦後処理前夜

朝が来るのが怖いと思ったのは、今回が初めてではない。小学校時代の遠足や修学旅行の前夜、卒業式後にやらかした決闘騒ぎの後、自分で秘密にしていったことがあからさまにクラスでばれてしまった時。本条先輩の言つ通り、自分の過去は本当に恥ずかしいものばかりだった。今までなんとか、許してもらえていた。気付いているのかいないのかは判断できない。知らないふりをしてくれた。

羽飛貴史も、清坂美里も。

今回ばかりはそもそも行かないだろう。目の前で堂々と、貴史の友情を利用し、美里の想いを逆手に取ったというわけだ。もし自分が同じ立場だったらどうするだろう。絶対に許せないだろう。

理解してもらえないのはわかっている。
仕方ないことだってこともわかっている。

上総自身の感じ方にあるとも気付いている。

悔いの気持ちだけはなかつた。

始業式の後で菱本先生から、停学、悪ければ退学の処分が下されるだろう。まさか美術館で泣きながら殴られるとは思つても見なかつた。気に食わない先生だけど、驚いた。

反省するくらいだつたら、あんなに細かく計画なんて立てやしな

い。

運転手さんに告げた言葉に変わりはない。

我、目的を遂行す。

上総はノートに「我、目的を遂行す」と五十回書き記した。

書いているうちに波がだんだん落ち着いてきた。開け放した窓から見える空に、星は全く見えなかつた。青潟の空は曇つてゐるからだらう。突き刺すような星の光も、貴史、美里、菱本先生たちのまなざしも、今は忘れていた。

2 一年生廊下にて

田を覚ますとすでに朝七時半だつた。寝坊してしまつとこだつた。大急ぎで着換えて自転車に乗つた。始業式は午前中で終わる。四日前に準備しておいたかばんには、自由研究ノートと宿題一揃いが入つてゐる。

疲れてすぐに寝てしまつたから、あの後学校からつちに連絡があつたかどうかはわからない。父も何も言わなかつた。停学になつたらどうやらせよ、学校から連絡が入るだらうし、叱られるのはそれからでもいいと思つた。

チャイムが鳴る寸前に校門をぐぐつた。

一年D組の教室に行く前に、わざと一年生の教室を通つた。

うつかり忘れるところだつた。「黄葉山オリジナルキャラメル」を一箱だけ購入しておいた。杉本梨南への土産だつた。さすがに教室の中に入る気にはなれないでの、廊下にうろついていいかをざつと見た。杉本の場合自宅がすぐ近くなので、ぎりぎりに登校することが多いようだつた。今日はすでに教室でノートを開いていた。宿題だらうか。

まあいい、あとでいいか。

立ち去り、隣りのクラスの前を通り過ぎた時だった。

「ちゃん、泣かないでよ」

「羽飛先輩ならまだチャンスはあるって」

「そうよ、だつて清坂先輩はあの立村先輩と付き合っているんだから」

「元気出して！」

一年の女子が通路側でなにやら固まっている。上総に気付いてぴょこんと頭を下げ、今度はひそひそ声に変わった。三人の女子、うち一人は激しくしゃくりあげていた。ハンカチを渡しながら他の二人は顔を見合せつつ、なんども同じことをくりかえしていた。

「羽飛先輩以上の人、絶対いるって！」

もしかして、羽飛の奴、一年生の女子に断りの連絡を入れたんだろつか。

なぜ俺の名前が出てくるんだ？

清坂氏が羽飛と付き合っているという噂は昔からのものだつたけどさ。

俺が清坂氏に振られるであろうつてことは、明白だからだろうか。覚悟はしているつて何度もくりかえしているけれど。

「のままエスケープしてしまいたい気持ちを押さえつつ、上総は二年D組の教室に向かった。D組の教室は奥の方だった。急がないと間に合わないのはわかっているけれど、ゆっくり歩いた。

まだ何人かが廊下でしゃべりつづけている。外から見える景色はなんとなく覚めた緑色がちらちらしている。かすかにせみの声が聞こえ、突然風が窓際の埃を撒き散らした。軽く咳き込んだ。

A組の教室を覗き込むと、ひとつ、後ろに主のいない席が見えた。まだ狩野先生も、評議委員も来ていなかつた。

3 虫たちの見たあの日

いぐらむづくつ歩いても、結局つくのは一緒だった。一年D組のドアを、ゆっくり開いた。思い切つて顔を上げた。一瞬、静まり返つたのは予想ついていた。貴史と美里の方はあえて視界に入れなかつた。

隣りの席にいる奴らと自由研究の手芸ものや絵を見せびらかしあつていてる中、通ると気まずそうにみな黙る。離れたとたんひそひそ声になる。わかっていても、ひりひりする。

金沢の席が真後ろだつた。まだ南雲は来ていなかつた。礼儀として一応、

「おはよっ」

と声をかけると、気兼ねない返事が戻つてきた。

「ほら、これ見てよ」

一緒に覗いている水口が、にっこりして指差した。

「金沢、すごいんだ。一日で描いたんだって。ほら立村、昆虫の絵だつて」

「どれ、どんな感じなんだっけ」

丸めたくせのついた画用紙を広げた。

金沢は胸を張つて、一言。

「今年の文集の表紙にしたいんだけど、立村、どう思つ?」

向かつて左手に、アリ、コガネムシ、ワラジムシ、セミが、草木の陰に隠れて覗き込んでいる様子。虫特有のグロテスクなリアルさは感じなかつた。柔らかく、愛嬌があつた。右手に黄緑色の山々。たぶん黄葉山の景色だろ?。こまやかだつた。ふもとに小さく黒い斑点とグレーの線がちょこちょこと入り交じつている。

「テーマは、虫たちか?」

「うん。虫が覗いたうちのクラスのイメージってこつかなつて思つたんだ」

金沢は、画用紙半分を占めている大きなアリの親子を指差して、「お弁当食べている時、さつと草葉の陰でアリとかワラジムシとか、虫たちが覗いているんじゃないかなって、思ったんだ」「黒い点は、人間の集まり?」「

「そうだよ。みんな、遠くから見るとちつちつやいんだ。」

貴史を始めとする他の男子も集まってきた。覗き込みやいやい言つていて。

「さすが天才画家の金沢」

力をこめて貴史が背中を叩く。

「絵はわかんないけど、すゞくこいと思ひよ」

上総も金沢に向かって、これだけ伝えた。

ふと貴史と目が合い、すぐに逸らした。

感情を読み取らないうちに、前を向いた。

「何無視してるんだよ」

上総にだけ聞こえた声だった。すれ違い、席に付く前に一言だけだつた。

4 戦後処理

ドアが開いて菱本先生が入ってきた。昨日の今日とあつて日焼けがかなりすさまじかつた。赤黒い頬と腕。半そでのワイシャツに緑のネクタイ姿だった。髪型もきちんと整えている。やはり今日から学校が始まるのだと、あらためて感じる時だった。

「やあ、昨日の疲れは取れたか? おはようさん」

「全然とれなあい」

女子の数人が合唱した。

「なあに言つてるんだ。若こびらびらのくせして」

「先生、やらしい!」

「朝っぱらから全開で責めるのはよせ」

元気一杯、機嫌よさそだつた。教室内に笑い声がぼわっとふく

らんだ。

「まず、始業式までもまだ時間は、十分くらいあるか」時計を覗き込んだ。壁にかかっている振り子時計の音がかつかつと響いていた。八時一十分を過ぎたところだった。

「それじゃあ、号令」

菱本先生は上総の席に視線をやり、指を差して、促した。開始は上総が、終りは美里が、受け持つている。評議委員の義務だつた。

後ろのドアから誰かが入ってきた。南雲だった。

「先生、おはようございまつす」

「南雲、遅刻だぞ、つたく、お前規律のくせしてなんだそりやあ」「遅刻じやないつすよ。今、始業式前に職員室で打ち合わせしてただけですつて」

笑顔が変わらない奴というのもめずらしい。肩をすくめて南雲が席につくまで、菱本先生は黙っていた。上総の隣りに座り、南雲はちらりと肩に手をやつた。すぐに離した。

「三日間一緒に過ごしてきたからお久しぶりって感じもないんで、夏休み報告はまた改めてにしようか。片がついていないこともある」菱本先生は声音を変え、呼吸を整えるようなじぐさをした。

「いいか、これから話すことは一年D組だけの秘密にするから、よく覚えておけ。はっきり言つてばれても問題はないことだし、それをネタにして誰かを脅すような卑怯な真似をしても無駄だ。いいな」「南雲が上総の方をちらりと見て、すぐに戻した。

他から飛んでくる意識の刺が痛い。

来るべき時がきた。ノートに書き散らした言葉を繰り返し、心の中で唱えた。

我、目的を完遂す。

思ったとおり、菱本先生は教壇から上総の目をじっと見つめた。にらんではいなかつた。同情なのか、哀れんでいるのかわからない。

めずらしく、落ち着いたまなざしだった。上総はにらみ返さず自然に受け止めた。

「昨日、立村がなぜバスをいきなり止めて降りて逃げ出すということをやらかしたのか、俺はわからなかつた。結局わかつたのは、昨日の夜、A組の狩野先生から説明してもらつてからだつたんだ」

狩野先生？ なんでなの？ 狩野先生とどう関係あるの？

女子がひそひそと質問を周りの子に浴びせているのが聞こえる。言葉が繩で編まれて、上総を縛り上げていくようだつた。身体にきりきりと食い込む。いつか見た写真集の少女のように、苦しげに。

「一日日夜のクラスミーティングで、覚えているのもいるだろうが、俺と立村との間で意見の食い違いがあつた。立村は明星美術館でA組の女子たちと合流することに反対していたし、俺はそんなのが思ひ過げしだと却下していた。この段階で俺はきちんと、立村と一対一で話をすべきだつた。もちろん、俺は最後の旅行ということでいい思い出を、A組の」

言葉を切り、ためらいながら、

「昨日をもつて青大附中を退学してしまつた女子に」

一気にざわめきが走つた。悲鳴混じりに

「退学？ 退学つて誰？」

「A組の人？」

「もしかして？」

と情報を交換していた。男子連中だけはなぜか静かだつた。後ろを見たりはしなかつたけれども、みな納得ずみといつた風だつた。不気味だつたのもまた確かだつた。

「作つてやりたかったと思う。もしD組でそういう人が出たとするならば、俺はためらうことなくそうしただろう。たとえどんなに辛かつたとしても、俺のクラスの大好きな娘であり、息子たちなんだ。俺はまだ結婚していないが、青大附中で出会つた連中はみな、俺の子どもだと思っていたんだ」

片手を握り締め、言葉を切った。

「狩野先生から詳しい話を聞いた。お前らが両親をつぎりたいと思うように、俺や他の先生たちから離れたって奴も、もちろんいるだろう。そりゃあ、仕方ない。お前らはまだ十四才なんだ。俺だってその頃、そんなものわかりなんてよくなかったさ。受け止められないのが悔しいっていうのも、またお前らと一緒になんだよ」いきなり菱本先生の声が震え出した。聞いている上総の方が思わず退いた。

「立村、お前がどうしてああいう芝居を打ったのかはわかった。A組の女子をそつとしてやりたかっただけだってことだな。そういうう

背筋をぴんと張つて、上総はただまっすぐ、菱本先生の目を見つめた。

答えることも、答える必要もない、そう思った。

「お前だつたら、そうしてほしかったんだな。放つておいてほしかつたんだな」

同じく見つめつけたままでいた。

「立村の方が今回は正しかつた。狩野先生からもほつきりと言われた」

鼻をすすり上げている。上総以外の男子も、菱本先生の様子が涙ぐましいものに変わつていて、気付いたのだろうか。後ろで水口と金沢が「先生」とつぶやいている。南雲も一緒に、上総と同じ方向のまま菱本先生と対していた。

「いいか。今回立村の逃亡劇は絶対に、学校行事の中では許されないことだ。どういう理由があるにせよ、嘘を連ねてバスを止めて、予定を狂わせるということは、規律を乱すだけではない。クラスの信頼関係をも裏切つたことなんだ。俺だつたら許せないだろ」

「つづむいた。答えられない。停学、退学の言葉が頭をよぎつた。

「だけどな、今こうやって話しているのは立村、お前をつるし上げたいからじゃない。お前が一日田のクラスミーティングで必死に訴

えたことを全く相手にしなかつた俺にも責任があるからだ。俺はお前たちのことをあつさり無視するような人間らしくない教師では、ありたくないんだ」

後ろからすすり泣く声が聞こえた。女子だらうか。美里ではない。こずえでもない。田を留め、菱本先生は田をぬぐつた。

「立村。もう一度、俺と話したいと言つてくれなかつたんだ？」

すうつと田の中が冷めていく。

上総は答えなかつた。

ただ菱本先生の顔をじつと、静かに見つめつけた。

泣きたいとも思わなかつた。無視したいとも、刺してやりたいとも思わなかつた。

我、目的を完遂す。

言葉だけが頭の中をめぐつていつた。

菱本先生はしばらく上総の姿を眺めていたが、あきらめたように目を逸らした。机を見つめながら、

「今回の事件は終りだ。最後に立村、本当に何も言つことはないのか？」

自然に口からこぼれた。

「A組の人は、もう、学校に来なくていいんですか」

「え？」

言われた意味がわからなかつたようで、菱本先生は言葉を詰まらせた。

「退学した人のことを言つているのか？」

「はい。もう、一度と、こなくともいいのですか」

しばらく菱本先生は答えを躊躇していた。じくつと空気を飲み込むようにして、ゆっくりと上総に向かい答えた。

「すでに夏休み中に手続きは終わつてるので、九月から、別の中学校に転入が決まっているそうだ。もう、青大附中には、来る必要が

なくなつたよ」

「そうですか」

菱本先生の表情にまた、淋しげな影が漂つた。ふたたび、教室にいぶかしげなざわめきが流れた。誰にも意図を読み取られなくていいと思つた。全身から力が抜けていった。

椅子の背もたれに寄りかかり、初めて上総は南雲に向かい笑いかけた。

「りつちゃん？」

「じめん、なんでもない」

4 いつかたどり着ける日まで

校内放送の合図に、「クシコスポスト」の音楽が流れた。毎回朝礼の時に流れる、派手なインストロの曲だつた。

「これから始業式入場です。各クラスの評議委員を先頭に、廊下に整列してください。一年から入場です」

雲のベールをうつすらと挟んだ夏の太陽が、少しずつ教室に落ちていった。窓を閉める窓際の生徒。菱本先生はまだ痛みを忘れられない表情で上総を見つめ、廊下に出るよう指示した。

「評議を先頭に、男女各一列に整列だ」

緊張した空気はドアが開くと同時に外に逃げた。隣りの南雲は立ち上がり際に、

「りつちゃん、来週の月曜すぐ、数学の小テストあるつて知つてたか？」

耳より情報を残してくれた。

「え、ああ、でも俺は」

「今の話だりつちゃん、停学つてことはなさそうだしさ。お互い、赤点取らないよつ、がんばりましょうや」

奈良岡の席を遠回りして通つていつた。封印は切らないにせよ、

それなりの進展はあったようだった。いつも通り美里たちとおしゃべりしている奈良岡彰子をむりやり引きずるようにして、教室から出て行つた。

「立村くん」

貴史と美里だけが教室にまだ残つていた。女子評議の義務ゆえか、上総の方に来た。教室に入つてから、初めての挨拶だつた。

「おはよう、あのさ」

「直接言つてよね。お礼言つてくれるなら…」

「じめん、あの、それで」

「あやまらなくたつていいつて言つてゐるでしょ！ ほら、整列しな

くちゃ」

「ありがとう、あの、あれをさ」

すっかり勢いに押されてしまつて、自分のいた。気の利いた言葉が出てこない。

「キーホルダーなくしたんだつたら、またおんなじのあげるから！ 立村くん鍵をたくさん持つてるから、いいかなつて思つたの！」

美里はさつさと前のドアから出て行つた。さすがに校則違反になるためか、ドアノブのカバーミたいなターナンチエック髪飾りはつけていなかつた。

立ち上がり、そつと振り返つた。貴史がふてくされたように後ろを振り返りながら近づいてきた。

きちんと一度は殴られないとましいのだろうか。

絶交されるならば、その時なのだろうか。

廊下に出る前にけりをつけたかった。

「羽飛、あのや」

一瞬立ち止まつた。貴史はすつと、上総の顔をこりみつけた。言いたいことが満載、頬ばつているようだつた。

「殴つていいよ。それだけのこと、してる」

頭が横にかしいだ。貴史の腕がいきおいよく頭上に飛んで、腕そのもので締め付けられた。首をぎゅっと締められた。じゃれあつている時の格好によく似ていた。苦しくて手をばたばたさせた。

「立村、ほら、早く行けよ。お前2Dの評議だろ！」

耳もとでささやき、片腕を捕まれて前に突き出された。よろけて美里に激突しそうになり、慌ててバランスを取った。

「貴史あんた何やつてるのよ、朝から、変人！」

大声で叫ぶ美里。こずえがけらけら笑つていてのが聞こえた。

「立村くん、ほら、C組もう行っちゃったよ。急がなくちや」

整列チェックをしそびれたのが落ち着かない。C組の最後尾に追いつくため、早足で歩いた。

「自分の中にどういう感情があるか、それをじつと見つめていけばいいんです。君にはいわゆる『ふつう』の人が持つていらない、フィルターのかかっていない感情を受け止める能力が備わっています。だから、こうやって来てくれたんでしょう。今度はもつと『ふつう』の人たちを刺激しないような方法を見つけるためのマニュアルを覚えていけばいいんです。時間は掛かるけれど、大切なものを守るためにには少しずつ」

狩野先生の言葉がよみがえった。

『ふつう』の人を刺激しないような方法で、わけのわからないオブジェの転がる世界をどうやって歩いていけばいいのだろう。

狩野先生ですら、気付いたのは大学を卒業してからだと言つていた。十年以上もこれから、「フィルターのかかっていない感情」を受け止めなくちゃいけないのか？

こんなにみんな、いい奴ばかりなのに。

もう一枚の絵が浮かんだ。かのこさんと一緒におびえてくつっていた三人のA組女子だちだつた。一度と戻つてこない覚悟で、青

大附中を出て行つた。

上総がこれから覚えなくてはいけないことを、彼女もどこかの中學で、必死に手探ししていくのだろう。

どんなに菱本先生が涙ながらに訴えても、どこか冷めた気持ちしか残らなかつたけれど。羽飛や清坂氏が、俺にあんなひどい裏切りされて、それでも許してくれたのは、正直なところわからない。どうしてみな、そんな風に冷静でいられるのか、わからない。

いつかは狩野先生のように、俺みたいな奴を受け入れながら、『ふつう』の人と歩いていくことができるのかもしれない。十年以上たつたら。きっと。信じよう。ファイルターのついていない感情を受け入れられる感覚のまで、いつか羽飛や清坂氏の気持ちを受け入れることができるかも知れない、マニュアルが見つかることを信じよう。

階段を降りる刹那に、A組の狩野先生とすれ違つた。軽く頭を下げると、小さく頷いていた。無表情に近かつた。

ただ、これだけは伝えたい。

あの時、感じた思いだけは本当だつたつて。

我、目的を完遂す。

我、同士を見つけたり。

わかつてくれますか、狩野先生。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6795e/>

葉月の流星～青潟大学附属シリーズ中学編

2010年10月8日14時29分発行